THE CENTRAL REVIEW

中央公論

7-1920

七月號

384 7 35

第三十五年 第七號 第三百八十四號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
タッタ二十分で染る。
自然の髪の色艶に染る。
襟枕に汚染の惧なく。
洗ふて剝げず永く保ち。
用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり

■『何處へ行く』の著者の傑作にして劒と戀との物語也

大洪水

シェンキウィッチ著

佐々木孝丸氏譯

（新刊出來）洋布製五百七十頁　定價金壹圓八拾錢　郵送料十二錢

●●●●●●●●●●ポーランドは復活せり

此の時誰か、亡國ポーランドの爲めに、幾多悲壯の物語りを綴りたるヘンリック、シエンキウイッチの名を想起せざらんや。『何處へ行く』の名篇を以て聞ゆる此の文豪が、更に其の椽大の筆を揮ひて、十七世紀中葉に於ける瑞典王の波蘭浸入の當時を描けるものを此の『大洪水』の一篇とす。オルスザ侯アンドレ、クミタとウォドクテイ城の姫君オレンカとの情話を中心として、之に配する勇士、姦雄、美人、義僕等、幾多の人物を以てし、火と劒との渦巻の中に、美くしき哀しき戀を語出せるところ、まことに近代傳奇的文藝の冠冕たるもの也。

社會主義と人間の靈魂

オスカア、ワイルド著　本間久雄氏譯

定價八拾五錢　郵送料八錢

此の世の中が社會主義的に改造せられたる時、個々人は果して如何になり行く乎。此の問題に對する考察を基調として、近代の唯物主義デモクラシイ、ジャーナリズム、犯罪對刑罰等に關するワイルド一流の矯激奇拔なる社會批評を恣にし、兼ねて個人主義者の最高典型としてキリストを高調し、公衆對作家關係に於ける作家の權威、作家個性の尊重を力説せるもの。是れを我が國現下の文壇及び思想界に對する批評として見て、殊に多大の興味を感ぜしむるものあり。附錄には古今無類の病的人物たるエーンライトを描いてワイルドの面目躍如たる『ペン、鉛筆及び毒藥』の一篇あり。

東京牛込矢來中の丸　振替東京一七四二番　**新潮社**　電話番町八〇九番・八九九番

井箆節三著

ユウトピア物語

ユウトピアは尊い人間の創造力になつた美しい空想の花で是が漸次果實となつて行く處に社會の進歩があり向上がある東西古今に亘るユウトピアンの描いた空想の種々相は悉く此一巻に鍾る洵に智識と興味の新寶庫

四六判總布裝幀
コロタイプ版數葉
價貳圓五拾錢
（郵税十八錢）

最新刊

全トルストイ

石田文學士著
菊半截極美本
定價貳圓七拾錢
郵税拾八錢

近代の世界的詩人トー翁が思想藝術生活の全部面を描いて盡きざるはない。著者多年の私淑、熱誠は凝つて本書を産んだ

日本の美術

野口米二郎著
挿畫各種十數葉
定價四圓五拾錢
郵税拾八錢

東方美術國傳統の藝術美に對して清新奇警な鑑定眼を投射したもので批評と感興の錯綜する筆致は著者の獨擅場

白蓮女史著

戲曲 指鬘外道（しまんげどう）

急遽四版

最近文壇の寶玉、天才藝術の光彩陸離（四六版背皮印度更紗裝幀天金 本文精巧二度刷竹久夢二挿畫）價三圓二拾錢 郵税拾八錢

東京京橋桶町
大阪三休橋詰
株式會社 大鐙閣
振替（東京）三三六一八 （大阪）二七一五五

坪内士行氏譯
（定價金壹圓八拾錢 送料金拾五錢）

最新刊

バリー脚本集 社會と階級

英國近代劇の大家バリー氏の作は未だ邦語に譯されたるものあるを聽かず。劇文學の新權威士行坪内氏此文豪を知らざるは外國劇を研究する者の恥辱なりとの意氣を以て、忙中の閑を割き『英國劇界に於ける最善の作なり』と激賞せられたるアドミラブル・クライトンを始め社會及階級上、異常の特色を有する其代表作を譯したるものにして、蓋し我邦に於けるバリー飜譯の嚆矢たり。譯者は斯壇を新權威、原作の妙味を傳へて餘蘊なし。

エレン・ケイ原著
原田實氏譯
（定價貳圓四拾錢 送料金拾八錢）

第六版出來

戀愛と結婚

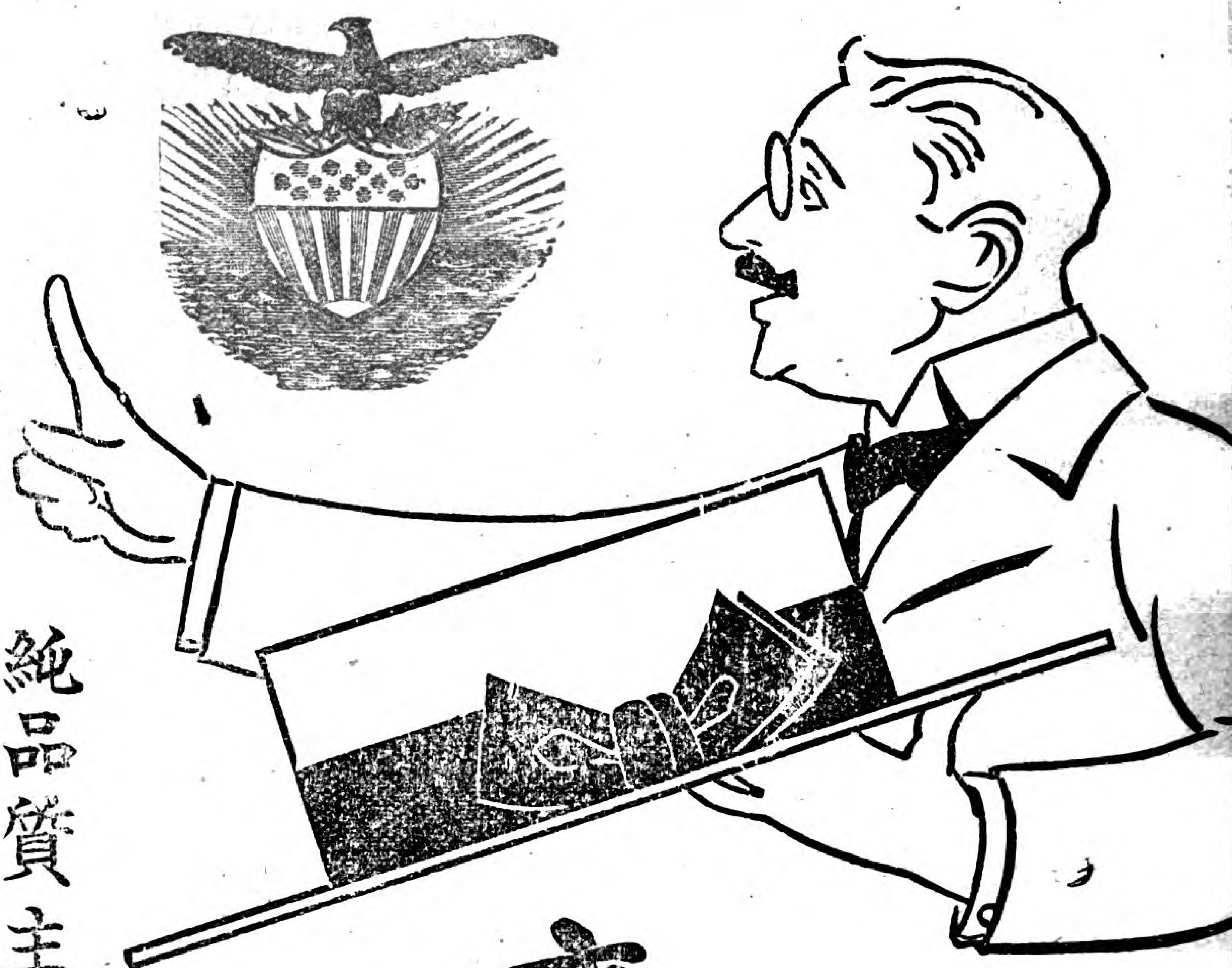
昇曙夢氏校閲
栗林貞一氏譯
（中判四百四十頁ポイント細活字箱入美本 定價一圓九拾錢 送料金拾五錢）

最新刊

クープリン傑作集

異常なる大天才クープリンの傑作は、其赤裸々の描寫往々にして其筋の許可する所とならず、爲めに其全豹を傳ふるを得ざるを遺憾としたりしが本社は前に『魔窟』（ヤーマ）を出し今又本集を出して漸く其全般を傳ふるを得たるを欣幸とす。本集載する所のもの四篇、『モロフ』の勞働者對資本家の問題を描きたる、『船暈』の或る暗黑面の出來事を赤裸々に細叙して哀れむべき愛を描きたる『クズムールド』の奇警なる『幼年學校生徒』の寫實主義の極致を發揮したる何れも彼が天才と特色とを發揮したる代表作なり。譯者は露國滯在中に筆を執り歸朝後露文學の權威、昇曙夢氏が嚴密に之れが校訂をなしたるものなるを以って、其完璧のものたることは論を俟たざる所なり。

東京市麴町區飯田町一ノ二
天祐社
（電話番町(長)一一七九番 振替口座一〇一二八番）





中央公論第卅五年七月號目次



早慶の野球爭霸戰を復活せよ

▼時論

《創作》



"KIT" OIL PAINTING
BY WILLIAM ORPEN, A. R. A.

東京帝國大學教授 文學博士 建部遯吾先生新著

國體國是及現時の思想問題

思想統一の一大鐵案

今や世界は思想の動搖激しく我が國民思想亦其影響を受けて實に混亂不安の狀態に在り國民道德の將來や洵に寒心に堪へざるなり此の如き時に當りて能く國民思想の統一を計り、國民道德に安定を與へ得るものは正に權威ある一大鐵案たらずんばあらず、而して能く斯の如き案を草し得る者は須く當に是に應ずる底の學識卓見を有する人たらざるべからず。本書は博士が慨世憂國の餘り乃ち畢生の精力を傾盡して論述せられたるものにして實に千有餘頁の大著なり、我が國是國本は之によつて以て明確にせられ、國民思想は之によつて以て歸起する所を得べけんなり。

洋裝總布菊判上製紙數壹千頁

正價金八圓內地送料十八錢

發行所 東京神田北神保町 振替口座東京八一五番 合名會社 弘道館

疲れたる歐洲と肥えたる日本と

歐洲よりの最近の歸朝者から聞いた。戰後の歐洲諸國に往つて何よりも先きに感ずることは、生活の不便乃至不安といふことだと。

第一に物價が高い。併し之は豫期せぬことでもないから驚かないが、意外なのは高くて品物の粗惡なことであつた。否、粗惡は我慢するとしても、品物の拂底なことであつた。大都市はさうでもないが、田舍などに往つて見ると物資の窮乏は話の外である。戰爭前會遊の經驗ある者に取つては丸で別世界の感がする。

單に夫れ丈けなら可い。物を買つても一々釣錢に警戒するを要すとあつては愛想が盡きる。伊太利は殊にひどいが、獨逸までが其例に洩れない。物を買つて金を拂つても約束通り屆けて呉れぬ。屆いても約束の時間に遲るゝのは何處の國でも普通の事となつて居る。

道路も塵埃だらけで昔の面影が無い。流石に此方面では世界に誇つて居つた獨逸でも、壞れゝば壞れた儘で碌な修繕もしない。汽車電車も汚くて不規則だ。時間の定らざるは云ふまでもない。急行でも時間通りに着くのは非常に珍らしい事になつて居る。手荷物なども自分で始末しないと如何なるか分らない。郵便や電信や電話の當にならぬは改めて言ふだけが野暮だ。

一言にして云へば、歐洲での生活は今日を以て明日が測られない。旅をするには勿論の事、ぢッとして暮して行くにしても明日以後のプランが丸で立たない。從つて皆浮き腰である。其日暮しである。物質的にも。また精神的にも。斯くして歐洲の人々は今になつて戰爭の慘禍を滲々と感じて居る。心ある者が平和主義の熱愛者となるも怪むに足らない。

併し新歸朝者の話を冷靜に聽いて居ると、之が遠い歐洲の珍らしい土產話かとあやぶまるゝ。何故ならば、そんな事は我が日本では昔から當り前の事であつたし、又今日となつても更に改めらるゝ氣配さへ無いからである。

歐洲諸國は戰爭で疲れた。疲れた結果の一時的變調として、社會の生活秩序が紊れて居るのだ。日本は戰爭で肥えた。肥えても整はなかつた生活秩序は更に改善され樣ともしない。

疲れて惱める者には恢復の希望がある。肥つても改めざる橫着者に至つては殆んど度し難い。何とかして魂の入れ替は出來ぬものかしら。

中央公論



第卅五年第七號
七月號
第三百八拾四號

我國現下の三大外交問題

法學博士 吉野作造

(一) 日英同盟の繼續問題

昨今の外交問題の中で一番大きなのは日英同盟繼續問題であらう。之について我國朝野の昨今の輿論は大體繼續論に一致して居るやうである。曾ては民間論客の間には無論の事、屢々廟堂に立つた事のある有力なる先輩政治家の間にも可なり強い反對論乃至破棄論を唱へたものもあつたが、イザいよ〳〵滿期に近づいたとなれば此等の意見は不思議に席を讓つて繼續論の横行に任かして居る。

轉じて對手の英吉利本國に於ては如何と云ふに、之れ亦大體繼續論に傾いて居るやうだ。少くとも今更ら事新らしく非繼續を我から提議するまでもあるまいと云ふ邊に止つて居る。尤も中には條件の訂正が必要であらうと云ふやうな議論もあるが、併し之は我國に於てもあるのだから、今迄通りの內容で其儘繼續すべきや否やについては彼我共に多少考が動きつゝあるものと觀ていゝ。若し夫れ英領殖民地並びに東洋在留の英人間に於て同盟繼續に反對の聲を高くしつゝある事は今改めて說くまでもない。在支英人が同盟の繼續を止むを得ずとせば、門戶開放、機會均等の原則を文字通り確實に守るの保障を得べきを主張し、又濠洲が新たに白人濠洲主義の承認を條件の中に加ふべきを主張せるの點は注目に値する。日英同盟がいよ〳〵繼續さるゝ事となつたとして、右の如き要求が鹿爪らしく書き上げらるゝとは思はないけれども、書かないからと云つて之を顧慮しなくともいゝと云ふ譯で無く、此等の要求は將來に於ける同盟活用の上に多大の影響を有するものと觀なければならない。同盟條約の文字上の內容がどうあらう我等は專ら之の活用によつて現實にあらはるゝ効果如何を着眼しなければならない。

支那の國論が又殆んど一致して同盟繼續に反對であり、否少くとも甚だ同情の無い態度を採て居ると云ふ事も亦大いに注目を必要とする點である。勿論日英同盟は日英兩國間の約束であつて、斷じて第三者の容喙を容さない。支那が獨立國の體面上默視する能はずとして如何に强烈な反對の聲を擧げても、同盟條約の締結又は繼續と云ふ事に、日英兩國の確固たる決心がある以上、全然之を顧る必要はない。併しながら今後日英同盟條約が主として活用せらるべき地理的舞臺は中華民國であるべきが故に、中華民國の同情無き態度が、同盟條約の實際的活用の上に、少からざる煩累を與ふべきは想像するに難くない。我々は同盟條約の繼續其物のみに熱中するの餘り、一見小癪な支那側の橫槍を輕視してはならない。

我國に於て、日英同盟に對しては其第一次の締結の際から今日に至るまで引續き其存立を得とするに一致して居る。偶々之を呪咀するの聲があつても、そは決して多數國民の衷心からの叫びではなかつたと思ふ。夫婦の間でも時々別れ話を持ち出すことはある。イザとなつて本氣になつて別れやうと云ふ深い考の無いと云ふのが兩國從來の間柄であつた。併しながら日英兩國が夫婦の間に見るやうな精神的融合があつたかと云へば大いに疑はしい。我々の觀る所を隱さず云ふならば、精神的融合の結果相結んだのではなくして、偶々利害の相一致するものがあつて提携した事の結果、幾分精神上の諒解も出來つゝあつたと云ふ有樣であつたと思ふ。從つて今日我々の間に同盟繼續論に略ぼ一致して居るのも、之れ過去に於ける同盟條約の恩惠を思ふからであつて眞に英國民を諒解しての話ではない。從つて今後同盟條約を繼續しようと云ふ事になつても之によつて期する所は一種の利益であるが故に、彼の條件改訂論を唱ふるものも、畢竟皆利害の打算から割り出されるのである。更に極論すれば利害の打算が主であつたからこそ同盟反對論の如きも起つたと云ふ事が出來る。何故なれば此等の人は我の利益の要求が思ふ通り通らずして、只對手方が此條約によつて利益した方面のみを主として着眼するからである。

過去に於て我國は此同盟によつて如何なる恩恩を蒙つたかは委しく說くの必要もない。國際間に於ける帝國の地位の著しく高められた事や、日露戰爭に於て美事の勝利を得た事などは其最も著しいものであらう。無論之は同盟條約のみの賜物ではない。國民の努力奮勵の結果の當然の現はれでもあるけれども、我國民の中には偏狹な名譽心に驅られて外部よりの恩澤を過小に見積り、以て事實の正視を謬るもの頗る多きが故に特に此事を一言して置く。兎に角日英同盟は我國に大いなる利益を與へた。之を口に云ふと云はざるとは別問題として、國民は暗々裏に之を十分承知して居る。だか

らいよ〳〵と云ふ場合になると國論は期せずして繼續論に傾く譯なのである。

併しながら此同盟は昔のやうな利害の打算一點張りで繼續していゝものかどうか。無論之で繼續の出來ない事はない。併し之で行く丈けなら同盟條約は最早や實際に於て能力を發揮する場合は極めて少くなり、新時代の機勢に殆んど無交涉な空名の約束となり終る事はあるまいか。早い話が當初同盟條約の締結を必要とした事實は今日全然消滅に歸して居る。即ち露西亞があゝいふ事になり、次いで獨逸も怖るゝに足らずとなれば日英兩國に對する共同の敵は最早一人もない。單に此れ丈けの事實で同盟條約は昔通りの意味で繼續するの不必要を語り、若し更に繼續すると云ふなら茲に新らしい根據を見出さねばならぬ事を示すものである。無論日本一國にとつては尙怖るべき敵があるといへるかも知れない。予輩はしか思はなけれども一部の人は米國を着眼するのであるが、併し米國を敵とする限り英は從來の同盟條約が指示するやうな形に於て我の味方たるものでない事は極めて明白である。此事を顧慮して一部の人はイザと云ふ時に英國が責任を免るゝ事の出來ないやうな規定を設けろとか、又は同盟條約の效力の及ぶ範圍に太平洋を加へろとか云ふものあるが、向ふが腹で嫌やだと思ふ事を紙上の文字で無理にさせようと云ふのは極めて拙い遣り方である。紙上の文字はどうであらうが、實際に行はるゝものであるかどうかを眼中に置く必要がある。予輩は敢て茲に日米若し戰ふ事あらば英は決して我の味方たるものにあらずと斷言する。同じやうな事は英の方からもいへるだらう。東亞に於て英の最も恐るゝ所は印度の治安である。之を脅かすものが露西亞であつた間は日本の勢力を其防禦に利用するとが不可能でなく、日本も亦背面から露を牽制する位な勞は辭するものでない。けれども今日は印度の治安に對する脅威は外から來らずして内から起る。脅威の原因は同じく露西亞から來るとしても今は印度の民心を煽揚すると云ふ形に於て露が英の怖れとなつた。斯くて印度が内部から擾亂することとあらんか、英は益々日本の勢力を利用するの希望を深からしむべきも、日

本としては之に應ずるの力が無い。同盟條約の條文が何となつても、日本は斷じて印度に出兵する譯には行くまい。して見れば日本も英國も共に夫れ〴〵枕を高うして眠る能はざる境遇にあるも、之が防衛に互に他を利用すると云ふ事は事實不可能である。故に少くとも此點に於ては同盟條約は有つても其効力を發揮するものではない。

そこで之までのやうな同盟條約を繼續するとなれば、其眞に能力を發揮すべき範圍は僅かに支那に止ることになる。殊に支那の內情が今日のやうに動搖定まりなく、延いて世界各國に波動を及ぼすやうな事であれば、東亞に於ける二大勢力たる日英が此方面に於ける平和の維持を共道德的責任として負擔せんとするのは當然である。此點に於て日英同盟は最も有力な働きをするものであるが、併し日英と云ふ二大勢力が結托して僅に他の國々を制することが出來るとなると、時として此兩國が提携して共同の利己的目的を計らないとも限らない。そこで若し我々が同盟條約を繼續するに當り、利害の打算と云ふ事が、依然として根本の考をなして居れば、同盟の誼を楯として互に我儘を看過し合ひ、二人でこつそり旨い事をすると云ふ風に條約を活用しないとも限らない。こう云ふやうな意味に同盟提携が之からの世の中に於て出來るものかどうか。こゝに又一つ愼重なる攻究を要する點がある。而して予輩は從來の經驗に照して、こう云ふ考では啻に他國の反感を招くのみならず日英兩國共物が到底十分に一致することが出來ないと思ふのである。現に今日まで兩國の利害は支那に於て最も激しく反對して居つたではないか。而して我は同盟國だからもつと我々に讓つてもよからうと考へ、彼は又同盟の誼には係らず餘りに亂暴だと我々を罵る。支那に於ける日英兩國民の關係は同盟所か、寧ろ仇敵も啻ならざる有樣にある。して見れば今の儘で同盟條約を繼續するのは全然無意義になる。それでも尙繼續しようと云ふなら、而かも之を空名のものたらしめさんとせば玆に全く新らしい別の基礎を探し求めなければならない。それは何かと云へば即ち利害の打算を捨て、東亞の大局の平和的維持と云ふ事でなければならない。此事は過去に

於ても唱へられた。只過去に於ては之は表看板に過ぎなかつた、が今度からは實際の目的であつた利害の打算を止めて正直に表看板を實際の目的とする事である。

予輩は所謂同盟條約の繼續非繼續については夫れ程深い興味を有たない。最も關心する所は繼續さるゝとして同盟條約が將來どう云ふ精神で運用さるゝかと云ふ事である。而して運用の根本精神が我々の希望するやうなものに變れば實は同盟條約などは繼續しなくとも妨げはない。此精神が出來てゐないのに繼續しないとあつては假令繼續の實際的必要の消滅が明白であつても兩國間の特別の不和を意味することになる。斯く解せらるゝのが嫌やだからと云つて冷淡水のやうな三國同盟も滿期毎に更新されて居つたではないか。特に日英兩國が不和になつたのでないから條約を繼續して置けと云ふ丈けなら、條件がどうだらうが、文字がどうだらうが、一向差支ない。只之を少しでも世界の進歩乃至東洋の幸福の爲めに貢献する所あらしめんとする以上、玆に改めて何の目的の爲めに之を繼續すべきかを眞面目に國民と共に考へたいと思ふのである。

（二） 西伯利出兵の結末如何

——附尼港事件の善後策——

日英同盟に次いで矢釜しい當面の外交問題は西伯利出兵の善後策である。細目の個々の問題についてはいろ〳〵の議論があるにしても政府も國民も他國の內政に干涉すべきではない、西伯利の出兵は何れ遠からず撤退すべき筈のものであると云ふ見解に定まつて居る。而して表向き如何なる口實と理由があるにしろ、大兵を出して居ると云ふ事實につい

て國民の間に大いなる煩悶ある事は又隱すことは出來ない。されば民間には露骨に無條件且つ急速の撤兵を要求するものあり、否らざるも現在の駐兵に對していろ／＼辯解に苦しんで居る。兎に角此問題は現下の政界に於ける一大暗礁と云はざるを得ない。

更に轉じて西伯利に於ける形勢を觀ると、大體に於て日露兩國の反目對抗と云ふ形をあらはして居る。內政不干涉を標榜して兵を進めた我軍が、多數の露國民を敵として戰つたについては相當の理由があらう。如何なる理由があるにしろ、內政不干涉を標榜するものが土民の多數と戰ふと云ふについては內心大いに苦しい所がある。而かも米國は皮肉に撤兵して事實の上に日本の行動を贊成せず、他の歐洲諸國も亦暗に日本に快からざるの形勢を示して居る。此苦しい立場から何とかして逃れ出でようと云ふ苦心は偶々緩衝地帶の設置によつて酬いられんとしたが、之れ亦失敗して今尙窮して通ぜざるの狀態に在る。斯くして之は現政府にとつて最も困難な問題であると共に、又我々國民にとつても最も面倒な問題となつて居る。

緩衝地帶設置の提議に接して我國の軍事當局者の第一に期待した事は、親日派の權勢を以て西伯利各地を統轄する事であつたに相違ない。けれども事實が之と反對に進んで來たので、我々は啻に意外な而かも不愉快な主人公を隣りに迎へねばならぬのみならず、所謂親日派の始末にすら窮するとになつた。そこで形勢は又昔に戾つて日露兩勢力の對抗の儘となつた。只幾分異る所は此ゴタゴタの間に對手方の勢力を著しく增進した事である。夫れ丈け西伯利に於ける我國の地位は幾分困難を加ふる事になつたやうだ。而して斯の如き結果を來たしたのも、畢竟は第一西伯利に出兵した事、第二セミヨノフとかコルチヤツクとか云ふ民間に人望の無い反動的保守階級を對手とした事が原因である。

是に於て我々が冷靜に考へねばならぬ事は、第一我々の結んだ所謂親日派は西伯利に於て今後どれ丈け勢力を張り得

るものか、否な彼等は早晩消滅すべき運命にあるものではないか。若し日本の直接間接の援助がなかつたならば夙うの昔に消滅して居つた筈のものではなからうか。第二には、さう云ふ種類の階級と是非共提携せねばならぬ理由は何處にあるか。假りに相當の理由があるとしても今の儘で土民の多數と反感の形勢を續けていゝものかどうかと云ふ事である。西伯利の出兵をどうするかと云ふ根本問題がどう極まつても、今出て居る兵隊を動かすと云ふ事が已に重大な問題であつて、それには少くとも前の二點を冷靜に考ふる必要がある。而して我國の當局者は西伯利土民の多數を以て恰かも危險思想の宣傳者の如く見做し、西伯利に於ける現在の狀態を繼續することは實は日本の自衛の爲めに止むを得ないと見て居るやうだが、果して然らば西伯利問題は一轉して思想問題であると云ふ事に觀なければならない。成程所謂過激派が西伯利の方面から宣傳の手を伸ばしつゝある事は疑を容れない。けれども當局者が此等の運動の正體を明かにせず、只一も二もなく恐がつて所謂風聲鶴唳に脅へるの醜態を演じつゝある事はフリーメーソンとサイオニズムとをゴツチヤにしてマツソン秘密結社の世界顚覆の隱謀なる珍無類の滑稽な妄説を流布し而かも今日有力な政治家中之を信ずるものゝ少からざるに觀ても分る。之れ畢竟彼等が時勢の進運に盲目にして其抱持する思想に確信なきの結果であつて、國內のいろ〳〵な問題につきいろ〳〵な過ちを重ねつゝあると同樣の失態を西伯利問題についても演じつゝあるものと觀なければならない。西伯利問題は單純な出兵の可否乃至撤兵の時機如何の問題ではない。

之に關聯して所謂尼港慘殺事件の善後策の問題について一言して置きたい。

尼港に於て婦人幼童まで悉く慘殺されたと云ふ事は何と云つても我々の血を湧かし肉を躍らしむるに値する暴虐に相違ない。けれども我々は憤慨の餘り極度の昂奮の結果、常規を失するなからんとするの愼重と雅量とを缺いてはならな

い。少くとも如何なる狀況の下に三月の事變が起つたか、又如何なる狀況の下に五月の虐殺が起つたか。前後の事情をあらゆる方面の材料によつてもつと精密に研究して置くの必要がある。先年鄭家屯事件なるものがあつて、支那兵が日本の將校と兵卒とに凌辱を加へたと云ふ事が報道せられた。當時國民は非常に憤慨して遂に政府に迫り、謝罪を支那に求めしめたのであるが、後冷靜なる事實の審査が重ねらるゝに及び彼我何れを責むべきやが頗る怪しくなつた。最近の福洲事件についても同樣の結果に畢つた事は讀者の知らるゝ所であらう。先年英吉利に居つた時、埃及人の一群がハイド・パークに集合して盛んな熱罵を英國の政府と國民とに加へた時、通りがゝりの英國人は――どうせ下層階級のものが多數であつたに相違ないが――悉く微笑を以て之を傾聽して居つたのを觀て、流石は大國民の雅量だと感心した事があつた。此點に於て昨今の我々同胞が少しでも冷靜な態度を採るものがあると如何にも國民的良心の痲痺したものであるかの如く罵倒するものゝあるを觀て甚だ苦々しく思ふて居る。

尤も如何なる新らしい事情が發見されたとしても婦人や小兒までも而かも一人殘らず虐殺されたと云ふ事については何といつても容すべからざる暴虐として之を憤慨せざるを得ない。只こう云ふ場合に何時でもある事だが、此國民的憤慨を或る目的に利用せんとする輩の少からざる事は我々の大いに警戒せねばならぬ所である。卽ち之を機として徒らに國民の敵愾心を昂奮せしめ、以て或は兵員增派の目的を達せんとしたり、或は自家の頭上に歸すべき責任を匆忙の間に他に轉稼せんとするものなどがある。斯う云ふ連中の陰謀がある爲めに我々の憤慨は又不當に冷却せしめられるやうな感がないでもない。

同じやうな事は本問題の責任糺彈についてもいへる。我々は、一部爲めにする所あるものゝ罠にかゝつて不當に昂奮するの餘、本件に關する本當の責任者を見損つてはならない。而して其所謂眞の責任者は明白に政府殊に軍事當局者に

あるのであるが、玆に又在野政客の一部の間には、得たり賢しと之を政爭に利用せんとするものがある。卽ち昨今開かる丶尼港問題演說會などに於ては二言目には現內閣丶倒壞期すなど丶出て來る。現內閣を存續せしむべきや否やは之も確かに一問題たるに相違ないけれども、反對派が直ちに之を政爭に利用するのは、政府側が之を政黨政派を超越する國民的大問題なりと稱して、獨自の責任を避けんとするのと同樣に我々の甚だ不快とする所である。斯くの如きは本問題を純粹に攻究判斷するを謬らしめ、且つ之と混同せらる丶を厭ふの結果、終に論者をして本問題から遠からしむるやうになる。兎角斯の如き問題がいろ〳〵の方面からいろ〳〵の目的に利用せられ勝ちなのは我々の甚だ遺憾とする所である。

(三) 日支懸案の一としての山東問題

もう一つ昨今の外交界に懸案となつて居るものは山東問題である。山東問題の解決がどう着かうと我國の之によつて得る所のものは大抵極まつて居る。當初豫期したやうな利權はどの途得られない。得られる丈けのものは跡始末がどんなに拙くとも得られるに極まつて居るから、殘る所は只どう云ふ形で結末を着けるかのいはゞ體面の問題に過ぎないと云つてい丶。現に山東に特殊の經濟關係を有つて居る人には可なり重大な關係あるに相違ないが、我々國民にとつては此問題はどうなつても大した事はない。止むを得ずんば今の儘に放任して置いた所が格別の不都合はないのである。けれども之が支那と日本との間に存する幾多の交涉案件の一であり、此解決如何が他の多くの問題の解決を導く目標になると云ふ風に觀ると、山東問題はなか〳〵簡單に見逃すべき問題ではない。之れ本問題が夫れ自身としては何でもない事であるに拘らず、他の諸問題と關聯して非常に重要視する所以である。

山東問題の紛糾して解けざるは已に久しいものだ。最近我政府は長文の聲明を發して從來の關係を明かにしたが、併し之は單に日本の立場を中外に聲明して無用の誤解を一掃したるの效あるは勿論ながら、問題其物の實際上の解決の上には何等加ふる所無かつた事を認めざるを得ない。

何故山東問題の解決が着かないか。支那の政府が道理の說明に服從しないからである。何故道理の說明に服從しないか。人民――實は青年學生――の反對に壓倒せられて居るからである。支那の政府が國民を支配するに殆んど無力なるは云ふを俟たざる所。而かも最近は動もすれば其壓迫を受けて獨立の見識を立て通し得ない。いはゞ風前の燈火とも觀るべき薄弱なる政府に向つて事理を說くは、貧乏人に向つて債務の辨濟せざるべからざるを繰り返すと同一である。從つて先達發表したやうな聲明を以て彼我の間に取交はされた交涉の顚末を第三者に明かにしたからとて、無い袖は振れぬ道理で、向ふから折れて來る事を期待し得ないのである。あれで解決が着くと云ふなら餘りに理屈に拘泥して事情に迂なるの譏を免れざるが、又民間の議論などは政府の力でどうにでも壓迫が出來ると考へて居るならば、之れ亦甚しき官僚的偏見といはざるを得ない。

支那の政府が右の如き立場にありとして、更に考ふべきは政府を壓迫する人民が、何故我々の聲明する道理に承服して政府に對する在來の態度を改めないのか。之については我々は日本政府の立場の根據と、支那民衆の據つて以て立つ所と根本的に相違して居ると云ふ事である。吾人の立つ所は彼我兩國の間に存する條約の理論的解釋である。而して彼の據つて以つて立つ所は假令其中に幾多の謬謬と誤解とを包含するにしろ、事件を有りのまゝに觀たる上の道德的判斷である。換言すれば、甲は證文を楯として借錢を返せといひ、乙は其證文が不法に得られたものだと抗辯する。之に對して甲が敢て不法に得られたるにあらざる所以を說く事なく、徹頭徹尾證文の文句の形式的解釋を以て押し通さうとし

ては到底圓滿なる解決を見る能はざるべきは云ふを俟たない。

そこで向ふが何と云はうが事件がどうならうが、こちらが云ふ丈けの事さへ云へばいゝと云ふのなら之でもいゝ。少しでも事件の發展を促して確實に實際の效果を擧げようとなら、も少し變つた方法を執るの必要はあるまいか。言ひ換ふれば民衆の據つて立つ所の根據を取り、民衆其物にぶつつかるの必要はあるまいか。我の對手とすべきは政府の外にはないなどゝ云ふ貴族的な、或意味に於ては横着な外交振りでは何時まで經つても解決の曙光を見ることは出來ない。而して本問題に關し結局如何なる解決を告ぐるやは世界の耳目の前に日本國民の眞の外交的能力を試驗さるべき興味ある問題となつて居る。而かも此問題は本來夫れ程六づかしい問題であらうか。

一體外交は無理にいろ／＼な文句を證文に書かせ、出來る丈け之を活用しようとするのは極めて拙い遣り方だ。強い國が兵力を擁して弱國を强制する場合の外、實質的に何の效果も擧げ得るものでない。双方の友誼關係を事實の上に發展して、證文などは無くともいゝ、要り用なら文句は如何樣でも相談づくで書き得ると云ふ風にならなければならない。封建時代のやうに空名に拘はる世の中に於ては兎に角證文さへ取つて居れば、之を楯にどん／＼政策の進行が出來たかも知れないが、今日は名よりも實、而かも其實たるや國民の根本的諒解を必要とするのだから、外交方針も亦從つて舊い夢から覺め、方向一轉の勇斷を必要とするに至つた。之れ今日いろ／＼の形に於て叫ばるゝ靑年の要求である。

然るにも拘らず我國今日の當局者が、此時代の新らしき要求に對して動もすれば面を背けんとする色あるは我々の甚だ遺憾とする所である。尤も靑年の要求は時として舊式外交の攻擊になる。新に就かんが爲めに舊を罵るは已むを得ない。而して舊の捨つべきに氣附きながら尙民間の要求に屈して之を捨てたと云ふ形を取りたがらないのは官僚政治家の

常であつて、其甚しきものは、自己の良心に背いてまで厭くまで舊を善と强辯するを官憲の威信を保つ所以なりと考ふるものすらある。今まで寳丹が腹の痛みに最良の藥だと敎へて來た。今度新たにもつといゝ藥が發明されても今更ら之を推薦する譯に行かないと云ふのならまだいゝが、寳丹以外に良藥ありと主張するものを陰に陽に傷けんとするに至つては橫暴も亦甚しい。況んや寳丹式外交の已に却て有害なる事の證明された後に於ておや。而して對手方は官僚政治家の强辯如何に拘らず寳丹以外に良藥あるの新智識を十分に會得して居る。それに氣附かずして彼に依然として寳丹を强ひ、而して自國の之に反對するものを難ずると云ふのが卽ち今日の對支外交の狀態ではないか。彼と我と本當に結ばうと云ふなら虛僞を其間に混へてはいけない。眞實を語るもののみ獨り本當の親善關係を建設することが出來る。

最近一部の政客の間には對支外交の從來の誤りを悟り、之に何等かの變更を加へんと畫策するものはある、併し之は支那に於ける政界最近の變調に促されて止むなく方針の一變を迫られて居るもので、未だ自發的と云ふ事は出來ない。そは寺內內閣時代以來我國は北を援けて南を抑へ、北の中でも特に段祺瑞を擁立する所謂安徽派を陰に陽に援けたのであるが、最近之に對抗する直隸派の擡頭と共に、北方に於ける實權の地位は彼より此に移らんとしつゝある。之と同時に南方派亦陸榮廷、岑春煊の實力派と孫逸仙、唐紹儀、伍廷芳等の理想派との分立を見、而して前者は北方の直隸派と結び、後者は安徽派と結び、是に於て南北の縱斷的抗爭は、南北を通ずる甲乙兩派の橫斷的反目に代ると云ふ奇觀を呈するに至つた。そこで從來支那の統一は武力に依らざるべからず、而して最も强大なる武力を有するものを援助して一日も早く統一の實を擧げしむべしとする沒理想の打算政策は、期せずして眼を段祺瑞一派より轉じて、直隸派と岑陸一派との聯合に投ずるに至らしめた。併しこんな方策で成功するものなら、寺內內閣の援段政策が夙うの昔に成功してゐねばならぬ筈である。方策が變つても根本の思想が依然として舊套を脫しない。

然らば我々は支那の如何なる部分を對手にすべきであるか。之については從來いろ〳〵の機會に論究して置いたから玆に再び之を繰り返さない。只一言すべきは我々の對手とせんとする對手は、我國に於て往々親米派の名稱を以て知られて居る事である。親米派と云ふ名稱の正しきや否やについても大いに疑問があるが、一旦米に親んだからとて、更に我に親しましめ得ないとは限らない。一度他に思を寄せたからとて、永久自分に惚れぬものと極めるのは意氣地なしの事、確固たる自信あるものは手に入るまで競爭を續けるの氣慨あるを要する。而かも今日已に彼我一部の青年の間には秋波の交換が始まつてゐる。之を思想定らざる青年同志の輕薄なる狎れ合ひとして、頑くなゝ僻見を加へては日支兩國の親善は永久に立ち得ない。

尼港虐殺事件を何と觀る

文學博士　三　宅　雪　嶺

尼港虐殺事件の報道は、國民一般に特殊の胸響きを與へた。騷ぎもせず靜まり返つたのは、冷淡の爲めでなく、容易ならぬ事が起つたとして、思案したのである。待設けた事であり、前例が有る事であるならば、例に依つて例の如く騷いだりしようが、虐殺など他國の記錄で讀んだだけの事、それが同胞間の事實と成つては、暫時途方に暮れる形になる。是を觀て國事に冷淡と罵じるなど、分らぬにも程がある。報道を得て急に騷ぎ出さなんだのは、流石に國家的思想の錬磨したところあるを示す。不意の出來事ながら幾許かの用意を失はぬ。二十年も前ならば、いろ〳〵騷がしくなつたらう。その冷淡を責めるのが、國內に向ふ眼を國外に轉じさせようとするに在つては、いよいよ人が脚下に注意し、かゝる重大事件を手品の種に使はれて堪るものかと考へる。先づとくと事件を審かにしてからの事とし、漸く審かなるを得て適當の處置に出てようとする。決して無闇な事を求めず、成るべく當り前の道を踏んで貰ひたいと望む。

何と云つても問題は責任の所在と、善後の方策とに分かるる。兎も角も虐殺は非常の事件であり、何人も豫期せぬところにかゝる。憂ふべき狀態と察した者あれど、眞逾彼の如き事に成ると考へなんだ。當局者が出來るだけの事を爲し來つたと云ふのは、强ち曲辯するのでなく、自らさう心得て居るのである。要職に當りながら、好んで職務を荒廢する者は無く、出來るだけの事を爲し來つたといふのを認めて可い。併し出來るだけの事を爲しさへせば如何なる缺陷があるとて責任が無いと云へぬ。人間の智惠に限りがあり、運不運が伴ひ、時として無雜作に成功する事あると共に、時として意外の失敗を招くを免かれぬの覺悟を要する。都合の好い時ばかり責任を負ひ、都合の惡い時之を避けるなど、聊か算盤を脫れて居る。運の好い時あれば、運の惡い時に諦めねばならぬ。原首相は尼港事件を以て不可抗

の勢としたとかせぬとかの噂あるが、不可抗の勢として何故に惡いか。當局者に取つて不可抗の勢であつたに相違ない。當局者の智力で之を防ぐ事が出來なんだのであらう。不可抗の勢と云ふのが怪しからぬとするのは、斯く云ふて平氣で居るのを怪しからぬとするに過ぎぬ。不可抗の勢でも、當局者として責任を負はねばならぬ。責任を負ふと云ひさへすれば筋道が立つて居る。況して今少しく眼先きが利いてさへ居れば、彼の事件を未だ起らざるに防ぎ得たと知られては、いよ〳〵責任を負はねばならぬ。原首相に辭職せよと云ふのでなく、責任を明かにせよと云ふのである。首相に於ても其儘にして居らず、何とか爲るであらう。如何に爲すかゞ注意を値する。

一應陸海軍の關係者が責めを負はねばならぬ。其關係者まで不可抗の勢として自ら免れようとせまい。尼港から救援を要求したのが、司令部で受取つたのか何うか。受取つたとして、一層速かに救援し得なかつたか。司令部に於て責任を負ふとしようとし、又事の困難であつた事情と說明しようとするであらう。司令部で遊んで居た譯でなく、必ず心配し、骨折つたであらう、昨年十一月から今年五月まで交通杜絕し、其以前は安全に見えたと云ひ、既に危險の兆候があつたと云ひ、いろ〳〵云ひ合ひして居るが、露の政府を信用せず、極東に於ける或る臨時政府を信用する事が出來るか何うか。レーニンは當てにならず、之と交涉しようとせず、而して西伯利に出沒する若干の人物と約束し得るか。約束するは可いとし、それで安心し得るか。國家の趨勢は人智で測り難く、成りさうに見えて成らず、破ぶれさうに見えて破れぬ事があり、先見の明は何程か紛れ中りの嫌ひあつても、全く巧拙の差別ないとせぬ。明治維新の際英國は薩長を助け、佛國は幕府を助け、英が先見の明を誇り得るのは、それ程眼が利いた譯でなくても、比較的眼が利いたと云はねばならぬ。幕府は尙ほ助け甲斐あるとし、北海道に脫走した榎本一派は何うであるか。會津又は長岡は何うであるか。後雲井龍雄が同志を伴れ薩長を倒さうとした。其雲井一派を助けるのを以つて、眼が利いたとするか。雲井とて時勢が時勢なら何とか爲し得たかも知れぬ。併し彼の場合にさうは行かぬ。若し雲井の成功を期し之を助けたならば、失望に終つたらう。露の政府は如何に成るかゞ判らず、顚覆說の傳はつたのも一再でなく、眞に顚覆するかも計り難けれど、之を測り難いとし、之れよりも遙か無力なるものと共にし、それで安寧秩序が維持せられると考へ、幾月も交通杜絕するところに二個中隊を駐め、それで安心しては、事が容易過ぎるでないか。雲井龍雄が大丈夫と受合

つたとて、それで安心し得るか。政府に人多く、もつと露國の事情を解して居らうと思はれたのに、實際はさうでなく、却つて買被りたるを免かれなんだ。軍事當局者も解つたやうで解らず、外交の衝に當る者も、解つたやうで解らぬ。秘密の事が分らぬのは致方無いが、秘密でも何でもなく、公然過去及び現在の記錄に備はつて居る事まで會得し得ぬとは、餘りと云はねばならぬ。

露國人は親しみよく、打融けて話しする事が出來、眞に愉快を覺ゆるところあるが、罷り間違へば何んな殘忍な事を爲ぬと限らぬ。極端から極端に走るは周く知られ、神と皇帝とに從し、只命惟れ聽いたかと思へば、皇帝及び其一族を虐殺するを憚らぬ。奈翁に攻められ莫斯科を燒いて退いた如き、露國獨特の戰略に屬する。流石の奈翁も之を豫期し得なかつた。併し其後露國と云へば斯かる事を敢てするものと解するやうになり、事實以上に之を恐れるに至つた。日露戰役でも、露で講和を急かず、我れより進み、彼が退けば何うしようかといふを憂へた。パルチザンが日本の救援軍の來るを察し、之に先んじて尼港附近を燒拂ひ何處へ行つたか知れぬのは傳來の手段に出でゝ居り、彼等の側から見れば小規模に行つたのであらう。日本側では常に之を念とし、其準備を怠つてならぬのであつた。結氷以前に平穩であつたから、事變の起るに氣附かなんだと云ふが、此邊の事を考へて居れば何とか處置の仕樣があつたでないか。既に皇帝及び其一族を殺し、貴族富豪を迫害し、それで日本人を保護して呉れるか何うか、分つて居るでないか。ゴルドン將軍は異民族に對し赤心を披露し、熟く人の心を得るに長じて居つた。全く利慾心なく、己の所有するところを悉く人に頒ち與へる。將軍の居るところ敵心を挾む者が無い。寔に電の如く人の敵心を打推いて終ふ。カルツームに派遣されたのも、其邊の事情を以つてゞある。赴任するや果して能く民心を得たが、それでもマヂ軍に圍まれ、中に裏切る者があり、遂に殺された。彼自ら豫め覺悟して居り、人に云ふた、「我は職分を果しに行く。何とか成るであらう。成らなくても死ぬか殺される位のものである」と。能く人の心を得るのゴルドンでもさうである。威力を以て命令するだけで能く群衆の悅服するのを豫想し得るであらうか。日本の軍人は世界の何處へ出しても、軍人たるに背かず、何國の軍人にも敗けを取らぬ。文官でも他國のそれに劣るとせぬ。定り通りに事務を取るは確かである。除外例があつても、一般にさう云へる。然し近來何國でも排日熱の昂るのは、種々の事情あるにせよ、左樣然らばで押通し、人情で融合するやう

な事が缺けて居りはせぬか。惡るい事を爲さず、爲すべきを爲しても、他國人から見て何處となくいけ好かなく思はれはせぬか。内地でも民衆は高官に對し餘り快く感ぜぬ。高官が惡い事を爲すのでなく、何の落度もなく、只何處となくいけ好かなく感ずる。敵に對するやうに構へ込み、談判口調で話し合ひ打融けても奥齒に物が挾まつたやうである。舊幕時代の役人の遺習であらう。それに通譯官の數が少く、事情が通ぜぬとあつては、當方で出來るだけの事を爲しつゝ、彼の方で之を諒解せず、誤解に誤解を重ねる始末になる。

虐殺事件が知れてから、政府側で頻りに之を權力爭奪に利用してはならぬと說き、斯かる事は政黨政派を超越すべきものと稱する。これからして謬つて居る政。「府では何處までも責任を負ふ、内閣側にて責任を負ふべきものならば、何時でも之を負ふべきを辭せぬ。何とかして今後の處置を善くしたいもの」と云ふべきである。反對黨が何かと云へは總辭職を迫るのも褒めた事でないが、政府側で嚙り着き一方になるが故に、反對黨で忌ま忌ましく、總辭職を迫つたりするのである。反對黨から責任を問ふに對し政府側で自ら失敗を陳謝し、責任を負ふとすれば、何れ程事が圓滑に捗ぶか知れぬ。責任を問はれさうになるや、一生懸命に之を遁れようとするので事が面倒になる。ゴルドンが殺された事がグラッドストン内閣倒壞に與つて居る。今回の虐殺事件で首相が辭表を出さねばならぬと限らぬにしても、十分に責任を明かにするに努めねばならぬ。而し被害者をして只徒らに被害に終らしめず、成可く多く國家に關係あらしめるやうに取捗ぶを要する。從來對露策が一定せず、撤兵するやうな撤兵せぬやうな、露の政府と交涉するやうな交涉せぬやうな、煮え切らざるにも程がある。一國のみで事を處置し難く、他國の振り合ひを見ねばならぬにしても、軍隊のみ我國一國で動かし、其以外の事を悉く他國並にするなど、事の當を得て居ると云へるか。西伯利の一臨時政府を信じ、二年餘り續き來つた露國勞農政府を脆弱視せねばならぬか。勞農政府は運命測り難いが、測り難いとせば際限ないではないか。曾て露國帝政時代の政府を信じ、之と協約を締結し、東洋の平和を確保し得るとし、關係者に論功行賞し、幾月をも經ぬに其政府が顚覆したでないか。獨逸帝政時代の政府は模範的政府とし、只彼の如くなれば結構としたのが、今や跡形も無い始末になつて居る。用心の上に用心せねばならぬにしても、前の前まで心配しては何事も出來ぬ。臨時政府を信じ六七百人の生命を之に委ね、而して之よりも能く秩序を維持して居る政府を無暗に疑ひ、之に觸

れるのを無益とするのは、事の宜しきを得るものであるか。官吏は洋服を着ながら、舊幕時代の裃の形で之を着て居る。何處か不釣合である。衣服は何うでも宜いとし、何でも談判口調にせず、心から接近するやうに心掛けては何うか、今の官吏は以前程でなけれど、尚ほ排吏熱の起るのを覺ゆる。國民全體として愼むべきであつても、官吏自ら排吏熱を減ずべきである。斯くて漸く排日熱の減滅に取り懸る事が出來る。急に處置すべき事は急にすべく、此邊の事を慮かるを忘れてはならぬ。

自滅を急ぎつゝある知識階級

中澤臨川

マルクスは、彼の唯物史觀をその社會主義へと導く前提の一つとして、資本の集中といふことを擧げてゐる。卽ち今の經濟組合の進展するに從つて、次第々々に少數者の手に資本が吸收されるといふのである。この現象に當然隨伴して起るべき副現象は所謂中流階級（ミッドル、クラス）の衰滅であつて、同時に第四階級の增加であらねばならぬ。『共產黨宣言』の中にはこの事に就て次のやうに言つてある。「旣に我等の說明した如く、支配階級の全部は、產業の進步に伴つて、無產階級の中に沈降するか、さもなくとも彼等の生活狀態を脅かされるやうになる」と。

ながく疑問とされてゐたところの唯物史觀からのこの歸納的豫言は、今回の世界大戰といふ非常の出來事によつて、事實に近いことが證明された。戰爭に參加したどこの國でもが莫大の國帑を消費して戰後の經營に苦んでゐる一方には、戰爭によつて非常な利益を獲得した少數の成金者がある。不必要に富み且驕る者の出來た他面には、物價騰貴によつてその生活を脅かされつゝある多數の人間がある。殊にその中でも今日最も生活の脅威を感じつゝあるは所謂中流階級――特に知識階級――であらう。昔からその尊敬すべき特殊の位置を樂むことのできた大學教授に就いて見るに、今日の彼等は最早一般勞働者よりも低級な生活に甘んじなければならないやうな境遇にまで引き落さ

れた。彼等に與へられた割合に豊富な研究の餘暇でさへ、家族を養ふ内職の爲めには餘りに短いことが歎かれねばならない。英國の某雜誌に載せてあつた大學教授の生活の内幕なるものをみると、彼等の俸給の半分は税に、殘りの半分は物價騰貴の爲めに奪ひ去られると書いてある。もつと慘めな事は彼等の家族が内々古洋服や古靴を仕入れるといふ事實である。一般軍人、官吏、低級會社員などに就ても同樣の事が言はれうることは勿論である。

近代の知識階級者の生活が、どれだけ不自然で、機械的で、そして單調で、アンヌイなものであるかといふことは誰も知るところである。彼等は朝早くその務め場所へ出て、夕方は疲れて自分の家庭へ歸る。狹く薄暗い彼等の家の中で、物憂い彼等の頭にその妻子の顏が輝いて見えよう筈はない。それでも彼等は一たび沒入したかやうな生活から脫しようとはしなんだ。その理由は自分たちは社會の中心を成すところの重要階級であるといふ傳統的の矜持が一分、筋肉勞働者のやうに「汚賤(ダーテイリー)」でないといふ虛榮が四分、生活の安全を亂すまいとする怯懦心が五分である。(第二に擧げた理由、卽ち彼等が勞働者の位置をどれだけ賤み嫌つてゐるかといふ事は殆んど想像以上である。私は之に關し、玆に談るべき一つの經驗を有してゐる。餘程以前、私が或る電氣鐵道會社に勤務してゐる頃、改札番人等の給料の薄いのを憐んで、彼等を工夫と同樣の制度のもとに待遇してやらうとした事がある。然るに意外にも彼等はその改正を喜ばなんだ。その主なる原因は、給料は增加しても、詰襟の洋服を脫いで法被(はつぴ)すがたになるのが非常の恥辱のやうに思はれたからである。所謂紳士階級又は洋服階級の虛榮がどれだけ强いかといふことは此一事からでも分り、それから推して彼等が勞働者階級に落ちるのをどれだけ恐れてゐるかといふ事。從て中流階級と第四階級との間には今日でも越すことのできない感情の溝渠があるといふ事を知ることができる。)

以上列擧の理由からして、戰前の知識階級はそのアンヌイな生活を忍耐してまでも、自己の現在の位置に十分の執着を有して、それが安全の爲めにはあらゆる犧牲を拂つて來たのである。然るに、前に述べた如く、今回の戰爭は憐まるべき彼等の位置に更に一段深刻な激動を與へた。なぜなら、彼等の唯一の本據とする生活及位置の安全さへが不自然な物價の變動によつて根底を覆されたからである。上は勅任官、大學教授より下は郵便局の書記に至るまでの凡ての知識階級が、最早晏如としてゐられなくなつた。不平の聲はあちらからもこちらからも起つた、中流階級の救助を叫ぶ聲が、兎角けたゝましい勞働運動の

撃に打消されがち乍らも、それの斷え間々々に聞え出した。

併し、世界を通じて中流階級又は知識階級の反抗の聲は至て煮え切らない微弱なものである。彼等の間には一つの力强い組合さへない。我國にもS・M・Uとか著作家組合とかいふものがあるが、それ等がどれだけ有効な活動に這入りうるかは、今のところでは先づ絶望に近い疑問とされる。そこで我等はかういふ疑問を發せずにはゐられない――「社會に於ける員數としてはかなりの大多數を占め、且つ現社會の重要な諸機關を掌つてゐるところの彼等がなぜさう微力であるのか?」「なぜ彼等の團結力はさう薄弱であるのか?」と。

想像力の鈍い世界の常識はかういふ。それは彼等知識階級者は他の社會に比べて節操の德を知つて居り、自己の位置に對すに責任を解してゐるからであると。殊に武士道の信者は、之を以て我國傳來の美風の尙殘つてゐるものと見做して、消費的な謳歌をさへそれに惜まないのである。私も亦かやうな節操又は矜持が傳統的に今日の知識階級の心理の一部を支配してゐることを否む者ではない。併しそれは前にも擧げたとほり、贔屓眼(ひゐきめ)に見たところで彼等の非活動的心理の十分の一にも足りない。彼等を支配する他の十分の九の動機は、私の見る處では、彼等の病的心理狀態に歸せねばならない。その事を私は次に說明するであらう。

今日の所謂知識階級は十九世紀文明獨特の產物である。彼等の利器は理知と科學であつた。それを提げて一世紀間彼等はどれだけ勇敢に戰つたことであらう。そして彼等はどれだけ廣い自然の野に於て眼覺ましい成功を收めたことであらう。併し成功の裏には油斷と驕慢があり、永い戰のあとには回復の覺束ない疲勞があつた。彼等は物質的成功に滿足して精神と神とを忘れた。彼等の理知主義は虛無主義的の個人主義を導いた。彼等は自分自らが造り上げた煩瑣な「文明」に眩惑して極度の神經衰弱に陷つた。その爲めに彼等は冷笑的になり、猜疑的になり、孤立的になり、感傷的になり、利我的になり、恐怖的になつた。

貴族に盛衰のあ　やうに、階級にも亦盛衰がある。佛蘭西革命が"repentant noblemen"を葬つたやうに、今日の中流階級者はこの過渡時代に際し"repentant intellectuals"として、彼等の文明と與に葬らるべき順番にあるのであらうか。黃昏が彼等の階級の上に推寄せて來てゐる、彼等の生活は不安と恐怖のほかに出でない。彼等は責任と鬪爭と冒險と努力　を忌避する。彼等の孤立的日蔭主義は彼等に團結の力をさへ與へない。彼等は冷笑的猜忌と多大の恐怖とを以て勞働者の運動を眺めてゐる、彼等の中に生れた勇敢な戰士は　今日皆な勞働者の味方と

じて彼等を見捨てゝ行く。それで彼等の中には賢い人、善良な人はあるにはあるが、併し一人の行爲の人も無い。彼等の凡てが疲れてゐる。彼等は今日の思ひ設けない不幸に逢つて猶更その心を沮喪さした。我等の祖先が幾度か繰返した傷々しい嘆聲――

"And thus the native hue of resolution
Is sicklied O'er with pale cast of thought."
――"Hamlet"

は、今日の知識階級者の嘗めつゝある苦がい味である。

然らば之が救濟の策はないかといふに、その第一の急務は彼等の強固な組合を組織して勞働組合と親密な聯盟を結ぶにあることは勿論である。今日の中流階級者は個人的には階級思想の保守者であるが、團體的には比較的容易に勞働階級の同情者でありうる。それに物質的利益の點から見ても、彼等はこの儘資本家に隨從して行くよりも、勞働者と聯盟した方がましである。現にかやうな運動は英國あたりで起りかけてゐる。

併しこの事は、言ふは易いが實行は却々困難である。彼等のデカダンスは第一に必要な彼等の勇氣を奪つて了つた。彼等の理知主義。個人主義は彼等の要求する團結を破壞するに十分である。それに彼等の女々しい恐怖心は勞働者と聯盟への道を深い感情の溝を以て阻んでゐる。「鐵鎖のほか失ふべき何物をも持たぬ」デスペレートな勞働者に對して、彼等は失ふことを恐れるところの餘りに多くの物を有してゐる――その小さな虚榮、そのワイシャツ、その赤靴、その家具、物憂い乍らにともかく外面的には安全な彼等の家庭の小平和。かやうな障害の爲めに、この儘では、今日の知識階級が組合の力によつて直ちに第四階級と聯盟するといふ事は非常な困難である。今のところ自滅が彼等の運命である。

之に對し私はたつた一つの救濟策を知つてゐる。それは勞働階級との附燒刄の聯盟でなくて、二つの階級の漸的融合である。もつと具體的に言へば、既にその使命を果した階級が新興の階級の犧牲となることである。今日の知識階級は再び生れるために一度は死なねばならぬ。併し彼等は失望することはない。死ぬ者は彼等自らではなくて彼等の階級であるから。かくて新しき階級に再生する彼等又は彼等の子供は今迄とは違つた希望と幸福とに充ちた廣い原理を見出すことであらう。同時に彼等の融合は新興階級を啓發することに於て非常に役立つであらう。遠き未來を考へると、彼等の死は必ずしも死ではない。

然らばかやうな融合はどうして達せられるかといふ最後の疑問が殘る。私の意見ではそれは正しき方向に振向けられた教育によるほかはないと考へられる。今後の教育は、誰彼の別なく

勞働を出發點とせねばならぬ。勞働の尊いこと樂しいこと、必須なこと、普遍的でなければならぬことなどが、勞働の歴史及科學と與に教えられねばならぬ。かやうにして我等は眞の意味での平等、正義、自由、及び犠牲を解するに到るであらう。階級の對立は罪惡の對立である。二つの階級の聯盟又は妥協といふやうな不自然な現象は考へられない事である、ちやうど虎と狼との道件れが考へられないやうに。



「恐慌來」と國民生活

恐慌來と國民生活の不安

法學博士　堀江歸一

經濟的反動の時代

政府の當局者や政府の爲めにする者の言ふ如く、昨今、我國を襲ひつゝある經濟的反動が政府の試みる救濟策位で、其形勢を一變することが出來るならば、何人も我國の經濟社會に對して深憂を懷くことを要しない道理であるが、恐慌と云ふものは、決して斯う簡單に處置し得る可きではない。我國が數年來の好景氣から、今日の反動時代に推移するに就ては、世界經濟界の大勢に支配された點もあらうが、同時に原內閣が經濟上の政策を誤まつて、病根を深くし、又病症を重くするに至つた事實を否定する譯に行かぬ。政府では今度の恐慌を以て、世界經濟の大勢の然らしむる所であると云ふことを力說し、一方に自家の秕政に就ては、全然之を棚に上げて、成る可く世人の注意を外に向けやうとして居るが、天下の識者は決して斯る言論に惑はされるものでない。戰時數年間歐米諸交戰國の經濟社會は活氣極めて旺盛であり、其影響は他に波及して、我國の商工業にも大なる刺戟を與へたことは、蔽ふ可からざる事實であつたが、其原因は要するに諸國が戰時經濟を維持する爲めに惜氣もなく經費を支辨して、外國から物資を購入する、自分の國の財力で支拂をする道がなければ、他國に信用を起して、尙ほ物資を需要する、軍事費が國民に撒布されゝば、更に國民各自の物資に對する需要をも增進すると云ふ勢で、戰爭若しくは戰時經濟なるものが廣く國際間に經濟上の働きを刺戟することゝ爲つた次第である。我國の經濟狀態に就て考へても、生絲が一時四千數百圓の高値に上つて、尙ほ米國に輸出されたとか、諸株式なり、米綿絲を始め總て投機取引の目的物と爲る商品の市價が、戰前の二三倍は愚か、數倍の高きに上つたとか、金利が非常に低落し

て、金融が緩漫と爲り、新事業が盛に發起され、然も新會社の株式は必ずプレミヤム付きで賣買されるとか、凡そ好景氣に伴うて生ずべき經濟上の狀態は相次ひで起つたのである。

恐慌來の責任は政府に在り

随て歐洲戰爭が終熄して、國際間の經濟が戰時の混亂した狀態から、段々整理されて、平時の狀態に恢復することゝ爲れば其間に以上と正反對の現象に接するのは、略ぼ世間に想像された所である。さればこそ、戰爭中、獨逸が講和を提議したと云ふ外國電報に接した場合でも　交戰諸國が愈々休戰條件の決定に着手したと云ふ報道を得た場合にも、我國の株式市場や、其他の投機市場は非常の打擊を蒙つて、半恐慌の慘狀を生じたことは、吾人の記憶に殘つて居る所である。即ち戰爭が終れば、日本の經濟社會に不利の影響が來る、商工業の不景氣も亦免かれ難き所であると云ふことは、略ぼ世人に依て了解されて居つたのである。故に此場合に政府が經濟社會の大勢を見越し、又講和成立後に外國の經濟狀態に生ずる變動やら、其變動が我國に及ぼす反應を達觀し、適當の警戒を加へて居つたならば、反動來は到底免かれ難いとした所で、其影響を局限するを得たに相違なかつたのである。經濟社會に一度は危機が殺到する、而して其殺到する時も亦餘り遠くないと云ふことは、識者の間に於て略ぼ認められて居つた所であつて、斯くて通貨收縮論や、金利引上論は種々の機會に於て主張され、現に私の如きも本誌や其他の刊行物に於て、屢此種の議論を公にしたのであるが、經濟政策實行の衝に居る政府は果して何事をしたであらうか。原內閣の財政當局者は常に民間の通貨收縮論や、金利引上論を默殺し冷笑するの態度に出でたのみならず、寧ろ放漫極まる財政策を濫行し、不謹愼なる金融政策を盲斷して、彌が上に通貨を膨脹させれば、物價をも騰貴させ、斯くて世間の好景氣が刺戟されて虛業の跋扈するのを以て、經濟上の施設の宜しきを得たものとして憚らなかつた。原內閣が經濟社會に如何なる暗礁があるか其暗礁の所在は勿論、之に向つて、船が近づきつゝあることを知らずして、無暗矢鱈に商工業の景氣を煽り立てゝ居つたのは、誠に危險千萬な話であつた。然し休戰條約の成立、講和會議の開始、講和條約の締結と爲つて、時勢は段々變つて行く、遲鈍にして、愚昧な當局者の腦髓にも何ものかゞ、映じて來たのであらうか、昨年の下半季に爲つてから、十月に一度、十一月に一度相次いで日本銀行の金利步合に引上げを行ひ、金融を引締めることゝ爲つた。日本銀行が一個の意思で、金利政策を決定し得たならば、是れより以前に警戒的手段を施したであらうか、

日銀當局者は如何に此手段を欲しても、政府が金利引上を許可しなかつたので、所謂證文の出し後れと同様の姿に終つたのであらうか、斯う云ふ問題に對しては、局外に居る吾人は何とも判斷を下すことが出來ない。然し何れにしても日本銀行の金利引上は市場を警戒する手段としては、時機を逸したが、金融を引締める點に於ては、大なる效果を揮した。即ち日本銀行の金利歩合の低かつた時代には、市中諸銀行は日本銀行から安い金利で融通を仰いで、何時でも手元の窮迫を救うことの出來る自信があつた爲めに、諸銀行自ら金利を安くして、盛に貸出割引を行ひ、信用を膨脹させて、顧みなかつた。諸銀行の預金に對して、金銀在高の割合が非常に低い所まで下つた事實の如きは、要するに諸銀行が日本銀行に依賴した結果に外ならないのであるが、其日本銀行で續々金利を引上げて來た、萬一の場合に、日本銀行に就て、資金の融通を仰がうとしても、高い利子を負担しなければならぬ狀態と爲つたので、市中諸銀行も自ら衛り又自ら備うるの必要から、貸出割引を制限することゝ爲つたのである。

銀行が或る場合に信用を膨脹させ、又他の場合に之を收縮させ、其伸縮を決する方便として、金利歩合を上下するのは、普通の出來事であつて、毫も異とするに足らない。然し何分にも我國では從來金融の緩漫、事業熱の昂進を極めて居つた折柄、其反動として遽に信用の收縮を生じた爲めに、經濟社會の全體に及ぼした影響は重大ならざるを得なかつた。即ち其第一は株式市場を始め商品市場に於ける、物價の暴落であり、第二は銀行の破綻であり、第三は新事業の頓挫であり、第四は商品の投賣であり、第五は勞働者の失業、俸給衣食者の失職であり、是等の事實が因果の關係を持ちつゝ、相次いで起る爲めに、遂に經濟社會を舉げて、恐慌の狀態に陷らせ、今日の處では、何時に爲つたならば、一陽來復を期することが出來るか、之を知るを得ないのみならず、恐慌其ものゝ慘害を減ずる方策に就ても、殆ど其行はれんとするものゝないのは、吾人の遺憾とする所である。

銀行經營の根本問題

今度の恐慌が將來如何に發展するかは一個の問題であるが、今日までの經過に就て云へば、最も世間に刺戟を與へたのは、七十四銀行の支拂停止、之に關聯する豪商茂木氏の沒落に外ならぬ。我國に於て近年銀行制度は大分整頓し、銀行自身の基礎も相當に鞏固に爲つたと云はれるに拘はらず、少し經濟社會に變動が起ると、著名の銀行で、支拂を停止して、恐慌の先驅を

したり、又は世間を騒がすものがある。日露開戰當初の百三十銀行の如き、其後に於ける北濱銀行の如き、隨分大なる波動を經濟社會に及ぼしたが、其原因は何れも當業者が投機的企業に關係して、之に銀行の資金を固定させ、其回收を果さない間に經濟上の趨勢に變動を生じて、企業其ものに失敗を來したことに外ならぬ。今度破綻を暴露した七十四銀行に就て考へても亦同樣であつて、此銀行は先年茂木氏が株式の多數を買收して以來事實同氏の機關銀行と爲つて居り、七十四銀行が世間から吸收した預金は茂木氏の事業其ものに融通される姿と爲つた。事業家の立場から云へば、高い利子を拂つて、事業に要する資金を銀行に就て借入れるよりも、自分の機關銀行をして貸出利子より餘程低い利子で、世間から吸收させた預金を營業上に利用する方が割に合う譯である。是れが相當の事業家に爲ると、必ず自家の機關銀行を所有するに至る理由であつて、茂木氏亦此理由を以て、七十四銀行に臨んだものと考へられる。然しながら茂木氏の經營する事業の内には、或は貿易であるとか、或は船舶であるとか、或は一般商事中、投機的企業に屬するとか、經濟上の狀態に依て、隨分急激な變動を蒙る可き性質のものがあり、現に茂木合名會社の大阪支店長某と呼ぶ者の如きは、得意に綿絲の買占を試みて居つたと云ふことである。是等の仕事に要する資金が盡く銀行の吸收した預金に依て供給され、事業が意の如く行はれない場合には、之を盛り返す爲めに更に多額の資金が銀行の手を經て供給される。斯くて一旦經濟社會に於ける反動に襲はれて、事業が頓挫すれば、銀行の注入した資金は事業に固定するか、或は損失と爲つて、消滅するか、孰れか一に歸するを免かれない、世間で薄々斯る樣子を知つて、預金者が銀行に取付けを始めれば、銀行は固定させたり、損失したりした所の資金を如何ともすることが出來ず、忽にして支拂を停止することゝ爲るのである。

銀行にして預金銀行であり、世間公衆から預金を託され、要求拂の債務を負うて居る以上は、營業資金を運用する場合にも短期の手形を割引するとか、短期の擔保付貸出をするとか、要するに資金其ものを流動させることを主眼としなければならぬ。是れが預金銀行なるものゝ營業上の本則であつて、預金銀行でありながら、投機的企業に資金を融通し、殊に此方面に資金を固定させたならば、預金銀行の本色に反するの甚だしきものである。然るに茂木氏なり、七十四銀行なりの場合は如何であるか。七十四銀　が預金銀行であり、殊に近來預金の增加著しきに至つた場合に、以上の本則を無視し、茂木氏の事業に對する機關銀行として働いた以上は、茂木氏の事業と共に、銀行の運

命を犧牲に供したのは、必至の勢である。我國には近年從來の預金銀行型の銀行經營振に滿足せず、銀行をして進んで企業の發起經營に參加し、積極的に、又能働的に活動せしめなければならぬと云ふ意見が頻に行はれて居つた。然し銀行が斯う云ふ方針で營業する以上は、其營業資金を預金以外に求めなければならず、預金其ものを營業資金とすること從來の如くでありながら、事業の發起や經營に銀行の資力を注入するのは、銀行をして甚だしき危險を冒さしめるものに外ならない。私は此論點から一部論者の銀行營業刷新論なるものに同意するに躊躇せざるを得なかつた。茂木氏の如きは、七十四銀行に對して、不言の間に營業刷新論を實行して居つたのであるが、其結果は卽ち今日の如くであるとすれば、無暗に營業刷新論を銀行に應用するの不可なるは論を俟たない。富豪の機關銀行として、富豪其人の事業に金融上の援助を與へ、然も之を與へるに就て程度を逸して居るの例は他にも澤山あらうと思はれる。私は今日直に斯る銀行の信用に就て、云爲するものではない。唯機關銀行の經營者が銀行業者としての責任を嚴守すること、預金銀行は飽くまでも從來の營業振りを以て足れりとすること、銀行の營業をして工業の發起經營に干與せしめんとする以上は、營業資金を預金以外に求めなければならぬこととの三點は將來の注意までに、私の特に主張して置かうと思ふ所である。

恐慌救濟策の效果如何

曩日大阪市で增田ビルブローカー銀行が手形交換不能から支拂を停止する、次いで橫濱東京大阪等に本支店を構へて、盛大に營業して居つた七十四銀行が支拂を停止し、茂木氏が倒產の悲境に陷つた、其他諸地方に於て株なり、綿絲なり、生絲なり、鐵なりで暴富を占めて、之に誇りつゝあつた大小の成金が何れも痛手を蒙つて、中には再び起つことの出來ないものがある、株式市場は連日棒下げの悲境であり、仲買人の間には、夜逃げを爲兼ねない者もあると云ふ。是等の諸事實を擧げれば、今日の經濟社會が恐慌の襲う所と爲つたのは、爭う可からざる所であるが、玆に一ツの問題と爲るのは、此恐慌狀態から、不景氣卽ち商工業沈衰の時代が幾年かに亘つて、繼續するか、夫れとも恐慌が救濟され、人心の不安が一掃されると共に、從來の如き好景氣に恢復するのは困難であるとしても、平生の景氣に復するであらうかと云ふ點である。此問題を解決するに就て第一に考へなければならぬことは、政府の目今計畫しつゝある救濟策が幾何の效果を奏するやと云ふ一事である。政府は如何なる救濟策を行つて、局面を轉換する工風であるか。金融の梗塞が經

濟的反動の原因であり、經濟社會の局面に現はれた幾多不祥な事實も總て金融梗塞に胚胎して居るものである以上は、恐慌の救濟、不景氣の轉換を計畫するには、一に梗塞した金融を疏通することを以て、出發點としなければならぬ道理であるが、此點に就て、何人かに確乎たる成算があるであらうか。成る程恐慌以來日本銀行は株式綿絲其他當業者の窮狀を救濟すると稱して、多少金融に手加減を施し、資金の融通を謀つたやうであり、蠶絲業者に對しても亦結局同樣の救濟が行はれたやうである。斯くて日本銀行の一般貸出高は近頃に至つて著しく增加したやうに見受けられるが、是れだけで果して經濟社會を救濟すると云ふやうな根本的效果を擧げ得るであらうか。如何にも現に物資の生產に從事しつゝある人殊に銀行から資金の融通を受け、自己の信用の限りを盡して、事業を擴張した人であるとか、他人に物資を註文して、未だ之を引取らず、引取つたとしても、未だ代金を決濟しない人などは經濟的反動殊に金融の梗塞に苦んで居る。隨て政府の計畫しつゝある如く、日本銀行が諸銀行に貸出を寬大にし、諸銀行亦日銀の意を承けて、是等の人々に資金を融通したならば、彼等を一時の窮境から脫せしむることは出來やうが、彼等の困窮を救つたことが同時に經濟社會全體に幾何の利益を齎するであらうか。

株式の市價が今日より少し高く爲つたならば、株式市場救濟の目的は達せられやう、然しながら之と同時に株式市場が恢復して、株式の市價を堅實に騰貴させて、事業の振興に資するを得るであらうか、此働きがあつてこそ、株式市場の救濟は卽ち經濟社會の救濟ともなり、景氣の變轉とも爲るのであるが、此事の望まれない限り、聊か日本銀行の手加減で、或る方面に資金を供給した處で、當面に困窮して居る者を救ふのに止まつて困窮する者は相次いで生ぜざるを得ない。或は政友會の一部議員などの間には、今日の救濟策として、日本銀行をして大に民間に資金を融通せしめやうとする說が行はれて居るが、日本銀行と雖も、決して無限 資金を擁して居るのではなく、隨て經濟社會に於ける飽くなき要求に應じやうとするならば、通貨に膨脹を來し、結 兌換制度の根柢を危うするに至らざるを得ない。或は原內閣成立の當初、原氏や高橋是淸氏が無暗に世間の人氣を繫ぐ爲めに、如何なる積極策をも濫行して、憚らなかつた時代であれば、兌換制度を犧牲に供すること位ひ、顧み かつたかも知れないが、今日の如く何度も經濟政策の上に蹉跌を來して世間の非難盛な 場合には、彼等にして如何に非常 であり、又虛業保護に熱心であるとしても、到底右の如き蠻勇を演出するだけの元氣はあるまい。政友會の議員輩が原、高橋氏の平生の

言論や、性癖に徹して、原氏なれば通貨の膨脹を辭せないだらう、高橋氏なれば、金利引下を斷ずるだらうと想像し、得手勝手の救濟策を案出して、兩氏に實行を迫つて居るのは、世俗に謂ふ「親の心見知らず」の類に外ならない。

生絲の市價の底知れずに低落するのを如何にして防がうとするか、生繭の價格を維持して、養蠶家を救濟するには、如何にしたならば宜しいかと云ふことは、養蠶業が我國重要の產業であり、生絲貿易が我國輸出の大宗である關係から、特に世人の注意を惹いて居る。若しも徹底的救濟策を求めたならば、政府が適當の價格を以て、生絲を買收し、如何に經濟社會に破瀾が起つても、生絲の價格の低落す可き最低限度を保證するの一事であるが、斯の如きは國庫に莫大なる經費の支辨を訴へる譯であつて、如何に蠶絲業救濟に熱心な政府と雖も、實行に堪へないであらう。然らば蠶絲業救濟とか、生絲貿易振興とか、如何に大きな聲で叫ばれたとした所で、實際の救濟策は生繭を所有して居る者、蠶絲を所有して居る者に金融の便を與へて、一時の苦痛に當らせるに過ぎないであらう。

恐慌の對外的原因

斯く經濟振興を目的とする救濟策を案出することの困難である原因は如何なる邊に在るかと云へば、今日の不景氣たる、遠く其源を外國に於ける經濟上の變動に發して居つて、我國の獨力を以て、如何ともするところの出來ない事情に基くのである。金融の梗塞に就て考へるに、或は物價騰貴の爲めに、以前と同じ規模の仕事を計畫するにしても、倍以上の資本を必要とするの關係から、資金に對する需要が劇增したことの如き戰時數年に亙る好景氣に乘じて、虛業が起つた爲めに、資本が或る方面に固定し、又は空しく費消されたことの如き、其原因たるを失はないが、更に有力なるものは、昨年の下半季以來繼續する輸入超過併に貿易外收入減損の結果として、我國が內外に所有する正貨に減却を來し、此有樣で進んだならば、遠からず日本銀行の兌換券發行高に反動的收縮を生ずるのは、免かれ難い勢である。と云ふことが一般金融業者に依て想像され、結局銀行をして自衞の爲めに、金融引締めの已むを得ざるに至らしめた次第である既に然る以上は、今後貿易其他の關係から、正貨減少の勢が止まり、寧ろ正貨に增加を見ることの明白と爲つた場合には、今日の如く梗塞した金融も緩和するであらうが、我國の貿易は物價が今日よりも著しく低落した曉に於てこそ、輸出の增進する見込こそあれ、諸外國の平準點に比較して、我國の物價平準點の方が高きに居る場合には、輸出超過の如きは、到底望まれず、

海運業の運賃の如きも、戰時に比較すれば、收入高を減ずる道理であつて、斯く觀察するときは、當分我國の金融業者は正貨取付、兌換劵收縮の勢に壓せられて、始終金融取締の方嚮に出るものと認めて、間違はあるまい。否從來の日本に於ては、物資の少ない割合に、通貨が多きに過ぎて、爲めに物價に異常の騰貴を來して居つたのである。而して戰後世界經濟の狀態が漸を以て戰前の狀態に復歸しつゝあるものとすれば、此物資と通貨との關係に先づ調節の働きを見る可きは勿論である。供給の少ない物資は如何にして充足されるかと云へば、一部は輸入の増加に依り、他の一部は輸出の減少に依るのであつて、斯くて一方に輸入超過に對する決濟を行ふ爲めに、正貨が拂出されれば、兌換劵の收縮するのは勿論、信用も自ら縮小し、物資の増加したのに對して、通貨が減少する結果、物價の平準點は自ら低落するこゝと爲るのである。諸外國も數年に亘る大戰爭に關係して、國内の經濟狀態に非常な攪亂を受けた今日であるから、今後如何に此狀態が動くかと云ふことに就ては、常軌を以て律す可からざる點もあるが、諸國が戰後經濟復興の根本原則として居る所は、外國より少なく買つて、外國に多くを賣らうと云ふ一事で、殊に外國から國民生活上の必要品や、國民産業上の原料品を輸入する場合は兎に角、是等以外の物資を輸入することに就ては、嚴重に制限しやうとする傾向が見へる。現に米國に於て日本の生絲を法外な價格で、多量に輸入することが昨年來世間に於ける非難の標的と爲つた一事に徴しても、一斑を窺ひ得られる。斯の如くして歐洲の諸交戰國は有利なる貿易狀態を作つて、外國債の負擔を容易に減却しやう、内國に於ける通貨を整理しやう、資本の供給を潤澤にしやうとするものに外ならぬ。多數の國が多く外國に賣つて、外國から少なく買はうとするのは、恰も「マーカンチリズム」の誤謬を二十世紀の今日に繰返さんとするものであつて、果して如何なる程度で成效するやは一個の疑問であるが、聯合諸國が獨逸に對して強要した講和條約の如き、若し勵行されたならば、右の目的を達するに資する所であらう、又日本の如き戰時無暗に内國の通貨を膨脹させて、戰後に之を收縮させやうとせず、寧ろ物價の平準點をして諸國に於けるよりも、高からしめて居る國などに向つては、諸國は最も有利なる條件の下に物資の輸出を試みるに相違ないのである。英蘭銀行は昨年十一月上旬六分に引上げた割引歩合を本年四月中旬に至つて、更に七分に引上げ、市中諸銀行の割引歩合亦之に準ずることゝ爲り、一方に米國に於ても、聯邦準備金銀行は餘程前から割引歩合を六分に引上げて居る、是等は兩國共に、戰後の今日に於て、通貨を回收し、信用を收縮して、經濟

社會を平時の狀態に復舊せしむるに就て、如何に意を用ひつゝあるかを語る材料とするを得るのである。諸外國が斯る政策を講じつゝある場合に、日本獨り戰後の經濟に起る可き變動に處する用意も、準備もせず、信用も通貨も共に無限に膨脹させ、物價も暴騰させ、今や反動來に接すること〻爲つたものであるとしたならば、其影響は自ら大きく、反動後何年かに亘つて、不景氣の現象を生ずることに就ても、覺悟しなければなるまい。

不安なる國民生活

經濟社會の將來に就て、判斷を下すのは、甚だ危險の業であつて、私の敢てせざる所ではあるが、今日の狀態から推せば、貿易の逆勢は今後益々强くなり、信用は收縮し、通貨は減少し、物價も相當の處まで低落すると見なければならぬ。唯經濟社會が此大勢に支配されるまでには、自ら時を要する。例へば、我國で物價が何時に爲つたら、下落するかと云ふ質問は常に私の受ける所であつて、或は昨今既に恐怖が起りながら、物價の尙ほ低落しないのは、何故であるかと云ふやうな質問にも接するが、概して恐慌の際には一般の物價は低落しないものである。株式の市價であるとか、米、綿絲の定期相場であるとか、總て投機取引に依る價格は恐慌と共に、下落するが、此以外の物價に至れば、必ずしも然る譯のものではない。現に過日來棄賣投げ賣などが市場に行はれたが、是れなどは、偶々物資を抱へて居りながら、金融の便を失つた商人が現金を手に入れたい爲めに試みた一時の手段であつて、手元に在る商品が處分されたならば、其跡を絕つ可きであるのみならず、原產地に於ては、製造業者は頻に生產を制限して、價格を維持することに勉めて居る。而して彼等の努力も或る程度まで效果を奏するものと認められるが、大勢には打勝つを得ない。即ち彼等が幾ら生產を減縮して、市價を維持しやうとしても、第一外國から供給の不足した物資が輸入されるであらうし、第二輸入超過の爲めに、內國の通貨は益々減縮するであらうし、第三原料品の價格が低落する一方に、勞働者の賃銀亦低廉と爲つたならば、生產業者は何時までも生產縮小と云ふやうな消極的手段を取らず、下落した賃銀、下落した原料品を採算の基礎として、假令ひ金利は幾分高くとも生產を擴張し、內國市場に於ける物資の供給を豐富ならしめるを得るであらう。此時に至つて、物價は今日よりも下落して然も經濟社會に堅實なる發達を期し得るのである。

然しながら恐慌が暴發して、其れが鎭靜し、不景氣の時代を經て、經濟社會が堅實に發達するまで、國民生活は如何なる影響を蒙るであらうか。恐慌時代に於ける影響の最も大なるもの

は、財產に及ぼす危害である。成金者流の沒落するのは勿論、今日或る銀行が支拂を停止したと思へば、明日は或る會社が破產したと云ふ狀態であつたならば、世人は財產上に多少なりとも影響を蒙るであらうし、又危險を感ぜざるを得ない。特に近年株式の所有又は之に關する投機取引が都鄙到る所に行き渡つたことは、驚く可きばかりであつて、現に私は昨年夏長野縣の或る小さな町に滯在したとき、其町の養蠶家や製絲業者が繭なり、絲なりで儲けた金を東京の仲買人に廻して、東株の新を思惑で買つたり、時に賣つたりして居ると云ふとを聞いて、一驚を喫した次第である。彼等にして東株の新を賣つたり、買つたりする度胸があるとすれば、新設會社の株も引受けたらう、既設會社の株式で、目星しいものを買つたであらう、其れが今日の如く一齊に下落し、然も金融梗塞の爲めに、之を持ち堪へるとが出來ないとすれば、彼等が生活上に困難を蒙ると共に、株式の價格が常に低落することも、自ら道理ありと云う可きである。富豪や資產家は恐慌の爲めに損害を蒙り、不景氣の際にも苦痛を感ずるであらうが、中流の階級に居る者も其財產上に相應の打擊を受けたことを否定するを得ない。

然らば下級の無產者階級は何等の損害をも受けないかと云ふに、必ずしも然るを得ない。恐慌來事業が縮小され、閉鎖された結果として、失業の危險は俸給衣食者の階級にも、勞働者の階級にも殺到して居るではないか、一時事業熱の旺盛な時に、官界などを辭して、實業に就いた者の如き、收入の增加を喜んだのは、束の間であつて、今や罷免の運命に迫つて居ると云ふではないか、一の茂木氏の事業でも、今度の破綻で、解雇された者の數は一千數百名もあると云ふ。此他諸種の事業を通じて、人員整理の爲めに、失業者が生じ、勞働界に於ける失業者と共に、社會に於ける遊民と爲り、浮浪人と爲る者も增加せざるを得ない。幸に職に留まつた者でも、賞與金とか、利益分配金とか云ふやうな好景氣時代の浮いた收入は無くなり、失業者の中には、存外敏腕の人士があつて、何時でも取つて代らうと云ふ者で、求職の運動をして居れば、現に職業に就いて居る者の地位は必ずしも安全であることは云はれないのである。官界事業界を通じて、戰爭の生んだ成金時代の根性を脫して、整理時代の眞面目な計畫に向つて、步を進めなければならぬ。此點より觀察すれば、政府が好景氣時代に於けると同樣の考を以て、公債を募集したり、又途方もない增稅などを計畫して、無暗に事業を擴張しやうとすることも間違ひである如く、國民の間に成金時代に醸成された奢侈浪費の惡風の一掃されないことも、間違ひである。恐慌は一の颶風の如きものであるが、其一過し

た後には、種々の慘害が殘るのを常とする。卽ち不景氣時代に於て、物價が低落し、事業が不振と爲り、失業者の簇生すると云ふ狀態は之に當るものであつて、社會をして斯る狀態から早く脫出せしめやうとするには、一に國民の勤勉努力、其結果として生じた資本の增殖に待たなければならぬ。恐慌の後に、何年かの不景氣が續き、再び產業上に活氣を呈することゝ爲るのは、此不景氣の時代に、國力の培養される結果に外ならない。我國民が今後の恐慌に覺醒されて、健全なる生活に就くやうに爲るか、政府も亦斯る風に國民を指導するであらうか、此事は國民經濟の盛衰を支配する問題として、特に考量しなければならぬ點である。今日に爲つて言へば、一場の繰言に類するが、原內閣の如き私黨の利益を謀るの外に、何等の經綸なき輩が政治財政の局に當つて居つた爲めに、當然或る程度に抑制し得べき經濟的反動の勢を今日の如く強からしめ、又不景氣の期間を永からしめることは、吾人の返す〲も遺憾とする所である。

恐慌來と俸給衣食者の得失

法學博士　河津暹

我國も遂に恐慌が來襲しました。

恐慌とは、一言で云へば、經濟社會の機關が急激に其活動運行を停止した狀態を云ふので、信用制度が破壞され、金融が閉塞し、取引が圓滿に行はれず、品物が停滯して引取手が無いといふやうな狀態を申すのである。故に外國の經濟學者の中には近年は通信機關・交通機關等が發達して來たし、又金融機關も整つて來たから、經濟社會には景氣の好い後は景氣が惡くなり、不景氣の後には好景氣が來るといふ、景氣不景氣の變りは有るけれども、急激に經濟機關が運行活動を止めるといふ事は有り得べからざる事であると說く人もある。併し乍らそれは經濟社會が比較的完全に成り、又經濟界の變動があつた時も、之に對する政策等に誤りがなくなつた曉に初て望み得られるとであつて、然らざれば望み得られないのであらう。現に我國に於て見る如く、經濟社會の組織に少からぬ缺點があり、又之に對する政策も十分に明瞭でないから、經濟機關の急激の停止を見るに

つたのである、甚だ遺憾な事と云はなければならない。

而して此恐慌來が社會各方面に種々な影響を及ぼすのであるが、御當により、特に俸給生活者に如何なる影響があるやといふ事を觀察して見れば、第一に注意しなければならぬ事は、恐慌來に次いで起る不景氣といふ事に伴つて物價が下落するといふ事である。物價下落は、言ふまでも無く定額の俸給に衣食する者に取つては有利なる事でなければならない。而して物價下落が俸給生活者の生活に直接關係があるのは、卸賣相場でなくして小賣相場である。卸賣相場は所謂玄人の間に行はるゝ相場であるから、之には自由競爭が割合に行はれて、從て經濟の法則の如くに動いて行くものである。けれども小賣相場はやや異つて、卸賣相場の如くに變動するものではない。卸賣相場が下落したからと云つて、直ちに小賣相場に影響して行くものでない、其理由は主として吾々消費者は、經濟社會の事情に疎く且同時に力の弱い者であるから、從つて小賣商業を營む者は消費者の不明と微力に乘じて、出來得る限り相場を下げまいとするからである。それに加へてやゝ高く仕入れて居るから、損失をしない爲めに出來得る限り其小賣値段を下げないのである。併し乍ら如何に消費者が微力であり不明であるとしても、經濟社會に反動が來ると自然社會多數のものゝ購買力が減少して來るから、何時までも小賣相場を下げないで居る譯に行かない。其結果小賣相場に影響して來る。斯くの如く小賣相場の下落が、なだらかに容易に行かない事を學者は觀察して、小賣相場の摩擦と云つて居る。

それは偖て措き、下落の勢は小賣相場に於ても物に因つて自ら異つて居る。贅澤品の如きになると、比較的早く相場の下落を見る。之に反して生活の必要品になると、相當に需要があるから下落する勢が緩いと云へる。それ故俸給生活者の方から云つて物價下落といふ事の餘慶を蒙る事は、主として生活の必要品に關係するから、卸賣相場の下落に後れねばならないと云へる。何時頃之に由つて相當に下落の餘慶を蒙るかは簡單には述べられないが、私共が豫想して居るところでは、卸賣相場の下落に後るゝ事半年、從つて此秋口にならなければ、我々の生活に眼立やうな影響を及ぼさない事と思ふ。而して其物價下落が如何なるところに安定するかは餘程難しい問題で、尙ほ今日私共が調査最中であつて明確なる豫見も出來ないけれども、價格の高かつた時の略ぼ三割安、戰前の相場の二倍前後であらうと思ふ。而して俸給生活者等の俸給などは、戰爭前に比較して、之れも事業により、又種々な原因から一樣にはなつて居らぬが、略ぼ二倍近いものであるらしいから、それから考へて、二倍前後で

落着けば比較的に自然ではなからうかと思ふ。之は全く豫想に過ぎないから、果して斯うなるや否やは分らないが、何れにしたところで程度又は時期に違があるかも知れぬが、物價が下落して來た事は確かであるから、俸給生活者の生活が容易になつて來る事は大體申述べる事が出來る。

併し乍ら之は俸給生活者に取つて利益ある方面を云つたのであるが、此恐慌來が俸給生活者に取つて不利益なる點も少くない。其中我々の考へねばならぬのは、第一は俸給の減少である。俸給生活者は定額の俸給を得て居るから、物價が騰貴した時に於いても、勞働者などに比較して、俸給の上る事が遲いが之と同時に物價が下落した時にも、俸給の少くなる勢も亦勞働者に比べて緩いのである。結局俸給も下つて來る不利はあるが、勞働者に比べてやゝ有利の地位に在ると云へる。而して俸給が減少して行くのは、只單純に俸給が減るといふ形で表はれるのは餘程後れて來るので、多くはボーナスの減少、又は俸給增加が困難になるといふ事で顯はれて來る。會社等に於ては實際の俸給の外、中元と歲末とにボーナスを與へられて居るのが普通である。ところが經濟界が不況になれば、利益が減少するのでボーナスが減らされるから、結局收入の減少、俸給の減少といふ事になつて來る。も一つは經濟界が景氣が好い時には、割合に俸給の增加が一般的にも特別にも早い。然るに經濟界が不景氣になつて來ると、俸給增加が比較的困難である。從つて消極的には俸給の減少と同じやうな結果になる。之は已むを得ない事であると思ふが、私の觀るところを以てすると、物價の下落する方の勢が多いので、大體から云へばそれ程憂ふべき事はない。

それよりも緊切に不利益なる點は失業者の現出する事である。之れは勞働者に比べて多くは無いけれども、種々の事業を縮少したり、事業の整理をする爲めに能率の少い雇員を淘汰したりする企業家も出て來る。我々は成べくさういふ事の無いやうに、又有つても程度の少い事を希望するけれども、事實上起つて來さうである。之は已むを得ない事ではあるが、我々として希望したいところは、企業家等が彼等を解雇する時には、成るべく豫告期間を長くし、其間に十分善後の處置の取れるやうにしたい。又場合によつては相當の地位を周旋し、之と同時に縱令事業を整理する爲であつても、急激に多數の者の職を奪ふが如き事は愼んで貰ひたい。俸給生活者は多くは知識階級であるから、失職者が多くなると適當の地位を求むる事はなか〳〵容易でない、又社會を批判する力を持つから紊りな行動に出でる事はないが、之が爲めに直接間接に思想界を惡化する恐れが無いとは云へない。故に社會の方から云つても大いに考慮せねばな

らぬ問題であると思ふ。

このことと同じ値あることは就職難の問題が生じて來ることである。未だ職業の無い者が職を求められない。多くの學校を出た者が新に社會に地位を求めようとしても、不景氣になるとそれが困難になる。之れも前の第二の場合と同じく、世の中の爲めに甚だ憂ふべき事である。斯くの如くに恐慌來の俸給生活者に及ぼす影響は、利害自ら相混じて居るが、我々から云へば成るべく經濟界の不景氣の程度を少くするに相當の工夫政策をし貰ひたいと思ふのである。さうすれば自然悪い影響を少くする事が出來よう。それにも拘らず尚ほ起つて來れば、出來るだけ是等を救濟する手段を講じて貰はなければならない。

工業的恐慌と勞働者に對する資本家の責任

田邊忠男

(一)

(一)資本家は利潤を獨占し勞働者は一定の契約賃銀より外得られない。利潤は多く賃銀は少ないのを常とする。好景氣に乘じて利潤が膨張する時勞働者も亦其生産に寄與したるが故に一部を與へられ度しと申出る。併し獨り資本家のみならず純理論の宣傳者を以て任ずる經濟學者すら冷然と下の如く答へる。資本家は企業の損失を負擔する。此理由によつて利潤に對する權利を得る。勞働の報酬は保證されて居る。利潤は冒險の報酬である。勞働の報酬には危險の分子が含まれて居ないから、從つて勞働者は損失を免るゝと共に利潤も受けられない。

此議論は資本主義一流の觀念から出て居る。即ち萬事が貸借對照表的色彩を帶びて居る。給付と反對給付との平衡が一切の判斷の關鍵である。得んがためには先づ犧牲を拂へ、犧牲を拂ふことが得る理由である。自分は必ずしも斯かる思想に承服するものでない。所得の權原はもつと倫理的なものでなければならぬと信じるものである。併し資本主義的價値判斷の改造を志す社會主義者すら、「勞働成果全收權説」を唱へ勞働者の所得の理由を價値の生産理論に求める程であるから、自分も此時代思潮に敬意を表して、もつと高尚な倫理的標準を持ち來れば直に問題を解決し得ると思惟する時も、成る可く一應は此見地より立論し度い。

勞働者は損失を負擔せざるが故に利潤に對し何等の權利なし

と云ふは事實であるか。工業的恐慌の際最大の災害を被る者は勞働者では無いか。多數の者は失職して飢餓の間を彷徨し、尙殆んど凡ての者は賃銀を低減されて窮乏に苦む。資本家が如斯き狀境に至るは稀有の現象である。然らば資本家が企業の損失も負擔するとは貨幣獲得慾上の不滿足であり、勞働者の其れは生活慾上の苦痛である。勞働に對し賃銀は保證されて居る。勞働者に對し職業は保證されて居ない。勞働を勞働者より分離し抽象的に考へれば勞働に對しては賃銀と呼ぶ一定の報酬が與へられる。併し生存せる或勞働者が常に一定の賃銀を得て居る事實は無い。工業的恐慌の場合第一に來るは一般的解傭である。解傭によつて生產を縮少し賃銀低減によつて生產費を節約する資本家は損失を免れ又は輕減する。――多くは利益の減少の度合を調節する。解傭せられ又は賃銀を低下されたる勞働者こそ眞に犧牲を拂ふ者ではないか。

(二)資本主義的工業が存在を繼續して行くためには常に利潤が生じて來る必要がある。利潤が成立するためには一定期間の製品の賣價總額が其期間の生產費總額に超過する必要がある。今生產費中の勞働に對する出捐即ち賃銀に就いて考ふるに、先づ勞銀の決定せらるゝ法則は常に需要供給の法則である。而して勞働の供給の方面を見るに、多少の失職者が存在することを工業界の常態的現象とする。賃銀が現實に一定の額に決定せられたりとして、此決定の法則が需要供給の法則であるとすれば失職者の存在即ち供給の過多と云ふことは必ず賃銀を低廉に決定する原因となるものである。換言すれば工業に於ける賃銀を低廉にするため從つて利潤を增加するため餘剩勞働者(勞働豫備軍、失職者)の求職競爭は一定の貢獻を爲して居るのである。加之勞働豫備軍の存在は資本主義工業の存在に不可缺の條件である。第一に工業が市場の形勢に策應して常に利潤を成立せしめ之をして成る可く大ならしめるには、必要の際に急速に勞働を傭入れ得ると共に、不必要の際に急速に之を解傭し得ねばならぬ。第二に資本家は勞働者の入れ替へをなす必要がある。特に科學的管理法其他の工程の加速制度を實施する時は短期間に勞働者の全精力を凋渇せしめ其健康を破壞し若しくは早老の結果を齎すまで勞働者を酷使せされば大なる利潤を上げるを得ない。此場合に於て短期間に一生の全精力を消耗し盡され又は健康を害れたる勞働者の代人を勞働豫備軍より求め、前者を勞働豫備軍に編入し得る事情が存在しなければ近世工業の存在條件の一なる工程の加速を目的とする諸制度――例へば上記の科學的管理制度、「プレミアム、ボーナス」式の賃銀、請負賃銀等は或は機械科學實驗心理學を應用して工程の加速を强制し、或

は勞働者の食慾心を刺戟して同樣の結果を實現せしめ、勞働者をして過度の速度を以て勞働せしむる制度である。――は應用し能はざるに至る。

上記の(一)及び(二)の論點から引出し得る結論は恐らく下の如きものであらう。(一)は勞働者は企業の危險を負擔するものであるから利潤に對して權利がある。若し利潤に對する權利を認めずとすれば企業の危險をも同じく負擔せしめざるを正當とせざるや。即ち恐慌の際の如きは資本家は勞働者の生活を保證するを正當とせざるやを云つたものである。(二)は一般的に勞働供給は利潤の成立に寄與し且つ工業の不可缺の條件なるが故に同じく工業の負擔によつて養はる可きものに非ずやと云つたものである。

(二)

工業的恐慌が起りたる後に於て觀察すれば、需要が甚しく供給に及ばずと云ふ狀態である。併し何故に斯かる現象が一般的且つ急速に出現するか。

先づ需要と供給とが相應せざるに至ることは消費者が供給に對し嚴密な管理權を得ない場合が多い。「ウエッブ」は工業の管理權の中生産物の數量種類及び生産の時期を決定する者は消費者であると云つた。之は一見甚だ明瞭の如くであつて實は資本主義制度の實行と一致せざるものである。現今隨意の規模に於て隨意の時期隨意の種類の生産に當る者は正しく資本家である。顧客生産と市場生産との差は、前者に於ては消費者が上記の事項に關し能働的動作に出で後者に於ては生産者が能働的動作に出ることである。現代の資本家は需要に應ずるに非ず、需要を求めるのである。需要を「作り出す」者である。消費者は欲せざる時は購買せざるを得る。斯くして資本家の財嚢を通じて管理をなす。併し實際には此事すら餘り行はれない。

一般消費者が欲し若しくは欲せずと云ふことは大體の場合價格のみに關聯するものである。而も重要商品即ち文明生活の必需品に對する場合消費者が提供する貨幣の額には可成な大きな差がある。消費者は及ぶ限り小額を以て必要の貨物を得んと欲し、資本家(工業者、商人)は多額を以て引取らしめんと欲する。玆に資本家と消費者との駈引即ち爭鬪か生じる。此爭鬪の勝敗を決する原因は實際の需要供給許りでなく、價格と云ふものは元來心理上の現象であるから、消費者をして之々の價格を以てせざれば之々の物品を入手するを得ずと思はしめる原因は凡て其である。好景氣の場合は一般的に資本家が消費者の價格判斷を支配し得る地位に在る。資本家の指定する之々の價格を以

てせざれば購入するを得ずとの信念を發生せしめるを意味する。即ち上の限界に近く決定せらる。而して恐慌の際一朝にして資本家が此地位を失ふは決して物價騰貴に原因する供給の增加の如き物的原因即ち當然緩漫なる力によるのではない。又現に一般的に供給が需要を超過せるを始めて認識したためでもない。恐慌の際資本家が忽ちの間に斯かる地位を失ふは下記の如き事情により資本家は全體として消費者に對する價格決定上の戰鬪力を喪失するに基く。其限度に於て消費者は將來の價格は少くとも一時必ず下る可しとの信念により忽ち資本家より强ひられたる從來の高き價格判斷を低き價格判斷に改訂するのである。恐慌の一面は消費者の價格判斷が高く引上げられたる後に於て其の急速且つ一般的なる變化である。即ち心理上の變化である。單に生產過剩の結果供給が需要に超過するとの物的現象にのみ此原因を求むる時、恐慌前の需要と恐慌後の需要とが同一のものなりとする時は供給の增加より漸次に不景氣に移る現象を說明し得るも恐慌を理解し得ない。

　然らば如何なる事情によつて資本家は消費者の價格判斷の支配者の地位より墜落し、消費者自身の價格判斷に聽從せざるを得ざるや。

　資本主義の經濟は資本の增殖を目的とする。資本と利潤との比率が企業の成否を分つ標準である。之は利潤を大にするか資本を小にするかの孰れかの途を取る可きである。一定の資本額により獲得し得可き利潤の額は凡そ平均する傾向があり此方法を以て比率を良くするは多く望み得ざることである。於玆資本額を小にせんとする競爭が起る。資本額を小にすると云ふも決して實質上の資本額を小にするに非ず、只實際に運用し得る額は同一として其中の一小部分をのみ(通例固定資本)「利潤占取權原としての資本」とし、他の部分(通例流動資本)を利潤と無關係とするのである。而して資本に對する利潤の比率として企業の成否の標準となるものは實に利潤占取權原としての資本に對する利潤の比である。利潤占取權原としての資本は本來の資本であつて、然らざるものは廣義の借入資本である。後者は必ずしも金錢の形式を取る必要はない。製造の目的を以て買入れたる原料は買入代金の決濟未濟の間此種のものに屬す。而して此借入資本の關係は資本主義の發達と共に、各事業の間に交錯して存在し、各事業を相關的ならしめるものである。

　廣義の借入資本は其名の示す如く借入なるが故に信用を基礎として居る。又資本なるが故に時の觀念と結合して居る。蓋し「時は金なり」とは資本主義の根本觀念の一である。其意味は資本は一定の時間の間に規則的に增殖せざる可からずと云ふもの

である。即ち資本には利益、報酬を伴ふと共に、之に關する一切の行爲例へば貸借報酬等には時間的の制限がある。資本を貸すは一定の期間に就いて貸すのである。而も資本主義の發達が高度なれば高度なる程此時間は短きを常とする。

如斯く事業從つて全經濟が信用の基礎の上に立つ事と此關係が交錯せることと結局此信用には短期の時間的制限あることは生産方面に於ても亦心理的動因が力を振ふ餘地あるを示すものである。即ち或事情によつて信用に對する疑惧が起れば、――例へば極めて信用ある企業の倒壞の如き――急激且つ一般的に借入資本の需給に對して變化を生ぜしめ、期限の經過せる借入資本は容赦なく引上げられて事業を去り、新なるものは流入し來らず、事業の基礎たる運用資本の中にて借入資本の占むる部分は缺間となり惹いて全體を倒壞せしむるのである。

最初の動因となりし全經濟の信用の疑惧を捲き起す可き大事業の倒壞――信用無き事業、從つて此信用の消滅に依りて全體の經濟が實際に損失を被ることも無く、又心理上の恐怖をも惹起せざる如き事業の倒壞は經濟上の自由競爭の陶汰として看過する。――は借入資本の砂上に成立する全生産經濟を脅威して資本家をして借入資本(流動資本)の獲得に狂奔せしめ、即ち結局の獲得の資源として商品の賣却を急がしめ、而して消費者は資本家が窮迫の狀態に在るを眺めて急に價格判斷を改訂し、玆に昨日までの價格を標準とする供給と今日の需要との間に大差を生ずる。之が恐慌である。

故に恐慌の存在條件は利潤占取權原としての資本額を少くする競爭、即ち資本對利潤の比率を有利にせんとする資本主義に內在する條件と、其結果たる、消費者が或一時に於て價格支配權を掌握すると云ふ同じく資本主義に內在する條件から生じる。――單に供給を調節せざる結果供給が需要に超過すると云ふ現象は個々の企業の漸次の陶汰を來し、又從つて或場合に於て恐慌の間接の原因となることとあるも、之は間接原因として必然常に存在す可きのもに非ず、又之のみにて恐慌を說明し得ざるものでない。

(三)

責任と云ふ字には種々の意味がある。大體に於て責任とは行爲の選擇と伴ふものである。然し實踐道德上の觀念としては行爲者の能力の範圍に限らる可きものである。即ち自己の選擇せる行爲に就ては責任がある。而も同じく果し得る限りにおいて責任がある。――此能力の限界に就いては客觀的標準を用ふ可きものである。

又個人としては選擇の餘地無く從つて責任無き場合にも、階級又は國家の一員としては選擇の餘地ありと認められ從つて責任を負ふ可き場合がある。戰爭に對しては何人も個人として責任を負はない、併し國家としては責任を負ふのである。

上記の如く資本主義制度に於て勞働者に利潤を與へざる以上、又勞働豫備軍が資本主義工業のため必要なる以上、同じ恐慌が少くとも資本主義に基く以上、個々の資本家は個人として勞働者に對し何等の責任がないと云へる。個人たる資本家は個人としては資本主義制度を如何とするとも出來ない。彼等が資本主義の下に於て企業主たるは個人としては必然であつて、決して此場合他種の制度の下に赴く選擇が存在しない。又個人々々の資本家が別々に失職者を養ふとには賃銀の低減に反抗することは經濟上の不能である。彼は斯かる煩累なき他の資本家との自由競爭に於て打敗られざるを得ない。只資本家は階級として資本主義制度の維持を計り之より利益を得るものなるが故に階級としては同制度維持の結果生ずる恐慌が勞働者に及ぼす影響に對し責任を負ふ可きである。現今の如く失職者を社會全體の手に委し、且つ恐慌に當りて反つて賃銀の引下げを行ふ如きは最も標準低き「給付反對給付の道德」より見ても許容し得可からさることである。

然らば資本家をして責任を履行せしむるの方法如何。例によつて之を勞働者の力に委す可きか。勞働運動特に勞働組合運動の之に對して取る可き態度如何。勞働組合運動は大體に於て——組合を結ばざる勞働者は尙更——好景氣の場合に强くして不景氣の場合に弱い。恐慌の際資本家が勞働豫備軍を增加し又は一般の賃銀値下げを實行するとすれば勞働者が營々として好況の時代に築き上たる標準は悉く破壞される。云ふ迄も無く恐慌の場合は最も工場閉鎖に便利であつて同盟罷工に不便である。故に勞働者にのみの力に倚る時は勞働者は常に杜を上りては滑る蝸牛の狀態を摸倣せざるを得ない。若し勞働者が好況中に克ち得る生活標準が倫理上是認し得るものなれば國家は社會正義の擁護者として之を不動となすを必要とせざるか。即最低賃銀法を以て勞働者の主張に對し破り得ざるの保障を與ふ可きである。

失職者に對しては失職保險法を設け且つ之に對する負擔を工業の利潤に求めねばならぬ。

東京市の電車・道路・名勝保存問題

東京市の電車と道路

田川大吉郎

一

東京市の電車の事ですか、私は、三錢五厘二毛三朱を基礎として計算しました。

これが所謂乘車賃である、その單位である、一人前片道三錢五厘二毛三朱で、一年の乘客豫想が、ザット二億人、それで一年の乘車賃收入が、約七百四萬六千圓、私は、これならば、やつて往ける、次第に擴張も、整備も出來るといふ確信でありました、今も尚當時の計算に誤りがあつたと、悔ゐて、たぢろいては居りません、

それが凡そ十年以前の事である、その後諸物價はどうなりましたか、少くも三倍に爲りましたらう、或は四倍になり、或は五倍に爲つたものもある、もつと刎ね上つたものもある、電車のみこれに傚はないといふ譯に往かぬ、貨幣の値段がそれだけ下つたのである、大體に於て三分の一に下つたのである、それを三倍に引き上ぐれば、當時の三錢五厘の相場は、今の十錢である、當時、三錢五厘を至當の値段、廉くて、都合がいゝと思つて拂はれた人々は、今日、十錢の値段を、矢張、廉くて、都合がいゝ、至當の値段だと思つて拂はれねばならぬ、それを拂はないで、電車の改良擴張を迫るのは、無理では無いでせうか、

市の當局者は、今日、往復十五錢の値段で、幾多の改良擴張の責任を引き受けたやうである、それには、確乎たる計算の根據があることで有らうから、私は、滅多な事は言ひたくないが、然しながら以上の記憶と、數字の基礎に於て、私は、當局者の今日の申立て通り、それが確實に、順當に進行するや否やを疑ふて居る、不快な想像だが、その將來に於て、更に行き詰ること無きや、これは意外だ、もつとやれる筈だつたが、やれなくなつたと、追悔すること無きやを、窃に案じて居る。

序に申して置きますが、倫敦の地下電車は、從來一哩四錢の立て相場であつた、それを此の春に至り、どうしても、それではやりきれない、一哩八錢にしなければならぬと、要求することに爲つた、それがその通りに爲つたことは未だ聽かないけれど、然しながら、此の如き要求は、數理上有り相な事と思ふて居る、米國各市の電車は、東京のと同じく概して均一制であつた、(中には區域制の所もある、私は常に區域制が至當の制だと唱へて居る)概して五仙均一であつたが、物價騰貴の餘響として、それを二十仙均一に引き上げた所も一二では無い、それは例外としても、八仙に引き上げた所が二十一市で、七仙に引き上げた所が百三十九市で(中二十一市は荷物の運賃を別に一仙)市内と郊外とに分つて、六仙づゝ、即ち市内から郊外へかけて十二仙に引き上げた所が十市、たゞ六仙にして居る所が百五十八市に爲つて居る、決して賃銀の高くなつたことを、いゝと言ひ、又、高くなることを、いゝと言ふのでは無いが、材料が上がり、賃銀が上がり、經費が上がり、若くは所謂貨幣の値段の廉くなつた場合には、それに騈行する釣り上げは已むを得ない成り行き、結果であらうと思ふ、東京市民にも、此の理解と、雅量は必要である、市電の當局者をして、たゞ、ぶる〳〵びく〳〵、慄へて居り、いぢけて居り、萎へ切つて居らせるだけでは、どうにも、かうにも、やり様が無い、もつと互に扶け合つて、大膽眞率にやらせねばならぬと思ふ、

電車の缺點、それはいろ〳〵ありませうが、私は、機械の利用が、太だ不足であると思ふて居る、例へばボギー車一車に、車掌は二人乃至三人乘つて居るが、英、米、佛、私の往つた先々の何國でも、ボギー車に二三人の車掌の乘り込んで居る所は無つた、何國でも皆一人づゝ乘り込んで居たと記憶して居る、それは、我が車掌の働きが、彼の國の車掌の働に較べて、優劣の差があるといふよりも、寧ろ機械の用ゐ方の差で有らうかと思ふ、種々の裝置の中、その一つは、車の乘り口に、賃錢の受け容れ器を置いて、乘客は、その入り口に於て先づ賃錢を拂ふやうにして、先づ賃錢を拂はねば、中に進むことが出來ないやうにしてあり、車掌は、その側に監視して居る、只その一人の車掌だけで、乘客は、そこで車掌に賃錢を拂ふのでは無い、自らその受け容れ器に投げ込んで進む、若し十錢の持ち合せの無い者は、車掌に換へて貰ふ、車掌は、ずん〳〵換へてくれる、その持ち合せは豐富で、兩換へには些しの澁滯も苦情も無い、此くして乘客は、次第〳〵に、順を逐ふて、車中の席に就くのである、これは其の一例に過ぎないが、私は、日本の電車に、この種の機械の利用が太だ少いと思ふ、機械を少く用ゐて、人

を多く用ゐて居るから、經費の多くかゝる所以であり、混雜の反つて滋く爲つて居る所以である、この場合、乘換切符を出す所ゝあり、出さない所もある、乘換切符を出すに當り、東京に於ての如く、その往く先々に、一々に鋏を入れる所は、曾て見當らなかつたと覺へて居る、

因に記すが、米國でも、英國でも、曾て釣錢に困つた覺へは無い、東京に於て、五錢の釣錢に困るといふことは、電氣局の怠慢といふよりも、寧ろ政府當局の怠慢であらう、私は、この情形に對して、殊に不快な、不審な感じを抱いて居る、

二

道路の事は、私が、尙東京市に奉公して居た頃の事である、一日、交詢社に、市政講究に關する會合があつて、その席上、鎌田榮吉氏より私へ、道路が惡くて困る、早く改良して貰ひたい、その方法は無いかと詰られたことがある、私はこれに答へて、方法は無いことは無い、いろ〳〵考へて居りますと申したら、大へんに金がかゝるか、いくらかゝるかと問はれた故、私は大凡二千萬圓の見込であると答へました、勿論、二千萬圓で東京市の道路を、隅から隅まで、殘り無く鋪設することは出來ない、一等の道路、二等の道路といふ如き、目貫の、必要の所を擇んで、アスフハルト、若くば木塊の鋪設にし、その餘は、段々に、低下した、粗末の廉普請にするのであつた（アスフハルト若くば木道の鋪設にしても、その鋪設の標準は、一九一三年の萬國道路會議で、私の當時の豫算よりは、ずんと高く一定せられた、私の當時の豫算は、自動車馳走の道路に及ぼす影響を、殆んど未だ驗測して居なかつた時代の豫算であるから、今日に於ては、その基礎が既に大いに變じて居る次第である）そこで鎌田氏は言はれた、二千萬圓なら高くは無い、若し二千萬圓位ゐで、一と通りの改良が出來る事なら、どうぞ至急に着手して貰ひたい、東京市民の數を凡そ二百萬人として、一人前卽ち十圓の負擔である、一人前十圓の負擔は、一寸輕くないやうだけれど、これを公債にすれば、一人當りその十圓の金利を負擔すればいゝ譯である、その金利は大凡そ一圓と見たら澤山だらう、一圓とすれば、決して堪へ難い負擔とは思はれない、雨に、風に、泥に、ほこりに、各個人が、下駄を損じ、靴を破り、着物をよごし、車に乘り、さま〴〵の損をして居る一切の費用を積算したら、一年一圓位ゐの負擔は何でも無い事のやうに思ふ、是非やつて貰ひたい、なぜやりませんか、市會議員が肯きませんかと問はれた、私は、市會議員も肯かないことは無い、その同意を得る事は容易では無いけれど、要するに當局者

の決心如何である、當局者が、眞に決心の臍を固め、條理を具して、熱心、誠實に、これを主張したら、市會議員は、大槪承知してくれるでせう、現に私は、私の今日まで計畫し、主張したことで、市會議員の理不盡なる反對のために、空しく阻止されたと思ふ經驗は殆んど無い、全く無いでは無いが、殆んど無い、咎めを市會議員に歸しません、要するに當局者の準備足らず、實力足らず、誠心足らざるの致す所であります、殊に改良道路の問題は、私にこれを提案する決心が未だ着いて居ない、私は今、これを思案して居る、私自身が尙躊躇猶豫の態でありますと答へた、なぜかと問はれたから、私は更に下水改良問題がある、その工事を總へない中は、道路改良工事は、要するに無用である、道路改良工事に先づ着手して、下水のため再びこれを堀り返すといふは、如何にも忍び難いことである、先づ下水の工を竣へ、而る後に道路に着手するのが、至當の順序であらうと確信すると答へた、

以上の最後の答へに、滿足され無い方も、勿論有つたらう、然しながら、いく分そうかと思はれた方も亦有つたと見え、談話は以上の所で一段の句切りをつけた、思へばそれが約十年以前の事である、

十年の以前に、この非難、この要求があつて、而してそれが未だ充たされて居ないのみか、道路の實際は、今日に至り益々甚しくなつて居る、今日に至り、その非難の惡罵と變じ、その要求の威迫に化りつゝあることは、毫も無理では無い、私は、それを一々道理の有る事と思ひ、市當事者の態度をあまりに怠慢無責任（私をも其の中に入れて）であると思ふて居る、

下水の事に就ては、もう申し上げますまい、然し前に申した通りである、今日と爲つては、下水改良工事と、道路改良工事を、一時に駢べ起して、一氣にこれを仕上げるより外はありますまい、既におくれた、今は一刻も猶豫すべきの時で無い、今は悔憤して奮ひ起つべき時である、東京市は、必らず悔憤して起ち、そのおくれたるの務めを、償ひ充たすべく、確にその最善の思慮を傾け、力を盡さるゝでありませう、

三

最後に一言を添へさせて下さい、私は東京市に對する世上の非難が、餘りにひど過ぎはしないかと思ふて居る、

東京市の道路は、如何にも舊式の道路である、自動車は、新式の機關である、舊式な東京市の道路は、新式な機關を駛らすに堪へない、新式な機關の自動車を駛らせて、その結果、東京市の道路が、めちや〳〵に壞されたのは、當り前である、東京

市はそれを豫知する明が無つたのか、豫防する工夫が着かなかつたのか、ナゼそれに順應する準備を爲さないで、この通りな慘狀に陷ゐれたかといふのが、今日の攻擊である。

だが、世間は一體、東京市を、何と視て居られる、所謂自治制は、東京市を、完全に發達した、一人前の男と見て、これに相當な權力を與へ、位地を與へ、待遇を與へて居るのであらうか、倫敦も曩には自動車の奔馳に困惑した、倫敦のみで無い、巴里も困惑した、紐育も困惑した、が、流石に世界の大都である、今日に於ては（數年前より）既にこれに順應する計畫設備を終へて、所謂舖設の道路に、幾千、幾萬、幾十萬の自動車を輕油の如く滑かに縱橫、奔馳せしめて、些の支障を見ない偉觀、美觀、盛觀を呈して居る、洵に倫敦市や、紐育市は近世的都市である、その模範である、然しながら誰も言ふ通り、羅馬は一日にして成らない、殊にその自治體としての位地、待遇、能力は、殆んど中央政府のそれにも劣らない有力のものである、彼等は確に發達した一人前の男である、法制の面に於ても、實際の働きに於ても、政治上、社會上、經濟上、實に儼然たる一小獨立國の觀がある、これは爭ひなき事實である、東京市を、これらと較べて御覽なさい、盛んに發達した一人前の男が、これだけの仕事が出來るから、未だ發達しない、幼弱の子供にも、これだけの仕事が出來べき筈だといふのは、無理である、殊にこれを未だ發達しない幼弱の子供、無智の子供、無能の子供、無識の子供、無經驗の子供、半病人の子供の如くに視、そのやうの待遇をしか與へず、常にそのやうに世間に紹介し、且抑へて居る監督者、內務省が、これを今日の東京市に責むるのは、餘りに矛盾した要求、威迫では無いか、私は、この場合に、特に東京市の位地、待遇、與へられたる實力如何の點檢を、廣く朝野の有心人に請はざるを得ない、

缺點は無論東京市にも在る、それは決して少く無いが、然しながら、訐いて直と爲す者を忌む、監督者としては、內務省としては、鐵道省としては、政府としては、寧ろ庇ふて、その過ちを蔽ひ、扶けてその力を伸さしむべきでは無らうか、私は、內務省や、鐵道省邊の才人が、東京市の過ちを、麗々しく廣言摘發され、往々冷笑嘲罵の辭を弄せらるゝ、近日の傾向を（新聞紙の報道に由る）頗る奇怪に思ふて居る、長者の道は寬、かの人々は、もつと穩かなる態度もて、內輪から、親切に、導いて、勵まさるべきだと信ずる、これを餘所事と思はず、相寄り相扶けて、共々に心配し、工夫さるべき筋合のものだと信ずる、

前にも述べた、釣錢の不足である、これは今日に始まつた問

題で無く、數年來引き續いた問題である、先般、私は、總選擧のため、地方を歩いた時、その不足の、意想外に大なる事實を知り、地方民の被つて居る不便、不自由、不利、迷惑の甚しい有様に喫驚いたした、政府の當局にして、これを知られぬ事は有るまい、若しこれを知らぬと言はれるなら、餘りに不注意である、若しこれを知りながら、何も爲す氣が無つたと言はれるなら、餘りに無頓着である、若し爲す氣があつたけれど、爲すを得なかつたと言はれるなら、餘りに無能力である、若し爲すを得なかつたけれど、構ふ事は無いと言はれるなら、餘りに無責任である、然り、一個の釣錢問題、十錢問題にしても、政府は當然に不注意か、無頓着か、無能力か、無責任か、其の一つか、或は其の總てかの誹りを受け、責を負はれねばならぬ、東京市の怠慢と失敗は勿論である、けれど、今日の政府當局者は、威丈高に爲つて、これを東京市に責め、東京市を辱かしむる資格、權威は、何處にも無い筈である、

但、これも或は私の言ひ過ぎかも知れぬ、私は、飽く迄も、彼等の相互に扶け合ひ、協調して、互に其の美を成さんことを望む、今日の東京市は、大いに責めらるべく、餘りに幼稚、微力、低級である（六月二十日）

史蹟名勝保存と都市政策

文學博士 黑板勝美

辨慶橋附近埋立の問題は、既に各方面の反對によつて東京市會も大體反對の決議を爲る事となつて居るので、今更それについて何等言ふ必要はあるまいと思ふけれども、此機會に於て吾々が平生史蹟名勝等の保存について考へて居ること、特に都市政策との關係について私見を述べて置くことは可い事と思ふし、又この度の問題を單に一辨慶橋問題と觀せずに、今後幾多この種の問題が起る場合に於ける吾々の覺悟をこの際に於て表明し、將來の場合に應じて行きたいと思ふ次第である。

元來史蹟とか名勝とかいふ言葉には、一般の人々に未だ十分諒解の出來ない意義が含まれて居る。それは歴史その物が、從來の意義と今日の意義とは、大分變つて居るばかりでなく、吾々日本國民の思想に於ても、史蹟や名勝に對し、猶ほ多少の誤解を有するためである。

從來歴史といへば、主として政治關係を中心とし、國家組織を通じて、經濟問題なり、信仰問題なりに觸れたものであるが社

會生活を基礎としての史的現象を研究するやうになつたのは、寧ろ新しい時期に屬するといつて可い。吾々が大昔から子孫相繼いでこの社會を造り、國家組織の下に發達して來た文化その物を時間的に研究するのが、即ち歴史といふ學問である。而かもこの社會なるものが空間的に現はれて居るが爲めに、文化の發達し行く中程に於て、その跡を地上に殘して居る、これが所謂史蹟で、吾々はこれによつて或る時代に人類が如何なる文化の程度を有して居たかを知り得るのである。從つて此等の史蹟は、また同時に歴史の資料として吾々に提供せらるゝことはいふに及ばぬ次第、それに依つて吾々の祖先が如何に活動したかを觀ることが出來るのである。いはば吾々人類活動の痕跡が即ち史蹟そのものであるから、過去に於ける人類の社會的活動を觀るに就て此等の史蹟を尊重する必要があり、從つて之を保存する義務が吾人の上に加へらるのである。言ひ換ふれば、吾々人類がその社會的生活を繼續するには天然を破壞し變形してその社會に適應せしめ行くのみならず、その社會的生活を愉快にし向上せしむるに最も都合よき様に天然を變化せしめたのである。或は國家的見地からも軍事その他の必要から天然を破壞し去る場合もあつたのである。一言にしていへば、人工を自然に加へてその社會や國家が進歩するので、一方から觀れば天然破壞の程度によつてその文明の程度が分明るといへる。併し人類が天然を破壞するのは破壞そのものが目的では決してない。吾々人類の國家的又社會的に生活狀態に最も適應せしむるやうに破壞して來たのである。さりながら天然を破壞して吾々の生活狀態に適應せしむるは必ずしもその破壞を同じ處に繼續する要がない、一の場所から他の場所へだん／＼移り行くこともまた考慮の中に入れて置かねばならぬ。從つてこの天然破壞は一たびその破壞が仕遂げらるゝと、又何時しか第二の天然となつて吾々の眼前に展開する。若し天然破壞といふことが文明の進歩上連續的に行はるゝべきものとすれば、破壞そのものが理想でなければならぬことゝなるから、破壞を同じ場所に繰返すのは、吾々人類の目的に反することゝなり、從つてその社會の進歩發展を阻害する特殊の事情存せざる以上、第二の天然、若しくは第三の天然を保存することになるので、この見地からまた史蹟保存が必要となつて來なければならぬと思ふ。

併しながら吾々人類はまた必ずしも天然そのものを破壞する要を認めぬことがあるのみならず、社會的生活の上から寧ろ之を保存しなければならぬ場合が少くない。或はたゞその一部に人工を加へて成るべく多く天然を保存することが生活の必要條件としなければならぬことが屢々生じて來る。例へば人工的の

山水よりも天然の山水が寧ろ吾々の生活を愉快ならしむるといつてよい。よし之を觀望するに於て、又天然そのものゝ本性をして一層有効ならしむる爲めに、場合によつてその一部によし人工を加ふるとしても、その大部分ば矢張天然その儘に吾々の生活に最も適應するものでなければならぬ。こゝにまた從つて名勝の保存といふとが起つて來る。しかしこの名勝が何等史蹟として人類活動の跡を留めぬにしても、それが文明の進歩を阻害せぬ以上之を保存しなければならぬばかりでなく、成るべく之を保存することが、屢々生活の上に必要なるを感ずるのである。換言すれば衞生上からも、趣味の上からも、之によつて生活を愉快にし、以て社命の向上發展を來すことゝなるのであるまいか。こゝにもまた鄕國保存といふ意義が存在するのである。

要するに吾々人類がその生活するところの國土に對して、一方に破壞すると同時に他方に保存する必要がある、そしてそこに國土を愛護する觀念が吾々人類の思想に强い根抵を有することなるのであるが、前にいつた史蹟と名勝との保存は實にまたこの思想の上に現はれて居るので、所謂鄕國保存として人類の活動を要求するものと言つて可い。

更にこれを歷史の方面から論ずれば、歷史の舞臺が元來地上であり、水上であるけれど、水上のそれは之を保存するなどいふことが出來得べきものでないから、この史蹟名勝の保存は地上に局限せらるゝはこゝに言ふを須ひぬ。たゞ地上の總てが必ず歷史を有するのではない。近世に至つて兩極探險の事業起るまでは、嘗て人類の活動を見ざりし處の南北兩極地の如き、之を史蹟名勝と稱ずる譯に行かなかつた。我國は太古以來吾々の祖先が活動したところで光榮ある歷史を編み出したのであるから、一坏の土も一塊の石も、何等かの關係を活動の上に有せぬとはいへぬ。名所と稱し舊跡と呼ぶところ、すべて過去の歷史を語るものであるが、さればとてこの意味に於ける史蹟名勝なる語を解し、國處孰れの處も之を保存せんとするのは言ふべくして行ふべからざることであるばかりでない。社會の進步を一切阻止して了ふことになるので、吾々は敢て之を强ゐんとするものでない、けれどもその中で保存しなければならぬ史蹟名勝は、簡單にいへば所謂移動すべからざる紀念物で、歷史や美術等の研究上特に必要あり便宜を與ふるものである。かくいへばとて國民の信仰から或は國民の風教から、英雄偉人の舊蹟を保存すべきは勿論の事である。これは尤も嚴密なる意味に於てこの種類に屬せぬものも、古來一般に史蹟名勝として之を數へ上げぬことはないが、特に社會人心に感化を及ぼすところの傳説又は小說と引きつけらるゝ地點は、よし史蹟名勝として何等の

價値なきため保存を講ずる要なきが如く見ゆるものもあるけれど、國民の間に偉大なる感化力を有することは、實に傳說又は小說をしてその關係地ともいふべき處があるとせば、こゝに史學的價値を生じ、その史蹟の與ふる影響の大なる點から、歷史の發展に至大の關係を有し、單に史學の上から觀ても之を研究資料に供する要があると思ふ。普魯西の文部大臣が一九〇四年に出した覺書に所謂紀念物の定義を下して何といつてあるかといふに、單に刻文の如き歷史的のもの、有史以前の墳墓武器の如く、文化及び技藝の或る程度を觀るに足るべきもの、及び一般に風景の美を添ふる繪畫的表示、若しくは美術工藝上現代の模範となるべきもの等を指して紀念物といひ、畢竟するに技術を有して居る過去の遺物であるといつて居るが、吾々がこゝに史蹟名勝と稱するは、更に之を限定して不移動的遺物とし、その移動的遺物は更に他の保存法を講じたいのである。

余はこゝにその史蹟名勝の保存方法にまで立ち入つて考察しやうとするのでない。たゞ史蹟名勝保存の意義が徹底すれば、それで滿足するのである。併し今少しく進んで最も破壞せられ易い都市の史蹟遺物について都市政策の上から觀察して見たいと思ふのである。それは要するに都市政策さへ定まつて居れば此たび喧しくなつた辨慶橋問題が必ずしも論議せられる要無きのみならず、この問題を惹起したことが我が東京の都市政策が未だ樹てられず、都市そのものについての研究が甚だ不十分なるが爲めであると思ふが故である。

尤も都市の政策いふ事については余は何等研究した事もなく又特に、それについて自分の考を發表する勇氣も有たぬけれども、史蹟名勝との關係についていへば、都市を形成して居る市民の趣味を向上するに於て、かの現に行はれつゝある、活動寫眞の如きものは決して市民の趣味を增進するものでない。更に今進んで高尙なものが市民の間に起つて來なければ、いよ〳〵市民の趣味が低下する事になるのである。この趣味の敎育といふ事が實際のところ從來割合に閑却されて居るので、博物館や美術館はいふに及ばず、是等に關係深き史蹟名勝を保存する事すら考へて居ない次第であるのは、尤もよく東京市及び市の附近に見らるゝことで、寧ろ史蹟名勝を既に多く破壞し去つたといつて差支ない。例へば江戸時代から櫻の名所として有名は向島の如き、最近十二三年間に殆と其の極く小部分を除くの外は、見る影も無い位となつて了つた、其附近には盛んに工場が建てられて、昔からの史蹟を破壞し、名勝を俗化し、櫻其他の植物が煤烟の爲めに其生命を縮められて、閑靜と侘びとの趣味的向島を慕ふて永く住んで居る人々なども、已むを得ずその居

を他に移さねばならぬことになつた。成る程向島は工場地として、最もよい土地であるかも知れぬけれど、向島だけがまた必ずしも唯一の適當な工場地でないと思ふ。最初少しく注意して都市政策を立てゝ置いたら、江戸時代からの名所を保存すると同時に適當な設備で都市の美觀を更に加ふることが出來たであらう。

元來都市政策として、その發展上第一に市區の整理や道路の改良や、上水道下水道の設備や、その他いろ〳〵考慮し着手すべきものがあるであらうが、要するに心を用ゐねばならぬことは市民の生活をして最も便利に最も健全ならしむるにあるはいふに及ばぬのみならず、都市の美觀といふことがまた最も大切な要件であらねばならぬ。しかも我が東京は多く之を閑却し之を忘れて居るやうに見ゆるのは甚だ遺憾である。辨慶橋問題を惹起したのは、住宅地を得んが爲めであつたといふが、かの東京の中で稀有な風景地を、僅々一萬坪ぐらゐの住宅地とする爲めに破壞し去らんとするは、市民の衞生や都市の美觀から看過すべからざることである。しかもそれが一辨慶橋問題として論ずべきものでなく、若し一たびこの埋立を斷行すると、四谷から牛込に至る間の外濠の如き、又はこの度宮内省から御下賜になるといふ噂のある上野公園から不忍地附近の如きは、此際に於て十分よく研究して置かねばならぬ。如何に都市の美觀を保存すべきか、またその美觀を保つと共に勞れたるものに慰藉を與ふるには如何なる設備を爲すべきか、しかもその外濠や上野公園が史蹟として名勝として如何に保存せらるべきかは最も注意して置かねばならぬ。よし東京市に上野公園を下賜されても第二の淺草公園が現出せられるやうに萬一なつたら、――辨慶橋埋立の筆法で云へばさうならぬと限らないし、既に寶塚のやうな俗地にしやうといふ噂もある位であるから、此際市民はよく當局を監視する必要があるのである。

尤も東京市の繁榮や發展の上から、之を破壞しなければ市の經營が出來ぬといふ口實の下に、或はこの非文明的な行方に贊成するものがあるかも知れぬが、東京の如き大都市に、都市の美觀などいふことを考慮せぬのは根本から誤まつて居るといつて可い、即ち都市生活を積極的に愈々愉快ならしむる必要上またその保存を必要とするのである。たゞ是まで眼前に社會生活を脅す問題が多いので、市民の大部分が之に注意を拂はぬのであらうが、普通でも趣味とか美觀とかいふ問題は兎角閑却され易い傾向がある。それ丈け前以つて注意を拂ひ、又研究する必要があると思ふ。實は何うでも可いやうであつてしかも社會生活の上に大いなる力を以つて居るのが、都市の美觀である。物

質主義から云へば、或は一見贅澤な事であると考へられるかも知れないが、我が東京が大帝國の中心であるといふ地位からも、都市政策の上に一歩〳〵理想を出現せしめねばならぬ。謂はゞ一家にしても客室を飾つて人を待つと同じ意味で、其日暮しの借家住なら兎に角、堂々なる帝國の首都として辨慶橋問題の如きものを惹起したのは實に東京の恥辱であるといはねばならぬ。今日のやうに何等統一もなく、理想もなく、何時の間にか非常に醜俗なるものが多く存在するといふ事は我が東京の現狀ではあるまいか。しかもこれは第一に史蹟名勝を保存する意義を十分に諒解し得て初めて都市政策と史蹟名勝の保存の關係がまた明確になつて來る。最後に一寸附け加へて置きたいことは、東京市內の史蹟名勝の保存既に多少試みられて居るので、建札や榜杭を立てゝその舊址であることを標明して居るところも澤山ある。たゞ東京市の內部や郊外などの史蹟名勝の地がかくして破壞せらるゝか、將に破壞せられんしつゝあるのは、史蹟名勝に關する機關を特に設けた東京府や、東京市史の編纂事業を起した東京市としては全く矛盾である。また郊外の名勝地は多く東京の市民が行樂を恣まゝにする所であるから、よし管轄違としても特に市の事業として其場所の保存や設備に留意して貰ひたいと思ふ。飛鳥山とか池上附近とか大森附近とか、凡てさういふ東京附近の史蹟名勝たり、未だ史蹟名勝と稱すべからざる處も皆多くは俗化せられ、醜惡化されて居るではないか。余は此等の方面に於ても注意を喚起する必要を認むるのである。


プラトン
インキ
新人のインキ
萬年筆用
筆記用
學生用
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



頼山陽の出奔

木崎愛吉

一

久太郎は、部屋に寝そべつてゐる。

水無月の炎天つゞきに、堪へがたい暑さを、煩悶と憂鬱とに毎日腰紙の破れかゝつた壁と、睨みつくらをして、彼はその日〳〵を送つてゐるのである。

「江戸の修行を馬鹿正直に仕上げたとて、それが何になる。朱子學の外に學問はないかのやうに、いや、朱子學以外の學問を異學として取扱ふやうな了見は、實際馬鹿々々しくつて、お話しにも何にもなりやしない。俺は江戸見物のつもりで、江戸へ往つて見た丈けだ。それでも道學一點張りの、あゝいふ、むつかしい、しやの家父だから、名義なしでは手放さない、まあ何うでも好い、昌平坂——學問所——へゆくやうな顔して、國元は出は出たものゝ、それは世間の表向きで、大方は良佐叔父（尾藤二洲）母方の——屋敷に轉がつてゐたんだ。それも七面倒な經書の講釋は眞平だ、幸に叔父は史學——日本歴史——が割合に明るいといふから晝寝がはりに、そんな話しを交換したといふだけの事實さ。それも大抵底が見えて來たから、一年と經たぬうちにサッサと引揚げて來たのだ。學問所の修行を馬鹿正直に仕上げて『褐を諸侯に釋』いたところで、飯粒が足のうちにくつついて腰を五斗米に折られては、男兒一代の御災難だ。やれ〳〵國へ歸つて肩のこりが少々和らいだといひたいけれど、今度は藩法

といふやつが身體を縛る、ちつとばかりの御扶持を貰つてゐる家父の總領と生れた不仕合せには、丸で手も足も出ないぢやないか。あゝ、つまらない、氣がくさる、えゝうるさい、俺の病氣が碌でもない藪の匙加減で癒ると思つてゐるのが、物の間違ひだ、くそ、いま〳〵しい、こんな藥が呑めるかい。」と久太郎の額には、肝しやくの青筋が、汗にまみれてニヨキ〳〵と、のたくつたかと思ふと、彼は、枕元に置かれてあつた藥茶碗を、片手でたがハツシと壁へ投げつけた。

この物音におどろいて、唐紙一重の次の間から這入つて來たのは、母のお靜である。そんな氣振りを見せずに、敷きつぱなしの床にもぐつて、輕い麻の搔卷を頭からすつぽり被つてゐる狸寢の久太郎をのぞき込むやうにして、

「また、肝が募つたと見えるな。」

お靜は、手早く壁ぎはに轉がつてゐる藥茶碗のしまつをして古疊にこぼれた煎藥を、勿體なささうに、ふところ紙で拭き取つた。外はもう大分暗くなつてゐた。

そこへ取次ぎに來た下女が、叮嚀に兩手を敷居ぎはについて、

「奥さま、與一さまがお見えになりました。」

與一と聞いて、久太郎はムツクリ刎ね起きた。お靜も、氣のおけぬ與一の訪問に一寸笑顏をつくつて、

「それは好いところへ與一さま、すぐに御案内申すやうに。」

透かし羽織に凉しさを見せて、與一はいつものやうに心やすく、病室をおとづれた。

「いかゞですな、御氣分は？奥さま、けふは又何といふ蒸し暑さでござりませうな。」

「これは〳〵、與一さま、いつも御親切にありがたう存じます。さあ　どうぞこちらへ、緣側はそれでもすこしは風がすくやうでござります。」

障子ぎはに据ゑられた夏ぶとんへ、與一はふはり羽織の裾をはねた。久太郎は寢ぼけたやうな顏で、何とも挨拶せず、ぴりりと眉毛を動かすやうにして、兩膝を崩さぬやうに坐り直した。

與一は久太郎の方を見向かうともしないで、

「奥さま、御病人は散歩に限ります、こんなに一間に引込んでゐられては、達者なものでも病氣になります。」

「いつもさやうに仰やつて下されまして、それが何よりも久太郎のくすりでござります、さあ、どうぞおらくに……砂糖水でもこしらへてまゐりませう。」

お靜の出てゆくのを待ち兼ねたやうに、久太郎は、ぐつと身體を崩すやうにして、

「梶山さん、あなたの顏を見ないでゐると、命がそれだけ縮こ

まるやうだ、書齋の方にむつかしいやは居つたやうだつたか。」

與一は、手を振つて、

「聞える〳〵、老先生の嚴格は、お生れつきぢや無いか。」

「あなた迄がそんなことを言つては困る、嚴格は結構だが、起きると寢るまで、社杯をつけ通してるやうな嚴格は、嚴格ぢやない、嚴酷ぢや。」

「殿さまでさへ彌太郎さま御出仕といふ聲には、居ずまゐを御直し遊ばすといふ程ですからな。」

「だから、三百六十五日、その手でやられては、家庭に花は咲くまいぢやないか……」

「又お株が始まつた、アハヽヽヽ。」

「アハヽヽヽヽ。」

久太郎も、つひ釣り込まれて、陰氣な笑ひ聲を出して見せた、額の青筋は、すこしそのうねりを鎭めた。與一は一膝のり出すやうに、

「すこし氣分が好ければ、外へ出て見やうぢやありませんか、嚴格な老先生も、心配性の奥さまも、私だけには、ふしぎに御信用がありますから……。」

渡りに舟を漕ぎ出して、久太郎は一寸着がへをして、そつと玄關先へ飛んで出やうとすると、出合がしらに母と顔を合せたが、與一はその場をつくらふやうにして、

「一寸、凉んでまゐります。」

兩人は晩凉を逐うて、何處へともなく浮かれて往つた。

廣島杉ノ木小路にある頼の屋敷には、主人彌太郎(春水)妻お靜(梅颸)の間に、嫡男久太郎(山陽)、その妹お十と、二人の兄妹がある。彌太郎は、藩の御儒者(側詰格)で、ことしは珍らしく國に歸へてゐる、これまでは若殿(淺野齊賢公)の御傅役として、大抵江戸霞ケ關の上屋敷に勤めて居つたが、去年、末弟の萬四郎(杏坪)にその職を讓つたのである。萬四郎は多門屋敷に居つたから、御多門の先生で通つてゐる。ことし(寛政十年)彌太郎五十三、お靜三十九、久太郎十九、妹お十は丁度十歳である。

二

頼の兩親に對して、久太郎の身柄を保障するのは、この場合、梶原與一——彌太郎の門人——の役目であつた。與一は、久太郎が、たゞ一通りの病人でないことを知つてゐた。久太郎の早熟は、彼が詩文書道のそれと同じく、否、それよりも、彼が異性に對する心持の、十九の青年としては、餘りに練れ過ぎてゐる

のに、年上の自身も舌を卷かずにはゐられなかつたのである。

江戸修行の間にも、彼は尾藤方の下女との間に成立つたとかいふ風のやうな或る噂も聞かぬではなかつた。彼が豫期されなかつた程、早く江戸を見すてたいきさつも、一つはこの一件から餘儀なくされたのではあるまいかとも想像してゐたらしかつた。歸藩このかた、彼に接する機會の多かつただけ、彼の胸に喰入つた或る種の幻影より持ち來されたといふより外、その原因の突留め得られない不健康らしい肉體的の煩悶はあるにしても、それほど彼の精神には影響を受けて居ないらしくも思はれてゐた。

久太郎の病氣を救ふには、與一の見立は醫藥以上に有效であつたらしい、兩親も久太郎の氣分を引立てるべく、久太郎を與一に托することの安全さをよく知つてゐた。久太郎を散歩に連れ立つて吳れる與一の親切には心からの感謝を拂つてゐた。「嚴酷」な彌太郎さへも、醫者に手を握らせるよりか、散歩の效果を爭はれないもの〻やうに、少しは我を折つて、折からの宮島管絃祭の盛觀を見物せしむべく、めづらしく久太郎を驅り立てるのであつた。

「これ、久太郎、くすりも好いかげんにして、宮島さまの御供舟へ往つて見やう、けふは氣分も惡い方ではなからう。」

父にす〻められても、久太郎の氣は進まなかつた、むつかしいやのお伴で、面白くもないお祭り見物よりか、與一を相手に氣焰を吐いてゐる方が、どれだけ氣分が紛れるかも知れない。

「折角ですが、けふは參りますまい、どうも氣分がはつきりいたしません。」

お靜は、それを執り成して、

「その氣分を引立てる爲ぢや、さあ、お伴して出かけることにしなさい、惡いことはいはないから。」

やかましく双方からせき立てられて見ると、蒸し暑い部屋の中に寢そべつてゐるのもつまらないと、しぶ〳〵宮島へ往つて見ると、その翌くる日から、氣分も少しは好くなつたらしく、初秋の風と共に、久太郎は頭腦が輕うなつて來たのを覺えた。いや〳〵ながら強いられた課程を藩の學問所に修むべく、規則的に通學するやうにもなつたのである。

これに調子づけられて、けふは萩見、あすは月見と、季節の移りかはりにつれて、兩親は久太郎の快氣に胸を撫でた。月見には、御多門からの案内で、彌太郎は久太郎、お十の兄妹をつれて往つた、良夜の歡會に、親子三人は夜半前に、こよひの清光を浴びて歸つた。

額の一家には久し振りに、喜びの空氣が漂うてゐる最中、十

月の朔日には、二男の士郎が生れた、が七夜の祝ひもそれどころでなく、可愛いみどり兒はその日、蟲氣がかうじて、そのまゝ醫療の手も盡されなかつた。

この悲しみも忘れられて、極月に入ると、梶山與一の橋渡しで久太郎の縁談が、ぽつ／＼問題になりかゝつて來た。與一はこの一件を久太郎の氣分を鎭める唯一の方策とも考へてゐた。

「久太郎さんも、おひ／＼御氣分が好さゝうで、まことに祝着に存じます。就きましては、この間から申し上げて居りました六丁目さまとの御縁談はいかゞでござりませう、先方さまは御承知の立派なお家柄でもござりまするし……。」

與一は、けふもその下話しを進めるのであつた。

「段々とお骨折りに預かりまして、大慶に存じます、久太郎に話しますと、いつもの通り、善いとも惡いとも申しませぬけれど、そこは兩親の心一つで、それはいかやうにも納得させるでござりませう、出來る事でござりますれば、年内にもおはなし丈けのお取極めを願ひまして、祝言のところは、お正月早々に運びたいものでござります。」

お靜は、夫彌太郎と目を見合せて、與一の話を引取るやうにした。

「でござりますれば、表立ちましては、奥山龍藏殿の御媒妁といふ事に願ひ上げます。」

持ちかけられた花嫁は、御典醫御園道英の娘でお淳といふ、取つて十五のまだ初々しい少女である。久太郎の病氣の一つの原因を、それと一人で極めてしまつてゐた與一は、この場合、一日も早く久太郎の身を固めさせることが、友人に對し、師家に對し、その幸福を保たしめる恰好な處置であらうと信じてゐたのである。それでこの話の進行上、兩親の同意を先きにして、十分その根を固めてから、久太郎に打明けた方が得策であらうことを考へてゐた。彌太郎夫妻にしても、與一の話を突き止めてから、改めて息子の承諾を求めることの遲くはあるまいと思つてゐたのである。それで双方の話が十分圓熟するのを待つて、久太郎に對して、始めてその縁談を持出した。

「どちらになりましても——お勝手になされて下さいまし、お話しの進んで居りますことを、今更私は彼れこれ申し上げません。」

久太郎の答へは、半ば捨鉢氣味の無造作であつた、それだけこの縁談は久太郎の意に背いたことでもないらしいと、兩親はいよ／＼乘り氣になつて、年の暮の忙はし次手に、十二月十一日

お上への内伺を立て、二十一日に改めて本願ひの手順を濟ませたのであつた。

明けて二月十五日(寛政十一年)、けふは日柄も善いといふので、彌太郎は使者の千歳に、持手兩人、お供一人を附けて、六丁目の御園方へ目出度結納を遣はした。二十一日には輿入の荷物が運ばれ、二十二日の黄道吉日に、滯りなく花嫁の輿入があつたのは、暮れ六つ過ぐる刻であつた。儀式萬端は、すべて藩士神尾惣右衛門の指圖に任せられた。

三

與一は、その取持甲斐のあつたのに滿足した。

久太郎は、唯一の心たのみにした與一までが、矢張りほんとうの心知りでなかつたことを面白くないと思つた。

久太郎は、この話の持上がると共に、その持病は次第にあらぬ方へと外れてゆくのであつた。輿入りの迫つて來るのを餘儀なくされてみれば、父も單にむつかしやだけでもなく、母も一筋の心配性でもなく、尚それ以上の意味に於て、自分の身に取つては、兩親の胸の中との隔たりが、餘りにその遠過ぎるのを痛感せぬ譯にはゆかなかつた。彼はたしかに戀その物には熱烈な憧憬を抱きもした、否、それ以上に、彼は「人間」としての自分の將來を夢みてもゐた。小さい花嫁の花は、花を手折つて花生に活ける程にも、その「花」を美はしいものとも感じて居なかつた。けれどもそれ程に與一が骨を折り、それ程に兩親か乘り氣になつてゐることなら、何うなりと勝手にその滿足の買へるだけ、事件を進行させるのは、御都合次第で何うでも好いとして、天の一方に仰いてゐる理想の實現を期しつゝある自身を裏切ることの甚だしいことは、與一や兩親の盲目には映りさうな筈はないのである。まゝよ、何うなりとならばなれ、つまらない、うるさい、いま〳〵しい。

久太郎は、いつの程にか、夜遊びに興ずるやうになつた、正月十四日の左義長見物を言ひ立てに、こよひも夜深かしに耽つた。夜遊びの癖がかうじて、或る夜は飲めもせぬ酒さへ、したゝかに叩つて、臭い息を吹かけつゝ千鳥足で歸つたことさへあつた。(彼は三十七八までは下戸であつた。)輿入前後の亂行は日に〳〵激しくなりつゝあつた。兩親は一藩の爪はぢき、世間の思はくを顧みなければならなかつた。

「久太郎にも困つたのう、折角あなたのはからひで、身の納まりもついたとよろこんでゐたが……何が氣に入らいで、夜遊びが募ることだらう。」

彌太郎は、折から訪問した與一を相手に、述懐の辭を繰り返

さずは居られなかつたのである。

「結構な緣談も滯りなく濟ませていたゞいた與一さんに……それでは餘んまり氣儘が過ぎるといふものでござります。」

傍からお靜も執り成してゐるところへ、涙片手に花嫁のお淳は、すべるやうに一間へ身をかゞめて、

「母さま、わたくしは、今晩一寸里の方へ歸らせていたゞきたうござります。」

與一に對しても、何となく座の白けかゝつたのを繕らふ樣に

「久しう里歸りもせずに居たから、それは父上さまへもお願ひして、一晩ぐらゐは苦しうあるまい。」

お靜はこの折柄、嫁の里歸りが、けつく双方のくつろぎにもなるらしく思ひ取つたのである。

うれしさうに、對の袂をかゝへて出てゆくお淳のうしろかげを見送つて、お靜は夫と與一に眼をうつして、

「淳の身に取りましても、久太郎の仕打は、あんまりでござります。」

と、そつと涙を拭ふのである。

花嫁の里へ歸つた翌くる日、久太郎は又しても、外出するらしい素振りが見えたのを、目ざとく押し止めて、一家は一寸角芽立つてゐたところへ、折よく來合はせたのは、藩の用人築山嘉平であつた。築山は、文武兩道に秀で、久太郎に取つては、少年時代からの恩師である。

賴家の愁訴をかね〳〵聞いて居つた築山は、久太郎に對して、さま〳〵訓誡の辭を費やした上、

「今日のところは、この築山が、一先づ久太郎どのを預かつて歸るといたさう。」

久太郎は築山に拉へられて往つたが、夜ふけてしほ〳〵と戻つて來た。

深酷な恩師の訓誡も、久太郎の放縱を引締めることは出來なかつたらしく、冬に入つても、例の夜遊びはいよ〳〵甚だしくなりまさつた。

「今は堪忍の緒も切れた、向後は一切禁足申附けたぞ。」

彌太郎の怒りは雷のごとく、久太郎の頭上に落ちかゝつて來た。

年も暮れかゝつて、禁足に處せられた久太郎は、鬱勃たる神經を尖らせたが、年が改まつて、正月十五日(寛政十二年)の上元の祝ひに、何と思つたか、久太郎は是迄の心得違ひを衷心悔悟したといふ誓書を父母の前にさゝげた。與一も立會うて、あらためて禁足の處分は解かれたのであつた。

「重々の不心得、今日限りさつぱりと改心いたしました。そのしるしに私の心中を表白いたしまするため、『改亭』といふ號を用ゐることにいたします。」

思ひ入つたやうな久太郎の誓言、よもや徒事ではあるまい、「過を改むるに憚かる勿れ」の本文、それには與一も相槌を打つて、その喜びを分たずには居られなかつた。彌太郎はたゞ無言、お靜は安堵の色を浮かべた。

正月廿二日には、お淳の袖留の祝も首尾よく行はれた、が間もなくべつたり床に就くほどの病人となつた。

三月に入つて、彌太郎は久方振りに江戸へ勤番すべく御沙汰を拜した。久太郎は築山が新たに組織した輔仁會といふ文會に入會して、一しきりおとなしく文墨場裡の人となつた。彌太郎はこれに安心して、江戸へ出立したのは八日の朝であつた。

四

お淳はあてがはれた部屋に相變らず寢たり起きたりしてゐる。

久太郎は、書齋に閉ぢこもつて、詩文の推敲に餘念もない。

娘の病氣見舞に訪づれた御園道英は、久太郎の勉强振りが、娘の病の重らぬよりか、一倍うれしい事のやうにおもはれた。

夫の留守するお靜は、御園への愛想ばなしのつもりで、若夫婦の噂を持ち出した。

「淳の病氣もねつことはつきりとはいたしませぬが、何申してもほんのねんねえでござります。今も今とて、久太郎が書齋へ這入りますと、淳はわたくしをつかまへて、兄さんは氣强い、わづらうてゐるわたしをふりすてゝ、一寸の間も傍にゐてくださらぬと申すので……ホヽヽヽ、餘んまり仲の好いのにも困らされまして……。」

「ハヽヽヽヽ、まるで義太夫のさわりそつくらでござるな。」

一かどの警句を吐きでもしたやうに、御園は身を反らして高笑ひをした。

浪收まり風しづまつて、洋々たる春の海は、頼の一家を幸福の岸へ導いたやうでもあつた。久太郎は、この折から、御城下の胡町から出た町人の息子で、大阪から伊勢まで遊學に出かけて、國學の研究にいそしんでゐる橋本稻彥といふ青年が、めづらしく歸國したといふ知らせがあつたので、今、世間に評判の高い、本居宣長の學說を聽いてみるも一興と、橋本の宅を訪問すると、稻彥は、さも得意らしく、滔々と漢學攻擊を、本居の口うつしで辯じ立てるのであつた。

久太郎は、言はせも果てず、開き直つて肩を聳かしつゝ、一々その意見を反駁した。

「世間でやかましく言ひ囃してゐる本居の學説も、そんな小ぽけなものかな。王道蕩々ぢや、本居に限らず、神道などゝ門戸を樹てゝからしてが、上すべりの狹い了見ぢや、空騷ぎにさわぎ立てゝ、却つて道を小さくする。一體國學者などゝいふものは、あまりに吾が日本國を世間せばくし過ぎてゐはしないか、たゞ〳〵漢土を抑へて、日本を揚げやうとするからが、片腹痛い。吾等所存は、吾が日本國を左樣な小さいものとは存じて居らぬ。であるから、海外萬國から入つて來る有らゆる學問は、皆んなこれを採用して、それを有意義に働かせることぢや、その了見狹い〳〵。」

痛論、骨を刺すともいふべき議論に、稻彦もこれを爭ふほどの餘裕は持たなかつたらしい。

書齋の久太郎は、おぼこい花嫁のきげんを取るよりか、モツと大きな學問の研究を怠らぬことを樂しんでゐた。病身のお淳には目を呉れないにしても、書卷に親しんでゐるのが、彼がこの時の急務でもあつた。

學問向上の一念は、今や久太郎の取るべき羅針の指し示してあつた。そのせゝこましい書齋の裡に引きこもつて廣い世間をよそにしてゐるのは、伸ばすにも伸ばされない不滿である。幸ひ父は江戸詰の不在である、母一人のこの場合、天の與へた千載一遇の好機會を逸するのは、取り返しのつかぬ殘念さだと焦りにあせつてゐたをりから、父の郷里竹原からの消息が屆けられた。それは、父の叔父に當る傳五郎といふ人の訃音であつた。

彌太郎の父又十郎惟清(亨翁)の弟忠七郎、備後尾道に分家した――の次の弟が傳五郎である。

母の指圖で、久太郎は早速御多門の叔父萬四郎へ、この手紙を持參した。萬四郎は兄嫁と相談の上、悔みの使者として、竹原へ久太郎を遣はすの外はなかつたのである。

下男太助を供に、久太郎がズツシリ重い香奠をふところに、廣嶋を出立したのは、九月五日の明け方であつた。籠の鳥はめづらしく、ひろ〳〵した野外に、その翼を伸ばすのであつた。

道中のとある宿場で、主從兩人は澁茶に渴をいやして、脚袢の紐を締め直した。久太郎は遽てゝ何か思ひ出したやうに、

「太助、困つたことをしてのけた、母さまから預かつて來た大事の風呂敷包みを、さつき休んだ茶店へ忘れて來たと見える、一走り御苦勞ぢやがさがして來て呉れないか。」

太助は、一寸當惑の色を見せたが、

「これは、うつかり私も氣がつきませなんだ、一寸お待ち下さりませ、すぐに取つて參ります。」

その後かげを見送つて、

「根が正直なおやぢぢや、こちらは胴丸の鎧を買ひにやられた、木下藤吉郎と出かけて見やう。」

久太郎は、よぼ〳〵した太助の姿が、向ふの森がけにかくれたのを見すまして、宿場脇の畔路を間道づたひに、いづくともなく急いで往つた。

五

時を移して、己斐の街道筋に、懷中の香奠包みをしつかり押へた久太郎の姿が現はれた。彼は雲をかすみと中國街道を東へ〳〵と高飛びするのであつた。

竹原へ使者に出した久太郎は、けふあたり歸つて來る日取りであつたので、八日の晝すぎから、お靜は、風呂など焚かせて心待ちにまつてゐる。お淳はずつと部屋に臥せつてゐる。御園も見舞に來てはゐたが、それは娘の病氣といふ外に、萬四郎からの便りもあつたので、うす〳〵聞いて居つた久太郎出奔後の樣子を探る下心でもあつた。太助も大事の主人を見失つた無調法に身を咎めて、これも主家へは歸る面目もなく、萬四郎方へ身をひそめてゐた。そんな事實を藥にも知らなかつたところへ萬四郎が這入つて來て、椿事を打明けたので、お靜は今更涙も出ぬほどの心配顔に俄かに胸の動悸が高ぶつて、そのまゝそこへ卒倒してしまつた。

御園の手當がよかつたので、お靜はやがて正氣づいたが、あまりの大變にその夜はまんぢりと寢つかれず、明くれば十三日、後の名月は、さやかに雲間にあらはれだが、久太郎は何處へ往つたか姿はない。お靜の心づかひは譬ふべくもなかつた。又も見舞に來た御園を相手に、

「久太郎の不心得は何といたしませう、これはわたくしの述懷……腰折一首、ごらん下さりませ。」

＝思ふことなくて見ましやとばかりに
後のこよひのつきに泣きぬる＝

御園は、讀み返して、ため息の外はなかつた。

十五日には、竹原から、傳五郎二七日の茶の子が送られた。夢と過ごした十日の日數も、未だ久太郎の行方を知るには、餘りに短かつた。追手は蜘蛛の子を散らすやうに、四方へ飛ばされたけれど、それは後のまつりであつた。

萬四郎は久太郎の行方を上方と睨んでゐたのである。取り敢

へず、大坂今橋の中井家へ消息したが、立賣堀には兄嫁の親里もある。久太郎の落ゆく先は、この篠田の方ではなからうかとも考へた。そこで十九日付の書狀を差立てた。

‖古屋船便(にて)一書啓上仕り候。……然らば、久太郎儀、近年兎角放縱に之あり候處、當年家兄留守中、浪遊に耽り候故親戚朋友、切戒懇諭も仕り候へども、相改めず、當月五日竹原大叔父病死仕候に付、弔禮のため、家來添へ、差し遣はし候處、途中より逐電仕り候。家來歸り、私方も早速に聞き、竹原よりも追手差し出し候へども、既に時日も經ち候事ゆゑ、今以て尋ね得申さず、今日まで樣子相知れ申さず、弊藩府內より、備後福山領へ出て行までは、相分り申し候。左候へば、何分、洛攝間に潜匿候事と察せられ候。この間中井御父子に、書狀にて此儀申し遣はし候。……弊藩の法、嫡子出奔仕り候へば、甚だしき越度に相成り候事に御座候。其上狂漢の事に御座候へば、如何なる事仕出かし申すべくも計り難く、宗家一子の處にも之あり、公私ともに、捨て置きがたく、尋ね得て連れ歸り申さず候ては、相濟み申さず候。何卒御手がかり之あり、蹤跡相分り候儀御座候はゞ、中井父子へ御相談なされ、然るべく御取計らひ下さるべく候。本人儀、素より別に刑憲を犯し、逋げ去り候樣の儀に、毛頭之なく、但豪俠狂妄の所爲にて御座候。然し、狂妄なりに宿志も之ある事と相見へ候へば、當分は必ず潜み居り候て、追手を忍び申すべく、若し御見當り(ありても)、卒爾に御留置き成され候はゞ必ず逸居仕るべく候間、御見留めの事も御座候はゞ、隨分御談合にて、御周旋御取計らひ囑し奉り候。誠に弊家存亡の係るところに御座候へば、費用は何程入り候ても、苦しからず候間、御手厚に御取計らひ下さるべく候。恐惶謹言。

九月十九日　　頼萬四郎

篠田剛藏樣

尙々、家嫂も驚き、心痛の至りに候處、傍より色々慰め置き候、江戸へは申し送らず候、何分尋ね得候上にて、申し遣はしたく候‖

篠田剛藏は、今は世に亡きお靜の父、篠田德安(學名を飯岡義齋といふ)の弟、二世德安(滄浪)の子三世德安(存齋)である。

中井父子は、懷德堂の塾主善太(竹山)と、その子淵藏(蕉園)とである。善太は、彌太郎が以前大阪江戸堀北一丁目で靑山社といふ家塾を開いて居つた時分に、篠田家からお靜を妻に迎へたをりの媒妁人であつたから、今も賴家とは親類づきあひの間

柄である。

六

中井一家は、さんぐ〳〵に久太郎の大不孝を罵倒した。悪い噂はそれからそれへと傳へられて、あんな堅苦しい頼彌太郎の嫡男に、そんな極道が生れたのは、苦々しいことだと、本國は素より、京阪兩地の道學者流は、誰とて爪はぢきせぬものとてはなかつた。その中に只の一人、久太郎の心事に諒解と同情を持つて居つたのは、萬四郎叔父ばかりであつた。「狂妄なりにも、宿志も之ある事と相見へ候」の一言は、久太郎に取つて、何といふ强味であつたであらう。

江戸表へは無論、事件を極秘に附することを忘れなかつた。彌太郎の耳に兇報の達せないうち、一刻も早く久太郎の行方は突き留めたかつた。

晦日にも、御園は頼家を見舞つた、彼はいつにない、たゞならぬ血相を滿面に浮べてゐる。

「今日推參いたしたのは、娘の病氣見舞ではござらぬ、久太郎どの放埒の一條、今以て行方さへ分らぬとあつては、一藩の面目、世間の手前、このまゝでは濟まされ申さぬ、不束かなる娘、是迄の御心づくしは、何と御禮の申しやうもござらんが今となつては致し方もない、御主人不在中、いかにも心外の至りではござれど、拙者も御扶持頂戴の身分、どうかこの處御勘辯を願ふことゝして、今日限り娘を引取つて歸ります。」

これには、いかなお靜も返す言葉を見出し得なかつた。

「お言葉重々御尤もと存じまする、この上はお心任せにあそばしていたゞくより外に、思案の出やうもござりませぬ。」

咽び入つた姑の背中へ手をやつて、お淳は氣だるい表情を可愛らしい眼元にうかべて、貰ひ泣きする外はなかつた。

「では、母上さま、これにて御暇をいたゞきます。」

涙にうるむ聲の下から、お淳は父の手元によりすがつて引取られて往つた。

十月の朔日には、大阪中井家からの消息で、久太郎の行方が始めて突き留められた。四日には藩の賄方金山重左衛門方からも急飛脚があつて、同じくその行方を知らして來た。

久太郎は、跡の月の五日に、竹原の道中で、下男太助をまいてから日數を重ねて、京へ出奔し、福井新九郎といふ人の許に身を匿してゐたのであつた。

悲しみの中のよろこびである、お靜は早速迎ひの使ひを出した。七日には竹原で醫者の玄關を張つてゐる彌太郎の弟（萬四郎の兄）松三郎（春風）も、久太郎の行方が知れたといふので、廣嶋へ出かけて來た。それで萬四郎等とも相談の上、十日には松三郎が久太郎引戻しのため、上方へ急ぐことゝなつた。

江戸表へも、いつまでも消息せない譯にはゆかなかつたから、一件の報告をすることにしたが、丁度同じ十日に、それが霞ケ關の上屋敷へ屆いた。「嚴酷」の父彌太郎は、この憂ふべき報知に接した時の心中は、何うであつたらう。

この騷ぎの最中に、一旦義絶した嫁は、いつの程にか身重くなつてゐて、十五日が岩田帶の祝儀であるとのかげの知らせがあつた。姙娠といふ上、兩家の情緣は再びつながれざるを得なかつた。御園からは賴家へ宛てゝ祝儀の樽肴が來る、萬四郎からも祝ひの品を贈つて來る。與一は賴家の正家として、涙を盃に酌んで呑んだ。

廿日になると、先きに出した追手の一人が、兵庫で久太郎に分かれて、先着として御多門へ歸つて來た。その口上は、十三日に久太郎は京を出立したとのことであつた。萬四郎は、時を移さず、そのよしお靜を訪問して物語つた。

「やれ〳〵、それで少しは肩の荷がおりたやうな氣持がします、ところでこゝが思案の仕どころ、といふは他ではありません、總領出奔といふ大法の手前、このまゝには濟まされません。」

お靜は、堅唾を呑みくだして、

「それは十分心得て居りまする、いよ〳〵久太郎が戻りました上は、いかに取計らひましてよろしうござりまするか。」

「致し方はござらん、お上への申し開き、圍ひをこしらへて、閉門させるより外に、思案はござらん。」

「主人の御留守中と申し、それでは萬事お手落ちのないやうに御指圖を……。」

そこで萬四郎は、お靜と相談の上、俄かに出入の大工を呼び寄せて、座敷の中へ圍ひの仕構へに取り掛つた。二十三日から取り掛つて、翌くる日の夕方には、嚴重な座敷牢が出來上つた。お靜はお上への遠慮とあつて、十一月二日に御多門の方へ引取られて往つた。

その翌三日、迎への使が、いきせき海田市から先走りして歸り、久太郎は、その日の夕方叔父松三郎に伴はれてぼんやりと屋敷へ戻つて來た。

七

そのまゝ、座敷牢に幽閉された久太郎は、お上を憚かつて、『憐二』といふ假名を呼ばれる身となつた。

十四日には、お靜が御多門から屋敷へ戻つて來た。

或る夜ふけて、築山は訓誡の爲、この座敷牢を見舞ひ、萬四郎も打合せがあつて、立會ひをした。久太郎はその後、他の見(はた)る目もいた／＼しい程、謹愼を表してゐたが、恩師と叔父の訓誡に對して、

「何卒、兩親のお書きになつた御教訓のおことばが拜見いたしたい。」

この申し條、殊勝な心掛けとあつて、彌太郎の手に成つた藝備孝子傳といふ書物の序文と、お靜が久太郎江戸修行の首途に作つた戒めの和歌三首とが、萬四郎の手から久太郎へ渡された。

江戸勤番の父彌太郎は、國元の大騷ぎから、今はお上へ對して久太郎廢嫡の決意をしたのであつた。その願ひ出は、小姓中島榮次を經て許されることになり、彌太郎假養子の御沙汰が傳へられたので、弟松三郎の悴熊吉が往く／＼はその跡目に立つやうになつた。

里方へ歸つたお淳は、十二月十五日、一旦賴家へ復ることゝなり、その上改めて離縁といふことに話は纒まつたが、その時お淳は早や產み月近い腹をかゝえてゐたのである。

久太郎の謹愼は認められて、同じ廿九日に、始めて更衣(ころもがへ)沐浴を許され、おぼつかなくも新玉の春(享和元年)を迎へたのである。

二月廿日の八つ前の刻、御園方からお淳安產の知らせがあつた。生れたこどもは、玉のやうな男の兒であつた。母の手から引離されたこどもは、改めて賴家へ引取り、都具雄(つぐを)と命名された。これが後の廣島賴家の正統と立てられた餘一(聿庵)その人である。久太郎は廿二歲で、人の父となつた。

四月廿八日の夜、久太郎は始めて座敷牢入りを赦され、五月十六日には、父彌太郎も江戸から歸藩する、不在中の不始末を詫びもし、戒められもした。けれども、その身柄は、今は立派な廢嫡の日蔭者である、久太郎はこゝに首尾よく、その理想境を現出し得たのであつた。

彌太郎は、この勤番中、昌平坂學問所に上り、島津豐後守(薩摩)の家來赤崎源介(海門)と同じく林大學頭(述齋)、尾藤良佐

(二洲)、古賀彌助(精里)の推擧を以て、「右兩人、在府中、學問所に罷出、御用相勤」め、前後十三回經書講釋の慰勞として、幕府から銀子五枚を拜領して、いよ／＼御奉公大事の念を堅めた。

父は名譽の光りを浴び、子は不名譽に曇らされた、吾から黑雲の裡に包まれつゝある久太郎は、おかげで自由の天地に羽翼を伸ばして、世間一切の覊絆から解放されたのである。

彼は座敷牢から出て、日の目を拜んだ日に、改めて兩親の前に低頭平身して、

「不束ながら、この書き物を御覧下さりませ。」

と崇高な原稿の一つどりを持出した。それは日本外史――先づ手の着けられた織田氏本紀――の初稿であつた。

彼は今、格式の嚴重な藝州廣嶋の城主、從四位下左近衞權少將兼安藝守淺野重晟公の家來賴彌太郎の嫡男ではない。親の跡目は、きれいに從弟に讓つて、押しも押されもせぬ一個の浪人である、日本外史は尊王賤覇の大義を國民に宣傳せんとする、時代の危險思想とも見做さるべき大著述である。

久太郎が自から求めた浪人生活は、彼が初めからの筋書の完成でなくて何であらう。

――九・五・一八――

酒顛童子物語

藤澤衛彦

例へば赤口めらりひよん、牛鬼、山彦おとろん、わいらうわん、目一つ坊、抜け首、ぬつぺらぼう、ぬり佛、ぬれ女、ひやうすべ、しやうけら、ふらり火、りうんばう、さかがみ、身の毛だち、あふあふ、猫また、野狐、雪女、河童、山童、犬神、山姥、火車、みこし入道、さういつた奴等を、過去といふ怪しい物騒な闇黒の中から、一匹一匹づつ引摺り出して、一喝二十

世紀の電氣に當てゝやる、それが現代の傳說研究である。通り腴、事物精靈にも說明の時代が來た。天狗、人狼を葬る時の流れが、太陽の周圍をぐるぐると廻る度に、魑魅魍魎の影は薄くなり、妖怪變化の生體は、薤の皮の如くに、伽別の葉の如くに剝がされて行つた。何時の間にか柳の下に幽靈も居なくなつた。古城に現はるゝ白馬白裝束の姿も消えた。森には不思議な馬鹿囃子も聞えず、軒には川獺も訪れぬ。鼬來らず、嬰兒の睡眠おだやかに、狸貉の魅力も人間に及ばずなつた。湖沼に千年の夢を貪る沈鐘の枕を驚かすに、女波男波の呼きはあまりに低すぎる。深く湛へた水は澄めるも、片眼魚の泛べる見えず、湖畔にそよげる片葉の蘆の昔語も、長いとも長い佐渡まで屆くと言はれた越後揃毛の傳說と共に、今大方あてにはならぬ。――世に所謂大江山の酒顚童子が、さうした越後揃毛の籔を分けるに三年もかゝつて、偉大なる母胎から、今の新潟縣西蒲原郡島上村大字砂子塚に呱呱の叫びを擧げたなどいはるゝ遺跡も、要するに一千年の昔の儘と信ずる事は出來ぬ。

西蒲原に有名な信濃川分水岐路の邊から、西川に添ふて上れば、左五千石、地藏堂町、右島上村大字笈ケ島、興野、砂子塚と續く。昔、信濃川が國上村を流れて、西川島崎川の瀨が岐れなかつた時分には、砂子塚にも酒顚童子の產湯川が流れてゐて揃毛の籔を七巻半めぐつてゐたさうだ。その頃その川に捿んでゐた色黑の杜父魚には、頭に異樣の瘤があり、懷孕の婦人がこれを喰ふと、產るゝところの子必ず大惡の盜賊となり、女兒なれば、邪淫にして必ず罪を負ふの人となると言ひ傳へられ、無心の處女の誤つてこれを喰ふも、忽ち多情無恥の者となるなど言ひ傳へられてゐたが、此地の流域に大變化があつて、再び怪魚の出現せずなつたは幸ひである。類似の傳說は越中にもあり上新川郡新保村大字安養寺寺跡の川に捿む杜父魚の頭には、兩眼の間に顯然鱗形の斑紋があるといつて、隣村蜷川村黑瀨出生の伊勢新九郎が、安養寺に廻曆の最明寺時賴の遺物である鱗形の系圖を繼承して、北條早雲と號したといふ「先違錄」の記錄より古く、わが酒顚童子は、越中の國府に行く途すがら、此川に嗽いだといふ事である。

杜父魚が酒顚童子の行く先々に絡んでゐるのは眞に不思議だ。古き昔の記錄によると、童子は、生れて纔か一年に過ぎないのに、その腕白なること群童に過ぎたといふこと、深夜人靜まつてから、密に一人起き出して、梁上に攀ち登り、堅餠を盜み食ふこと屢であつた（北陸地方では、堅餠を繩で繫いで、梁の上に干して置く風習がある。）ので、童子の父母は非常にその行末を心配して同郡和納村の楞題寺に賴んで其處の小僧として

もらつた。和納は、國鐵信越本線を柏崎から岐れる越後鐵道の地藏堂驛から、西吉田を經て至る一村落、村は西川と飛落川の狹間にあるが、入門の日から、酒顛童子は、怪童子振を發揮したので、住侶は恐れ戰いた。又、童子は、その頃、よく飛落川に遊んで、魚を噛み殺したといふが、川の杜父魚の盡くは、彼の餘威の爲に、永くその眼が落窪むやうになつてしまつた。

古口碑は例へば霞のやうに、掴むに觸れず、觸れざるに匂ひを籠むる、至つてとりとめの無いものだけれど、揃毛の母は童子の暴惡を傳へ聞き、揃毛を伸して童子を捕へ、彌彦の鉢穴に投り込んだといふ話もある。その仕置で童子の性格は一變するに至つた。それを一轉期として、童子は久賀躬の山寺に送られたが揃毛が童子に卷きついた處が今の卷町、童子が苦しがつて揃毛を切り放つた小刀が、毛の數九十九本目で錆び折れた處が今の漆山村大字赤鎗だといふことだ。

彌彦の山續き、國上山の山間に、眠るが如くに今もある古の久賀躬の山寺、その國上山國上寺の山門に、『人の血を啜り、人の肉を啗ひ、此世の魔となり、地獄の鬼とならんがために、此門を出づ。』といふ酒顛童子の落書が、どこぞに殘つてはゐないかと思つた程、自分は、此山に於ける酒顛童子の再轉期を怖れる。しとゝに降る雨を物ともせず、滑りがちの石階を登り盡して、其處に見出した寺に對しても、自分は現在といふ事を忘れて、過去の徑路に於ける此寺への傳說を恐れる。謠曲「花月」に、『丹後丹波の境なる、鬼ヶ城と聞きしは、天狗よりも怖ろしや。』と謠はれた大江山鬼ヶ城の主人公は、この國上寺の求道者が瞬轉したのだ。見渡したところ、その寺の形、その物憂げに見えるところ、四邊の物靜かな事、總て普通の寺院の概念と變りはない、たゞ異れるは煩惱に溺れ、罪惡の相に擒はれた酒顛童子への連想である。

酒顛童子の傳說は、この山寺に傳へらるゝところのものも、大江山入以後は、一般流布の傳說と何等異るところがない。

昔、丹波國大江山に、酒顛童子といふ鬼神捿み、多くの眷屬の鬼共を集めて部下とし、日暮るれば近國他國の者までも數を知らず執りて行き、時々は都にも出でて、女房の十七八をかしらとして數多の美女を掠め、財寶を奪ひ、大江山に歸つては淫酒に耽る由聞えたので、勅により、源賴光、これを平げよとの宣旨を受けた。賴光は、藤原保昌、渡邊綱、坂田公時、碓井貞光、卜部季武等を將ゐ、身を山伏の姿に扮し、武具をば笈の中に秘めて、大江山に下る途、住吉熊野八幡三社の神助を得、剰へ神便鬼毒酒を授けられ、喜び勇みて行く方に一流の川あり、妙齡の上﨟の血に染みたるもの洗へるに逢ひ、その教導によつて鬼の捿處に

着き、かの人間には靈藥となり、鬼には毒酒となる神便鬼毒酒を進めて、鬼共を醉潰し、酒顛童子が飛行自在の力を奪ひたる上、首尾よく彼等を退治なし、かねて捕はれゐたる上臈達を引連れて、めでたく都に凱旋した。

かうした傳說の記錄は、香取本（下總國香取社大宮司所藏本「大江山繪詞」一名酒顛童子變紙）が最も古いが、詞書兼好法師といふもあてにはならず、鎌倉季世の物だらうと言はれてゐる。次ではお伽草子本、續いては古法眼本の「大江山繪詞」「酒顛童子追討圖」であるが、古法眼本は、童子の住家を丹波とせず顛近江國伊吹山の奥大江山の千丈が嶽と記してゐる。謠曲の「大江山」、「羅生門」その他、淨瑠璃の「酒顛童子」、「大江山物語」、「酒呑童子出生記」、「酒顛童子枕言葉」その他は、皆、繪詞、草子本の筋に則り、これに勝手な作爲を加へてゐる。

國上寺にも、「酒顛童子繪卷」といふを存してゐるが、緣起には、別に「越後名寄」の記錄その儘の言ひ傳へがある。

酒顛童子、蒲原郡砂子塚村の產也。今、名主の居宅の向當り田圃の中に、童子が生土也とて形あり。父母何なる者といふ事を知らず。およそ十六ケ月にして生れ、初生より言語を能くし、步行を能くす。四五歲に及んで、尋常の兒十歲餘の如く也。然るに故、有りて、これより一里半ばかり北同郡、和納村へ居を移す。村の入口、塘の傍、榎の邊を童子屋敷と稱す。村の水田の內に、童子田と名附けたるところ今にあり。八歲にして、同村の楞嚴寺へ、手習ひの爲に上せ置きけるに、容貌泥迹なりけれども、氣性剛强にして、人に疎まれたり。仍ち又、久賀躬の山寺へ侍童として登せしに、成長に隨ひ、猶更猛勇奇怪なる事をのみ好みて、竟には、われと身を置き衆ね、密に寺を忍び出で、頃刻同山の內東稻場の傍に隱れ栖みしが、とても住み果つべきならねば、此處をも亦うかれ出で上方へ吟ひ往き、後には、丹州大江山千丈ケ岳に住居し、人を害ひ、惡行世に越えたり。時に 人皇六十六代一條院の正曆元年正月二十五日、勅命に依つて、源賴光これを誅す。云云（「越後名寄」三十一卷）

その酒顛童子の名については、或は酒呑童子、或は酒天童子或は又酒傳童子などと記し、いづれも大に酒を嗜むよりの名としてゐるが、國上寺の寺傳には、寺の天童子の名に出たものではないかとも言はれてゐる。

國上寺を去つて大江山に立越えたについて、おとぎさうしの「酒顛童子」などは、『童子あまりの嬉しさに、本國は越後の者、山寺そだちのちごなりしが、法師に妬あるにより、數多の法師を刺殺し、その夜に比叡山に着き、わが住む山ぞと思ひしに、

傳教といふ法師、佛たちをかたらひて、わがたつ杣とて追ひ出す、力及ばず山を出で、まづ此みねに住みしとき、弘法大師といふえせもの封じてこゝをも追ひいだせば、力およばぬ處に、今はさやうの法師もなし、かやうの山に入定す。今又こゝに立ち歸り、何の仔細も候はず。云云』と言つてゐるが、こゝに變つた退寺の傳說が、五智の國分寺にある。

その寺の雛僧であつたかれ酒顚童子の幼だちは、無二の美しさであつた。彼は僧院の人々から戀はれたばかりでなく、禁制の女人からも慕はれた。然し未だ邪氣なき童子は、死を籠めて慇懃を求むる者の艶書を、不思議さうにしては篋笥に投げ入れた。その頃の彼は、靜寂なる僧院の中に、最も淸く美しき者の一人で、心から佛を禮拜し得た殊勝者であつたが、一日わがため、艶書の贈り主の一人が、ほど近き淵に身を投げて、われから女子の一生を泡沫のごとくに消えたと私語かれ、彼はと胸を突いて現實の悲慘に戰慄した。そして人の世の情に目覺めた。此時、彼は、淨土へ淨土へと天を仰いで憧憬るゝ心と、地獄へ地獄へと日々に墮獄を急ぐ心との中間に立つた。彼が散亂麁動の心は、罪惡人往生の道を知る事が出來なかつた。同じ頃に小野道風といふ男があつたが、書道の上手に達し兼ねて中絕の志を起しながら、ふと來る途の川端で、一本の柳の枝に飛びつかうとする蛙を見出した。蛙は幾度か柳に飛びつきそこねてがつかりしたが、ふと思ひついて一遍川の中に落着き、悠悠と糞を垂れて身を輕くし、更めて柳の枝に飛びつく事に成功した。正直一途の道風はその糞を發見し得なかつたので、一心不亂に書道に志して、遂に三蹟の隨一と出世したが、酒顚童子は、わがため投身の女子を尋ねて、ふと此蛙の糞を見、淨土の無碍自在の相を感得することより、欣求する心を糞に垂れ、五戒を破つて煩惱の情に培ふ方が、どれだけ身輕であり得るかしれぬと思つた。彼の追憶は、煩惱の羈絆を堆積の艶書の上に求めるべく忽ちにして篋笥のもとに走り、わなゝきながら迷ひの蓋を取ると漠々として立ち騰る一縷の煙、童子は茫然として暫く其處に神を失してゐた。かれ此時歲十六、淸淨無垢なりし童子の性情は、此瞬間にして墮獄の惡鬼となつたのであると。

五智の傳說が、國上の傳說に附會されてをる事は勿論だが、一國上の傳說が、「大江山繪詞」以前に存在してゐたか否かは全く明かでない。或は國上の傳說が、同じ童形を主人公とする大江山の傳說に結び付いて、混成傳說を形成せしめられたのかもわからない。

越後から丹波に渡る酒顚童子の足跡を尋ぬるに、一旦越中の國府に立寄つた形迹があるので、雨の二日を新港邊にうろつい

たけれど、射水郡の萬松山翁徳寺に、渡邊綱の元結一本、橘下條村の寺村文左衞門の家に、同じく綱所持の太刀一振、布谷村には綱の子孫がある由を尋ねあてたに過ぎなかつた。

で、大方の越後の傳説は、國上の岩窟から、どのやうな經途で丹波に渡つたかを明かにしてをらぬ。寺泊から船出して、すぐと京洛に求道に愛憎づかしの行動を取つたか、お伽草子の如く果して比叡山に一旦の身を寄せたか、その邊頗る曖昧である。第一、ずぼんと大江山に飛んで行つた、その大江山さへ、近江國伊吹山の奧だの、越後國中蒲原郡大江山村だのと、とてつもない異論があるが、古來の言ひ傳を尊重して、『丹後丹波の境なる鬼ケ城もほど近し。』と謠曲「大江山」に謠はるゝ丹波の大江山、福知山の北七里に聳え、和知福知の兩河が東西から落ち合つて巨流を成し、由良港に注ぐ其間の山峽から望むに最も高峻な大江山が、酒顚童子の住家であつたとするに、又頗るの矛盾が生じる。今も此山には、鬼の洞といふ自然の岩窟があるが、といつて、此山、鬼氣の人に迫る程の深山でもなく、所謂千丈ケ嶽の名を偲ぶ程の高山でもなく、賴光時代、交通は、海路由良港の船に福知山まで上り、陸路園部から牛野の驛路を經て、福知山丹後府への往來は、その頃なかなかに頻繁であつて、酒顚童子退治の一人として知られてゐる藤原保昌などは、丹後守として妻の和泉式部を携へ、此行路往來の一人であつた事が知られてゐる。かう考へてくると、酒顚童子大江山籠城の傳説は、至つて影の薄いものゝやうになるが、それは、酒顚童子を、神出鬼沒、變幻自在の妖魔と考へ込むからで、『酒呑童子がその姿、色うす赤くせい高く、髮はかぶろにおし亂し、晝の間は人なれども夜になればおそろしく、そのたけ一丈餘にして、譬へていはん方もなし。』の『童子が姿を見てあれば、宵の形とかはりて、そのたけ二丈あまりにて、髮は赤く、倒に髮の間より角生ひて、髭髯も眉毛も繁り合ひ、足手は熊の如くにして、四方へ足手をうち投げて、ふしたる姿見るだに、身の毛もよだつばかりなり。』などとお伽草子の形容に拘泥せず、彼に人間味を加へて普通の盜賊と解すれば、大江山に立籠らうと、何處に居らうと、ちつとも不思議ではなくなつてくる。

盜賊を擬して鬼となしたのは、當時一般の俗信として、鬼といふ物象が、最も怖ろしき物として認められてゐたからで、從つて暴惡なる事鬼の如き盜賊を鬼賊と呼び、單に指して鬼と稱へたので、酒顚童子なども「日本紀略」に、『醍醐天皇寛平九年七月二十二日乙未、陸奧國言、安積郡所レ産小兒、額上生二一角一云云、亦有二一目一』など言へる畸形兒では全く無く、當時名だゝる山賊の首魁であつたに相違ない。殊に平安朝の中葉以降、諸國に强

賊の群横行して、被害頻々であつた事は、隱れもない史上の事實で、洛外は勿論、羅生門朱雀門など初め洛中寺院の塔などにさへ、盜賊住居して良民を脅かしたので、一條天皇の正暦五年三月六日には、勅ありて、源滿正、平維時、源賴親、源賴信など、山々に差遣されて盜人搜索を命じられてゐる。かの酒顚童子を退治たといふ傳說のある源賴光は、此折の賴信の兄で、源滿仲の子に當る。「古今著聞集」によると、一日賴光、賴信の家を訪ねて、酒宴の折、厩の方を見やるに一人の童のいましめられ居るを誰ぞと問へば鬼同丸なりといふに、驚いて注意し、金鎖に繋がせたが、鬼同丸はそれをもふみ切つて遁れ出で、賴光を襲はふとして果さず、再び牛の腹に隱れ忍ぶを渡邊綱に見露はされて矢を射かけられ、遂に賴光の牛に切られたといふが、これらの說話に、二萬の兵を率ゐて、源賴光が、江州伊吹山に盜賊を追討するといふ「前太平記」の傳說などが附加せられて、大江山酒顚童子退治の傳說が成り、「日本紀略」に、『村上天皇天德二年閏七月九日戊午、有二狂女一、於二門前一、取二死人頭一食レ之、此後往々臥二諸門一之病者、乍レ生被レ食、世以爲二女鬼一』『圓融天皇安和二年六月九日戊寅、式部曹司內、南舍庇上、女一人撫レ髮立、是狐妖歟、』などが、綱が女鬼を斬つた傳說の根據であるかもわからない。

好事の者は、梁の武帝の大同の末年、歐陽紇といふ武人が鬼神を退治る支那の說話を押して、大江山酒顚童子の原話の如くにするが、頗る隱當を缺いてゐる。もと此說話は「白猿傳」に載れるもの、「白猿傳」は、唐時代の作で、「獸威秘書、」「唐人說薈」、「說郛」等中に收められ、「白猿物語」など稱して、和譯を存し、甚だ通俗のものである上、思想の上に類似の點があるので、古來往々にして此說を成すものがあるけれど、これの勅によつて當代の武將が鬼賊を退治るに對して、彼は一武人の鬼神に妻を奪はれたるを怒り悲み之が復讐に出掛けるもので、結末も「白猿傳」のは頗る振はない鬼神の子を紇の妻は姙んでをり、のみならず、鬼神の意によつて、其產るゝ鬼子を殺さずに置いたといふので、日本の此種の鬼賊退治英雄傳說とは全く其形式を異にしてゐる。古くは素戔嗚尊が八岐の大蛇を退治した神話でも、日本武尊が熊襲を征伐し、上總の鹿野山に鬼賊惡樓王を退治した說話でも、坂上田村麻呂が信濃國中房山に魏石鬼を退治たる傳說でも、乃至は平維茂が信州戸隱山に鬼女紅葉を退治たる傳說でも、形式は酒顚童子退治賴光の傳說と同じである。故に、强て共根原の傳說を求めたいなら、はるばる「白猿傳」を引張り出さずとも、手近な日本神話のうちに之を求める事が出來るのである。

大江山出征に就て慈延の「隣女晤言」は、「陽明家日錄」正曆元年庚寅、三月の處といふを引いて、

渡邊舍人綱
酒田靭負公時
碓井荒次郎貞光
卜部六郎季武

源朝臣頼光蒙
勅令、近日發行丹州大江山、早討朝敵欲令歸洛而已。宣執
達候。

源　頼　光　公
平　井　保　昌　殿

右同道にて御出程なく御退散、御用向極御隱密にて不知右兩人亦歸御禮、臣等旅中之有樣願之通山伏之裝束免許。

かくの如くありとなり。』云々と記し、「家田虎の「隨意錄」には、

又「酒顚童子之事、昔年聞レ之安永乙未歲六月、三井寺僧鸞鷲權僧正候二陽明家一、時會レ曝二古記錄一竊聞レ之、中有二正曆元年庚寅三月之記一、首書二渡邊右舍人綱、酒田靭負公時、碓井荒次郎貞光、卜部六郎季武一、而曰、源朝臣頼光、蒙二勅令一、近日發二行丹州大江山一、早討二朝敵一、欲レ令レ歸二洛一而已、宜レ願二執達一、而又書日、源頼光公、平井保昌、兩人伴來、少間而退去、其事密而不可レ知、兩人反還乃謝、且言、臣等旅裝、因レ請見レ許二道士之服一、正曆元年庚寅三月廿二日發行、而二十六日退治、今茲甲子春、一讀二阿弟慈延所レ著之冊子一、中有レ錄二頼光四臣之事一、而引二諸說一、乃因二陽明家之古記一、以斷レ之矣。是同二於昔年所レ聞焉、故錄以徵之、從二正曆庚寅一、至二今歲享保甲子一、八百十七年、』云々と記してをり、「鹽尻」には、丹波國籠宮明神に、源頼光鬼賊退治の途に奉つたといふ願書といふを存してゐる由に記されてゐるが、」それには、正曆三年（壬辰）三月二十五日の日附があつたといふ。然し、此願書といふもの、恐らく「前太平記」十九の卷、頼光朝臣打越丹波事、付籠宮權現願書事の條に附會して僞作したものであらう。「一話一言」には、『大江山緣起、八月十日は童子忌日。』云云といふ事を記錄してゐるのが、酒顚童子の死亡年月日の明かであるべき筈がないから、これも後世の作爲になつたものであらう。

出雲地方の口碑に、大江山の酒顚童子が、退治られて、その頭が竹籔の中へ投棄てられると、童子の亡念で、その頭の肉が腐つて、幾千萬疋とも數へられぬ蚊軍となつた。蚊が人間を刺すのは、酒顚童子が祟るのであるといふ傳說があるが、揃毛の籔から生れ出て、竹籔の中に死滅し、忽ち蚊になつて今の世までも人間を惱ますなどは、如何にも酒顚童子の酒顚童子たる

處を首尾一貫的に發揮してゐるやうでおもしろい。

酒顛童子の征伐の大將は、言ふまでもなく源頼光であるが、副將格に、藤原保昌が置かれてあるのはまことにふさはしい。何れかといへば頼光は武勇の將で、彼一人ではその陣立が心細い。そこへ來ると保昌は、自然と威の備つた且つ智惠者であつたらしい。或夜、世の中の皆が寢靜つた頃彼は月の美しさに興じて、嗜みの笛を吹き鳴らしながら、月下をさまよひ歩いた事があつた。折から來かつたのは强盜追剝一方の巨魁袴垂といふ者であつたが、彼は、やがて秋寒の一稼ぎに、よい掠鳥ではあると保昌の後をつけた。然るに、十餘町もつけながら、流石の袴垂が臆して手が出せない。袴垂は、かくも臆する自分を嘲りながら、それでも不敵者であつたので、突然刀を拔いて保昌に切りかゝつたなれど、『何奴だ。』の一喝を喰つて、びくつと肝をひしやぎ、匿れもならず、頭から追剝だと名乘つて出た。保昌は冷やかに彼を見て、軈て彼に、『己について來いよ。』と命じ、そのまゝ笛を流して前に立つて行く。天下の袴垂ともあらうものが、今では逃げるのが却つて恐しく、おづおづと保昌に隨從して、その家に連れ込まれ、衣服一領賜つた上、『此後とも過ちすな。』と、申し含められて返されたが、其時の恐ろしさ忘れ兼ねたと見え、其後他の罪によつて捕へられた時、袴垂は、『生涯に怖ろしかつた事は、たつた一遍、月下に笛を吹いて通つた人をねらつた時であつた。』と白狀したといふ事だ。かうした、たつた一つの逸話によつても、保昌の偉らかつた事、武勇の勝れてをつたばかりでなく、優美な、そして何事にも恐れない態度の大きな人であつた事がわからう。

門閥正しい源氏の大將の副として、藤原保昌のふさはしい人物であつた外、頼光部下の四天王にも、それぞれ記すに足る武勇談が語り次がれてゐる。殊に渡邊綱と碓井貞光とは、武藏國に住つて、共に武威を輝かしてゐた箕田源二源宛と、村岡五郎平良文との愛子で、宛の子が綱、良文の子が貞光、親の代から親交のあつたもの、昔は父親同士武を競つて、互角の名を擧げた堂々の武士の子が、後には義を結んで頼光に從ふといふ筋道になる。

所謂頼光の四天王のうち、最年少者はいふまでもない坂田公時で、一般には、彼は足柄山の山奥に、山姥の手に育つたと信ぜられてゐるが、實は信濃國南安曇郡八坂村大字上籠の産だと言はれ、其地には、金時山、金時窟、金時産湯の池などを言ひ傳へてゐる。山姥の謠曲に、『これはあげろの山とて、人里遠き所なり。』云云と見える山姥の棲處は、別に越後國西頸城郡上路村であるといふ傳說を存してゐるが、坂田公時の後胤なりと稱

するものは、この信州の上籠から出てゐる。承應明暦から明和に至る百餘年間、金平本によつて偉大なる勢力を作り、明和・安永に至つては、

へ蜈蚣がほんの金平ならば、俵藤太の矢先にかゝつて、射らるる筈はなけれども、藤太が矢先で射らるるからは、藤太がほんの金平金平。

へとゝがほんの金平ならば、嚊に叱られ飯貪く筈はなけれども、嚊に叱られうろたへ廻つて飯貪くからは嚊がほんの金平金平。

などと、金平したりや節に唄はれ、『強いものは金平』と、ものは附にまでされた英雄坂田公平は、まこと坂田公時の後胤に出た實在の英雄ではなく、軟弱なる思想に反抗して、當時の社會が担ち上げた、理想的假作の英雄であつたに過ぎない。（終）

櫻田餘聞　水戸殿御使者

村松梢風

一

今し方仕事から戻りの駕昇きが、空駕を軒下へ卸して這入つて來て、土間へ突つ立つたまま升の角から小氣味よく冷酒を煽り付けて出て行つたあと、酒屋の店には暫らく客が絶えてゐた。雪は小止みもなしに降り續いてゐた。往來にはもう彼是五寸位も積つてゐる。其の雪をサクサク踏んで歩く通行人の足音が可成り繁く聞えた。

「そろ〳〵花の咲く時分だのに何といふ莫迦な陽氣だらう」酒屋の亭主はさう思ひながら縄暖簾の間から戸外の眞白な物を眺めた。

「許せよ」其の時から言つて縄暖簾を潜つてヌッと這入つて來た浪人體の武士があつた。雪の附いた饅頭笠を片方の手に提げ合羽を着て、朴齒の足駄を履いてゐた。

「入らつしやいまし」と亭主は揉み手をしながら客を迎へた。

「亭主、冷で宜敷いから二合程頼む」武士はかう言つて合羽を着た儘手近い樽の上に腰を掛けた。

「へい〳〵畏りました。――どうもちと陽氣外れで、悪い物が降り出しましたな。外は嘸お寒う御坐いませう」

武士は、亭主が量つて出した酒を湯呑に注いでグツと一ぱい呑みほした。

「否、雪は豊年の貢と言つて、何時見ても氣持の好いものぢやて――。時に亭主、お前の家などは種々の人間が立ち寄る處だが、今朝程何か變つた評判は聞かなかつたか、どうだ」

「否、別段變つた評判も聞きませんが、何か御坐いましたんですか」と亭主は怪訝さうな顏をして問ひ返した。

「なに、變つた事が有つたといふ譯ではないが、一寸訊ねて見たのだ」かう言つてから武士はふと心附いたやうに「亭主、確かお前の家は水戸家のお出入りだつたやうに思ふが？」

「旦那よく御存じで。こんなケチな店ですが、酒が良いと仰しやつて御家中の方が皆樣御贔屓にして下さるお蔭で、お出入りを許されて居りますんで」

「左樣か。では一つ其方に頼み度い事がある。一番良い酒を二升程御家老の岡田信濃守殿の許迄屆けて貰ひ度いたのだが」

「お易い御用で、どうも毎度御贔屓に有難う御坐います。して旦那樣のお名前は」

「あはゝゝゝは。いや夫れは先方で訊いても言ふには及ばん。」俺は以前岡田氏と俳諧の友達でな、今は浪人の身の上だが、今日圖らずも水戸家の御門前を通行致すにつけて昔馴染の岡田氏の事を思ひ出したのだ。此の雪を肴に俺が贈つた酒で一獻呑んで頂けばそれで宜いのだわい。あはゝゝは」

「左樣で御坐いましたか。手前共は無學で一向解りませんが、俳諧とやらは大層風流な物だと申す事で」

亭主は直ぐ樣大きな貧乏德利へ別口の酒を二升量つて入れて德利の口へ堅く栓を差して客の前へ持つて來た。

「旦那樣、是れで宜敷う御坐いますか」

「結構々々。では直ぐ樣屆けて貰ひ度いのだが」

「畏りました。相憎小僧が出て居りますから、手前が一走り行つてお屆け申して參りませう」

「夫れは大儀ぢやな、では是れで俺が呑んだ分と、兩方の勘定を取つて呉れ」と言ひながら武士は財布から二分金を一つ取り出して亭主に渡した。

「へい〳〵、どうも有難う存じます」と亭主はペコペコお辭儀をして、其の金を持つて剰錢(つり)を取りに帳場の方へ行つた。

武士はギロリとした眼を亭主の方に配りながら、懐中から何やら小さな紙片を取り出して、それを堅巻きにして素速く德利の栓を拔いて中へ差し込んだ。亭主は何も氣が付かずに剩錢を盆の上に載せて持つて來た。

「旦那、どうぞお剩錢をお改めなすつて」

武士は夫れを財布へ納めて懐中へ入れた。其の時亭主は、不圖、武士が左の腕を怪我でもしたと見えて洒し木綿でぐるぐる卷いて、夫れに紅く血がにじみ出してゐるのに眼を付けた。よくよく見ると、襟頸のあたりにもペツトリ血のりらしい物が附着てゐた。

「旦那樣、何處かお怪我でもなすつたんぢやあお御坐いませんか」

何の氣無しにかう訊いて見た亭主の言葉が、武士の體をピシリと鞭で打つたやうに感じた。

「否、怪我といふ程ではない。實は昨夜さる處で飲み明かしてな、甚だしく銘釘して、ちと暴れ過ぎた酬ゐで方々擦り剝いたのぢやわい、あつはゝゝゝは」

武士は相手の言葉を打ち消すやうな高笑ひをしながら急いで起つて饅頭笠を冠つた。

「亭主、では確と頼んだぞ」

かう言ひ捨てて、武士は縄暖簾を潜つてプイと表へ出て行つた。

二

水戸家の老職岡田信濃守は、靜かに茶を喫みながら、珍らしい庭の雪を眺めてゐた。其處へ用人が遣つて來て、

「只今お勝手口へお出入り町人の久兵衛と申す者が參りまして浪人體の武士に頼まれたと申して、御主人に差し上げるやうにと言つて德利へ酒を入れて屆けて參りましたが、如何計らひましたもので御坐りませう」

「何、德利の酒を屆けて寄越した？して、遣はした當人の名は訊ねて參らぬのか」

「夫れを訊ねました處、名前は言はなくても宜いと申して行つたさうで御坐ります。然し、何でも以前俳諧の御交際を致した者だと申したとかいふ話で」

岡田はふと胸に思ひ當つたやうな顔をして、

「贈り物とあらば受けて置いて差しつかえあるまい。兎も角其の德利を是れへ持參致せ。あゝこりや〳〵、ついでに大きな丼を一個添へて持つて參れ」と用人に命けた。

間も無く用人は二升入りの貧乏德利と大丼を主人の居間へ持

ち運んで來た。
「如何遊ばしますので？」徳利と丼を其れへ置いて用人は怪訝さうに訊いた。
「あゝいや、予に尠し考へが有るのぢや。其方は退つて居れ」と岡田は徳利を見遣りながら言つた。
岡田は獨りになると、徳利を側へ引き寄せて栓を拔いた。そして兩手で徳利を持ち上げて中の酒を靜かに丼にあけた。ドクドクと音をさせて酒が丼へ八分目位滿された時、徳利の口から酒と一緒に一枚の紙片が飛び出して來た。岡田はハツと眼を輝やかして、酒を注ぐのを止め、丼の中に浮かんでゐる紙片を破らぬやうに丁寧に指の先きで撮げて見た。酒に浸された紙片には鮮やかな文字が現はれてゐた。

今朝同志十八人櫻田門外に於て首尾よく國家の元兇を討ち留め申候事　　鐵

夫れは確かに關鐵之助の手蹟と思はれた。岡田は思はず「占めたツ！」と叫んだ。
櫻田事變が小石川の水戸邸へ知れたのは、夫れから間もない事、午前十時頃だつた。誰が見て來たともなく、藩中の者が井伊家の登城先きへ斬り込んだといふ風說が立つたのであつた。

夫れから引き續いて、愈々大老の首を取つたといふ事が聞えて來た。邸內は、上下を擧げて大騷ぎに陷つた。名狀の出來ない昂奮の色が人々の面上に漲つて來た。
「愉快々々」と譯もなく連呼する若侍もあつた。
「何だか迂論な話だ、全體、大老の首を取つたとは餘り話が大袈裟過ぎる」と半信半疑でゐる向きも尠くなかつた。
其處へ、御城附白井平次兵衛が遽かに下城して來た。それで全く風聞の通り、大老が櫻田門外に於て掩殺されたものに相違無い事が一般に知れ渡つたのであつた。
夫れからあとは追ひ追ひと樣々の報告や風說が水戸邸に達した。「今夜彥根藩士が主君の仇を報ず可く大擧して來襲する」といふ風說も聞えて來た、噂とは言ひ乍ら、是れ丈は當然さうある可き事として、殆んど的確の事實のやうに人々の間に信ぜられた。
軈て、一家中の侍は惣出仕を命ぜられた。續いて、十歲以上の男子は邸內の弘道館へ集れといふ達しも出た。廣い正廳は家中の侍で充滿された。其處で老職の一人が進み出て事件の經過を報告した後で、彥根の藩士が今夜當家へ押し寄せて來るといふ噂があるから、此方でも夫れに對する防備を施して置かねばならぬが、右に就いて意見のある者は遠慮無く述べて欲しいと言つた。すると種々の意見が出て來た。「飽く迄も小石川の邸を

固守して一歩も退く可きではない。それには駒込中屋敷に在勤する人々をも此方へ招いて十分に奮戰するがよい」と言ふ者と「否々、此の邸では守るに不便だから地の利に據つて對抗すが宜い、夫れには直ちに當邸を引き拂つて駒込へ合體して立て籠るのが最乘の策である」と主張する者とあつた。が、結局、「一歩でも後へ退いては水戸の武勇の名折れである。又現在の人數だけでは敵はないと言つて駒込から往援させたとあつても矢張り外聞が惡い話だから、徹頭徹尾居る丈の人數で當邸を固守する事にしよう」といふ話が勝利を得た。

直ぐ樣邸中へ觸れが廻つて、各藩士の家族の者は廻り拍子木の音を合圖に、老幼を擧へて駒込の中屋敷へ立ち退くやうにといふ事になつた。

軈て拍子木がチョーン／＼と鳴つて通ると、藩士の家族はゾロ／＼邸を出て駒込を指して引きあげ始めた。中には良人の先途、我が子の武者振りを見屆けやうと、腰を据えてゐた婦女子も尠くはなかつた。井伊家の同勢は主人を討たれたので死に者狂ひになつて一氣に攻め掛るに相違無い。當家の武勇を汚すやうな事があつては祖先へ對して申譯が無い。千騎が一騎になる迄も卑怯な振る舞ひのないやうにといふ注意が老職から人々に與へられた。

小石川邸の騷動は直ぐ樣駒込の中屋敷へも知れて來た。「本邸へ井伊の同勢が攻め寄せるなら、水戸の武勇を天下に示す絕好の機會だ、吾れ／＼も高見の見物をして居る場合ではない、猶豫なく往援しろ」といふので、午過ぎになると中屋敷の侍達はどん／＼小石川へ驅け着けて來た。森川町邊から壹岐殿坂へかけたあの邊一帶の町通りが、中屋敷へ引き揚げて行く家中の老幼婦女子と、鎧櫃を背負つたり長槍を擔いだりして本邸の往援に出掛ける侍達とで雜鬧を極める程だつた。大老が殺されたといふ事は最早江戸市中殘らずに知れ渡つてゐた。直ぐ其のあとから「今夜彥根と水戸と合戰が始まるさうだ」といふ評判が立つと、市中は一層劇しい混亂に陷つた。

井伊大老が道路で掩殺されて首級まで取られた事は隱れもない事實であるが、而も表面は、登城先きから急病を發して邸へ引き返したといふ事にして、井伊家からも、幕府からも公表されてゐた。老中、若年寄が病氣の場合には、三家を始め諸侯は早速に使者を立てて見舞ふのが慣例であつた。今日も表面大老が病氣として發表された以上、水戸家からも例に依つて見舞の使者を立てなければならなかつた。然るに先刻から井伊家の來襲に對する武備やら議論やらで取り紛れて大分時刻は遲れたが裏面は裏面、表面は表面で、畢竟使者を立てない譯には行かな

い、老職等は相談の上、愈々井伊家に對して病氣見舞の使者を派する事に決めた。

其の日當直の使番は、楠弟之助、伊東元太郎の兩人であつた。楠は二十八歳、伊東は三十歳で、どちらも二百五十石取りの武士であつた。彼等兩人は老職の部屋へ呼び寄せられて、井伊家へ使者の役目を授けられた。

「平素と異り斯樣な際であるから、途中若しくは先方の邸に於て何か變事が起らうも知れぬ。が、如何樣の事が起らうとも其の場に於てうろたへて當家に瑕瑾を殘さぬやう、首尾よく役目を果して立ち戻つて來るのを相待ち居るであらう」と老職は兩人に對つて懇ろに言ひ聞かせた。

「畏りました。縱ひ吾々の一命を抛ちますとも、決して役目の名を辱しめぬやう、覺悟を定めて參るで御坐りませう」

と言つて兩人は其の場を退つた。楠、伊東が井伊家へ使者に立つといふ事が知れると家中は又もや大騷ぎを起した。時に依つては上使をさへも殺し兼まいとした水藩である。其の自分達の心持から想像して見ても、此の場合、井伊家の家來が水戸の使者を無事に還す筈はない。假りに先方の重役に深慮があつて亂暴な振舞ひを禁じたとしても、彦根藩にも腰拔ばかりは居らぬ。まして今夜にも當家へ攻め寄せて來やうといふ程殺氣立つた今の場合、血氣に逸る若侍達が何でおめ／＼指を啣へて引つ込んで居るものか、必ず一騷動持ち上るに決つてゐる。使者に立つからには無論一命は無いものと思はねばならぬ。——一番案じられるのは使者の役目を果しての歸途である。夫れも櫻田門外から日比谷御門迄の間が最も危險であると思はれた。

御使者の供揃ひは若黨が二人、槍持馬丁草履取各一人、兩掛或ひは挿箱の擔夫が一人、總勢六人に過ぎぬ、御使者が正副二人出る時には供方も二倍になる。今日も楠が正使、伊東が副使で二名赴くのだから供方は都合十二人である。僅か十二人の同勢に對して井伊家の要撃隊はどれ程の人數が出るか分らない。衆寡敵す可からざる事は最初から判明り切つてゐる。が、今日のやうな場合に增員をすると弱味を見せることになる、依然として平日の定供でなければならない。そして一行は潔く討死するより外に爲す可き方法は無いのだ。水戸家が天下に誇負する武勇の程を知らせて武士の面晴れにするのは此時である。隨つて井伊家の要擊隊に出遇つて、若黨仲間たりとも一名でも逃げ出すやうな事があつては後日の恥である。それには一期半期の者を出して遣つたのでは案じられる。供方を吟味して覺悟のある者を擇ぶがよいといふことになつて、到頭士分の者を若黨仲間に扮せしむることになつた。人選の結果、槍持には福王忠左衞門、戶

祭久之進、馬丁には堀口友之進、江幡兵右衛門、若黨には酒井市之進、白石庄三郎、林達部、伊藤半三郎、仲間には同心の中から人選をした。悉く一騎當千と言はれる者ばかりであるが、就中馬丁に扮する堀口江幡の兩人は君公の馬術顧門、若黨に扮する五名は千葉周作門下の錚々たる劍客揃ひであつた。

　楠には妹があるばかりだつたが、伊東には妻子があつた。伊東は御長屋へ立ち戻つて、妻子と訣別の水杯を酌んだ。

三

　水戸家の使者が小石川の邸を出たのは午後の六時であつた。間際になつて、特に徒目付大河内熊之介が差し添へられた。大河内は徒目付の定供、手附同心、押へ仲間、草履取各一人を召連れた。使者の同勢は都合十八名になつた。

　道順は水道橋を渡つて三崎稲荷の前を眞直ぐに神保町通りへ出て、あれから一橋を這入つて濠端を日比谷へ向つて進んだ。御門限は何處も午後の六時であるが、水戸樣御使と言ふと、見附々々では片扉を開けて一行を通した。

　途中から日はとつぷりと暮れた。雪はとうから止んでゐたが空はまだ重くどんよりとして、眞暗い夜の闇が無氣味に頭上を壓してゐた。一行は咳き一つ發する者もなかつた。提灯の明りが眞白い往來の雪を照らして、雪を踏んで歩く足音だけが寂寞を破つて耳に這入つた。

　使者より一足先きに進物が井伊邸へ、屆けられた。軈て一行が皂莢（さいかち）河原迄來ると、草履取りが驅け拔けて「水戸殿お使――」と、井伊家の表門に向つて叫んだ。忽ち表門が八文字に開かれた。正副の使者は其處で馬を下りて門內へ歩いて行つた。玄關から一名の侍がバラ／＼と跣足で飛び下りて使者を先導した。使者は式臺の處で出迎への人々に會釋して、自分達の姓名を告げてから、先方の庶士に案內されて使者の間へ通された。

　使者の間には今屆けたばかりの進物が白木の臺に載せて直してあつた。正席の外に、左手に少しばかり離れて同じやうな席が出來てゐる。楠、伊東の二人は左手の席に就いた。すると案內に出た庶士が刀を請け取つてそれを傍らの刀架に掛けた。茶と煙草盆が夫れへ出た。

　井伊家の重役が出て來て、使者と向き合ひに座つて挨拶をした。楠、伊東の兩名も先方に挨拶を返し、其のあとで正面の席へ着座して使者の口上を述べた。

「掃部頭殿御病氣の趣承り、使者を以て御容體御見舞ひ申上げます。御見舞として國產浮木龜（うきき）を進ぜられます。宜敷く御披露を賴みまする」

「主人掃部頭病氣に付、御使を遣はされ難有仕合に存じ奉る。醫師見立てもよろしく、聊か心配も無之、此段宜敷く御披露願ひまする」と、井伊家の重役は平身低頭して答へた。

口上が濟むと使者は一旦元の席に復した。平素ならば口上の後で懇談を交す處だが、今日は夫れどころでないので、早速暇を告げて起つた。

一行は井伊家を出て、元の道を引き返した。櫻田門外へ差し掛る時分には、一同の心臟は極度に緊張して來た。今朝の罪事の中の活劇が彼等の眼前に彷彿して來た。無數の劍の光が自分達の身邊を取り卷いてゐるやうに感じられた。

路傍には、着流しに兩刀を帶びた人物が三々五々佇立んでゐた。一行の眼には、其の容子が何とも言へず胡亂なもののやうに映つた。日比谷へ近付く時分には益々其の人數が增して來たが、夫れらの人物は、何れも唯往來の端から一行の樣子を窺ひ乍ら隨いて歩くばかりでどういふわけか何時迄經つても手出をする樣子がない。一同の者は終ひに疑念を生じて來た。若しや本邸から途上の警備に配置したのではないかと思つて見た。然しそんな事があらう筈がなかつた。彼等が出掛ける時も、警固とか加勢とか種々の名義で同行を願つた人々に對して重役は嚴重に差し留める旨を言ひ渡した位であつた。して見ると、矢張り彦根の藩士に違ひない。油斷はならないとも思つた。一同は五里霧中に彷徨するやうな氣持で、態と緩り歩いた。

路傍の怪しい人物は、三人減り、五人減り、段々尠くなつて來て、日比谷附近の危險區域を通り越してしまつた時分には一人も姿が見えなくなつた。

水戸家の使者は、午後の九時過ぎに難無く小石川の藩邸に歸還した。藩邸では、深夜に及んで彦根の同勢が押し寄せて來るに相違無いと言つて戒嚴の用意おさ／＼怠り無かつた。一同は使者の一行が無事に歸つて來たのを奇蹟のやうに思つた。楠、伊東の兩人は直ちに藩の重役の前へ出て復命した。途中で怪しの人物を澤山見かけたにも關らず、先方から斷つて出る模樣がないので、眞逆此方から手出しも出來ず、何事も無く歸つて來たのだと途上の事までも報告したあとで、

「今日こそ晴れの死場所と思つて出掛けましたのに、何事も起らず誠に殘念な事を致しました」と言つて、伊東は口惜しい顏をした。

小石川の水戸邸は終夜混雜を極めてゐた。變を聞いて本國の水戸から足を空に驅け着ける者が陸續として絕えなかつた。「國元から藩士を召集したとあつては幕府へ對しても宜敷くない。來着した國侍は慰諭して直ちに本國へ歸せ」と言つて重役が命

令したが、誰れも其の命令に服從する者は無かつた。

しかし、彥根の同勢は遂に來襲しなかつた。其のうちに夜がほのぼのと明け放れて、雪のあしたらしい澄んだ太陽が、浮らかな雪の上にギラギラと耀いた。

昨夜、路傍を徘徊してゐた澤山の人物は、幕府が特に配置したのであつた。（完）

〔作者附記。此の稿は三田村鳶魚氏の研究に負ふ所多し。同氏に對し謝意を表し、且つ讀者諸君の御諒恕を乞ふ。〕

續神曲地獄篇

生方敏郎

一、知識階級地獄

「どうだ、これから廻り路をして、知識階級の人々が墮ちる、いろ〳〵の地獄を見て行かないか？」

と彥さんが私を顧みて云つた。私は知識階級の地獄と聽いてゾツとした。

「ですが知識階級の者なんかでも、地獄へ墮ちるやうな事がありますか？　政治家は奸策を弄するし、豪商は貪るし、軍人は血に渇くし、其他いろ〳〵地獄へ墮ちる人もありませうが、知識階級なんかは、景氣が好くつても洋服細民位のところに止まり、景氣が惡るければ高等遊民と變名せざるを得ないやうな、慘(みじ)め目な人々許りです。それ等を地獄へ墮しては、あの世でも苦しみ、又この世でも苦しむやうなものぢやありますまいか？　それでは少し可哀相過ぎます。」

「可哀相でも何でも、惡い事をする奴は仕方が無い。おまけに教育を受けて惡い事をする奴と來たら、地獄へでも放り込んで、目の醒めるまで懲罰するより外はあるまい。いくら君が知識階級の一人だからと云つて、あんまり自家辯護許り考へずに、周圍の仲間を觀て見たらどうだ？」

「それやあ勿論知識階級だとて、聖人君子許り揃つちや居ませんよ。然しあんまり旨い汁を啜つたといふ譯ぢやないから、地獄まで墮すのは可哀相ですね。」

そんな問答をしながらも、私は矢張彥さんの行く方へ、引き摺られるやうに、隨いて行かない譯には行かなかつた。

その內に私達は、淺草の花屋敷か上野の動物園でもあるやうなところへ來た。入口に知識階級地獄と認めた額が掛かつて居た。其處には虎や獅子を初め、豚、鹿、犬、猫などの動物が澤山居た。私は

「ハヽア、これは地獄の動物園ですね。矢張知識階級の人が見て樂しむ爲めに、飼つて置くのでせう？」

と訊くと、彥さんが笑つて、

「なアにさうぢやない、まるきりその反對なんだ。此處では動物を樂しませる爲め、知識階級の人間が飼つてあるんだ。見なさい、多くの動物が檻の前に立つて、中に飼はれて居る人間どもを見物して居るから。」

成程、これは世が逆樣だ。熟く見ると、動物の方が見物人であつた。その取つ附きの檻の中には、耳が大きく、異常な發達をなし、そして足のヒヨロ長い人間どもが、眼をキヨロつかせて居た。何となく卑しい、物欲しさうな、そして人の好ささうな間の拔けたところもあるが、嫉妬心の深かさうな、煽動に乘つて輕擧をしさうな、けれども人を疑りさうな、復讐心の强さうな顏をした異樣な人間が居た。これは何かしらんと思つて、金網の傍に付いて居る札を見ると、それには「新聞記者の見本」としてあつた。そして傍に細い說明も付いて居た。

說明書

これは特別に物を聞くのが速く、耳が異常の發達をなし、そして性來好奇心强く、他人の秘密を訐くのが好きで、それを探訪する爲めに步き廻つたので、足の畸形に發達した人類の一種である。彼の肩が非常に瘦せ悄けて居るのはその記事に對して何等重き責任を荷ふに堪へぬ事を示して居る。見よ彼の兩手は變形して二本の尾と成つて居る。その右の尾は資本家の前に振るの役目を爲し、又左の尾は勞働者の前に振るの役目を爲す。その性質は度量狹く、己より富み且權勢ある者を見ては非常に嫉む。これと似而非なる職業の文士等が高名なるを見ては、嫉妬するのみか、同業者の內にても、多少羽振り好き者に向つては、妬みの刄を磨く。その耳の聞くところは速いが、頭腦が明晰でないから、常にその判斷を誤り、事實の眞相を遁がして居る。それ故彼等の作つて居た新聞といふものは、實は新聞ではなくして誤聞であつた。誤聞を誤報し、その爲めに人々に迷惑を懸けた事は非常に大きい。

その直ぐ隣の檻の中にも、略ぼそれに似た人間の見本が居た。但、口が耳の近くまで裂けて、眼玉が一層薄氣味惡い光を放つ

て居ただけの相違だ。その說明書にはかうあつた。

これは他人の罪惡を探訪し、これを扞いて世間に報道すると云つて威しつけ、即金を得るか若しくは效目なくして高價なる廣告の註文を得て生活の途を立て、而かも口には常に正義人道、デモクラシー、普通選擧、何でも流行のお題目を唱へる動物。特にその中でもこの男は、脅喝的天才を有つて居た。一例を擧げれば、或る日その男は知人を訪問して、前の客が其處へ忘れて行つた鞄を發見した。そして主人が便所へ行つた間に中を搔廻して、一枚の診斷書を發見した。この鞄を遺失した客は某製菓會社のお抱へ醫者であつた。彼は診斷書を手早く寫し取つた。それはその會社の職工の一人に對して肺病の診斷を下したものであつた。彼は北叟笑みして知人の許を辭し、直ちに車を走らせて某製菓會社の重役を訪ふた。そして

「今日は貴方のところの職工A君のお見舞に上りました。」

「それはどうも御親切様に有難う存じます。貴君は何方樣で？」

「なか〳〵重い肺病のやうで、貴君の方でもさぞお困りでせう。菓子屋の職人が肺病ではまるで結核菌の大賣捌をして居るやうなものですからね。」

とギヨロツとした眼で先方を睨み付け、ニヤリと氣味の惡い笑ひ方をして、

「手前はかういふものです。」

と「○○實業雜誌記者」の肩書ある名刺を出した。それは實業界の誇張したる素破拔き記事を以て知られて居る雜誌であつた。會社の重役は蒼くなつて、一頁金壹千圓也の廣告料を拂つた、云々

その次ぎの檻の中には、矢張貧弱で神經質さうな、黑い法服法冠を着けた人間が居た。その舌は蛇のやうに長く、外へ垂れて居た。咽喉の渇いた時の犬のやうにも見える。札には『辯護士の見本』としてあつた。

説明書

權利義務のみを知つて、義理人情を知らざる動物、博徒、放火犯、殺人犯、詐欺取財、收賄罪等罪人の提灯持を職業とする時もあり、又泡沫會社の參謀となる時もあり、高利貸の手先となる時もあり、時には原被兩告双方より謝禮を受けて、掛引きする事もある、至つて收入の多さうな動物である。その癖ピイ〳〵風車で、酒を飲めば飲倒し、家賃は拂はず、常に商人を戰慄せしめて居た。法網の許す範圍で、他人の私慾の爲めに、若しくは自分の私慾の爲めに、働いて居た報いで、今はこの金網の中だけで働く自由を許されて居るに過ぎな

い。繁昌しない者は一年平均八件しか取扱はず、成功した者は衆議院議員にまで泳ぎ出して、お手前物の駄辯を振ふが、義理人情に無感覺だから、云ふ事が何時も無責任な屁理屈ばかりだ。國民がもつと自覺して來れば、かういふ文化的教育なき法律家を、自分達の代辯者として選擧する者は、恐らく一人も無くなるであらう。

偖又次ぎの檻の中には、仁丹の看板のやうな帽子を冠り、鼻下に八字髯を貯へた、顏色蒼白の動物が居る。これには『官吏の見本』といふ札が付いて居た。私がその說明書を讀まうとして居ると、彦さんが、

「何だか厭な奴だね！　此奴等は昔で云つたらお代官といふところだ。」

「何處の國の人でせう？」

「さア何時頃から生捕られて來たものかな？古い時分には薩摩か長州へ生れた土方人足のやうな奴等は軍人と巡査とになり、身體の虛弱な妓夫太郎か緣日商人のやうな奴等は皆この仁丹の帽子になつたものだ。さうして知事樣風を吹かせ、地方巡行の際には、沿道の百姓に路まで掃かせた位に威張り散らし、その部下の郡長風までが、人民の家へは泥靴のまゝで、座敷へ上つたものだ。然し此奴はもつと近頃生捕つて來た動物だらう。」

と彦さんが說明書を見た。私は自分の小供の時分見た稅務官吏の事を思出した。私の生家は藥舖であるところから、一年に何回となく稅務官吏が巡つて來た。薄髯を生やした、色の生白ろい青二才で、黃色い襟が黑い靴の上にチラ〳〵見える。全く彦さんの云ふ通り私の家へ來ると土足のまゝで、通常藥だの劇藥だのの棚の前へ上つて行つた。商家とは云へ舊幕時代には苗字帶刀を許され、奉行や家老も打解けた樣子で、時々は用達に來たがその時代でさへもこんな橫柄な人間は無かつたとやらで私の父などは、何時も稅務官吏の歸つた後で憤慨して居た。そして少し厭な顏をすれば、直きに難癖つけて罰金を取立てた。それも長州の男だとやらで、私の町などでは、薩長人と云へばゲジゲジのやうに憎んで居た。だがこの說明に據ると、この見本はそんな者ではなかつた。

說明書

これは文官任用令の製造するところに懸る。常識も識見も無く、肋骨の一本足らざる動物。閥族の爪牙とも後繼者とも付かぬ者。上役に阿りつゝ、上役の死ぬのを待つてさへ居れば、何時かは順押しに出世出來るといふのを處世の方針として、一時間で出來る仕事を、一日掛かるやうにしてお茶を濁し、無能と懶惰とはその二大特質だが、偶々悧巧振つて前人

未發の金をしたと思ふと、それは名所古跡を湮滅して、猫額大の埋立地を儲け出さうとする位の馬鹿さ加減。年棒は定つて居るのに、物價は騰るばかりなので、官吏の位もだんだん下り今では昔のやうに肩で風を切つても睨みが利かず、それ故時々卑しい根性を出して、御用商人から賄賂を取るもあり、又は奸商の金を强奪せんとして人殺しをするもある。

次の檻には洋服を着て鼻下には髭などを貯へ鳥渡前の官吏の見本と肖たやうな顏をして居ながら、腰には黑いゴロフクの前垂を掛けた男が居た。洋服を着て下駄を穿いて居ると、役場や學校の小使のやうだが、洋服を着て前垂を掛けたは、鳥渡珍らしい格構だ。さう思ひつゝ更に熟く視ると、彼の前に置かれた臺の上には、小刻みに刻んだ紙片が散らばつて居て、彼は肉切庖丁のやうなものを持つて居る。札には『敎育家の見本』と認めてあつた。

説明書

敎育家と稱する動物は、多くは官費で、自身の懷を痛めずに僅かばかりの學問を仕入込む。尤も時には、その內の幾分かを自費で支辨するもあり、又は全然自費で購入するもあるが、その僅かの學問を、肉切庖丁で刻むやうに、毎日一片二片位づゝ、何年となく同じものを刻んで販賣する。それ故終ひには古くなつて、學問に黴が生えて來て、購賣者の精神的衞生に危害を及ぼす事が少くないが、肉や魚の商人に對し取締りのなか／＼矢釜しい警視廳も、何ういふものか學問の黴には危險を感ずる事が遲鈍であると見えて、何時も眼零しにして居る。それ故方々の學校に二十年勤續だの、三十年勤續だのといふ、念入りに黴の生えたのが幾許もあるが、妙な事にはかういふ黴は却つて表彰をされて居る。だから鳥渡考へるとこの學問の切賣商人程ボロイ儲けのある商賣は、外に類が無ささうに思はれるが、あべこべに學問の値段が頗る安く、物價騰貴の大波を喰つては、彼等一家族の細い煙もたて兼ねるといふ始末、そこで小中學校の敎員は、父兄からの付け屆けを當にし、大學の敎師は官本主義だの民本主義だの、デモクラシイだのソシアリズムだの、さういふものの行商までして內職的に稼がねば追付かないのだから憐れなものだ。そこで彼等の中でも惡性の奴は商人から賄賂を取つて敎科書を採用した。それが所謂敎科書事件で、全國に亘つて この收賄敎家が澤山出來、一時天下を騷がせた事さへあつた。然し今はそんなボロイ儲けもなく、相變らず黴の生えた學問の切賣りで、シガない暮しをして居るから、營養不良に陷り、顏色もこの通り惡い。産地としては茗溪、赤門其他私立の島からも

出るが、何れにせよ氣の利かない人間の見本である。

彥さんは之を讀み終つて、

「この人間の見本は、何れも之れも貧弱に見えるが、また何れも之れも必ず賄賂を取るといふやうな、いまはしい文句が付いて居る。かういふ人間の見本は、吾輩が日本に居る頃は、未だ全く見る事も出來なかつたから、此處へ來て初めて見るやうな次第だが、何かねえ、明治以後に出來た人間の見本は、皆このやうに賄賂を取るのかね？」

と訊かれて私は鳥渡面喰つたが、矢張り正直のところを云ふより外に誤魔化しの文句の持合せもなしするので、

「まアそんなやうなものでせう！　實際明治以來の歷史は、あの頭刷りに書かれた一奸兩嬪を皮切りに、最近の九鐵事件、收賄稅務官吏事件に至るまで殆ど、賄賂の歷史であります。恐らく今日賄賂を取らないものは、それこそ泥坊と乞食位なものでせう。尤も泥坊なんかが、賄賂を出す家へは這入らないといふ位融通が利いて呉れると、甚だ結構な次第です。そんなやうな次第で、泥坊ばかりでなく、官吏や敎育家でも、矢張賄賂を取るものは、世間から重寶がられるのです。衆議院議員なんかに成るものは、殆ど奸商から賄賂を貰ふのが目的ででもあるかのやうに思はれます。何にしろ議席を空にして缺席續けの、偶々出て他人の演說を聞いても、何の事やら分らない連中が多いのですから、さういふ連中は何が樂しみに議員になつたかと云へば、二三萬の選擧費を投資して、それより多くの賄賂を得ようとして居るのでせう。いはゞ議員商人です。從つて議員の方にも日糖事件などといふのがありました。九鐵事件は官吏の收賄ですが、又多士濟々たる海軍の方でも此點ばかりは文官に負けてゐず、シーメンス事件などゝいふものがありました。國家の干城なんと云つても、なか／＼隅には置けない、開らけたものです。」

彥さんは私の反語が解らないと見えて、眼を怒らせ、

「隅には置けないとは何事だ！そんな奴等が國家の干城か？帝國軍人なんて偉らさうな事ばかりいふが、さういふ惡い奴が出ては、國民も自然敬意を表さなくなるであらう。勳章と金モールの光だけで偉く思はれようとしたつて駄目だ。彼等の魂が腐つて居るのでは、誠にどうも困つたものだ。」

とプリプリ憤り出した。海軍軍人に云はせたら、なアに陸軍の方にだつて、山城屋和助事件もあれば、馬蹄銀事件もある。海軍ばかりが泥坊ではないと云ふだらう。長閥の陸軍に薩閥の海軍、剔じれば傷が出るばかりだ。彥さんは又

「あの一番初めに見た新聞記者といふ奴は、賄賂を取りさうな

柄ではないが、あんなもののとこへは、取らうとしても賄賂を持つて來るものがあるまい？」

「さうでもありません。矢張り商店だの、人氣取り商賣の政治家だの、役者だの、そんなものからは幾分かの附け屆けはありませう。ですが、新聞記者は賄賂を取るといふよりも、所謂髭女郎といふものださうでして、矢張り閥族だの政黨だのに時々買收せられるといふ事です。だから其時次第で、軍閥に買收されゝば主戰論を唱へ、政黨に買收されれば憲政擁護論を唱へ、金權に買收されゝば普選尙早論を唱へるなど、まるで彼等の主義だの社說だのといふものは、蓄音器のレコードと變つた事は無いのです。何なりとお誂へ向きのものを抽斗から出して來ます。」

「さうかな。もう餘程前の事だが、日本全國が薩長閥族の毒牙に懸り、惱まされてた際に、獨り諤々諤々の正論を唱へて熄なかつたのに新聞ばかりだつたと聞いたが、今ではそんなものに成つて終つたかい？」

「さうです。右からは新聞紙條令で脅喝され、左からは金錢で買收されますから、とうとう今日のやうな下らぬものと成下つて、世間の信用も可也失つて居るのです。早くから平民主義だの社會主義だの唱へた新聞で、閥族金權の走狗に變化して終はないものは無いのですから。」

「さうか。困つたものだね。」

「全く困つた事ばかりです。」

そんな話をしながら、その次ぎの檻を見ると、其處には「宗敎家の見本」といふ札が付いて居た。二人の人間が一緒に入れられてゐたが、その內の一人は、紛ふ方なきお寺の坊さんで、他の一人はフロツクコートを着た、活辯のやうな男であつた。

「この中の一人は坊さんと知れて居ますが、あの活辯のやうなのは何でせうね？」

と私が訊いた。すると彥さんは

「あれは私より君の方が知つて居さうなものだ。あれは耶蘇敎の牧師だよ。彼奴等二人一緒の檻に入れて置くと、どうも仲が惡くて、朝から晚まで喧嘩ばかりして居る。それあの通り顏でも手でも、嚙り傷や搔き傷や、傷だらけになつて居るだらう。」

成程さう云はれて見れば、ネクタイの結び方なんかに、何處となく牧師風の質實なところもある。私は彼等と問答して見る氣になつた。

「和尙さん、君は何宗です？日蓮ですか？門徒ですか？」

「私は佛敎のいろ／＼の宗派を代表して、坊主地獄の中から此處へ見本として連れて來られて居るんです。」

「坊主地獄なんてのがあるんですか？」

「ありますとも。坊主の地獄は厭離地獄から初まつて阿鼻地獄まで、大體九つあります。地獄の中でも、一番苦しいところでせう。善男善女を騙くらかして金品を着服した爲めに、厭離地獄へ行くもの。檀家の後家を口說き落して、不義の淫樂を貪つた爲めに、等活地獄へ行くもの。資本家に賴まれて雇人等に盲從主義を說法した報ひで舌を拔かれ、黑繩地獄へ行くもの。金權黨の代議士どもの演說會場として寺を貸し、寄附金貰ふ約束で政治運動をした爲に衆合地獄へ墮ちたもの。百姓どもに高利の金を貸し、抵當の田畑を捲上げて慾つたところから叫喚地獄へやられるもの。其他の地獄の何れへか、坊主は一人として墮されないものは無いでせう。もと〳〵自分達で作つた地獄へ、自分達が墮されて行くのです。」

「其處で君はどんな惡い事をして地獄へ來たのです？」

「私は別に之といふ程の惡い事はしませんでした。昔の坊主のやうに、向鉢卷で山王の神輿を擔いで暴れ廻つた譯ではありません。今の坊主並みに、人の死ぬのを生活のたつきとして、檀家の頭數を數へて樂しみ、自分にも分らないお經を上げて、お布施を頂戴し、昭代の有難さには、酒も飲み、肉を喰ひ、偶には待合へも這入り、利子の高い方へ金を貸したり、利廻りの好い株を買つたり、そんな事をして居る內に一生は過ぎて終ひました。」

その時彥さんが傍から口を出して、

「新聞記者と喧嘩をした坊主はお前さんだらう？」

と笑つた。坊主は頭を掻いて、

「先生とんだ事を御存知ですね。それを素破拔かれちや面目次第も御座いません。併しそれは確かに新聞屋の方が惡いのです。成程私は地內の釋迦堂が繁昌する爲めに、金廻りが好くなつたものですから、妾を置くには置きました。姉と妹と二人妾にしましたが、只それだけの事です。それだのに新聞屋は私の事を破戒無慚の惡僧だなどゝ書き散らしますから、私も腹を立てゝ裁判へ訴へたのです。そして罰金を出させてやりました。」

彥さんは、

「呆れたものだな。破戒無慚の上に、裁判までして、それでは熊坂長範以上だ。そんなのが今日世間並の坊主かい。人に責められる時は、身に恥辱の衣を纏ふて、ます〳〵修業すべきもの。然るに貴樣は自分の惡事を訐かれたとて、裁判へ出るとは何事だ。」

するとその傍に居た牧師が、

「今日の偶像教徒は、皆この通り憐むべき不道德漢です。彼等

は煙草を喫つたり、酒を飲んだり、淫賣を買つたりするのを、少しも耻どは思つて居りません。併し我々は基督教徒には、そんな人間は一人も居りません。」

　すると坊主は、頭から湯氣を立てんばかりに腹を立て、牧師を睨めて、

「何吐かす。貴樣等耶蘇坊主が、他人に對し不道徳だなと云へた義理か。貴樣達は世間の人へもつと惡い事をして居ながら、只口實を作るのが巧いだけなんだ。教會内の女信徒を弄んでは神聖な戀だと云ひ遁れ、葡萄酒を飲んでは基督の血だと説明し、貧乏の信者には鼻汁も引懸けない癖に、金持の信者となれば、やれ長老だの執事だの、靑年會の會長だの、婦人會の幹事だなどゝ擔ぎ上げ、彼等に媚びてその虚榮心に附込み、一文でも多く金を引出さうと努力する。拜金宗といふのは本當は耶蘇教の事だ。禁酒禁煙もその根本は吝嗇から來て居るのだ。

「坊主生意氣を云ふな。自分の心で人を付ると間違うぞ。」

「何だと？　耶蘇國賊奴！　貴樣達は毛唐人から金を貰つて、國を賣る賣國奴だ。」

と罵りながら、坊主は腹立ちまぎれに、牧師の右の頬をぴしやりと打つた。牧師も負けて居ず、

「手出しをしたな！　さア打つならたんと打て。」

と今度は左の頬を向けた。彦さんは喧嘩を止めようともせず、

「これはまるで夜店の夫婦喧嘩のやうだ。たんとやれ〳〵。」

を笑つて見て居る。私はその時尊い聖書の言葉を思出した。

「聖書に、人若し爾の右の頬を打たば左をも旋らして之に向けよ、といふ文句がありますが、この牧師はそれを實行したものと思ひます。」

と洒落の積りで云つたが、坊主にはまるきりそれが分らなかつたと見えて、

「何あにこの耶蘇坊主が聖書の言葉を實行なぞするものですか。此奴は本當に欲張りで、教會の席を芝居小屋のやうに、一等二等三等と分けて、金次第で信者に等級を付けた男です。そして地面を買つたり、家を建てたりした男です。慈善事業を看板にして、人に慈善をさせて自分はその世話賃を取つた男です。」

と何時までしても果しが無い。到頭また二人は摑み合を初めた。

　私は何とかしてこの二人を和解させるか、又は全く別々に棲まはせたら宜からうと云つたが、彦さんは、

「彼奴等は到底和解する事は出來まい。凡ての人間の中で、宗教家程喧嘩の好きなものは無い。渡來當時から佛教程人の血を流させたものはあるまい。」

「その點は耶蘇教も同樣です。異教徒の爲めに耶蘇教徒が虐殺

されたり、新教徒と舊教徒と仲間同士で血を流し合つたり、近代になつて、猶太人の虐殺を何度となく行つたり、どの位無意味にお互の血を流したか知れません。四海同胞と教へる宗教を信じながら、彼等のやつて來た事は、何時も四海仇敵でした。最近に於ても耶蘇教國同士で戰爭し、同じ教會內でも、常に喧嘩が絕えません。そして彼等は何時も、自分の方が正義だとお互に信じ、そして神樣は正義なる自分を援けると、お互に信じて居るのですから始末に終へません。」

「そんなものかな。切支丹伴天連は私が日本に居た時分まではなか／＼信仰が强く、何度禁制して磔にしても、後から後から信者が出來たものだ。」

「さうです、その時分の信者は魂ひの救ひの爲めに信じたのです。然るに今日の耶蘇教信者は、道德家らしく見せ掛ける爲めに信じ、牧師は全く生活の爲めにやつて居るものが多いのです。その牧師はどういふ動機から教役者になつたでせうか？聞いて見れば分りませう。」

　すると坊主が横合から口を出した。

「さうですその通りです。この男は貧乏で學資が無いので神學校へ這入り、其處を出ると外國商館の番頭となり、中學の英語教師となり、それでも飯が食へないで、今度は牧師になつたのです。」

「牧師がそんな良い商賣なものか。牧師になつたつて、當り前の事をして居ては、矢張飯が食へやしない。」

と牧師が不平さうに云つた。私は實際この牧師を氣の毒だと思つた。牧師が全く善良であれば、現代の日本に於て飯の食へる譯が無い。彼等が無趣味であり、僞善であり、吝嗇であつた場合に、初めてどうやらかうやら人間並みな暮しが出來るのだ。

「耶蘇教の牧師なんかは、餘り旨い汁を吸つた譯でも無いのですから、五人や十人見本として地獄の動物園に置く位は已むを得ませんが、田舍牧師なんかを地獄へ墮しては可哀相ですね。」

　と私は、彼等が憐れになつたのでかう云つた。彥さんは、

「併しいくら旨い汁を吸はないにしても、信仰が無くつて宗教で飯を食つたものは、一種の詐欺取財だからな。それだけの罰は受けるよ。」

「でも、救世軍なんか往還であんな大きな聲を張上げて、皆に顏を見られながら、汗をびつしより搔いて、詐欺にしては隨分骨の折れた、氣の利かない詐欺ですね。併し彼等の中に信仰のあるものは何人あるか、その保證は私にも出來ません。」

　次の檻には、洋服を着て近眼鏡を懸け鼻下には髭を生やし、上品ぶつた傲慢な顏をした人間がゐた。その金網には「博士の

見本」と認めた札が附いてゐた。

　彦さんは、私に對ひ

「博士といふ動物を我輩は殆んど知らないのだが、矢張みんなこんな高慢な顏をしてゐるかね。」

といふから、私は

「さうです。高慢なのもあれば、謙遜なのもあります。矢張その人々の性質に依つて違ひます。」

と答へてから、倚ほ博士の見本に注意して觀ると、彼は右手に鋏を持ち獨逸語や英語の本から何やら荐りに切拔いてゐる。あんな、内の茶目吉が幼年畫報をさんざ見た後でする悪戯のやうなことをして、何うする積りか知らんと思つてゐると、今度はその切り拔いた物を切拔帖へ貼付けてゐる。それが仲々大袈裟なやり方で、その目的から、彼の傍には大きな皿へのりをといて大きなはけが添へてある。私は物臭だからたとへ必要があつても切拔帖を拵へたことは無いが、私の知人の中にも、物に丹念な人は新聞なんかの記事でも、自分の商賣上必要なことに出合ふと、赤インキでその項の上へ輪か何か描いて置く。細君が後からそれを鋏で切り拔いて、矢張此博士の見本君のやうに貼り付けて藏つて置く。だから私とても切拔きを見て格別不思議には思は無い。けれど唯、私が少なからず驚かされたことは、此博士君はそのドイツ語やらフランス語やらの切拔帖の表紙へ、法學博士學輪淵志と自分の學位姓名を自署して、その下へ「著」と書き付けた事だ。

　彦さんも之を見てゐたが、こんな切拔なんといふ學者らしい事業は彦さんには一向不案内と見えて

「ははあ、博士といふものは何かい、經師屋の下職のことかい。不器用な手つきだが、仲々丹念にや極てるわい」

と嘆聲を洩らした。私は、如何に彦さんが田舍者にもせよ、博士を經師屋と間違ふとは、あんまり人を侮辱した仕打だと思つたから、早速博士の爲めに辯解してやり度くなつた。

「いや、この人は經師屋の職人なんかぢやありませんよ。仲々名譽の有る人です。國家から學位を與へられた人ですもの」

と云つた。彦さんは併しまだ十分腑に落ちぬといふ様子で

「さうかい。我輩も博士といふから矢張昔の文章博士(もんじやうはかせ)の類かとは思つたが、仕草を見てゐると經師屋の様だから、實際變だとは思つた。さうすると、博士といふのは、矢張今でも學者のことかい？」

といふ奇問を發して來た。そこで、實は私もグッと詰つた。併し、嘘も言へないから

「いゝえ、違ひます。博士と學者とは同一ではありません。博

士は博士、學者は學者です。早くから博士に成つてゐながら、何時までしても學者に成れない人があります。その人は大學の教授にされたり、高等官何等とかに任命されたり、正何位とかに叙せられたり、文部省の留學生として外國へ遣られたり、又時には眠くて仕樣の無い教育調査會に引つ張り出されたり、中等教員檢定試驗委員なぞに任ぜられたりして、自分でも答案の出來ぬ樣な骨の折れる役目まで果して、國家に對する勳功は積んで山を成すやうであるにも拘らず、些とも學者には成れない人があります。然う言ふ人は、一生涯、學者に非ざる博士です、さうかと思ふとまた、極めて稀には仲々立派な學者では有るが博士には成れない人も有ります。だから、博士と學者とは同一ではないのです」

「博士には何んな種類が有るね」

「それは說明書を讀む迄も無く、私が大體知つてゐます。まづ第一に今の切拔張付博士——これは西洋人の著書、又は古人(日本人でも支那人でも)の著書の中から、處々切り拔いて、それを今御覽の通りに貼り付けて新らしい本だか、パンフレットだかを作り、自分の名を署して、獨創化し、赤の他人の研究の責任を我一身に引き受けたといふ、學問の爲めには極めて献身的であり、又國家の立場から云へば外國人の發見なり創見なりを竊取するのであるから、誠に軍閥官僚魂の發現たる領土侵略の大精神と合してゐるわけです。だから、此種の博士は尤も尊敬せられてゐます」

彥さんは、私の說明を合點行かぬらしく

「さうかな、我輩には、そんな博士は尊敬出來んやうに思ふが、成程、ドイツの學者の創見なぞを分捕たら、之れ一城一壘を陷れたと同樣な功績かも知れんな。それだけでも大學教授にする價値はあるかな。だが、些と變だぞ」

「第二の種類に屬するものは、泣き付き博士といふのです。これは代議士に選擧して貰ふ爲めに、戶別訪問などして泣き付くと同樣の手段で、博士會に泣き付き、博士號をかち得た人です。第三種は相互博士といひます。これはT大學の教師の中から出した博士の候補者にW大學關係の博士製造有權者が得票を與へます。その代價を拂ふ爲めに、又T大學關係の有權者はW大學派猫鷲の候補者に投票します。恰度、道德的なる泥棒が仲よく贓品を分ける樣に、我愛すべき道德的なる博士會は、相互の分け前を仲よく分けるのです。その他、年功加俸博士、お付合博士、首代博士……弟子持博士……」

私が少し調子に乘つて此處迄喋ると、彥さんが、遮つて

「オイ、一寸待つてくれ。矢張說明を拔きにされちやあ分らね

え。その首代博士とは何だい。恐ろしい、物騒な名前だな」

「えゝ、それは大學教授を首切られて、全く庶人にされるとか又は學習院邊へ島流しにされる時、その首代りに博士を與れるんです。恰度會社が職工を首切る時三十日分の日給を與れるのと同じやうな理窟です。化けて出ない用心棒です」

「成程分つた。では年功加俸博士といふのは」

「それは長く同じ學問を切賣りして、學問に黴を生えさせた事に對する賞與です。」

「何故、學問を古くすれば手柄だ」

「學問も古くなると氣が抜けて、之を飲食する青年に酔ふ危險が無くなりますから。そこで最後に、まだ行き懸けの駄賃博士といふのを説明しませう」

「うん。やつてくれ。それは面白相な博士だな」

「えゝ、博士中の珍品です。之は博士製造會があんまり世間で評判が惡く、とう／＼廢止といふ事に極つたので、その行きがけの駄賃にうんと澤山博士を製造したものです。その有がたくも何ともない博士のことです。あゝ、併しこの人間の見本も、もう先刻からでは大分澤山見物しましたね。この位で切り上げて、何處か他所へ行かうぢやありませんか」

私は智識階級の地獄を見るに堪えなくなつたので、恁う言つた。けれども彦さんは

「折角來たものだから、飽きずにずつと終ひまで、皆な見て置け、尤も君は大抵知つてるやうな見本ばかりで、好奇心を引くほどの物は見當るまいが、我輩は餘りよく知らないのが多い。君から説明して貰ひたいものだな。今の博士の講釋なんか、仲〻面白かつたよ」

「さうですか？お讃めに預かるのが、私は何より嬉しいです。女房などに聽かせると、私の話は脱線してゐる相ですが、私はこれでもマジメに話してゐるのですからね。今のデモ批評家のやうに、自分はロクなことも出來ない癖をして嫌味なことを言ひさへすれば、役目を果したやうな氣でゐる連中は、嫌ひです。私は讃めて下さる人が一等好きです」

二　蛆の地獄

噂をすれば影がさす、といふが、私もこんなデモ批評家の陰口を利いてから隣の檻を見ると、これはしたり、そこにはデモ批評家の見本がゐた。

私は札を見ると、いきなり

「オ、、ゐた。ゐた。矢張ゐたぞ」

と叫んだ。彦さんはそれを聞いて

「何だ。地獄に貴公の知り合ひがゐたか」
とけゞんな顔をした。
「知り合ひといふ程ではありませんが、顏位知つてゐる間柄です。」
と私は彥さんに答へて、それから更にデモ批評家の方を見てゐた。すると、先方でも私を認めたと見えて
「いや、あなたは、あの」
と極り惡る相に、そし 頗る丁寧に私に話しかけた。尤も此男は昔から言葉でも挨拶でも甚だ馬鹿丁寧な方であつた。併し、同じ丁寧でも每もは洒蛙々々した丁寧なのに、今日のは頗る謙遜であつた。
「君、いつから此地へ來てゐます。君とこゝいらで出合ふことは、僕は殆んど豫期しなかつた、……」
と私は、彼の樣子を見てゐる中に氣の毒に堪えないので、こんな事を話しかけた。若し私はこんなところで合ふのでなかつたら、此方から彼に對つて話しかける氣には乾度ならなかつたのに。
彼は牢屋の人のやうに檻につかまつて窓ぎわへ顏を寄せ
「いや、こんなところで合ふとは、誠に面目次第も無い。私は一昨日から此所へ見本として陳列される爲めに、蠕虫地獄から此所へ送られたのです。文藝に對して迫害を加へた者、文藝の神聖を冒瀆した者等は、一切蛆の地獄へ投げ込まれて、苦しんでゐるのですが、一月交替で此所へ來るやうに成つてゐます。」
と語つた。私は蛆の地獄と聞いて、思はず戰慄した。蛇の恐ろしさと蛆の汚さとは、私の尤も堪え難いところであるからだ。
で私は
「蛆の地獄とは、地獄の數も多いだらうに、何故またそんな地獄へ投げ込まれるのだらう」
と訊いた。彼はさも悲しげに
「藝術を迫害し、若しくは冒瀆する者は美醜妍媸の差別が付かぬ鈍感者だから、美を愛する眼の覺めるやうに醜いところへ置かれるのだ相です。その地獄は見渡す限り、地は蛆を以て蔽はれてゐて、何處を歩いてもぐちや〳〵と蛆を踐み潰さないわけには行かないのです。蛆は足から這ひ上り、腹でも胸でも背中でも手でも襟でも頭でも口端でも鼻の穴でも眼でも、忽ち隙間無くたかつて、息をすることも出來ず、拂ひ落しても〳〵、直ぐ又後から〳〵這ひ上るから、終ひには疲れて、何うすることも出來ません。地上に一篇の創作が生れた時、天に大なる悅びがあつて、我々地獄の底の罪人に迄その悅びが頒たれ、その時はじめ

て清いパンや果實や清水を與へられますが、もうそれを二口三口喰ふ間にすつかり蛆に成つてしまひます。しかし、饑餓は人に何物をも忍ばせるといふことを、私はその時はじめて知りました。蛆のまゝそれらの喰物を捨てかねて一トロに呑み下さうとします。けれども惡臭が鼻を突いて嚥下するに堪えず、ゲロ〳〵と皆吐いてしまひます。そしてその吐瀉物も見る〳〵中に蛆を以て包まれてしまひます。誰の顏を見ても、そこには一分の隙間も無く蛆の這ふのを見るばかりで、友達の顏の見分けさへ付きかねるのです。唯膚の上を冷たい小虫がネバ〳〵した臭い汁をひいて終日終夜這ふのを感じる以外には何事も無い世界です。そこには美もなく醜も無く、光も無く味もなく音もなく仕事もなく榮譽もなく、眼を開けば蛆、口を開けば蛆、手を觸るれば蛆、足を踏めば蛆！そうです、唯蛆の世界なのです」

彼が男泣きに泣きつゝさう語る中にも、彼の鼻孔から蛆が出て來た。それを見て始めて氣づいて、熟く彼を視ると、耳にも顙にも亦蛆が這つてゐた。私はそれを拂ひ落してやり度かつたが、餘りの穢らしさに、それすら出來なかつた。私はたゞ言葉を以て彼を慰めてやらうと思ひ

「××君。そりやあ、成程代々の內閣のやうに、言論抑壓をやり、政談演說や活動寫眞の檢擧と同じ調子で、美術的の裸體畫に紫のふんどしを懸けさせたり、柿の葉つぱを局部に當てがはせたり、又は出獄者×氏の肖像だとて展覽會場から撤退させたり、自己の腐つた劣情的色眼鏡で藝術品を見て自分勝手に挑發されて置き乍ら、自分の品性の賤劣を恥ぢる代りに却つて藝術品其物に難癖を附け、之を迫害したりした奴等こそ、穢れの世界、蛆の地獄に永久に落とされるのも當然だらう。併し君等は左迄害をしたわけではない。たゞ拙い、見當違ひの月評をしたといふだけなんだ。又新聞を面白くしやうとしてジヤアナリズムの臭を附けたといふに過ぎないんだ。その位の事で墮獄の罰を受けるとしたら、誰も皆地獄へ行かねばなるまい。そしてそんな割に合はない月評なんか一人も之を敢へてするものは無くなるだらう。殊に君のは文藝新聞の記者として月給で身を賣つてある以上、仕事としてやつたんだ。いはゞ他から強いられて義務としてやらせられたんだ。だから、そんな殘忍な刑罰を何時まで受けるわけでも有るまい。もう少しだ。悲しむのを止め玉へ」

と成可く彼が安心するやう彼に希望の起るやうにと、彼を勵ますつもりで語つた。

けれども彼は頭を左右に大きく振つて

「いや、私の罪はそんな簡單なのではない。私の刑罰も到底あ

なたの想像するほど輕いものではない。あなたは、あの△△△△といふ色の黒い汚い馬方のやうな月評子が會てゐたのを御存知ありませんか？あの男の月評なぞ、何を空威張しやうと、誰一人その權威を認めず、從つて害も損ひも齎らさなかつたやうなものですけれど、それですら蛆の地獄の片隅では有りますが、刺す蛆の中にゐて、朝夕蛆に蝕されて苦しみ悶えてゐるのです。ですから……」

とこゝまで、彼の語るのを聞くと、私は思はず驚きの聲をあけて、その話を遮つた。

「へえ、あんな下らぬ男の下らぬ惡戯書に過ぎぬと思つたものまでが、そんなに意味深いものとして罰せられるのですか」

すると、之を聞いてゐた彥さんが

「そりやあ、小盜人や放火犯なぞの場合と違ひ、神聖な人の魂を傷けた行爲ならば、たとへ低能な男と雖も酙酌しないのだ」

と地獄の精神を說明してくれた。デモ批評家はまた言葉をついで

「まあ、お聞き下さい。でも、彼の罪は輕いから刺す蛆に苦しめられるのです。それに較べると、私等の方は刺す苦痛すらない、唯單調な汚ればかりですから、一層辛い苦しみなのです。もう二十幾日かすれば、またあの地獄へ引戾されて永劫に苦しむのかと思ふと、私は今から怕ろしくて眠ることさへも出來ません。」

恁う語る彼の顏色は土の樣だ。あのお巡査さんのやうにチョビとした髭も今はツンとしてゐずに、ダラリと垂れてゐる。あの鼈甲の伊達眼鏡の後ろに小人らしい光を放つてゐた細い眼も今はドンヨリと力なく見える。その白髮多き髮毛、そのチョコ〳〵したる顎、薄つぺらな唇、華奢な體、彼の容貌の一として、憐憫の情をそゝらないものは無い。

彼は語る。

「情實に依つてのみ、依怙贔屓な批評をする安評家等、無論彼等も臭い蛆にさいなまれてゐます。同人雜誌の六號欄で好い氣に成つて手前味噌を揑ねた手合、無論彼等も蛆の中にゐます。併し、私等のはそれより、もつと質が惡かつたのです。私等のは、此通り伊達の色眼鏡を懸けて我れと歪めて見ましたのです。實は眞直に見てさへも藝術が分る頭では無かつたのでした。私達はその專門の教養を受けたわけではなし、又その天分が有るわけでも無いのでした。たか〳〵古い時分の青年對手の低級な文學雜誌に懸賞を取るのが目的で投書なぞした不良少年に過ぎなかつたのです。それだのに、一寸その頃の文壇に勢力ある文藝新聞の文藝部長に成つたことが、偶ま私の己惚心を增長させ

て盲蛇にしてゐたところへ、本屋の資本家的侵略主義に或は脅喝され或は誘惑されして、その手先と成り、資本家に都合よき樣に、時には匿名にしてまで文藝の批評をしたのです。」

「あゝ、それでよく分りました。私もどうも、君の批評に少しも思想の統一がなく、觀照の標準がなく、餘り滅茶苦茶なものが多かつたと思つてましたよ。よしそれが作者に對する好意からであるとしたところで、何うしてさういふ作家にのみ好意が持てるかゞ疑はれたし、又一人の作家を昨是今非、全く飜弄してゐるのではないかと思はれるやうな節が、しば〳〵あつたのも、その筈、それでは、讃めるもくさすも、出版屋の命令次第だつたのですね。併し、それは、君が心配するほど文藝界にも讀書界にも害毒を及ぼしはしませんでしだよ。何故なれば、あの文學新聞も、君等が編輯するやうに成ると、忽ち讀者の間にすつかり信用を落してしまつた樣でしたからね。そして、君等の妄評と惡編輯との爲めに本當に損害を受け毒せられたのは、決して文壇でも讀書界でも無く、却つて被害者は君等自身でした。君等が世間から笑はれたに過ぎません。現世に於いて、君等の過失も不心得も、すつかり懲罰せられた筈です。然るに、それが次の生活へ迄附き纏ふて來て、君等が地獄で苦しむといふのは、聞いたゞけでも眞にお氣の毒な次第です。いや、だが君、そこに君の傍に有る雷樣の叩く太鼓のやうなものは何ですか？」

私は今やうやくそこに太鼓の有るのに氣づいて訊いた。すると彼は、

「之は蛆の地獄へ行く道に在る雷同地獄の人々が鳴らす太鼓です。こんな小さな物ですけれども、之を打てば諺に云ふ百雷の一時に落ちかゝるよりも囂しく、之を聞く者の頭の髓までづき〳〵うづきます。雷同地獄の人々は之を叩いては、その音に痛み苦しみ、耳を抑へて泣き悲しむのです。そこへ落ちて行く批評家も少なからず有ります」

三　ペンキ屋地獄附針の山

智識階級の見本はまだ〳〵嫌な物を澤山見たが、私達はそれに續くペンキ屋地獄樂書地獄なんかでは、またその埋合せに、ずゐぶんお腹の皮を撚らせられた。

かん〳〵と焦げつく樣に照る日光を浴び乍ら、多くの人々が地面や山や樹などへ頻りにペンキを塗つてゐる。西洋館では家の羽目板へペンキを塗る。又東京の街などを歩くと、屋根の上の招牌をペンキ屋職人が塗つてゐるのを多勢の子供や閑人がたかつて見てゐるが、こゝの地獄の人々のやうに、山や道や石や木

にペタ／＼ペンキを塗る職人を私は、未だ曾て見たことがない。

近づいて尙ほよく見れば、之等の職人等は髮の毛を長く伸ばし、ブルーズらしい物を着て、一寸美術家の書生のやうな樣子をしてゐる。その中の一人に就いて訊いてみると、矢張私の想像通り、これらのペンキ屋さんの前生は西洋美術家といふことであつた。彼等は寢言にもフランス語の單語を交ぜて喋る位にまで、美術家らしく振舞ふことに就ては熱心だつたが、チヤカホイ節の合唱とカフエーの洋酒の效力だけでは到底美術の堂に入ること能はず、彼等が生涯親の脛を嚙つて成就し得た事業はモデル女の尻を追ひ廻すことゝ自然を冒瀆したことに過ぎなかつた。彼等の生活は唯他人のしたことを模倣したに過ぎなかつた。よし彼等が草と土とを描いて、豚の腸に靑海苔を掛けた物とするともそれが獨創の見方に依るならば罪は輕かつたらうが、彼等はそれを人眞似でやつた。又彼等が萬花鏡のやうな染分をして、それを自然の一部と稱したところで、本當にさう見たが爲めに描いたものならば差支へもなかつたらうが、彼等は新時代の美術家ぶりたさにそんな物を描いて、臆面も無く公衆の展覽に供したのであつた。

彼等は、可惜男の一生を虛榮の追求以外に費さなかつた報ひとして、ペンキ屋地獄へ追落され、此炎天の下に働らかせられてゐるのであつた。

それに續いて型附地獄が有つた。こゝへ來てゐる職人は前生は日本畫家とやら自稱してゐた染物の型附職人で、虎を描いて猫としたり、山藷を以て岩と詐つたりしたのみか、描くところ盡く僞物であつた上に、展覽會といへば美人畫を出品して俗衆の實感的興味に訴へる如き奸策を廻らし、經師屋と結托し新聞屋を抱き込み、以て途方も無き高價の畫料を得、殆んど濡れ手で泡をつかむ如き沫く錢を儲け、無產者に不似合な贅澤極る邸宅を造り勝地に別業を營み、成金の幇間となり賣笑婦の旦那となり、不義の淫樂に耽つたのであつた。その爲め生前相互補助をやつた共犯人の骨董屋經師屋と之等の染物職人とは、地獄へ來ると修羅道に陷り、日夜喧嘩ばかりしてゐるのだ。

私達が通つた時も、その中の一人が多勢の骨董屋から責めたてられ、荊棘の山へ追ひ上げられ、足の裏から血を垂らして泣き叫んでゐるところであつた。山の麓からは

「畫債を還せ。／＼」

といふ叫びが聞こえた。

四　煽風地獄

荊棘の山を過ぎてしばらく行く中に、何處からとも無く、暴風の音が聞えて來た。地を甜めまくり砂を飛ばし樹を根こぎに

するやうな颱風であるらしい

「彦さん、何だか凄い暴れ模樣ですね。何處か、こゝいらに避難所は有りますまいか」

と私は訊いた。私は普段から風を尤も怖れてゐる。風が荒れて來ると、落ついて物を考へることも仕事をすることも出來なくなる。併し彦さんは相變らず平氣なもので、

「なあに、風は甚いが、上の方で荒れるだけだ。俺達に祟る氣遣ひはないから、安心して從いて來なさい。此所は煽風地獄と言つてな、無智な人民を煽動して騷動を起させ、その暇に金儲をしたり名士に成つたりする火事泥的の奴等が來て、吹きさいなまれる地獄なんだ」

と說明した。

だん／＼行く中に、私達はもうその地獄の眞中へ來てゐた、風は烈しく吹くが、皆私達の頭の上を吹いた。風の中に恰度木の葉のやうに弄ばれてゐるものがある。よく／＼見れば、それは皆人間であつた。それらの人間はひら／＼と風の吹くまゝに空中を飛んで、時には互に衝突して悲鳴を上げたり、時には木の梢に引掻かれたり、又岩角に足腰などを打ち付けて泣き叫ぶのもあつた。私は彼等と問答を仕樣としたが、彼等は小止みなく吹き廻されて上下左右に恰度フラスコの湯の中へ投じた鋸屑を下から火で暖めた時のやうに、絕えず動いてゐる爲めに、話しかけてみるわけには行かなかつた。

けれど、その人間の中には、嘗て私の知つてゐた男が有つた。彼は學問嫌ひであつたから、學校は常に休んで國元の兩親から送金も酒色の道に費ひ果し、學成らず業遂げず、下宿の二階にブラ／＼してゐたが、集會に行つて演說を聽いたり、彌次つたり、集會に來る人々と交際したりするのが好きで、とう／＼無智な當局者どもから强いて危險がられてゐる或る團體へ加盟した。その爲め刑事が或日突然その下宿へやつて來た。彼も始めは且つ驚き且つ心配したが、馴れるに從ひ名士扱ひにされたやうな氣持に成り、刑事の附くのを自慢するやうに成つた。もう然う成ると一人前の煽動主義者で、その仲間の先輩の口眞似を覺え、自分にも譯の分らぬ理屈を並べて勞働者の集りへ行つて煽動した。煽動して勞働者等から、先生と呼ばれて嬉しがつてゐる間はまあ大した罪も無かつたが、その中に煽動で飯を喰ふ味を覺え、警察の拘留所へも何度も打込まれて惡度胸が据はり、裁判所も怖くはなく成り、只管事件を惹き起して、何とかして都下の新聞から自分の惡名を天下に喧傳され度いと心懸けてゐた。之があの男の憐れな一生であつた。

又この中には、舶來のデモクラシーの受賣りと、自分の雄辯

振りを見て貰ひ度いばかりに、會集を煽動した男もゐた。新聞の名士と成り度さに一方金權に叩頭百拜しながら他方普選の太鼓を叩いた男もゐた。又中には勞働者の團體に阿り、普通選擧にでも成つたら代議士位には成れやうかとの野心も動き、又勞働者の指導者などと他から云はれる嬉しさに、一層御調子に乘り勞働者崇拜論などを書いた男もゐた。それほど勞働者を本當に心から敬慕するなら、自分も早速勞働者に成れば好さ相なものを、詰らぬところへ遠慮して自分は洋服、眼鏡、演說、英語のデモクラシイの種本等に身を固め「先生」と呼ばれるやうな生活を悅んでゐたのは彼だ。

又中には仇名を「憲政の神」と呼ばれた煽動政治家がゐた。彼は岩角へ吹きつけられて頭を割られ血を流しつゝ吹き飛ばされてゐた。私が思はず。

「オヤ、憲政の神が來てゐる」

と叫ぶと、彦さんは

「うん、お前も彼奴を知つてゐるか。彼奴は、第一に煽動人氣取り、第二に金權阿諛、第三に秘密に收賄、第四に閥族に降服等數罪倶發だから、彼地此地の地獄を廻り持ちだ。あいつは地獄の流行兒だぞ。あッはハハハハハ」

と哄笑した。私も笑つた。

五　失業極樂

「今日も大分くたびれましたね。何處か茶でも飮ませるところは無いでせうか」

私も彦さんの氣心がだん／＼知れて來たので、こんな我儘をいふやうになつた。彦さんは

「もう少し、辛棒しなさい。いゝところへ連れてつてやる」

と云つた。そして失業極樂へ連れて來た。けれど、此極樂まで來る道は容易の骨折ではなかつた。羊腸たる阪路を蔦かづらに足を取られて幾度も轉んだり起きたりして、やうやく、漕ぎ付けたのであつた。

併し、この極樂は全く公園のやうな、軟い、少し怠けた位の感じを與へるところであつた。

夏の微風のやうな、兎の毛で撫でるやうな風が、そよ／＼吹いてゐた。

人々は、池の畔、小山の裾、道傍の芝生の上などに、ごろ／＼寢ころんで、徂徠の雲のたゝずまないを眺めたり、小禽の唄を聽き惚れたりしてゐるらしかつた。

私達も小山の裾に休息してそこから湧き出す清泉を掬んで飮んだ。そして、私は恰度そこに居合せた一人からその身上話を聞いた。

彼は云ふ。

「此所にごろ／＼してゐる連中は、皆失業者の群です。あすこに池の畔に寢ころんでゐるのは、某鐵管製造會社の職工でしたが、不景氣風で首切られブラ／＼してゐる中に餓死して此所へ來た者です。株式會社は職工を首切ることなんぞ、蠅や蚊を叩

き潰すほどにも思つてはゐません。一日でも置いては不利益となると、ポコ〳〵と首切つてしまふのです。若い働き盛りを、金も無く仕事も無く、樂みも希望も無く暮す失業者ほど辛い慘めなものは有りますまい。私は職工ではなく、むしろ智識階級に屬する方で、景氣のいゝ時分は洋服細民と名乘つてますが、不景氣に成ると高等遊民と改名す可く餘儀なくされます。私は私立の專門學校を出て、そこの得業士となつたわけですが、實は失業士とでも云つた方が適當かも知れません。職業を得たと思ふと、忽ち失ひ、常に失業者でありました。私は新聞社へも勤めましたが、新聞社では、重役や幹部の交迭する毎に、數十人一度に馘首されることさへ珍らしくないのですから、私などが首切られたのも不思議はないわけです。常に失職者を出すことを攻擊してゐる新聞社夫子自らが、實は失業者製造株式會社といつてもいゝ位に冷淡に首を切るのですから、他の我利〳〵主義一點張の營利會社が職工や社員を馘首するのは、尙更のことです。」「でも、會社側では馘首は當り前かも知れませんが、社員の方ではさうポン〳〵切り立てられては堪りませんね。生活問題といふものもあるんだから」

「さうですとも。ですから被雇人には、一日も安心といふものは有りません。病身なれば首切られ、怠ければ勿論、働き過ぎても首になり、年を取れば恩給金の取れる年限まで屆かないところで首を打落されるのです。私は何よりも仕事の無いのを悲みました。仕事に戀ひ憧れて死んだ樣なわけです。」

「でも、此所へ來てから、ぶら〳〵遊んでゐるのも氣樂でいゝぢやないですかね。」

「えゝ、さうです。此所にゐるものは、皆な多少づゝ仕事を持つてゐますから。今は丁度休憩時間ですが、皆仕事を持つてゐるのです。私は地獄の人名簿を作るつまり戸籍係りですが、この頃、漸く時々は仕事の勞れといふ極めて樂しい苦しみの味を知りました。」

私は又、その男の友人の一人に紹介された。彼は中學教員であつた。

「私は學校卒業後直ぐ地方へ赴いて中學教員に成りましたが、そこに十五年勤めて首に成りました」

と語つた。私は

「それは、また何うしてゞす。矢張冗員淘汰ですか。」

「なあに、學校は年限が經ちさへすれば、給料が鰻登りに登るのです。私もそれを樂みにつとめてゐる中に、實際少しづゝですけれど登りました。そして登り詰めたところで首切られ、若い人と交替にされたのです。何の過失が有つたわけでも有りません。全く校費節減の爲めです。月給の昇給が災を爲したのです。」

「なる程、今の世の中ぢや、出世も浮つかり出來ないわけですね。あはハハハ」

失業者「あはハハハハ」

彦さん「あはハハハハ」

（完）

早慶の野球爭霸戰を復活せよ

▽早慶の學生諸君に諮る

久米正雄

早慶野球戰が、中止されてから何年になるだらう。僕はその時分、まだ中學の初年生位だつたから、彼是もう十四五年になるに違ひない。其間に年號でさへ明治は大正と代り、あの頑固一徹だと思はれてゐた一高の野球選手さへ、スパイクの靴を穿き、壘手もグラブを手にする時世になつたのに、早慶間の蟠りだけは、今だに解けさうもないのはどうしたものだらう。まだ兩校の學生相互に、此の試合を決行して間違ひの出來ないだけの自信がないのだらうか。學生たちは互ひに自制の出來る自信があつても、學校の當局者監督者たちが、まだ學生の自制力を見縊つてゐて、危つかしいと思つてゐるのだらうか。要するに早慶の試合が出來ぬ事は、早慶兩校の學生たちが、自分で自分を侮辱してゐるに等しい。諸君は此の自己侮辱を何時迄堪へてゐる積りか。いや、單に兩校の學生だけの自己侮辱だけではない、日本の學生界の汚辱だと云ふ事を考へないのか。私は不思議に思ふ。昇格したくないと云ふ、不思議な學生運動を起したとか聞く學生諸君が、何故內部から起つて、早慶戰復活の期成運動でも初めないのだらうと。聲は內からでなければならない。何故諸君は大學して、自分たちはもう充分自制力に富んだ一個の應援團體として、紳士的に試合場に臨み得るから、安心して早慶戰を復活せしめよと、各自の學校當事者に運動を開始しないのか。それだけの自信がないのか。繰り返して云ふ、諸君はそれだけの自信がないのか。

云ふ人がある。早慶戰に血の雨降らすべき野次は、決して學生の中には存在しない。却つて市井贔屓の徒に存すると。併し私は假にそれを信じない。而してたとひ幾分それを眞だとしても、さういふ人々を取締る方法は、學生相互の態度によつて幾らでもあると思ふ。自分の方の學校贔屓が、何か不穩な樣子でもあつたら、彈劾して大事に到らせない位な事は、各自が自戒

し合つてゐればすぐ出來る。出來なければ、學生以外のファンは、うんと入場料でも高く取るか、何等かの制限を付して入場遮斷してもよからうではないか。一高式に、袴を着けてない人の入場を禁止するだけでも、幾らか效能があるのだから。

併し、何よりも實際的な方法は、兩校の學生が運動して、一回だけ試しにやつて見る事だ。而して學生の紳士的態度が、果して何處まで自覺され進んでゐるか、お互ひに試驗して見る事だ。若しそれで、萬一間違ひが出來、ダイヤモンドに碧血を塗るやうな事があつたら、其時こそもう永久に止めて了ふのだね。而したら僕はもう兩校の學生たちが、何と云つたつて愛想をつかす。私學の横威の何のと云つたつて、まだ〱一高と三高との方がエライ事に決めて了ふ。まさか吾が敬愛する早慶の學生諸君は、僕如き一戀愛小說家に愛想をつかされる程腑甲斐なくはあるまい。

どうだ諸君。お互ひに協定し合つて、お互ひに充分自制するから、一度仕合ひをやらせて見て呉れと、學校の監督者たちに運動して見ては。而して一度試みに仕合をして見ようぢやないか。若し其際、熱狂して亂暴するやうな野次があつたら、それは永久に早慶戰を滅亡させる獅子身中の蟲、學生の面を汚す大敵だから、有無を云はさず制裁する規約でも設けて、充分警戒しようではないか。

▽日本球界の發達の爲め早慶戰を復活せよ

野球界主幹　横井春野

不完全なるリーグ戰

四大學リーグ戰は、早慶兩横綱が戰はざる限り、形式に於いて既に不完全である。名實相かなはざるものである。

近時四大學リーグ戰不振の聲は、愈々大となつて來た。今春に於ける四大學リーグ戰を顧り見るに、早慶兩大學は、容易く明法二大學を料理して、頗る平々凡々。早慶對明法の間には、實力の上に一段の差があるのであるからして、之れに對等の試合を望むことは、現在の狀況では不可能である、勝敗の歷然たる試合に對して、ファンの感興のうつらぬは當然である。早慶戰はざる限り、四大學リーグ戰不振の聲は絶えぬであらう。論より證據、昨春當りから、ファンの人氣は、四大學リーグを離れて、向陵に行はるゝ一高對早[illegible]三高戰に移つてしまつた。一高は球界の曲者である。年々俄か仕込みのチームであつて、技

倆其ものは、到底早慶に及ばないけれ共、しかも、强敵早慶を向ふにまわして、面白い取組をする。今年の一高は、隨分貧弱なチームであつたが、向陵獨特の一高魂は、發揮せられて、早大には、大敗したもの丶名にしおふ慶應健兒を破つて、大氣焰を吐いた。總べての點から見て、實力一段と劣れる一高は、横綱慶應を破つてゐる。ファンの人氣が、向陵に向つたのも、不思議は無い、けれ共一高は俄か仕込みのチームである。このチームが中心となつて、球界の健全なる發達を促さうと云ふ事は不可能である。

技術の上から見て、理論の上から見て、精神の上から見て、球界の發達に對して、其中心となる可きものは、云ふ迄も無く四大學リーグ戰であらねばならぬ。其四大學リーグ戰が、不振であると云ふ事は、由々敷き一大事である。この意味からしても早慶兩大學の試合を復活させる事は、目今の大急務である。

球界の發達の爲めに

野球技が、最近數年間に著しく普及せられ、相撲にかはつて國民的ゲームたらんとして來たことは、慶賀の至りである。日本固有の個人的競技が、衰へて、野球の如き團體的競技が、普及して來たことは、國民として、大いに、喜ばねばならぬことである。社會的訓練を切に要望するの秋、國民の體を鍛へ、膽を練ることを切に感ずるの秋、野球技の普及し來れる事は、大いに慶賀せねばならぬ。けれ共、今が大切の時であつて、餘程の注意をせぬと、野球道は、邪路に迷入つてしまふ。この大切の時に當り、球界の健全なる發達を促すには、早慶戰の復活を切望せねばならぬ。

野球の技術、理論、精神各方面の健全なる發達を促進するの道は、唯早慶戰の復活にあるのである。

早慶兩當局者に望む

早慶兩大學が、三回試合を以て、勝負を決する事になつたのは、明治三十八年早大が日本最初の米國遠征を企て丶目出度く歸朝して以來の事である。明治三十八年は、二勝一敗の成績で、早大の勝、翌三十九年は、第一回戰は慶應、第二回戰は早大の勝となつて一勝一敗。愈々決勝戰を行はふと云ふ間際になつて、應援隊の熱狂が因をなして、兩大學決勝戰は、中止となつたのみならず、兩大學は、永久に試合をしないと云ふやうな不祥事を見るに至つたのである。

其後、再三、兩校の試合を復活させやうと云ふ、運動は、試みられたが、いつも不調に終つた。中野武營氏の息武二氏が、

昨秋東京野球倶樂部を組織し、芝浦に大グラウンドを建設する運びに至るや、芝浦グラウンドの竣成と同時に、早慶戰は、復活するものと、取沙汰せられた。慶應が、近年の例を破つて、豊中にて冬季練習をしたのも、早大が奈良で冬季練習をしたのも、何れも對シカゴ戰の準備であつたには違いないが、實に、早慶戰が秋行はれるかも知れないと云ふので、其練習を兼ねたものであることも、推測出來るのである。然るに、芝浦グラウンドは、或る事情の爲め、一寸行き惱みの態であるし、早慶戰復活もどうやら危い雲行となつて來た。

　早慶確執の原因に就いては、兩校共に、各々立派な言ひ分があるのであらうが、過去の事を言ひ立てゝ居た日には、いつになつても、試合の復活は、望まれやしない。兩校は「日本球界の發達」と云ふ大なる目的の爲めに、今迄の總べての問題、其問題を混雜せしめた感情的色彩を悉く、サラリと捨てゝ、自ら進んで試合をするやうあり度きものである。「球界の發達」に貢獻する事は、云ふ迄もなく、國家に對して、忠實なる所以である。この點を考へて、この秋に際し、早慶戰を復活するやう兩校當局者に切に望む次第である。

▽運動精神の爲め、運動技術の爲め

帝大野球部主將　内村祐之

早慶野球戰復活問題に就いて、今日運動界に於ける諸先輩が一方ならぬ盡力をして居られる時に、自分の如き若輩が彼れ是れ此問題に對して容喙すると云ふことは甚だ烏滸がましく感ぜられる。然し此問題が今日我國の運動界に於て重大なる意義を持つて居ることを考へる時、不肖運動界の一隅に籍を占めて居る自分が、殊に早慶の野球戰復活に對する希望を述べると云ふことは許して貰へるであらうと思ふ。

　自分は此問題を考へる前に、何故に今日我國の運動界に於て獨り早慶のみが一切の運動競技上の國交斷絕の狀態に在らねばならぬかと云ふことに就いて大なる疑問を抱いて居る者であるが、道路傳ふるが如くそれが單なる感情問題、乃至彌次問題に起因して居るとするならば、これは一寸眞面目に考へられないことだと思ふ。苟も早慶兩大學は今日學界の權威であり、それを代表する運動部の選手は、更にそれを擁する數千の學生と共に、皆教養あり品位あるゼントルマンである限り、區々たる感

情の行違ひを楯に持つたり、神聖なるべき運動競技上の應援を單なる彌次馬の喧嘩と同樣に心得て居る者があるとは思はれぬ。若し飽く迄も感情問題の行き違ひや、彌次問題を以て早慶運動競技中止の主なる理由であるとするならば、當事者は學生を單なる暴徒と認めることになり、學生は甚だしく侮辱せられたものと云はなければならぬ。自分の如き者が今更らしく運動精神の何たるかを說く迄もなく、其事の神聖なるべきは誰にも分り切つて居る筈である。學生は此神聖なる運動精神を體得して居る者であつて、彼等は皆々たゞ嬉々として快活に彼等の運動を行へば好いのである。運動の眞精神から云つたならば、單なる感情問題や彌次問題などは顧みるに足らぬのである。不幸にして早慶野球戰復活の暗礁が感情問題とか彌次問題とかに在るとするならば、一日も早く斯かる偏見は我運動界から除き去らねばならぬ。自分一個の考としては、眞に早慶兩大學の野球選手が試合復活を熱望し、學生また輿論を作つて學校當事者を動かすならば、たとへ其處に如何なる事情が存するにせよ、近き將來に於て早慶戰問題の暗雲は我運動界から一掃されて復活の曙光を仰ぐことが出來ると信ずる者である。要するに此問題の解決は局外者の斡旋や盡力よりも先づ第一に當事者たる早慶の選手及び學生の奮起に俟つ所が多くはありはしまいか。

若し機運が熟して、幸に早慶野球戰が復活されることになれば、其時の我運動界の收獲は豫想するに難くない。野球戰が復活されゝば、從つて他の運動競技も復活されるであらうから、其時は我運動界の黃金時代を現出するであらう。更に大なる運動精神の普及、運動技術の發達は懸かつて早慶野球戰の復活に存するを知る時、此問題の解決は愈々重大であり、當事者の反省と奮起を切望せざるを得ないのである。

▽慶應義塾の當局諸公に切望す

「東京日日」記者　弓館小鰐

早慶戰の復活に對し常に反對し峻拒さるゝ慶應義塾の當局諸公に申上げます。

此試合が中止せられてより既に十餘年、天下が復活を翹望する心は、或は內部からの斡旋、或は外部からの促進となり、或る時は一方の早大から直接に挑戰狀まで發せられ、有ると有ゆる手段方法が復活の爲に致された事は、諸公の熟知されてる通りであります。のみならず試合の當事者たる慶應義塾の選手諸君を始め、出身の先輩諸氏及び學生等まで皆戰ひを望んで居る上に

聞くのに、獨り諸公のみが復活の結果より生ずる應援隊の紛爭を憂慮されて、今日迄いつも應諾を與へられぬのでありました。我々復活を熱望するものが唯一縷の望みを繫いで居た――芝浦のグラウンドが出來て現在の大學リーグが擴張され其リーグに加はらぬものは試合が出來ぬといふ事になつたならば、諸公も其愛する選手を孤立の地位に陷るゝ事をせずして參加を許し、從つて早慶戰も復活を見る事になるだらうと思つて居た其望みも、最近の新聞紙の報道に據ると、諸公は如何なる事情に於ても、早大との對戰は許可されぬ方針だと聞いて、餘りの事に諸公の再考を煩はしたいと思ひ立つたのであります。我が國運動界の爲に、將た又諸公の愛育さるゝ慶應の學生、選手諸君の爲に。諸公が其學び子の爲に慶應義塾體育會を設けて、各種の運動の奬勵發達に異常の努力を致されて居るのは、常に吾人の敬服して居る處であります。而して早大を除く各チームと對抗競技を許されて居るのを見て、競技が齎らす體育運動の效果をよく諒解されてるものと認めて居ます。運動を奬勵し其競技を是認されてる以上、天下萬人が認めて最も好敵手なりとする早大と試合させぬといふ根據はどうしても諸公が多年固持されて居る應援の紛爭を恐れるといふ事に歸着されての事でせうが之れが、又我々が何年經つても首肯出來ぬ點なのであります。

諸公は選手に對する自校學生の心から湧く應援を、よもや絕對不可のものとは思はれますまい。吾人をして云はしむれば、應援は試合の一部として學生元氣の爲に寧ろ奬勵すべきものと考へて居ますが、百步を讓つて假令可不可なきものとして諸公の之を恐れらるゝ所以のものは、唯其結果過度の激越から反目鬪爭等の不祥事が現出するものと豫想される爲でありませう。之も我々から見れば今の世にそんな莫迦な事が起らうとは想像もしませんが、同じく夫が起り得るものと讓步して考へる時、監督の職に在る諸公が自身の安易を欲する心からたゞ消極主義事勿れ主義に膠着されてるのを慨かずには居られません。如何にも應援激越の結果豫想されるやうな反目紛爭が起る場合があたつとしたなら、當然監督の諸公に責任は降かゝつて來るでありませう。併し其豫想する責任を回避せんが爲に、平素奬勵し是認し居る競技其もの迄も堰き止めんとするのは所謂枝を苅つて幹を枯すものではありますまいか。愼重の態度といつても度を越すと尻込思案から更に卑怯とまで下つて行くのは世間往々に認める所であります。

總ての物に利害の兩面あるが如く應援にも運動にも程度に依つて利も害もありませう。其害のみを認め利のある部分をも殺して顧みぬのは諸公等敎養に關はる人の勤めではあまりますま

い。害を矯むるは固より可、而して其利益を善導助長して行くことそ眞の教育家の天職でありませう。殊に其事ゆる處の學生は高等教育を受けつゝある立派な紳士であり、事に當る選手學生が皆競技を希望してるに於て、道を以て之を導かば、應援の紛爭云々といふやうな事は眞に杞人の憂に過ぎないのであります。之迄偶々あつた一二の小事例を以てして雲霧の裡に鬼胎を抱き主要の目的たる運動競技までをも許さぬといふ方針は、啻に諸公の爲のみならず、天下の學生界運動界の爲にも吾人の斷じて與し能はざる處であります。

殊に目下多少行惱みつゝあるやうですが、既に一高の先輩中野武二君が計畫發表した芝浦のグラウンドが將來出來上つた曉、早大との試合を避けるが爲に、自校の選手をして他の都下の有ゆるチームとも試合し得ざるやうな地に置く事を、諸公は尙快しとされますか。運動の效果が競技に依つて一層顯著にされる事を認められてるならば、些々たる應援問題に拘泥して、愛する學生、選手の手足を挽ぐやうな事をせずに、一番の勇猛心を振ひ起して自己及び學生を傷る如き方針を捨て、意義ある積極方針に出でられん事を切望して已まぬのであります。

序乍ら誌上を借て中野君に申上げます。貴下が我運動界の向上の爲に大運動場設立を計畫され、各チームの聯合を圖られつゝあるに就ては、其努力及び心勞に對し滿腔の敬意を拂つて居ります。たゞ最近の新紙に貴下の談として、早慶戰が絕望の爲運動場の計畫も頓挫したといふやうな事がありましたが、あの運動場の計畫の全部は早慶戰復活の爲許りではありますまい。種々困難な事情のある事は充分想像しますが、兎に角設立された上で然る後に復活を促進されん事を切望に堪えませぬ。

慶應の當局諸公に對しては言辭或は失禮に亙つた點があるかも知れません。若し御氣にさへられるやうな點がありましたなら小生の意のある處を酌まれ、謹んで寬恕を仰ぎます。又復活峻拒の理由が他に倚存し、單に應援問題とのみとしたのが小生の不明の致す處であつたならば、願はくば敎示を垂れられ、其蒙を啓かれん事を謹んで希望する次第であります。

▽自然の解決に委すべし

法政大學野球部長　新谷孝朗

早慶野球戰の復活を希望する所以のものは（一）兩雄の試合によりて我國野球技の進步に資し（二）之によりて益々スポーツマンスピリットの光彩を發揮し小學兒童にまでも良好な感化を與ふるといふにある。（二）は見方によりては次代の國民性にも

響を及すべき大問題ではあるが、それは(一)が實現されるとしての事である。

早慶を何故戰はせたいかといへば兩者が今日最も強いからである。其技術に隔段の差があれば戰つた所で斯技の進步に大して貢獻する所もないし、世間に格別の影響も與へない。故に早慶の内何れかゞ弱くなり又は他に强力なティームが出來れば永い間の喧しい問題が自然に消滅し若くは其價値の大半を失ふ事になる。而して此問題は從來の例に徵するも繰り返へさるゝ每に惡化し不可能の色を濃くする樣に思はるゝ。喧嘩でも仲裁をするものがあれば愈々片意地になるものがあるように一層溝渠を深からしむる樣に考へらるゝ。

そこで吾人は早慶戰の復活といふ事に聲を涸らすよりも他に强ティームを作る事に骨を折つた方が遙に得策であると信ずる。兩者が今日最も優れて居る原因は他に比して歷史が古く斯技に對する獨特のセオリーが構成されて居り且つ學校といふバックが目立つて大きい爲めに良選手が集まるにある。併し明治のティームも彼是十年許になるし法政も五年も經つた。大學の昇格も同樣であり一はデモクラチックな時代精神にもより明法にも追々と良選手が來るに相違ない。他日或は明法が早慶に取つて代る時があるかも知れぬ。其秋になつて早慶戰復活を呼號する者も無からう。要は明法(と限らぬ)の努力次第で此問題の命の長短が定まる譯である。

早慶戰停止の眞因が野次問題から起つたかどうかは吾人の知る所ではないが、今も猶復活不能の鍵がその點にのみ懸つてゐようとは信ぜられぬ。併し復活を希望するものゝ中に野次的エキサイチングゲームを見ることを樂みにしてゐる者が尠からずある今日急いで復活するのも考へものかも知れぬ。

要するに吾人は早慶戰復活問題の解決を自然に委すべしと云ふものである。そんな事に骨を折るよりも吾人は吾人のティームを强くし以て早慶戰復活に因りて招來すべき好果を吾人の努力に依つて齎らしたいと願ふものである。(九、六、二〇)

▽早慶試合と野次

「大正日々」記者　橋戸頑鐵

早慶何故に戰はさるか。明治卅九年秋以來兩校運動部に膠着したる確執は、十有三年を經たる今日に至るも依然として解けないで居る。何回となく調停は試みられた。有力なる有志は、機會のある每に出來得る限りの努力を傾倒したが、早慶戰復活の曙光は、何時望み得らるゝと云ふ豫想さへ附き兼ねて居る。

早慶野球試合中止の後數年にして明治大學野球部の勃興は、非常なる歡喜を以て天下に迎へられた。其後數年にして更に法政大學の存在が認められ、總て四大學リーグ戰の形式が成立した爲め、好球家の渴は之によりて一部醫されたかの感はあつたが、元來この四大學リーグと云ふものが變なものであつて、根本に於て早慶は戰はないのであるから、早慶兩軍はそれ〴〵明治、法政を相手として間接にその優劣を爭ふに過ぎないと云ふ奇觀を呈して居た。

この間接的優劣の爭は時々來襲する外國チームとの試合によりて益す烈しくなつた。殊に從來三回の來朝によりて我が球界を沸騰させた市俄古大學野球團に對する試合の如きは、兩軍が當の敵たる市軍に勝たねばならない意氣を示した事は勿論であるが、其背後には共に早稻田は慶應に、慶應は早稻田に劣らざる成績を示し度いと云ふ希望が滿ち〳〵て居るのが歴々と見へ透いて居た。

されば先日來行はれたる對市軍戰に於ても、慶應が最後の勝利を得ても、早稻田贔屓は何だか喜んで可いのか悲んで可いのか、歸着點の分らない樣な感に打たれたに相違ない。早大が市軍を破つた時も、恐らく同樣の感を慶應方の人々に與へた事であらう。

個樣に早慶試合が實現せざる結果、本邦の好球家は、靴を隔てゝ痒を掻く樣な感をしながら兩軍の力量を比較し、優劣を論ずるより外どうともする事が出來なくなつて了つた。

偶球界の彗星とも云ふべき一高軍の奮鬪があつて、時に早慶を危ふくし、今年の如きは三田軍を屠つて萬斛の溜飲を下げたとは云ふものゝ、これは唯結果の上に表はれた興味、應援によりて示されたる緊張味であつて、眞に力量が伯仲し、共に野球技の妙諦を發揮しての試合でないから、吾人の腦裡に印象されたる感興は、泡の如く淡いもので、何十年の後までその壯烈を稱ふべき早慶戰などに比すれば、誠にタワイの無いものであつた。

其他一高三高の試合なども今では年中行事の一となつて好球家の血を躍らせつゝあるが、これまた意氣の試合と云ふ點に於て價値あるも、共に技倆がいま一段の進境を示さぬ以上は、眞の野球を見せて貰う譯には行かぬ樣である。

加ふるに近來の四大リーグ戰なるものが、着しく面白くなくなつて來た。本年示されたる明、法選手の力量は、兎ても一流チームとして肯く事が出來ぬ位である。此に於てか『嗚呼面白い試合を見度い、高級なゲームに接し度い』と云ふ希望は、益す好球家の心に浸み込み、それが痛切に感ずれば感ずる程早慶

戰復活を望む聲が大きくなつて行く譯である。

早慶何故に戰はざるか。吾人は筆を擱くに當つて最初の問題に立歸つて所信を述べ度い。

私學の二大權威者たる兩大學が天下の希望に背いて迄も試合の再現を望まざる理由は、唯一つより外は無い。即ち「應援の熱狂から生ずる不慮の災變」これである。

卅九年の秋の決勝試合は、實に應援の過激によりて中止されたのである。引續いて早稻田は何囘となく應援者に訓練を與へ拍手の外一切の聲援を禁じつゝ今日に至つた。一高軍が從來の武器たる太鼓や武力罐を早稻田の校庭では叩け無いのはこの理由である。併しながらこれが何程の功果を學生及び一般の見物人に與へたかは頗る疑問である。其の證據には、一度三田或は早大の運動場を離れて、明大、法政のグラウンドへ行つて見ると野次の狂暴は實に言語に絕して居る。殊に明大の學生中には、聞くに耐えざる漫罵を敢てする者がある。最近明大對早大の試合を駒澤で見たが、明大側の野次は早大の選手を罵倒する餘鋒を新聞記者に迄も向けて自己の無節制、無智を遺憾なく發揮した。余は此の如き際に早大選手は何故試合を繼續するか、それが甚だ不審であつた。須らく試合を中止して野次と云はんよりは寧ろ暴漢を退場せしむるが、大學チームの權威ではあるまいか。余を取つた弱味と云ふ人があるなら、今後入場料は斷じて徵集せぬが可い。

野次！　野次！　試合を傷くる者はこの野次である。憎むべき野次は、選手の心を傷くる許りでなく、觀客にも絕えざる不快と憎惡の念を抱かせて、試合の興味を全然破壞せしむるものである。

思ふに早慶戰復活の道は實に見物の節制如何によりて封鎖もされ、或は案外早く開かれもするものである。吾人は前記明大對早大の試合を見て、早慶戰の復活もこの調子では、何時出來る事であらうか、甚だ覺束ない感に打たれざるを得なかつた。

早大の安部教授は從來熱心なる早慶戰復活論者であつて、機會ある每にその方面に盡力されて居たが、最近市軍を破れる時、早慶兩チームの應援が示したる熱狂の態度を見て、思はず『早慶戰の復活亦難い哉』の嘆を洩したさうである。これは一面から見ると甚だ元氣のない消極論の樣であるが、一面現今の應援が秩序を解せず、節制の度を辨へざる缺陷に對し、一大痛棒を喰はしたるものと云ふ事も出來る。

兎に角野球競技は進んだが、見物中には依然野蠻の者が多くて困る。併し吾人の見る所によればこの種の野次は至極少數である。自己の無節制がどれ程他人に迷惑を與ふるかを辨へざる

少數の低能者の行爲に過ぎない。而してこれ等少數低能者の爲めに、滿天下が希望して止まざる早慶試合の實現を見る事が出來ぬとなると、彼等は實に滿天下の敵である、防害者である。眞に早慶戰の再現を望む人々は、先づこれ等少數低能者を取締らねばならぬと思ふ。

▽日本野球界の恥辱

運動界主幹　飛田穗洲

私は早稻田緣故のものであるから今の場合、實際問題には觸れたくないと思ふ。此の問題は中止以後十數年間甚だ皮肉な交渉の上にあつて多數の人々を困惑させてゐる。早稻田の復活希望に對する聲明は十年一日も變はらない。それは既に世間周知の事實であるから慶應さへ承知して與れゝば今が今でも華々しく開戰する事が出來るのである。然しそれだけ早稻田側には理屈がない、只管復活を熱望してゐると云ふに止まるのである。「やらう」「やらない」此の簡單な掛合が十數年間續いてゐるも妙であるが、こゝにまだ解きにくい或物を心にくゝ思はねばならぬ。早慶戰の如きは何人も復活せねばならぬ事であると考へてゐる。解決の時ではなく實行の時であるべきは云ふまでもない。それが猶今日暗き帳の中に置かれてあるのは我れ人共に恬嘆ぜねばならぬ不祥事である。

此れは單なる早慶の問題ではない。實に日本運動界の恥辱である。私は常にかく考へてゐる。早慶試合すら恬淡に行ふ事の出來ぬ程狹量な日本の野球界が外國チームを招聘して技を鬪はすなど寧ろ嗤ふべき事ではないか、內に技を磨く便宜をすら造り得ぬ狀態にあるものが、外國の强チームを招ぎ或は外國に渡つて優秀なる成績を擧げんなど夢にも及ばぬ事ではないか、それをよく承知しつゝなぜ復活せぬであらうかと。

私は冒頭に斷つて置いた通りに深く進む事を避けるが、早慶戰中止の爲めに蒙つた日本野球界の損失に就いては云ふべからざる不快の念を有つてゐる。早慶戰が三十九年以來連綿と續いてゐたならば我が野球界の發達向上は決して今日の如き程度のものではなかつたに相違ない。野球の普及にも技術の向上にもそれは大影響を及ぼしてゐる事は何人と雖も否まれぬであらう。

殊に我々の所謂野球道の高唱を如何に阻害したであらうか、對校戰禁止論者の唯一の材料となつて我々を惱ましただけでも此の中止は呪はねばならない。それを拓いて行くのは早慶兩

野球部の義務であり責任である。唯今は實行の秋である、兩者は互に手を握つて日本野球界の爲めに光輝ある大試合を開かねばならない。

現在の狀態から推するならば敢て早慶戰の力を藉らずとも野球は充分に普及されて行くであらう。然れども早慶戰復活に依つてその熱度が如何に高潮され普及の速度が如何に加はるべきかは直ちに想像される。野球を愛するものは野球の爲めにその全力を濺がねばならぬ。その之れを知るならば兩野球部は安閑として居るべき場合ではない。

野球戰は選手によつて行はれる。選手によつて行はるゝものは、その選手を本位とせねばならぬ、選手だに戰ふ意志があり氣慨があるならば他の關係者の如きは問題とするに足らない。學校當局者や先輩が選手の戰意を壓迫し、强制するが如きは既に邪道に入つたものである。選手はそれ等誤まれる先輩並に學校當局に對しては屈從する必要を認めない。野球部は自由であらねばならぬ、獨立したものでなければならない。野球部は學校統治の下に窮屈なる存在をするものではない。學校は勿論野球部を擁護すべき義務はあらうが、之れに對し何等與奪の權を有してゐない。野球部は選手の意に、學校は野球部の意に添うて行かねばならぬ。選手が試合を希望し、野球部一致して敵の挑戰に應ぜんとするに際し、何等實力と理解を有しない學校の幹部が反對を唱ふる權利があらうか。若し飽までもその權利を主張するならば、選手は此等盲目的幹部と交渉なくして試合を行ふ事が出來る筈である。世論もまた玆に必ず一致して選手の行動に賛意を表するであらう。今日は總てのもの壓制の時代ではない。最も自由であらねばならぬ運動競技に丈け、忌はしき壓制が行はるゝとすれば天下の一大怪事である。

靜かに現下野球界の趨勢を考察するならば、選手自身大に覺めねばならぬ。徒らに先輩の從順さを踏襲して、とるべき策をとらぬが如きは野球部に對して忠實なるものではない。早慶戰復活して此れに出場し得る選手は、選手自身生涯に於ける最も華やかなる經歷を誇る事が出來る。社會に出づるの時その大野球戰場の經驗が如何に大きく動くであらうか。此の試合は種々の經緯の上に置かれたゞけ、再開始の曉には前年以上の熱を以て迎へらるべきは云ふまでもない。そのあらゆる緊張の中に戰ふ事は男子一生の修練である。願つてもなき幸福は唯選手十數人の上に萃まるのである。選手自身が萬難を排して此れを復活せしむべきはかゝる點に迄も深き意味を齎らすのであるから、野球界の爲めなりと云ふ廣義からは一層重大なものであるべきは云ふまでもないのである。

衝き進むべき處まで進むと云ふ事は、野球道が敬ゆる忍耐であり勇氣である。此れあるが爲めに野球道は尊望される。怯懦は野球技に最も退けられねばならぬ。早慶戰が遲々として復活せぬ如きは、選手自身の努力が足らぬ爲めである。早慶の現選手茲に大に考ふるところがあつて然るべきであると思ふ。

早慶戰は如何にしても復活せねばならぬ運命にあると思ふ。かゝる國辱に等しき事件が何時迄も解決されずに終るべき筈がないと信じられる。けれども遂にその機運に到達せぬものとすれば日本野球界は、此の大なる恥辱に對して深く考ふるところがなくてはなるまい。復活するかせないか、私は復活せねばならぬと思ふけれども、物事は豫想外の結果に驚く事が尠なくない。そうした場合、日本の野球界は如何なる處置をとるべきか、此れは單なる早慶問題ではない。日本野球の生命の爲めに、誰れも彼れもが愼重に考へて、最も正純なる判斷を下し、或る意味に於て我が野球界の精神的方面を救出せねばならぬと思ふ。

▽不合理不可解なる兩大學の確執

一高野球部主將　木内信胤

我國運動界に於ける早慶の位置は解くことの出來ぬ不可思議な謎であつた。自分はそれを永久に解くことの出來ぬ謎であるとは思はないが、少くとも今日に於ては多くの人々が此問題を解かんとして頭を惱して居ることは事實である。

總ての對校競技が學校當局者に依つて絕對に禁止されて居ると云ふならば兎に角、獨り我學生運動界に於て早慶兩大學のみが、單に野球のみならず、他の總ての運動競技をなすことを禁止されて居ると云ふ事實は、誠に理屈に合はないことであり、運動界それ自身のためにも惜みて餘りある事であると思ふ。

早慶戰中止の理由として世上、第一に彌次問題が擧げられて居るが、若し此彌次問題が當事者の試合拒絕の唯一の根據であるとしたならば、それは餘りに狹い考へ方であり、今日の野球競技に於ける彌次の實際を知らざるものゝ偏見であると云はなければならない。或は又、試合復活不可能と云ふ事實の裏面には、もつと局外者の窺ひ知ることの出來ない復雜な事情が潛ん

で居るかも知れないから、自分の如き第三者が彼れ是れ濫りに是非の判斷を下し得ないかも知れない。然しそれにしても今日早慶が運動界に於て何時迄も提攜することが出來ないと云ふ事は、明白なる理由と確實な根據の示されない限り、どうしても不合理であり、不可解であることには變りがない。此場合頻交問題が忘れたならば早慶戰復活は永久に望みが無いが、自分は早慶が猶其他の複雜なる事情のために永久に運動界に於て提攜を斷つものであるか何うかを考へる前に、先づ第一に早慶の當事者の意志が試合復活と云ふ事に對して動いて居るかどうかを問題にしなければならないのではあるまいかと思ふ。然し自分がそんな事を考へるより前に恐らくは賢明なる當事者は、早晩完全なる諒解の下に此問題の解決を着けるであらう。また自分はその事實の一日も早く實現せられんことを熱望して止まない者である。

▽案ずるより產むは易いぞ

「東京朝日」記者　植村陸郎

早慶野球試合の復活といふものは之れで何度叫ばれるのであらう。而も叫ばれる度に失敗に歸す。最近に於いて我が球界の元老中野武二氏が主唱となり一高に早慶明法四大學の諸先輩が相倚つて帝都芝浦に完備せる野球大競技場建設を企圖せるを好機として昨年來早慶の各先輩に中野氏等が加はつて早慶試合の復活を期すべく非常な努力を試みたが惜しい哉又復不成功に終つたとの事だ。明治卅九年秋最后の早慶試合の中止以來十有五年幾十度の復活運動あらゆる折衝を重ねて今尚成らず最早永久に不可能とさへ斷念される程になつて居る。而して又其の復活の運動は何時も慶應方の不承知に依つて成立たぬと聞いて居るがそも復活峻拒の眞の理由且又峻拒を主張するは慶應方の如何なる人なるや今尚判然と知る由がない。

選手側は「何時でもやりたいんだが」と云つて居る、野球部の先輩に聞けば「吾々は喜んでやらせたいのだが」と、一體誰れが「不可」を稱へて居るのだか明瞭にして呉れぬ。學校當局者も亦飄簞鯰の挨拶で果して何處の邊で拒絕して居るのであらう。種々事情を綜合して見ると選手側の復活を渴望して居るのは事實らしいが學校當局と先輩側の言明がどうも腑に落ちない、最后の調停の勞を執つた中野氏は「裏には裏があるので却々難しい」と云つて居るがそれは外面上先輩側は復活を希望して居る如くに公言して居るもの丶或一部の大先輩と目される人々が却々「諾」と云はぬらしい處もあるのと、又一方には學校當

局の最高幹部と思はれるところで頑として許可しないのだと云ふ事も聞いて居るから或はこゝ等の邊で握り潰して居るのではあるまいか、而もその拒絶の理由に於いては吾々の聞く處に依れば極めて薄弱であつて眞の理由は果して其處に在るかどうかを怪しむものである。其の理由は偖て置き早慶野球試合の中止は本邦の野球界延いては我運動界に如何なる影響を及して居るかを考へよ、此の試合の中止は早稲田大學と慶應義塾との單なる試合中止ではない、之れが爲めに受くる野球界の打撃損失は甚大なるものであつて私は或意味に於ける野球封鎖だと極言したい、而も其餘波は遂に飛んで漕艇界に迄及ぼして來た。去月都下各大學専門學校の端艇部がリーグを爲して日本漕艇協會なるものを創設せるに際しても慶應は獨り早稲田と戰はねばならぬと云ふ理由の下に其のリーグに加はる事を斷然卻けた。蓋し如何なればこそ斯く迄慶應は對早稲田戰に對して斷然たる禁止令を嚴守せねばならぬのか全く判斷に苦しむものである。他の競技は別として野球技に於ては少くとも早慶兩大學は十數年以來本邦に於ける兩横綱たるは吾れ人共に認むるところであつて、此の兩者が互に戰はずして徒らに睨み合ひの姿であると云ふは如何に野球の進歩を妨げ發達を阻止するものであるかは口を贅せずして自ら明かな事であつて、のみならず之れが他の競技に迄累を及ぼすに至つては一日も忽にすべからざる大問題であらねばならぬ。反對論者は、明治卅九年の中止當時を憶起せよと云ふかも知れぬ、又學校當局者は自分等の立場にもなつて見よと云ふかも知れぬ、當時の野球試合と十數年經つた今日の野球試合と何時迄も同じだと思つて吳れては誠に迷惑な話で、野球技の進歩と共に審判制度も完備し又、同時に觀覽者の頭も自らリファインされて來て居る事は吾人が玆に云ふ迄もなく何人も認めて居るところであらう。對校試合は學生の熱狂もあらう、當然な事だ、然も翻つて一高三高の野球試合を見よ、年々回を進むるに從つて應援隊の熱狂の度は加はつて行く許りだが却つて益々眞の統一がついて來て熱する中にも學生各自のセルフコントロールが能く行はれて來たではないか、要するに野球と云ふものを一般は能く理解して來たのだ。で今日に於いて尙十數年前の早慶試合當時の大混亂を來す事を恐れて居るのは寧ろ杞憂であつて何等の憂慮を要しない問題である。こんな理屈は今更吾人が云ふまでもなく既に諸先輩が口を極めて述べられた事共で、反對論者は恐らく耳に蛸だと仰言るかも知れないが靜かに胸に手を當て此の中止が運動界に及ぼす惡影響を考へて見よ、一日も早くその復活を計らねばならぬと云ふ事は自ら了解され寧ろ積極的に弊害を除去する事に努め、速かに此の問題を解決

する事に運動せねばならぬ。と同時に進んで早慶戰をして天下の模範試合たらしむべき事に盡力するに至るであらう。或る論者は云ふ「早慶戰の復活は以前程の熱はない」と又「一度火を消した薬缶の様で又火を付けても前程の味はない」と評して居る事を聞いたが、少くとも我國では最も洗錬されたテイム鎬を削ると云ふ事になつたらどれだけの興味を湧き起す事だらう、從つて本邦野球界の夫れから受くる利益はどれだけであらう。

春秋二回毎年擧行される四大學のリーグ戰、早慶永く相見えず全く火の消えた様なダルゲーム、は之れに依つて再び緊張を來し日本に於ける眞の野球選手權爭奪戰が出現せらるゝ譯である。今は最早理屈は云ひ盡されて居る、只速かに兩者相見えれば事が解決されるのだ。あらゆる條件は無駄だ、大學生は紳士としての自覺を十分に持つてる筈だ、選手は云ふ迄もない、凡ての因襲を捨てゝ試みに戰つてみよ、案ずるより産むは安いぞ、討ち討たるゝは兵家の常だ、幸兩戰士の意氣はシツクリ合つて居る、此の好機を空しくしては又と機會はあるまいぞ。

最后に臨んで完備せる芝浦の大グラウンドの一日も早く出來上る事を希望すると同時に、此の競技場設立發表の際早慶明法に帝大を加へた大リーグを作り慶應若も肯ぜずば最后の手段を採るべしと聞いた、吾人は萬一の場合斷然たる其の所謂最后の手段に至極賛成を表するものである。(了)

▽あらゆる情實を一掃して爭覇戰を復活せよ

中野武二

兩三年前に早慶野球戰復活問題が新聞雜誌紙上に於て論議提唱せらるゝや、當時一般運動家及び好球家の注目を惹く所となり、且つ兩者の爭覇戰實現に對して彼等の間に熱心な期待を抱かせたが、種々なる事情のために該問題は復活の機を見ずして其儘立消えとなつて了つたのは我國運動界の恨事としてかへすがへすも我等の遺憾とする所であつた。併し野球界の兩大關たる早慶の試合不可能と云ふ事は、永久の絶望として諦め忘らるべく我國運動界のために餘りに大きな問題であつた。今日早慶の先輩並びに一部有志の再び早慶野球戰復活問題に對して熱心斡旋する所あるも此意味を語るに過ぎぬ。見方に依つては早慶戰復活問題は舊い問題であるが、然しそれが度々繰返されると云ふとには新らしい意味がある。少くとも此問題が屢々運動界に於ける誠意ある提唱となつて現はれる時には、早慶戰復活の機運を促進すると云ふ意味に於て重大なる意義があると思ふ。

今日早慶兩大學の野球戰、及び其他總ての運動競技が復活されずに依然として兩者が反目の狀態を續けて居ると云ふ事實は、今日の運動界の現狀から云つて見ても不思議千萬なことであり、嚴密なる意味に於ける運動の立場から云つても誠に不合理千萬なことである。早慶が總ての運動競技を中止した事實の裏面には種々複雜なる事情が存在して居るのであるが、其主なる理由として世人が知つて居る事は應援團の問題である。少くとも此應援團の問題が他の複雜なる事情と相俟つて、早慶戰復活の大なる障碍となつて居ると世人は思つて居る。成程過去に於て此の應援團の問題が早慶野球試合に禍をなしたことは事實であるが、然し此事が今日早慶戰復活の不可能なる主なる理由であるとするならばそこに問題がある。斯う云ひ切つて了ふ事は今日の運動と云ふものに對して全然無理解であると同時に、運動競技に於ける應援團の位置を餘りに見縊り過ぎたものとの非難は免れぬ。勿論對校競技に於ける應援團は各自の學校を代表する應援團であるから、其場合各自の校風の相違、從つて氣質の相違から稍もすれば感情上の衝突は免れぬかも知れぬが、然し此等の應援團は校敎養ある學生の集りであり、今日に於ては運動精神の何たるかを理解して居る者許りであるから、單なる感情の上から紛糾を釀するものとは思はれぬ。從來對校競技の際一部の應援團の間に偶々衝突の起るやうな事はあつたがそれも、血氣に逸る元氣な青年の間に於ける、有り勝ちな運動競技上の些細な感情の上の衝突であつて、是を以て直ちに應援團全體の態度を云爲するのは早計の至りではあるまいか。應援團(モッブ)は暴徒ではないから訓練に依つては運動競技に對して效果的(エフエクティブ)でこそあれ決して害を及ぼすものではない。事實一高對三高の野球戰に於て、兩校の應援團は隨分緊張し白熱するのであるが、未だ嘗てそこに不祥事の起つたことは聞かない。若し飽く迄も應援團を暴徒(モッブ)と見做して、其弊害の方面のみを觀るならば一切の運動競技は成立しない譯であり、各大學の短艇競漕、庭球戰、並びに四大學の野球リーグ戰は直ちに中止しなければならなくなるであらう。要するに運動競技にかける應援團の問題は、應援團其物が悪いのではなく、彼等の自覺、訓練と云ふことが問題なのである。

今日早慶戰が單なる應援團の問題から復活出來ないとするならば、第三者から見てそれは餘りに馬鹿々々しい事であると思ふが、然しそこには複雜なる事情もあることであるから、一概にさうも云つて了へないかも知れない。けれど其處に如何なる事情があるにせよ、野球界に於て特に早慶兩大學が試合が出來ないと云ふことは不合理な事であり、運動界のために

なる損失であるから、我等一日も早く兩者の復活戰を熱望する者は、此不合理と損失とを除去することに努力しなければならぬ。事實學生運動界に於ける權威たる早慶兩大學の運動競技の中止は、運動競技に對する一部の人々の偏見を助長せしめ、引いては運動競技其物の本質を誤解せしめると云ふ事から、どれほど我國運動界に惡影響を與へて居るかと云ふ事を考へる時には、實に運動其物のために忽にすべからざる大きな問題である。然し局外者が如何に努力し運動しても、肝心の當事者が冷淡であつては此問題は永久に解決される時がない。それには當事者が些々たる應援問題や感情問題に拘泥せずに、高い意味に於ける運動精神の見地から野球競技と云ふものに理解を持つてくれなければ駄目だと思ふ。先づ當時者が動くことが第一であるが、それには社會的に有力な人が當事者を說いてくれるか、同時に輿論を喚起する事に依つて當事者を動かすかしなければならない。要するに此問題に對する自分の立場は一言にして盡きる。それは早慶兩大學は正しき諒解と感情の融和の下に、多年の情實を一掃して、我國運動界のために直ちに對校競技を復活させねばならぬと信ずる者であり、其第一の問題として野球戰の實現を熱望する者であるが故に、此問題に對して特に運動と努力を惜まぬ者である。



時論

法學博士　吉野作造

獨逸の政局

「新獨逸の研究」なる標題の下に本誌前號に蒐められた諸家の意見を觀ても、獨逸の政局が今後如何に落付くかを判斷することとは何人にとつても頗る困難であるやうに思はれる。大體に於て社會民主主義が優勢であるやうだけれども、保守的反動派の擡頭も亦輕々に看逃し難いし、殊に社會民主主義の間に於ける所謂多數派と獨立派との反目は政局の安定をして益々困難ならしめて居る。

保守的勢力の擡頭は露西亞に於てさへ段々起りつゝあると傳へらるゝ程だから、獨逸に於て此事あるは怪むに足らない。けれども露西亞に於ては若し噂の如く保守派が段々勢力を得つゝあるとしても、全體としての政局は新舊二勢力の對抗に過ぎないが、獨逸のは更に其新勢力が分れて二つとなり、保守派と云ふ共同の敵を有するに拘らず合體して之に當ることが出來ない程に反目して居るのだから、事が少しく面倒になる。併し政界の表面に鎬を削つて居る政治家の群れを放れ、姑く國民自身がどう考へて居るかを推測するならば問題はもう少し單純になるやうに思はるゝ。即ち國民の多數は自ら新らしき時代の要求に動かされて從來のやうな政治ではいけまいと云ふ考に動いて居ると同時に、現在の不安亂雜に苦むの餘り、時として過去を追懷して舊い經驗を復活しようかといふやうな考にも動かさるゝものと思はるゝ。此點に於て獨逸の國民は過去に於てそれほど壓制を極めた帝政時代を有つてゐなかつた丈け、露西亞國民に比し懷古的精神が厚い。露西亞の事は今茲に說かないが、昨今起りつゝあると傳へらるゝ所謂保守的運動は實は政治的復古主義ではなくして、過激派の唯物主義に對する宗教的精神主義の反抗であるらしい。

扨、獨逸の狀態を右の如く考へると、測らずも思ひ起すのは一八七〇年當時の佛國の狀態である。那翁三世が一代の榮華を極め、而も其侵略主義的外交の華々しさの蔭に一種の弱點を包藏して居つた事は戰前の獨逸と似て居る。彼が一度びセダンに

破れて獨軍の捕虜となるや國民は期せずして帝政の廢止に同意した。卽ち政體の變更は當時么微の間に國民の腦裡に書く刻まれた要求であつた。併し國民の多數は未だ新たに來るべき政體が共和制でなければならないと云ふ所までの確信はなかつた。舊制に執着すべからざるは明かなるも、扨新たに如何なる制度を採用すべきかに迷ふのは何處の國でも過渡時代に共通な現象である。玆に所謂急進派の苦心があり又保守派の乘ずべき餘地もある。果して普佛戰爭後新たに召集せられたる國民議會の七百五十人の議員の中、共和主義者は其三分の一に過ぎなかつた。多少の那翁黨もあつたが他の大部分は昔のブルボン王統を擁立しようとする王政主義者であつた。尤もこんなに多數の王政主義者が選出されたについては當時の佛國民は已に戰に倦み、爲めに戰爭繼續論者たる共和主義者を故らに避けたと云ふ理由もある。それにしても五百人に近い王政主義者を擧げたと云ふ事は以て如何に當時の國民が尙舊い經驗に特別の執着を有つてゐたかと云ふ事が分る。それにも拘らず王政は遂に實現しなかつた。之には又いろ／＼の理由もあるが、併し王政主義者が如何に其主義に熱心であつたかは、少くとも最初五年間の共和制は已むを得ざる一時的の便宜に出づるものとして共和政治の假りの試みと稱し、且つ共和主義の漸次的確立を助長するを怖れて極力憲法の制定に反對した事によつても分る。之れ程彼等は王政の回復に對して熱烈なる感情を有つて居つたが、それにも拘らず遂に共和制に固まつた所以は、單に二百數十名の共和黨員の熱心なる努力のみによるものではない、一つには我日本に於て觀るやうな君主として推戴すべき適當な人を缺いて居つたと云ふ事もあるが、主として舊制の復活を以て新時代に處するについての十分なる確信がなかつたからである。どんな舊弊な頑固老爺でも洋食屋でする結婚披露式に裃を着て出席するの勇氣がないやうに、如何に昔の制度に對する感情的執着が後ろ髮をひいても、時勢が變れば少くとも其大勢には押されて行く。只其反動的感情も相當に根柢が强いから新時代の要求がいよいよ確立するまでには永い間の奮鬪が要る。之れ佛蘭西の共和制が其後永い間反動的勢力の幾多の陰謀に惱まされ、廿世紀に入つてやつと安心が出來るやうになつたといはるゝ所以である。

普佛戰爭後三四十年間の佛國の政治史は無論多少趣を異にするが、或意味に於て獨逸政局の今後の發展を暗示するものと云つていゝ。大戰の結果として新たに世界に起つた政治の理想の何たるかは今更ら云ふの必要はない。歐米各國に於ける政治的乃至社會的の不安動搖は我々の觀る所から云へば此新理想の產みの苦みである。此等の諸國が結局健全な小兒を產むか或は畸

形兒を產むかは國民の素質と努力と、又過去の歷史となどが之を決するだらうが、何れにしても反動的保守思想が陣痛の苦しみを大ならしめて居る事丈は疑を容れない。此點から觀れば獨逸の政局が結局何處に落付くかについても我々は甚しく迷ふ所なく見極めを附け得べき筈である。只あゝ云ふ國柄丈けに保守的勢力は今後相當に永く跋扈するであらう。時としては隱れたる陰謀が反動革命としてあらはるゝ事もあらう。そんな事が屢々繰り返されたからとて、我々は獨逸政局の結局の安定を疑ひ且つ誤つてはならない。カップ革命が此後また繰り返されやうが、總選擧の結果保守派の黨員が著しく增さうが、獨逸と云ふ大船の航路は、初めから一定して動く所がない。

國民黨の宣傳部新設

六月十日開かれた國民黨の議員及び院外團聯合會は新たに宣傳部なる一機關の設置を決議したと傳へられて居る。之に關する犬養總理の演說には、黨勢擴張の爲めではない、政治意見の固定せざる若い人々を敎育するを目的とすると云つて居るけれとも、鵜崎幹事が最近時勢の變化に從ひ、黨の態度を一變するの必要から出たと云ふのが本音だらう。然らば之れ亦黨勢擴張の一方法に外ならぬが、予輩は玆に從來の政黨がそろ／＼國民に對する接觸の關係に覺醒し初めたるの兆候を認めて頗る此事に興味を感ずるものである。

犬養總理は頻りに黨勢擴張と云ふ目的を隱さんとして居るけれども、何も之は隱すに及ばない事である。商賣人が私利私益を眼中に措かず、社會一般の便益を計るのが目的だと云つたからとて損してまでも客の便宜を計るとは何人も思はない。そんな齒の浮くやうな虛飾の言を弄するよりも儲けたいなら儲けたい、黨勢を擴張したいなら擴張したいと言ひ切つて貰つた方が氣持がいゝ。そこで予輩は國民黨の本當の目的を推測して、黨勢擴勢の爲めに宣傳部なる一新機關を設けたと斷定して置く。而して之れ實に黨勢擴張方法の一變であつて、之れの運用の如何によつては我國政界の進步の上に可なり重大な影響を與ふるだらうと思ふ。

何を以て之が黨勢擴張方法の一變なりと云ふか。從來の黨勢擴張方法は各政黨を通じて餘りに貴族的であつた。各政黨が黨勢擴張の爲めに努めて接觸するのは國民の如何なる階級であるかと云ふに、各地方に於ける金持乃至所謂名望家である。貧乏人の全然無視されて居るは云ふ迄もないが、金持でも若い者は餘り顧られない。年の取つたもの、村會議員とか郡會議員とか縣會

議員とかにでもなつて居るものと連絡を取れば、其村其郡全體が動くと心得て居る。動かなければ若干の金で結局どうにも操縦が出來ると考へて居る。それで黨勢が十分に擴張が出來ると考へて、露骨に之を濫用したものは今度の總選擧に於ける政友會であらう。併しながら時勢は今や一變した。少くとも一變せんとしつゝある。青年の自覺は段々に所謂老成の名望家の頤使に甘んじない。單に此等先輩の擅斷に對して反感を抱くと云ふばかりではない、第一思想が丸で違つて來た。全體としてはまだ老成人が可なり重きを爲して居るやうだけれども、併し之も之から先何年續くかは最近の選擧に於に已に都會の青年が老成人の期待に背いた事によつてあらはれて居るではないか。玆に鵜崎幹事の所謂「最近時勢の變化に伴ふ態度一變の必要」が感ぜられて來る。

併し國民黨が率先して態度一變の必要を感じたのは、國民黨員諸君の聰明の結果と云ふよりも、寧ろ過ちの功名と云ふべきものであらう。何故なれば、旨々政友會から振り捨てられた國民黨としては到る處活動の舞臺が狹められたので、役にも立つまいと知りつゝ餘儀なく青年に縋らざるを得なかつたからである。初から確信を以て青年を頼んだのでない證據には、彼は今度の政戰に於ては悲むべき必敗を豫期して居つたとによつても分る。然るに結果は意外にも彼の豫想外の成功に歸つたのは、之れ過ちの功名にあらずして何ぞや。只此過ちの功名が指示する所の新機運を逸早く摑んで之を今後の黨勢擴張に利用せんとするの機智に至つては予輩の敢て敬服する所である。

右述べたやうな新機運は國民黨ばかりでなく、政友會なども亦之を認めて居る。併しながら政友會は青年の自覺が政界の掛引を老年に一任せざるやうになつた現象を指して危險思想の横行と解して居る。國民黨が「だから今後は若い者を力にしよう」と云ふに對し、政友會は「だから若い者は危險だ、之からは嚴重に取締らなければならない」と云ふ。尤も覺醒した青年に擧つて政友會に反對した事は疑ひない。併し之は政友會が專ら老輩のみに着眼した結果であつて、何も初めから政友會に反對するものと極つた譯ではない。自分の罪を棚に上げて徒らに反對者を罵るは醜陋の極、政友會に若し人あらば、國民黨の新運動によつて大いに學ぶ所なければならない。

何れにしても青年に着眼すると云ふ事は單に黨勢擴張の手段としても頗る有效なものに相違ない。青年の如何に賴みになるかは之からの選擧に益々明かになるだらう。此實物教訓は遂に政治上に於ける青年の勢力を大いに重からしめざるを得ない。玆に予輩は重要な意義を認むるのである。青年の思想が重きを

爲すと云ふ事はどの方面に於ても純潔と公正と熱情とを齎らすものであるから。

マロックの著書について

此頃の新聞の廣告に、瀧本博士序、宮地氏譯としてマロックの「社會主義批判」の飜譯が出て居る。標題は特に「指導能力と筋肉勞働」と改められて居るが、廣告文にもある通り、現代の「富の増殖は社會の大多數を占むる筋肉勞働者の效果にあらずして少數の天才、科學的智識の應用、事業經營の材幹卽ち一言にていへば少數者の能力によるものである」と云ふ主張に基いたものであらう。當節流行の社會主義的主張が富の生産に於ける筋肉勞働の效果を偏重するに對して、資本家階級所謂少數者の爲めに辯護の勞を取り、否な爲めに萬丈の氣焔を吐いたものとして之を世上に紹介すると云ふのが譯者の積りであらう。

一體マロックと云ふ人は近代の民衆的精神に可なり強い反感を有つて居る學者である。「社會主義批判」の外に彼には「純正民主主義の限界」と云ふ著書もあるが、之にも同じやうな論が多い。社會の大多數を占むる低級な民衆の爲すなきを罵倒し、社會の文化は畢竟少數賢明なるものゝ働きによつて出來るものたるを力說して居る。社會の幸福はいはゞ哲人の賜物であつて、デモクラシイの精神の擴布によつて我々が幸福になると思ふならそは大いなる誤りであると說いて居る。一面に於ては最もと許さねばならぬ點もあるが、併し彼の說には現代のデモクラシイに對する根本的誤解が伏在して居るので、西洋では餘り重きをなさないやうだ。獨り我國に於て一部の反動思想家は得たり賢しと彼の著書を持て囃すものあるは當節柄また怪むに足らない。宮地氏の譯も斯う云ふ一部の要求に應じて出て來たものと思ふが、彼のデモクラシイ論については先きに田中萃一郎博士の詳細なる紹介があつた。當地予輩は本誌に於て之に一言の批評を試みた事があるが、あの時の博士の紹介が最近になつて一部の人から剽竊呼ばりをされて居るのは同博士の爲めに甚だ氣の毒に思ふ。同博士がマロックを紹介した立場に對しては全然服する能はざるものであるが、博士が態々マロックを紹介する旨を斷つてあることによつて博士に對する剽竊呼ばりは全然誤解であることを序ながら辯明して置く。

社會主義批判にしても民主主義批判にしても、マロックの說の根本的の誤りは所謂指導能力と多數者の勢力とを物理的に對立分離せしむる所にある。昔の封建時代なら哲者の間に[illegible]

絡がなかつた。少くとも初期のデモクラシイの運動には民衆の力を以て少數者の指導權力を推倒せんとするの對立觀念はあつた。併し今日の政界に於て兩者の全然分離對立して居る現象は何處に之を觀るとが出來るか。指導能力は民衆の勢力と離れてそれ自身單獨には何等の影響を今日の政界に及ぼすことは出來ない。加之今日の多數民衆はまた全然指導能力を必要とせず、單獨の活動を縱まにするを要求すると思ふならば大いなる誤りである。多數の民衆が少數賢明の指導を要求し、且つ之に甘んずるはデモクラシイの精神と何等悖るものではない。而して今日のデモクラシイの世の中に於ける指導者はまた昔の如く何等民衆に立脚する所なき孤立的勢力ではない。少數賢明なる指導能力に服するが故にデモクラシイが健全であり、又多數民衆の勢力に立脚するが故に現代の指導能力は誤に陷らざるを得る。此兩者の間に存する微妙なる精神的連絡を無視して、少數者の指導能力が大いに活躍するから、所謂デモクラシイは駄目だと云ふのは、戰時中の英米が其信任する政治家に全能の力を與へたのを觀てオートクラシイの復活だと狼狽へたのと同一の誤解である。

社會主義にしても民主主義にしても少數者の指導能力を排斥するものではない。けれども誰が指導能力として適當なりやを決定するに毫も民衆の意嚮を參酌しない事に反對するのである。指導能力が必要だ、だから資本家に盲從せよと云ふのは、資本家が常に賢明であり、勞働者は常に曚昧であるとを前提としなければ成り立たない。否らずんば賢愚の別如何に係らず指導的地位を或る特殊の階級に壟斷せんとするものにして、彼の政權を階級門地の特權とした封建時代と異る事はない。少數者の指導を必要とすと云ふは可い。けれども或少數者の階級に指導的任務を托すべしと云ふは不可い。近來の民衆運動は右の如き固定的階級特權を打破し、眞に指導的能力を有するものをして階級の別に拘らず自ら顯出せしめようと云ふ所にある。

多數民衆と少數指導能力との離るべからざる關係に着眼した點に於て流石にマロックの眼は鋭い。けれども之が本當の民衆精神の要求であり歸趨であるとを心附かずして、却て社會主義を呪ひ民主主義を罵り、如何にも反動的精神の代辯者の如く觀られたのは彼の爲めに惜む所である。併し彼自身は決して專制主義者や資本主義者の代辯者たるの意思はなかつた。彼の著の飜譯によつて少しでも時代の新機運に水を差さんとするものがあるなら、之は確かにマロックの本意とする所ではない。

責任の歸着を明かにせよ

所謂森戸事件に關し東京帝大の經濟學部が有罪とも無罪とも極まらぬ中、周章てゝ森戸氏に休職を命じた事を世間には隨分批難するものが多かつた。一つには森戸氏の無罪を信じ、否な却て氏の說に共鳴するもの多い爲めでもあつたらうが、又一つには起訴されたと云ふ丈けで休職を命ずると云ふやうな事が、從來學校管理者の責任を明かにする一形式と認められて居つた事に不滿だと云ふ點もあつたと見える。同じやうな事は他にも多。い二三ヶ月前某小學校敎師が過激な演說をしたと云ふ警察官か何かの報告が本になつて、一言の取調べも受けずに免職になつたと云ふ噂もあつた。本當に惡い人間か善い人間か分らぬ中に只一時の評判に動いて人を處分するのは餘りに輕率だと思ふけれども、官界では深く之を咎めない。斯くては眞に其任にあらざるものを淘汰し、又此趣旨で官界を肅戒すると云ふ實際的效果は擧らない。時として有爲剛直の士が誤つて斥けらるゝ事あるは云ふ迄もなく、少くとも無能因循の輩でなければ官界に安住することが出來ないと云ふ狀態を來たす。惡い者も淘汰すると云ふ趣旨の制度乃至慣例が、わるいと云ふ噂の立つたものを悉く排斥すると云ふ、餘りに形式に拘泥する遣り方では本當の糺彈廓淸の實は擧らない。

責任の制度が餘りに形式的になつて居る他の一つの例は進退伺の濫用によつても分る。何かと云ふと進退伺を出す。之を出せばそれ丈けで責任が解除されたかの感をなす。而して官界の空氣は更に改らない。之れ實に目前の實況ではないか。

自ら責任を負うて處決する場合に於ても、又部下の責任を糺す場合に於ても、眞に責任を負ふべきものゝ何れなるやを主觀的認識に基いてやつて貰ひたい。責任を問はねばならぬやうな客觀的事實があらはれたからとて、直ぐ狼狽するのは寧ろ自己の聰明と確信との欠缺を自白するものである。山懸事件の爲めに道家農務局長がいよ／＼責を引いて辭職すると云ふ噂が昨今の新聞に出て居る。部下の中からあんな大罪人を出したのは道家氏としては恐懼措く能はざる所であらう。併しあの場合誰が局長であつてもあれ丈けの事はあつたので、特に道家氏の過失が事件の發生を可能ならしめたと云ふのではない。責任は之を糺すことによつて從來の誤りを再び繰り返さざらしめ得る場合にのみ之を糺すべきである。何人も豫見し得ざる不慮の出來事や、又何人も防ぎ得ざる當然の出來事について責任を問ふなどは土臺間違つて居る。確信あるものは世間が何といはうが自分

に責任がないと頑張つていゝ。こんな事に形式的の責任を問はうとするから一片の進退伺で誤魔化すやうになる。其結果此制度は遂に骨抜きの空名に墮し畢る。

聰明と確信と勇氣とを缺く凡庸の俗吏は外面的形式に拘泥して、頻りに自己の責任を避けんことに苦心して居る、部下に惡評の者ある時、狼狽へて之を處分するのは本當の惡者と分つた時の自己の責任を免れんとするのである。クロポトキンの本を有つて居つたと云ふ丈けで部下の教員を處分した校長、勞働組合を作つたからとて、容赦なく職工を馘つた工場長などは皆此類である。斯くして活氣ある有能の士を驅逐して一般の空氣を沈滯せしめて省みざるものは畢竟責任の歸着が明かにされてゐない結果である。

要するに責任を糺すなら「人」に着眼せよ、「事」に着眼すべきでない。我國官界の空氣が一般に餘りに「事」に拘泥するの結果は萬事が形式に流れて、遂に本來の目的を裏切るやうな事がある。「人」を信ぜずしてお上みの極めた形式で仕事をさして行くのだから、時々飛んでもない馬鹿な現象を見る。警視廳が狂犬の取締をする、一旦其疑を蒙つたものは甲から乙、乙から丙に移つても其後を追うて隨分嚴格に診檢を繰り返すが、郡部に行けば、丸で放任して顧みない。火事だと聞いて驅け出した消防夫が管轄が違ふと云つて歸つて來たと云ふ話も屢聞く。大阪の巡査が白晝殺人の現場を見ながら之も管轄が違ふと云ふので見逃したと云ふ記事がつひ此間の新聞に出て居つた。先達の選擧の時京橋局の消印ある七百有餘の郵便物が不都合な配達人の投げ棄てたものと見えて品川邊の海邊で拾ひ上げられた。品川警察署に屆出でた拾ひ主は、受領證を請求したるに、有價物たる拾得品に對する他受取書を出すと云ふ規定がないと云ふ理由で斷られた。陸軍の幼年學校では生徒に新聞を見せない、教育上有害なりと云ふ理由に出づるさうだ。日曜に外出を許さるゝ生徒が下宿に行つて眞先に手にする者は一週間分の新聞であることは公知の事實である。之を校長に問へば校內でさへ讀まなければ自分の責任は全うされるのだと答へた。屆書に正月何日生と書いて出した所が、戶籍の原簿には一月とあるからとて訂正を命ぜられた例もある。僕自身も子供の出生屆に第何女と書いた所が書式に照らして第の字が餘計だと云ふ理由で受附けられなかつた事がある。何れも非常識に過ぎて有り得ない事のやうに思はるゝけれども、之が頻々として我々に面倒をかけて居る日常の出來事だから驚く。之れ皆事を重んじて「人」を觀ざるの

弊害である。

封建時代の訓令政治なら之でよかつた。人智開けず、新制に慣れたるものを多く得難い時代にも此流儀による必要があつたかも知れない。今は然らず。分つた人の多い今日、何時まで人を木偶視するか。責任の歸着を主觀的に且つ實質的に明かにするでなければ沈滯の空氣を一掃して實效を確實に擧ぐることは出來ない。

小題小言三則

◎臨時議會開かる　總選擧に目覺ましい大勝利を占めた政友會内閣が、臨時議會の開催に當つて意氣頗る昂らざるは當然の事とはいひながら些か氣の毒の感に堪へない。何と云つても過去に於ける失政の之を助成したと觀るべき所謂財界の不況がいろ〳〵の難問題を派生して政府に自ら蒔いた種の刈入れを促して居る。中にも最も難關と觀るべきは所得稅法改正案であらうが、其外西伯利問題などもいろ〳〵な意味で政府の致命傷たらずとも限らない。其他臨時議會で討議せらるべき問題は多々あるが、併し之を通じて政府の懊惱を促す根本の原因は、彼が一方は軍閥財閥の意を迎へ、他方又民間の輿論にも迎合せんとする其旗幟の鮮明を缺く所にある。數年前までなら、之でもどうかかうか一時の事は濟いたらうが、今やあらゆる問題について新舊兩思想の判斷が極端に分れて居る。どんな誤魔化しの上手な政治家でも益々遠ざかる双方に兩胯が掛け切れない。聰明なる政治家は此際態度を何れかに決すべき必要に迫られて居るのに、政友會は生中社會政策などを標榜しながら、又相變らず軍閥財閥によつて政權の維持に之れ勗めて居る。之れで兩方甘く操縱の出來た時代もあるが、遂にはボロを出して双方から批難と罵倒を浴びせられざるを得なくなる。今日の政友會は恰かも二人の女と婚約をして自ら操縱の妙手腕を誇つて居つた男のそろ〳〵尻が割れ出して大いに煩悶して居る状態に比すべきである。意を決して一方を捨てゝ一方と結べばよし。此上覺束ない鈍腕を頼んで兩手に花の舊夢に未練を殘すならば、遂に名も戀も二つながら之を失ふに至るであらう。今度の臨時議會は此點に於て彼に男らしき處決を促して居るやうなものだ。聰明なる原敬氏を戴く政友會は果してどう此難關を切り拔けるだらうか。

◎國策といふ言葉の濫用を戒む　近來國策と云ふ言葉が頻りに使はるゝやうであるが、若し之が國家の政策の中、最も根本的なものを意味するに過ぎざるものならいゝ。

即ち一般法律の中に特に重大な憲法ありと云ふと同じ意味に於て、一般政策の中特に重要なるものを國策と云ふに我々は少しの異議もない。けれども此國策と云ふ言葉は初め何人が何の意味で使つたかを考ふる時に我々はこゝに大いに此文字の使用に警戒するの必要を認むるものである。予の記憶する所によれば、此文字の最初の使用者は軍閥及び其系統の學者である。彼等惟へらく軍事に關する國家の施設經營はもと天皇の大權に專屬し、普通行政事務を取扱ふ政府の管理の外にあるべきものである。而して普通政策と云ふ言葉は內閣の管掌に屬する事務の方策を意味するから、軍事に關する方策は全然之を其外に置き、而して內閣に屬するもの及び內閣に屬せざる所謂軍事に涉るもの之を總括して國策といはうと。之によつて見れば國策は即ち政策の重要なるものと云ふのではなくして、國策を分つて政策と軍事方策との二種とすると云ふ考である。政策は內閣之を管掌し、軍事方策は全然之を內閣の管掌以外に置き、而して天皇の大權が此兩者を統ぶると云ふのが彼等の法理的說明である。斯う云ふ思想が純然たる理論的研究の結果としてあらはれたと云ふよりも、寧ろ最近に於ける內閣の民衆化的傾向に對する軍閥の嫉妬偏見に出づるものなりと說くものあるが、何れにしても、此理論の遂行が帝國をして二重政府の厄に陷らしむることは疑を容れない。予輩は陸海軍の要路に居る幾多の友人より此種の說に對する批評を求められ、大いに其妄を辯じたることあるが、兎に角、かゝる妄說の軍閥者流の間に意外に根柢の深い事を認めざるを得なかつた。而して此文字が最近段々操觚界にも流行し出したのを見て、其由來を知つて之を使用するや否やは姑く措き、兎に角其流行に對しては大いに警戒の眼を睜るの必要を感ずる。然らざれば我憲政の進步をして著しく邪道に踏み迷はしむるの虞れあるからである。

◎**勞働者と其監督者** 予の知人に或官設工場に勤めて居る一職工がある。休みの時間に「中央公論」を讀んで居つた所へ、監督の高等官が來てそんなものを君達が讀むものではない。適當な讀み物を俺が遣らうと云つて翌日持つて來て與れたのは、何やら新聞の附錄になつて居つた例の有田ドラックの廣告であつた。而して監督者は動もすれば勞働者の無智と無識を云々するから可笑しい。此頃郵便局の特殊集配人募集廣告に夜間通學の便ありと云ふ數文字を見て予はつくづく下層階級に於ける研究慾の旺んなるを思はざるを得なかつた。つひ先達までは月收初任何十圓と云ふやうなのが人を誘ふの餌であつたのが、更に今度は通學の便有りと云はねばならぬ事になつた所に時勢の進みを看得する。勞働者監督の任に當るものゝ猛省を促すと同時に勞働問題の取扱ひに當るものにも此點に多少の注意を傾けられんことを希望する。

▼中央公論 一年一回定期增刊 夏季特別號 豫告▲

七月十五日發行

社會奉仕の鼓吹

總ての社會運動の基礎觀念として **社會**

徹底個人主義者の社會生活觀……田中王堂

民衆文化の社會心理的考察……大山郁夫

社會奉仕と資本家階級及び勞働者階級……文學博士 三宅雪嶺

新社會主義へ進め……杉森孝次郎

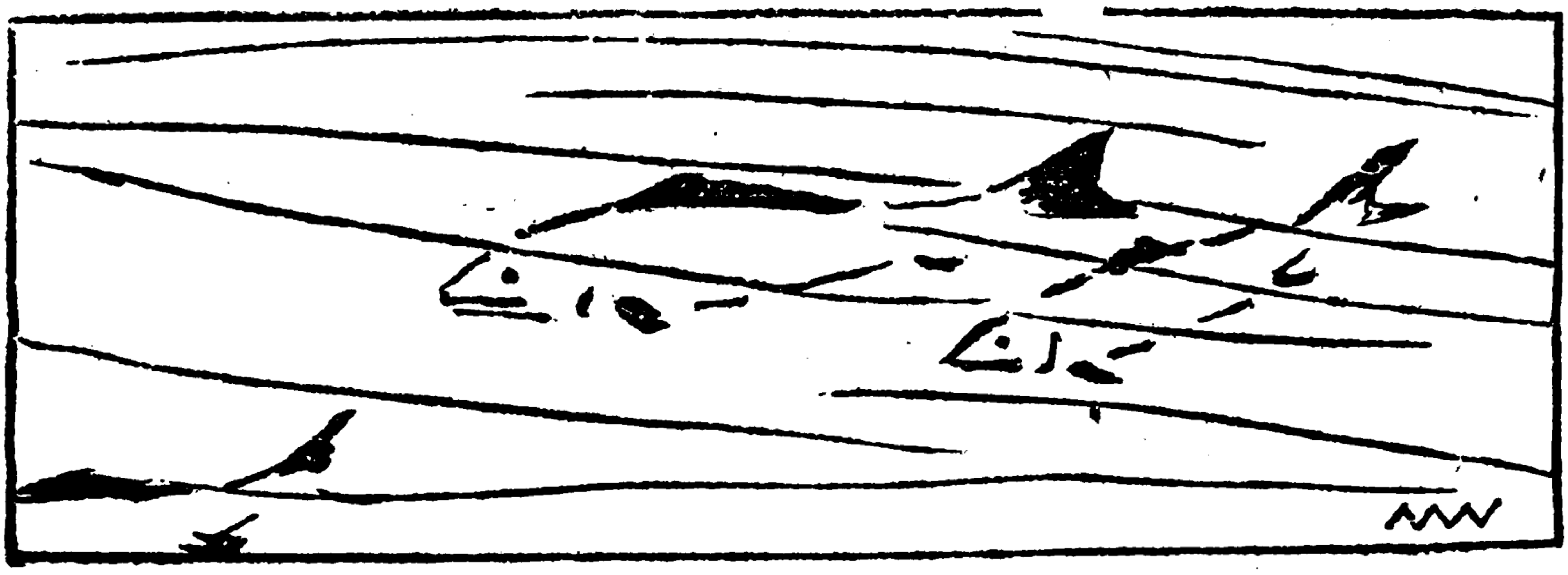
題未定……法學博士 森本厚吉

ギルド・ソーシャリズムと社會奉仕……室伏高信

社會奉仕の觀念の缺如せる我國資産階級……法學博士 堀江歸一

社會問題と其思想的背景……法學博士 吉野作造

人間の生活は、國により民族により時代によつて、勿論大いなる相違はあるけれども、今日の文明國民と稱せらるゝものゝ生活に對する希望と理想は、過去の人類のそれに比して非常に高くなり、大きくなり、且つ複雑になつた事は爭はれぬ。今日の人間が、人間らしき生活と思惟するものは、其最小限度に於ても、只衣食住の物質的方面の滿足と安全ばかりではない。精神的慰安、快樂も物質的要求に劣らざる重要さを有つ。進んでは何等かの形による自己表現を創造せんとするの衝動を感ずる。一言にしていへば、今日の我等は「單なる生存」に滿足せずして、「文化的生活」の實現を憧憬する。文化主義が力强く提唱せらるゝ所以である。併し今日眞に文化生活の恩惠に浴して居るものは、現在の人間の果して幾割、幾十割、或は幾百割あるであらうか。大多數は「單なる生存」さへも脅かされてゐる。それに加へて今日の文化なるものは、可なり贅澤な、浪費的な、萎靡し、爛熟した、活氣と精彩の乏しきものになりかけてゐる。それは文化が少數の資本家階級及び其れに近き人々の手に壟斷せられんとする傾向の自然の歸結である。勿論文化には永久的の本質があつて、時代や階級によつて變化されぬ或るもののあるは疑を容れない。然し限られたる一部少數の人によつてのみ愛玩せられ、創造せらるゝ文化は、疏通口なき小池の貯水と等しく、沈滯は直ちに汚濁、腐敗を伴ふ。のみならず、すべての人類の享樂すべき文化の樂園を以て、一部少數の人の壟斷に委するは不合理不都合此上ない。即ち之をすべての人類の上に普及し、光被せしむると共に、新たに文化に接觸したる一般民衆をして、新たなる文化の創造に與らしめ、量に於いて文化の全人類的普及を計ると共に、又質に於て活氣あり精彩ある多種多様の文化を創造して、朽壞に瀕せんとする舊文化の革新を實現せんが爲めに、我等はこゝに熱心に「民衆文化」の建設を提唱する。文化の文字の中に自然民衆の意義ありと說く人、民衆の創造する以外に眞の文化なしとする人、人によつて多少の相違はあるが、多くは言葉の相違、若くは意味の强調(エンファサイズ)點の相違位のもので、一般人類をして文化の享樂と創造とに與らしめんとする大旨には誰しも異議がなからう。若し今日に於て人類の物質的生活の方面を過小に見積つて、只管ら精神的生活の方面のみを高調するものあらば、そは恐らく彼の宗教狂に似たる安想家と云ふの外なく、又物質的生活方面のみを論議して精神的方面を閑却するものあらば、極端なる一部の唯物主義者の如く、人間を餘りに低劣視するものと評するの他はない。我等の提唱し建設せんとする「民衆文化」の理想は、物質的生活の安固充實の上に、精神的慰安快樂を持ち來し、全人間をして眞に人間らしき生活を完うせしめんとするものたるは云ふ迄もない。



青春の果て

石丸梧平

一

「こないに怠けてては、死んだお父さんにほんまに濟まんのやけど——」富次郎は溜息をつきながら心の中でさう呟いた。——この頃はまた濱寺の別莊から毎日通勤してるのだが、どうも店がおもしろくなくて、つい朝の出勤が晝になり、また午後にたつたりするのであつた。その上、氣に向かない時は、いつでも休むことにして居るので、別莊で寢て居るのなら、母も支配人も何とも云はないので、昨日も一日休んだのであつた。

「お父さんの仕上げはつた仕事には感心の外はないけど、それやと云ふて、わたいにはとてもお父さんの眞似は出來ん。——出來ん筈がないのやけど、とても出來ん！」富次郎はいつの間にか四五年前の、あの青雲寺の一室へ移つて行つた中學四年の三學期始のことを思ひ浮べて居た。病氣保養の目的を楯に、母からやかましく助言して貰つて、あの窮屈な伊原先生の宿から、あの氣樂な青雲寺へ逃げて行くことになつた前夜、はからずも父がいろ／＼と、それはその頃の富次郎には全くうるさくてならなかつたほ

どに懇々と、西田家の祖先のことから——その祖先たちがみな、非常な艱難辛苦をして、小さい店をだん／＼と一人前のものに作り上げて來たこと、わけても父は最初はこのかぎやの一小僧であつたのが、富次郎等の祖父さんにあたる、二代富助と云ふ人に見込まれて、とう／＼かぎやの養子になり、そればかりでなく、まだそれまではほんの一小賣商人だつたかぎやを、父の腕一本で、とう／＼今日の、大阪でも屈指のメリヤス問屋にしたことなど——そんなことをきかされたのであつた。

「商賣と云ふものは、生馬の眼をも拔くと云ふほどの烈しいもんや、十分間油斷をしてゝも生死の問題になることもある。」父がそんなことを云つたのは富次郎には、その時は全くうるさいお說敎に過ぎなかつたが、その後いろ／＼と思ひ當ることがあるにつけて、何と云つても父は、苦勞をして來た人だけあつて、その一言一句もみな、その腹の底からの血の出るやうな眞實の言葉だつたのだ。けれどもそれが、ほのかながらも、わかつて來たのは富次郎にはほんのこの頃で、のみならず父の死後のこの頃の富次郎が、兄や支配人との關係上、可なり苦しい立場に居るにつけて今後の自分を何とか考へねばならぬので——斯うした不遇に居る弱身がつい死んだ父の言葉など一々なつかしいのである。

「お父さんのして來たことを自分に出來ん筈がない。いつそのこと兄や支配人とは、さつぱり緣を切つてしもうて、自分も一つ裸一貫から努力して見ようか。」幾度かそんなことは思ひ立つたが、父が幼年の頃から一商店の小僧として辛苦を重ねて來たのなどとはまるで違つて、富坊／＼と大事にされ、我儘のしたい放題、遊びのしたい放題をして來た富次郎には——尤もその我儘に就ては、父は幾度何十度母に小言を云つたか知れないけれど、そんなことを幾度も云ふ父には、富次郎なども、幼心にも寧ろ反感を持つて、云はれゝば云はれるほど、陰では、出來るだけの我儘を母に對ししし通して來たのであつた。

「今日となつては、腕一本でやつて見せると云ふても——」全くこのやせ腕では、何一つかつぐことさへ出來ないのである。で、支配人と中たがひになつた今日でも、それに對して復讐らしいことの出來るのは、たゞ、これまで働いて居た店の仕事を怠けて見せると云ふ、たゞそれだけのことなのである。——怠けたとて腹を立てたとて、この富次郎一人

がすることぐらゐ、大きいかぎやの商賣に何の影響があるわけではないので、そのことは富次郎にもよくわかるので、富次郎としては、この頃の自分の立ち場が、たゞもう心細くなさけなく、どうしてよいか自分ながらもわからないのである。

父在世中にもあれほどいろ〳〵諭されて居たにも係らず女や酒に遊ぶことばかりを覺え、とう〳〵箱根くんだりまで逃げて行つたのだつたが、それでも父が在世中であつたればこそ、みんなが大騷ぎをして迎ひにも來てくれたのだらうに、もしか今、富次郎がそんなことでもしやうことなら「さあ、その時にみんなはどうするやろ！」

そんなことは考へるまでもなく、今日の富次郎の立ち場は、あはれなさけないものになつて居るのである。だからこそ、富次郎は、怠けて一日休んでも見たり、然しさうばかりもして居られないと思ひ立つたり、どうしてよいか富次郎には、今はまるで世の中が暗闇のやうな氣がするのである。

同じことを幾度考へても同じだが、然しこの頃では店へ出勤するのが如何にも氣がすゝまぬ。何とか自分の身のよい處置がないものかと、富次郎はいつも電車の中で、同じことを繰り返して考へるのである。

快走して居た電車が急に止つたので富次郎はふと我に返つた。時計を見ると午後の三時半だ。朝出勤するときと、午後歸宅するときとは、電車は山のやうに乘客を運ぶので不快この上なしだが、時間はづれの今頃に乘ると、さすがの南海電車も可なり乘客が空いて居るのである。

「——春酣なりだな！」富次郎は、窓外のうらゝかな午後の光りの、青い麥の上に輝いて居るのを見て思はず呟いた。「ほんま
天下茶屋の向ふの丘には櫻の並樹が、もう今にも散り果てやうとして、名殘りの春のかなしさをたゝへて居る。
に春ももう過ぎて逝く！」

さう思ふと富次郎はたまらなく淋しい氣がするのであつた。——父が亡くなつてから、もう一年半も過たが、そしてその一年半は、店の誰れからも指一本さゝれないほどの精勤ぶりと相當の腕とを見せて來たが、それは決して支配人風情に忠勤を盡す爲めでは、無論なかつたのである。二年前の箱根行のあと、くれ〳〵も訓してくれた父の、あの廣い心と

深い理解とを、しみ〴〵ありがたいと思へばこそ、そしてあの突然な父の死を深く悲しめばこそ、この富次郎が、たとへ骨の髄までの遊蕩兒であつても、せめて父の一週忌が來るまでは命にかけて謹愼しなければならぬと思つて居たからである。

その一週忌も無事に過ぎた。そしてその夏も暮れて、秋、冬、さては春の半ばにもなるまで、斯うして神妙に勤めることが出來たのは、我ながら父の訓へのありがたいとも、時々は思ひ出して涙にくれて居るのであるがもうこの頃になつて、つく〴〵かぎやの店にも愛憎が盡きたのである。

この一年半の間勤めたとて勵んだとて、あの無口の兄から、ましてやあの支配人から、何の酬ひられる言葉もきかないが、そんなことは元より望まぬとしても、最近半年ばかりの間に支配人が富次郎に示したさま〴〵の感情は、無論あからさまにではないが、どうも富次郎には癪の種なのである。「おれが眞面目に働いてるのは、このかぎやの財産を幾らかでもよけいもらいたい、兄貴の信用を得たい爲めのことやと思てるのか！　畜生め、ぼけ支配人！」

富次郎は思はずさう呟いたのであつた。あの時も――あの遺言開きの時もきつぱり、公言したやうに、二萬圓ばかりの金をありがたいとおし頂くこの富次郎ではないのだ。二人しか兄弟のないその一人の富次郎に、財産わけの意味なら二萬圓はあんまり阿呆らしいやないか。あの遺言狀が果して父のほんまの意志か。そこが大けな疑問やないか。詐僞師！

「――兄さん、あの支配人の横暴はだん〴〵ひどなるやうやさかい、一層のことも、奴は免職してしもたらどうや――――今の中に用心せなあきまへんで！」富次郎は、一ケ月ばかり前にも兄にさう忠告したのであつた。けれども兄は「まアあんなもんやろ」と云つただけで、富次郎が抱いて居る意氣の半分は愚か、てんからそんなことに氣づいても居ないらしかつた。それは富次郎にはくやしくてならなかつたが、甲斐性なしの兄を對手に、なんぼどんなことを云ひ出しても駄目や、とその時こそはつく〴〵思つたのであつた。なるほど兄は、商賣の「商」の端くれもまだ得心が出來てないので、今あの支配人が居なくなつたら、それこそかぎやは暗闇になるとでも思てるのだらう。

「富坊お前そんなら一肌抜いでしつかりやつてくれるか！」兄がそんなことを云ひさうな筈はないと思つたが、然し、あの時は眞面目に支配人問題を忠告したのであつたが――。

ふと向ふの隅を見ると――鳥打帽のほんの散歩姿だが、慥かに高津の田村に違ひないと思はれたので、富次郎はつか〳〵と座を立つてその青年の前に進んで行つたのである。

すると、その青年もにこ〳〵してこちらを見て云つた。「やつぱり西田やつたんか。」

富次郎はそれがやつぱり田村だと云ふことがわかると嬉しくてならなかつた。「ほんまに長いこと會はへんな！」

「僕はさきから何んぺんも君の方を眺めててんけど――西田によう似たるけど、君があんまり老けて見えたよつて――」

田村は少しばかり席を開いて、そこへこちらを掛けるやうに指しながら云ふのであつた。

「そないに僕年老つたか?!」富次郎は笑ひにまぎらしてだが、然し心の内では――もう二十二にもなつたのだから――その田村の言葉から、そんなことが急に氣になり出したのであつた。

「あれから隨分苦勞したさかいな！」

「君の苦勞なら知れたものや――好え女でも出來たんか」

さう云はれて見ると、なるほど田村とも隨分久しいものだと思はれた。あの中學を止めてからまだそれほど年月が經つてるわけでもないのだが、富次郎にはいろ〳〵の女の苦勞もして來たのである。それだけならはまだしもだが「父が死んだもんやさかい。」それを云ふときは富次郎も一寸しんみりして居た。

「さう〳〵、お父さんが死なはつたんやな！」田村もそれは知つて居た。「ほんまに御無沙汰になつてしもて――」

「君は學校は？」富次郎はきいて見た。

「まだ高商に居るのや。」

「こゝのか、あゝさうか。」

「今一寸天下茶屋まで散歩に行たんやけど――長いこと會はん人に、こんな一寸したとこで會ふとは！」

「ほんまに久しぶりや！」富次郎も嬉しかつたので幾度もそんなことを云つた。

その時に電車はもう難波に入つたのであつた。二人は改札口を出たが、このまゝ別れるのは何だか名殘りおしかつたので、富次郎は時計を出しながら

「もう四時やさかい、そこらあたり散歩して、播半ででも夕飯を一緒に食べよか。」

「うん、そうしよ〱」田村も同じことを考へて居たのか、こちらの言葉を待ち受けてたやうに云つた。さう快諾されると、富次郎も嬉しかつた。新吉兄さんなどは、こちらが隨分大きい聲を出してすゝめても、水の中で屁をひつてるやうな聲しか出さぬ無反響な男なのだが、それに比べると、田村は、中學時代からの親友だとは云へ、今日久しぶりに斯うして會つても、やつぱりその何年かの昔のまゝ、こちらが、やあと云へば向ふもすぐにおうと答へる、はき〱した賴み甲斐のある男なのである。

播半の二階の小間で食卓を中にして向ひ合つて二人は、もうすつかり中學時代の心安さに返つて、その頃の追懷やらこの頃の消息やら、話すこと、聞くことが山ほどあるのであつた。

「お前は隨分發展したようやな！」田村は、やつぱりこちらの消息に注意を拂つて居たのか、富次郎がお茶屋遊びをしたことからさては箱根へ逃げたことまで、どうせ聞きかぢりではあるが、大體は知つて居たのであつた。

富次郎はそれ等の話をきゝながら、恥しいやうな然しまた得意なやうな心持がした。然しそれよりも實は、この頃の自分の心の内を少しでもきいて同情して貰ひたいのだが、お酒を飲んでだん〱話が陽氣になるにつれ、そんなことはまたいつか落ち付いた時にでもすることゝして、今夜は何だか久しぶりに——さうだ富次郎には父の死去以來、全く久しぶりにいろ〱そんな若い花やかな話に接するのであつた。

「そんならお前も大分に遊んだんやな」富次郎は遊びにかけては少しばかり先輩だと云ふ自信もあつたのでそんな口を利いたのであつた。

「僕は遊びに行くことはよう行くねんけど、お前見たいに唄や踊が出來るわけやなし、」

「そんなら——」と富次郎はすぐに追窮した。「——これ専門か？」
「阿呆云へ——」田村は多少急所をつかれたからか、腹の底からから〳〵と大笑ひをしたのであつた。それから一しかし」と云つた。
「しかしええとこへ案内でもしてくれるのか。」富次郎は、急にどこかへ行きたい氣がして來たので、さう云つて誘ふて見た。
「お前行きたけりや、なんぼでも案内するで——然しお前の方が玄人やないか。」
「僕も案内はするで、そんなら僕のとこへ來るか。」
「けどな、新町に一寸ビユウテイが居るのや、それはなお茶屋の娘なんやけど、堅いのが評判で、誰れが行てもあかんねん。」田村は得意さうに云つた。
「それをお前が物にしたんか？」
「僕はそんな根がない——けどもそこへは僕はよう行くねん」今はもうかくす必要もないと思つたのか田村は、然し一寸聲を落してだが「僕はその家で外に一人好きな奴が居るのやが、お前その評判娘を見に行かへんか。」
「そらおもしろいな！」富次郎は直ぐに勇氣が出た。堅い女だとか、評判女だとか云はれると、いつでもむら〳〵と征服心がおこるのが富次郎の癖なのだが、また實際今日迄に富次郎がそれと眼ざして成功しなかつたためしがないので、今田村が云ふ堅い女はどんなものかは知らぬけれども「一つ僕に取り持つてんか。」
「そりや、君の腕なら大丈夫や」と田村は如何にもこちらにすゝめるのであつた。

二

「あゝ涼し——えゝ氣持や、もう夏やな！」
播半を出るとすつかり夜になつて居た。長堀川に映る仁丹の廣告電燈が、赤くなつたり靑くなつたり、さゝなみの上

にちら〳〵と碎けて居た。向ふ岸の柳の並樹――ほんの二三本しかない並樹だが、その斜半面が橋の袂のアーク燈に照されて青白く輝き、河面の方の半面が黑く濃い影をなして居る。河下からは心持の好い微風が頻りに吹いて來る。――こちらから見て居ると、その川柳の影と光とが、可なりデリケートに、涼しい微風に搖られて居るのである。「どうや、あの柳ええやないか。」

「うむ――」田村は、富次郎が云つた言葉にはほんの上の空で返事をして「おい〳〵西田！」と袖を引いて指すのであつた。

もう心齋橋の北詰に近づいて居た。靑白い柳の影から明るい街並に眼を移すと、全く眼まぐるしいほどである。――そこには散步姿の若い男女がぞろ〳〵と步んで居るのであつた。富次郎は心齋橋へ出るのさへも可なりの久しぶりであつた。

「あこや、西田！」田村が今一度さう云つて指すのを見ると、橋の欄干に凢れて、一人の若い女が、人待顏に立つて居るのであつた。

「ビューテーやな。女學生やろか。」田村が大聲にそんなことを云ふのを聞くと、富次郎は外聞がわるくてならないのだつた。けれども、田村のその、女學生やろか、は如何にも田村の今の趣味を現はして居ると思はれて、おかしかつたので「お前、袖子はんより女學生の方が好きか」と、からかふやうに云つて見た。

「女學生はええな！」

田村は二三度もその女を振り顧つて見て居たが、富次郎は心齋橋筋を橫切つて、河添ひの道を、さつさと先に立つて步いた。…………

「惠美子はん居るやろな？」その若松屋の座敷に通ると、田村はすぐに仲居にさう訊いた。

「へえ、今夜は浪花踊見に行たはりまんねん。」

「そんなら――西田君、浪花踊見に行くか」田村は、惠美子が居ないのに當惑してさう訊いた。富次郎は、浪花踊へ、

と云ふその言葉に心が引かれた。それに、その踊り場の演舞場では嘗ては、富次郎も幾度か踊つたことがあるのである。で、それに行くのは無論賛成だが、

「でもお前は踊なんて嫌やろ？」田村が心にもないお付き合ひをしてくれるのは氣の毒だと思つたので「――それにお前の袖子はんも待つてるのやないか。」

「袖子はいつでも會ふてるさかい、かまへんけど――」田村は眞面目にさう云ひながら、併し浪花踊にはあまり賛成ではあるまいに、「そんならおつねさん、さきに浪花踊見てくるさかい、袖丸と袖子とにかけといてんか」と云つた。

その間に酒が來て、二三杯飲み交して居ると――新しい銚子を取りに行つて來たおつねが

「惠美子はん歸つて來やはりました。」と報告した。「無線電信をかけましてん。」

「踊がもう果てたんか。」そんなことはあるまいとは思つたが、富次郎は時計を出して見た。もう十時に近かつた。播半で、お互ひに久しぶりのいろ／＼の消息を語り合ふては可なりの時間を費したこと、また可なりのお酒を飲んだことが今更のごとく思ひ返された。

「そんなら早よ惠美子はん呼んどいで――もうおどり見に行かへんよつて――あのな、惠美子はんに、あんたの顏を早よ見たいと云ふ業平朝臣が來たはるよつてと、さう云ひ。」田村もよほど醉つてるやうであつた。

やがてかけてあつた舞妓と、婆さん藝妓とが來た。――田村の可愛いもの袖子とか云ふのはどうしたのかと思つてると

「袖子はどうしたんや！」とすぐに田村がきいた。田村も可なりあつい仲なのだな、と富次郎は思ふと共に、然しほんのこの頃からのことだと云ふことが、その田村の露骨な焦れかたで察せられた。

「姉ちやん今すぐあとから來やはるわ」と舞妓がしほらしく云つた。

「ターさん、そないにやかましい云ひなはらんでも――三味線は先づこの榮丸が」途中から一寸何かの聲色の眞似をしてその婆さん藝妓が云つた。これからまた笑ひながら「袖子はんの御用はもつとあとでもよろしいやおまへんか。」

隨分露骨なことを云ふ婆だと富次郎は吹き出したくなつた。が、田村がこゝへ來るとすぐにその榮丸を名指しして呼んだことを思ふと、お互ひにもうよつぽど心安い中になつて居るらしかつた。

富次郎も二年前までは、南でも北でも可なり遊んだのだが、斯うして久しぶりに來るのに、そしてまるで見知らぬ初めてのところへ來て見ると、何かと淋しい遊び氣分が湧くのであつた。玄關に俥を横付けにしさへすれば、みんなが集つて來てちやほやしてくれるのもわるくはないが、斯うして萬事控へ目に、他人の遊ぶのを見てるのもおもしろいものだと考へて居た。それも初めてお茶屋と云ふものへ行つた――あの誘ひ仲間の楠本さんに瀧の家へ連れて行つて貰つた時のやうな恥かしさや不自由さではなくて、もうお茶屋のことなら大抵のことはわかつてるこの頃では、心の奥に餘裕を持ちながら、田村の寧ろうぶと云つても好い遊びぶりを見てるのもおもしろいのであつた。

だがその惠美子さんと云ふ美人、堅いのが評判のその女を何とか陷れて、田村にもこちらの腕を見せてやらうと思ふと、急に胸が躍らぬでもなかつた。「おれもやつぱりまだ若いわい。」富次郎は自らにそんなことを答へて居た。

「こん晩は――」さう云つて入つて來た藝妓を迎へて榮丸が

「袖子はんお待ちかね――」と云つた。そのあとにつゞいてまた

「こん晩は――」と、おとなしい然しはつきりした聲が、靜かに入つて來た。それがその惠美子であることを富次郎はすぐに察した。髮はハイカラにして華美なお召に、金紗の五つ紋の羽織をきて居る、なるほど美人だと云ふその櫻色の顏を、肩にかけて居る透き通つたベールの上へ、くつきりと浮べて居るのであつた。――然し富次郎は何も聲はかけなかつた。田村が

「あんたに會ひとて來たんやがな!」と云ふと、惠美子はたゞ笑ひながら靜かに下座の方に坐つた。

「姉ちやん、こゝへおいなはれ」と舞妓が云ふと、田村はまた

「お前の嫁さんに貰たんやないで――惠美子はんはこゝや〳〵」と云つて自分と富次郎との間に招いたのであつた。袖子はゝや田村の隣に据つて袂から煙草入を出して居た。

「今晩はえらい姉ちやんたちは沈み返つてるさかい、この婆さんが三味でも騒しまひよか――」榮丸は獨り言のやうにさう云つて箱を取り寄せた。

「いつ見てもあんたは美しいな。」田村がさう云ふと惠美子はそれでも惡い顏はせず、

「田村はん、今夜はよつぽどどうかしてやはるわ。」とわざとらしく笑ひながら「こんなお婆さんをつかまへて。」

富次郎はこゝへ來る道で田村から、惠美子が二十二になる「少し年增やが」ときかされて居たことを思ひ出した。まだ十九かはたちの若さには見えて居るが、どこかおちついた靜かなところは、なるほど二十二のお婆さんになるかともうなづかれた。

「もうえゝ加減にはきだめへでも捨てゝ貰はんなりまへん。」惠美子は田村から盃を受けながら、默つてる袖子に挨想を云ふつもりか、その方を見て笑つた。

「捨てる神あれば拾ふ神ありや」富次郎はその時口を出した。幾分か自分の心持を云ひ現はすつもりだつたが、然しその譬へは少しまづかつた。さう云つたあと一寸嫌な氣がして間がわるかつた。

「さあ一つ唄うとくれやす。」榮丸は三味線を取り上げて云つた。

「ぢや唄うよ。」田村は床の間に置いてあつた伊丹の酒の「白雪」の廣告本を取り上げて。そのうちにあつた都々逸を一つ唄つた。

「わたしの心は素面では云へぬ、醉うてまぎらす胸のうち………」

うまい〳〵とみんなが云つた。なるほど田村はあまり唄などは唄はぬのだが――と思つた。で、富次郎もつい

「中々うまいやないか」と云つた。

「今度はあんさんでつせ。」と袖子が促すのであつた。「あんさんは大分に上手らしいわ。聞かしとくなはれ。」

さう云はれて富次郎は、今田村の唄を批評した自分の言葉が如何にも不用意だと思つた。中々うまいやないか――さう云はれても本人の田村は別に何とも思つて居ないのだが、こんな席上で、うつかり云つた自分の先輩ぶつた言葉がお

かしかつた。が、今袖子が「あんさんは大分に上手らしいわ」と云つたのは、可なり侮蔑した言葉ではないかと思はれた。――唄うても舞うても、へつぽこ藝妓ぐらゐには引けは取らぬと云ふのが富次郎のいつもの自慢なので、袖子のその言葉にはたゞ「ふ、ふん」とそれだけ答へた。

「若旦那早よ唄ひなはらんか。」袖丸が姉ちやんの所望につゞいて云つた。そんなことを云はれるまでもなく、この二年前の富次郎なら何でも藝のありだけをやつて見せるのが自慢で、その爲めに或る藝妓は富次郎の座敷と聞くと、嫌がると云ふことをさへきいて居たくらゐだが――それよりも富次郎は、今袖丸が云つた若旦那と云ふ言葉が一寸氣になつた。初めて瀧の家へ行つた頃には、あの頃親しくなつた二三の藝妓たちは、連れて行つた店の甚七が富坊々々と云ふのに習つて、よくこちらを富坊と呼んで居たものだが「――もう若旦那になつたのか」富次郎はあれからも知らぬ間に幾年かが過ぎ去つたものだと思はれたりした。

「そんなら唄ひまつさ。」榮丸からまた促がされたので富次郎はハンカチで口を拭つてから唄つた。「…………びんの毛がぞつとするほどをか惚れしたが…………いきなお方につり合はぬ…………」

惠美子にあてつけて唄つたつもりだつたがこれもあんまり氣に入らなかつた。田村を賞めたやうには誰れも富次郎には賞めなかつた。榮丸が「よおゝゝ――」と云つた。そして惠美子はと見ると、微かに唇が動いたやうであつた。

「若旦那今晩は――」その時さう云つて入つて來た舞妓があつた。富次郎は、「若旦那」の度におびやかされた。然しこんなところには自分の知り合ひはないのだがと思ひながら、その舞妓の顔をよく見たが、富次郎にはやつぱり知らぬ顔であつた。

「鈴丸が來たな！」田村は立つて行つてその舞妓を抱へるやうに迎へ入れながら、「待つてたんや、今晩は一つ舞うてもらはんならん。」

「わて今晩よう舞はんわ」

田村がすぐに舞を命じ、その妓が舞を斷るところから察すると、こゝにも田村の心づくしがあつて、今晩は、富次郎

の好きな舞をみんなに舞はせるつもりらしく思はれた。
「あの旦那が舞が上手なんやわ——下でお母ちやんに聞いて來たわ。」鈴丸がさう云ふと、袖子は一寸眼をみはつてこちらを見た。惠美子も同じやうな表情をした。榮丸は
「わたいさうやろと思てた——」と云つた。
「舞はんと云ふことがあるもんか。舞はなお酒たんと飮ますぞ！」
「いややわ。田村はん——わてもう歸るわ。」一寸泣きさうになつたので榮丸は
「そないに本氣にならんかて好えやないか阿呆やな。」とたしなめるやうに又笑ふやうに云つた。
「そんならわてが鈴丸はんの代りに舞うたげる。」袖丸は、如何にも友だちの窮場を助けると云つたやうな誇らしい口のきゝかたをして立つた。そして榮丸の地で「梅にも春」を舞ひ始めたのであつた。
「ほんまは鈴丸の方がうまいねんけど——」と田村は富次郎に云つた。富次郎は田村があまり本氣なので
「あんまりそないに云はんとおいて——」と袂を引いたのであつた。
袖丸が舞ひ終ると、袖子が案の定
「さあ今度はあんさん舞うとくれやす。」と云ひ出した。みんなもさア／＼と云つた。
「お次の番だよ——」榮丸が三味線をかきならしながら滑稽にそんなことを騒ぐと、
「西田ほんまに舞ひいな！」田村がさう云つたので富次郎は仕方なしに——然し、内心では少々得意で、それを惠美子に見せるなどは殊の外妙だと思ひながら
「ほんなら舞ひまひよか。」富次郎が立ち上ると、袖丸がむかふから
「扇こゝにありますせ——」と投げた。
「とうない大けいな！」富次郎はそれを受け取つたが思はずさう呟いた。「なるほど新町は楳茂都はんやな」
富次郎は、自分がこれまでよく遊んだところは南地で、そこの舞の師匠は山村なので、扇が小さいのだが——と云ふ

意味のことを言外に含ませて居たのである。一つには、こんな大きい扇では舞ひつけないので、或はうまく行かないかも知れぬ。で、この時の言譯のつもりでもあつたのである。

「こんな大けなんで舞へるか知らん。――謡の扇見たいやな。」

「大は小をかねる――しつかりやんなはれ。」袖子がさう云ふ。榮丸がまた

「文句云はんと早よ見せとくなはれ」と云ふ。富次郎が身づくろひをして居る間に、みんなが口々にさわぐのであつた。

惠美子はただぢつとこちらを見てるやうであつた。

「扇が大きいさかへ、舞も大きい舞ひますさ。」それから榮丸に云つた。「御所車――本調子の方賴みまつさ。」

……香にまよふ梅が軒端の匂ひ鳥……初音のはづかしくまたとけかねるうすぐもり、チーン、チ、チ、チ、チ、チ、チツツン…………チリ、テツ、トン雪に想ひは深草の、百夜も通ふ戀のよく……君がなさけの假寢の床、…………まくらはづかし夜もすがら……」

みなが口々に何か云つたが、富次郎は酒を飲み過ぎて居たのか、今晩は非常に苦しかつたので――扇は勝手は違うけれど辛うじて取つたが――もうころぶやうに自分の座へ歸つたのであつた。

「ウイスキーどうです。」この時惠美子は、コップをこちらにさし出してさう云つたが、惠美子ではあつたが然し富次郎はこの上ウイスキーを飲む元氣がなかつたので、默つたまゝ手を振つて拒んだ。

それから田村も何か頻りに唄つて居たし、袖子も榮丸と一緒に三味を持つたが、そして一しきり騷がしかつたが、富次郎はだん／＼お酒が惡くまわるやうになるので、一度外氣に觸れて見たいと云ふ望みもあつたので、もう歸ると云ひ出した。

「今晩は泊つたらえゝやないか。」と田村がしきりにすゝめたけれど、店の方は昨日も今日も休んで居るので、濱寺の別莊へは、或は母が心配して、わざ／＼見に來てはしまいかと思はれたので、折角の田村の言葉だつたが、とう／＼歸ることにしたのであつた。

「そんなら、ぶゝづけ云ふとますさかへ、それ食べておかへりやす。」典美子がさう云つてくれたが、もうあまり遲くもなるので、俥を云ふてもらうて、難波驛へ急いだのであつた。

三

「富坊一寸――」さう云つて母が自分の室へ導いて行くのを、富次郎はその言葉のまゝについて行つたのであつた。

「あんた今お出なはつたんか?」長火鉢の前に据ると母がすぐさう訊いたのである。

「へえ、今來たとこだす。」富次郎が帳場の前で帽子を脫らうとしてるところを母が見たのだから、そしてまた僞を云ふ必要もなかつたので富次郎はさう答へた。然し懷中時計はそつと眺めて見たのであつた。

「もう三時だすやろ!」と母が云つた、その通りただ五分前だつたのである。

　母は少し言葉を改めるやうにして、

「あんた昨日も一昨日も休みなはつたが何ぞ用があつたんか。」

いつもなら、病氣やなかつたのかときいてくれる母が、今日に限つて、何か用があつたのかときくのは、まさしくこちらを疑つてるのであるし、また事實さう云はれても仕方がないのではあるが、然し母がさう云ふ問ひ方をするのは母の本心ではなく、少くとも母が思ひついての質問でないと云ふとがわかつたので、富次郎はむつとして訊き返したのであつた。

「わたいが休んだことに就て、誰ぞそんなことを云ふてまんのか。」支配人がと云ひかけ、それは一寸控へて、出鱈目に

「お腹の工合がわるうて仕樣がなかつたよつて、寢てましたんやないか。」

「そんなんなら仕樣がないけど、實はあんたが二日も休んだ上に今日もまた出勤しやへんよつて支配人が氣にして、わたいのところへ云ふて來たもんやさかい」やつぱり支配人の入智慧だと思ひながらきいて居ると今度は母は「お腹が痛いてどないに痛いのや」

それがあんたの本意でなければならぬと富次郎は一寸母の顔を見上げたが、然しまたそんな僞を云ふて正直な母に心配をかけるのもすまないと思つたので「大したことあらしまへん、食べ過ぎだす。わたいは春になるといつも食がすゝみまんので――」

それをきくと、母はすぐまた安心したやうに、

「そんなら一寸わたいあんたに云うとかんならんがな。實は支配人が云ふには、あんたは冬頃迄はほんまによう勤めはつたけど、この頃は店への出勤がいつも滯り勝ちになるさかい、もしや又惡い遊びでもしてるといかんよつて、これからはもう濱寺を止めて、やつぱり本宅で寢泊りをするようにと――さう支配人が云ふのやが。」

「阿呆らしい」富次郎は支配人の言葉をさんぐに罵りたい心持でさう云つた。

「さうやないのんやつたら、よけい支配人の云ふ通りにしといたらええやないか」

「支配人の云ふことはわたいは聞く必要はありまへん。」さう云ふたが、母が、よつぽど困るやうな樣子をして

「あんたはぢきに癇癪を起しなはるよつていかんのや、――それに、そないによう病氣になるのやつたら、わたいも心配するやないか。」

「あんたが心配すると云ふとくなはるのんなら、わたいも何時でも、さうします。」

富次郎はさう云つてしまつてから、これは失敗つたと思つた。つい母の言葉につり込まれて、さう云つたのだが、これまでの富次郎ならばそれでよかつたのだが、昨日久しぶりに遊んだお茶屋で――あの惠美子を知つたと云ふことは、昨夜も濱寺に歸つてから、あの惠美子のことが思ひ出されて、夜明け方までどうにも寢つかれなかつたぐらゐである。實は今夜にも今一度一寸出かけて見やうかと考へてたところなのだが――。

「あんたが、わたいの云ふ通りにしてくれたら、わたいも、支配人から賴まれ甲斐があつて、親の顏も立つと云ふものや――」

富次郎はもうかうなつては仕方がないと思つたので、强いてその言葉には反對しなかつた。然し何だかつまらぬいな

にかかつてしもたことを思ふと、急に不愉快になつたので
「もう用事はそれだけだつか。」と少し聲をあららげて云つたのであつた。そして母がお茶を入れやうと云つたのもきかずさつさと店の方へ、長い廊下をつたひながら來て了つたのである。――無論そんなに急いで店へ出る心要もなく、出たくはなかつたのだが――。

それからは電燈のつくまで、何をするともなくぼんやりと、たゞ自分の事務机の上に肱をつきながら――ともすると惠美子のことを思ひ出して居たのであつた。

時間が來たと見えて、兄も支配人も、間もなく店の机の前を立つて行つたが、その時も富次郎は、誰にも言葉をかけなかつた。そして廣い店が――今迄騷々しかつた店が、たゞそこらあたりに二三の小僧があとかたづけをしてる外、何にもないがらんとした店が、今更のやうに富次郎の眼の中に映つて、如何にも淋しい悲しい心持がするのであつた。

「これから若松屋へ行たろかな――」富次郎は獨言のやうに云つたが、然し、今のさき、母からさう云はれておきながら、そのすぐあとから、外出すると云ふことも、やつぱり氣がとがめたので「然し行つて見よかな」どちらともつかず、ぐづ〳〵して居ると、母がいつの間にかそこに立つて居るのであつた。

「富坊あんた獨り何にしてゝやねん？」

「二日も休んだんで仕事が溜つてますよつて。」好い加減に出鱈目を云つたのだが、母はすぐ、如何にもこちらをいたはるやうに

「あんたお腹が痛い云ふてゝ――そんな無理をしなはらんかてえゝやないか。」

富次郎は母のありがたい心持はわからぬでもなかつたが、それよりもこの場合、何だかうるさかつたので返事をしなかつた。そしてまた、あの惠美子の顔を思ひ浮べたりして居た。

「さあ富坊、御飯食べなはれ――あたりまへの御飯がいかなんだら、なんぞあんたの好きなもの取りにやりまひよか」

「そんなら鰻が食べたいよつて――」

「お腹にわるいことおまへんか。」
「お腹はもう何にもわるいことあらしまへん。」

四

昨日はとう〳〵こらへたけれど、今日はもう朝から惠美子のことばかりが思ひ出されてならないので、晝飯を食べると早々出かけようとしたが、それもやはり都合がわるくて出られなかつた。とう〳〵二時が打つた時、隣席に居る新兄さんに
「こないだから寢てゝ身體の工合が惡いよつて一寸風呂へ行て來まつさ」と云ひ殘して出かけたのであつた。
「今日は早よ歸らんならんさかへ――あつさり――」それでもやつぱり氣になるので、若松屋の座敷に通つてからも、富次郎は何よりもさきに仲居にさう云つて、それから直ぐ「惠美子はん居るやろな」
「來ると早々、歸る〳〵云ふもんやおまへん。」仲居はもう馴れ〳〵しくさうたしなめてから「袖子はんも呼びまんのか」
「袖子はいらんよつて――袖丸だけ呼んでんか。」
おかきと林檎で仲居が酒ばかりをすゝめるのは氣に入らなかつたが、それでも惠美子がすぐ來たのは何よりの滿足であつた。
「今日はお酒も三味線もいらんのや。惠美子はんさへ見ればえゝのや。」仲居にさう、いゝかげんおしやべりをして居たが、心の中もその通り、惠美子さへ見ればよいのであつた。
で、たゞ靜かに話しをした。でも、まだほんの一昨夜會つただけなので、話と云つても特別のこともなく、たゞ一昨夜あれからの座敷がどうなつたか、田村が朝歸つて行つたかと云つたやうなことをくり返しては話し、わざと笑つて見るくらゐのことであつた。だが、袖丸が來てからは、あどけない彼女が、惠美子と富次郎との間をうまくつないでくれた

ので、反つて話がしやすくなつたのである。「もうその内には袖丸も誰もが居ない二人限りの方がよくなるだらうが――」そんなことを思ひ出して富次郎は獨りで心の中で笑つて居た。

「あんさんほんまに奇麗な手してやはること！」惠美子は、然し、まだこちらの手は執りかねて、たゞ、ぢつとながめるだけでさう云つた。

「ほんまに奇麗なこと！わて等こないにきたないけど」袖丸も同じやうなことを云つて小さい手を火鉢にかざすのであつた。

仲居は新しい銚子を運んで來たが、お酒がちつとも減らないで、富次郎が時計ばかりを出して見て居るので、

「何にしてなはるねん――その時計こつちへ貸しなはれ！」と取り上げようとしたが、今日は何と云つても夕方の店が引けるまでに、ともかくも一度は歸らねばならんと思つて居たので、時計を仲居に渡すどころではなかつた。

「五時に丁度俥がこゝへ來るように云ふといとくなはれ。」

五

六月の初頃迄は斯うして、ほんの一寸した店の隙を見計つては出かけるぐらゐだつたが――その間に二度ばかり田村から電話がかゝつて來て夕方から十時過ぎまで遊んだことはあつたが、母がいつもいつもやかましく云ふので夜ふかしや、連夜の外出が出來ずに過ぎたのであつた。

けれどもとう／＼さうはして居られなくなつたのである。――梅雨に入つて二三日目であつた。どうも頭の工合が惡いからと云ふことを口實として、三日ばかり濱寺の別莊で休むと云ふことを母にまで申し出た。そして勿論濱寺へは引込まず、その三日間はとう／＼若松屋で居つゞけをしたのであつた。――あこがれて居た惠美子とはとう／＼仲よしになつて――然しあの最初に魂をつぎ込んだ女、花子のやうに夢中にはならなかつたが、田村が「誰れが行てもおかんねん、評判の堅い女や」と云つたことが思ひ出されて、たゞそんな滿足だけは充分にあつたのである。そしてこの頃には、

富次郎よりはもう惠美子の方があつい熱になつて居たらしかつた。

「ふ、ふん――」富次郎は久しぶりで店に出て自分の事務机の前に座ると思はずそんなほゝえみが洩れた。

丁度その時であつた。葉村の婆さんから電話がかゝつて來て、一度是非會ひたいことがあるから今夜にもこちらまで來てくれないかと云ふことであつた。

「何んやらう――」と首をかしげたが、一寸見當はつかなかつた。尤も葉村とは、あのころからづツと親しくして居て、その後は別に葉村の家で女をこしらへると云ふわけではなかつたが、婆さんには月々いくらかの小使錢までやつて居るので、何かと事が起ると、それは富次郎のことではなく、婆さん自身の何か事でも起ると、斯うしてこちらに相談をかけてくることも度々あるのであつた。

「こん夜來とくなはるな、雨も上りましたやないか。」婆さんがさう念を押したとき、富次郎は「よし〳〵」とつい答へたのであつた。

さうだ平氣で、「一寸散歩に出て來ます」と母にさう云へばよいのだと考へついたので、店の時間が引けると急いで夕飯を食べて、富次郎は、母にさう云つて、家を出たのであつた。

「富坊、えゝ女があんさんに惚れてますのやがどうしなはる?」葉村の婆さんは、富次郎の顔を見ると、何よりもさきにさう云つたのである。女のことは、この婆さんがいつも世話をしてくれるのであるが、今夜のやうなそんな言葉は婆さんからはまだきいたことはなかつたのである。それも萬更冗談でもないらしかつた。

「ほんまに冗談やおまへんで――」と婆さんは眞面目になつて自分も團扇を使ひながら云つた。「これもあんさんにそれだけの徳が備つたるのやが…………」

…………新町の中村寫眞館に、そこは富次郎がいつも寫眞をうつすところなのだが、その中村では、富次郎が新しく寫す度に、陳列ガラスの中にその寫眞を出して居るのであつた。――それは富次郎もよく知つて居た。初めそれを見た時は、一寸迷惑だとも感じたが、こゝは船場邊と違つて、別に知つてる人もないので――柚子や榮丸がもしか見たとこ

ろが、それは自分の美貌を説明する謗にこそなれ、別に恥辱と云ふわけではないのだから、まあそのまゝにしておいたのであつた。

「杉村はんの嬢はんがその寫眞を見やはつたんだすがな！　そしてあんさんにとことん惚れ込んでしまはつたんだすがな！」

　そこまで話を聞いて富次郎は思はず身體が振へた。婆さんの話には平氣で笑つて居たが、心のうちは嬉しさで一ぱいになり、胸もぞく／＼鳴るのであつた。――これまでから、お茶屋で會ふ女の中に、度々そんなことを云つてこちらに近づいて來たものもあつたが、然し考へて見ると、それはみな女どもの慫慂で、富次郎がかぎやのぼんちやと云ふことが、先づ第一に女どもを惚れさせたりちやほやさせたりしたことだらうと、それは富次郎自身にもよくわかつて居たのである。素人と云へば――どこかのお嬢さんだと云へば、あの最初養子の話があつた天滿のあの娘でも、こちらがあれだけ戀ひ焦れてさへも、ついに何の沙汰もなくあのまゝになつて了つたのであつたが、今度のその杉村の令嬢と云ふのは…………

「あんたはな、いつでも自分の容貌が自慢やよつて不可へん。それはうぬぼれと云ふもんや――あんな女どもは口さきだけはどんなことでも云ひますさかい――あんたはだまされてるのやがな！」笹原のおぢさんは、いつでもよくそんなことを云ふが、そしてただその一つを如何にも大きい證據か何かのやうに、大げさに女どもをけなすのだが、然し、さうした社會の女どもはまアおぢさんの云ふ通りとしても、

「その嬢はんは――そんなことほんまかいな！てんご云ふてるのやろ。」

「なんの僞など云ひますもんかいな。」婆さんがさう云ふまでもなく富次郎は嬉しさで、――もう何にもかもそれを信じては居たのであつた。

「まあ聞きなはれ、ぼんち――」婆さんは如何にもそれが自分のことでもあるやうに、これも口元に一ぱい微笑を浮べながら云ふのであつた。「その嬢はんは、四五日の間、毎日そのガラスの前に立ちに來てやはつたんだすが、とう／＼し

まひにその中村寫眞館へ、自分の寫眞を寫しに來て、それも寫さんかてええねんけど、その寫眞の主がききたさだすやろが、來て、あれはどこの人やと、根堀り葉掘り、聞いたんだすと――」

なほ婆さんの話によると――その孃はんは、寫眞屋からは、たゞ本町の大きいメリヤス問屋の息子さんだすと告げられただけだのに、それからどうして調べあてたか「今ではあの寫眞の本人さんはかぎやの次男やと云ふことまで、ちやんとよう知つてまんねんで――。」

婆さんは、以前からその杉村さんには厄介になつて居て――舊い知り合ひなのだが、一週間ばかり前に一寸所用があつて、その杉村さんへ出かけると、丁度お母さんがそのことで心配中で、ついこの婆さんにも智慧を借る爲めに話したのだが、

「へえ――あんたがそないに心安まんのか――そいで、その本人さんをよう知つといでやすのやな。」と、そのお母はんが大喜びをしたのだとのこと。

「そら知つてますくらゐな、あのお方は話がお上手でな」と、婆さんはその時にお母はんに答へた時の有樣を手似ねまでして見せて「――まさか花子はんと云ふええ女がおましたとは云はしまへんで、ぼんち――」

富次郎は熱心にきゝ惚れてゐたのであるが、婆さんがさう云つたので思はず吹き出して了つたのである。

「阿呆なこと云ひな！」然し、こちらの眞面目になつてる心を茶化されたやうな氣がしたので、そこですぐ苦い顏に返つたのであつた。

「そら、こゝでの內證やおまへんかいな。」婆さんはこちらの顏色を見て、又急に眞面目になり「――それででんな、結局橋渡しだけをわたいにしてくれと云わはりまんねやが――。」

「養子になんて行くもんか、阿呆らしい。」と云ふと、

「ぼんち、あんさんそんなこと云ひなはるけど――」婆さんは後の茶簞笥の抽斗から一枚の寫眞を取り出して――その娘さんだつせ、ほんまに別嬪だつしやろがな。」

富次郎は寫眞を出されると更に好奇心がむら〳〵と湧いたので、それを受取つて、つく〴〵と、婆さんが何かおしやべりをしてるのも耳に入らぬほど、一生懸命に見入つて居た。——頬がいつの間にかかいツと熱つて居るのであつた。

婆さんはまた云つた。

「ぼんち、あんたえらさうなこと云ひなはるけど、あんな花子はんみたいな妓に一生懸命になつたくせに——この嬢はん、あんな妓と比べものになりまへんで、上等で！」

「やかまし云いないな！　今見てるところや！」富次郎はまだ寫眞を離さずに居た。花子のことなどは、さう云はれるとたゞ侮辱を感ずるほどだつたが、然し富次郎はすぐに惠美子のことを考へて居た。

——惠美子よりはこの方がよつぽどええな。さう考へると、思はず微笑が浮ぶのであつた。笹原のおぢさんが云つたやうに、自分にはなるほどその容貌自慢と云ふことがあるかも知れぬ、慥かにそれはある。して見ると、あの「誰れが行てもあかんねん」と田村が云つた惠美子さへも、その惠美子さへも、その惠美子を自分が、ものにしたからとて、そこにはやはり彼女の商賣柄から推して、自分に對する愛の不純なものがあるかも知れない。——さう思へば、今度のその嬢はんこそ、ほんとうに何の不純なものをも交へずに、ぴつたりと、こちらに——こちらのあの寫眞に惚れて來たのである、

「自分がもし容貌自慢なら——」今度の女の惚れて來たのこそ、それはほんまに自分の自慢心を滿足させてくれたものではないか——富次郎は、さう考へると、これ迄も長らくの間、何ものかにあこがれ求めて居たその大きい滿足が、今眼の前に、彼女から跪いて來たのではないか——。

「ぼんち、どうだす、やつぱり養子は嫌だすか。——杉村はんは、わたいあたりまへのことを云いまんのやが、あんさんのお家より上手でこそあれ、下と云ふことはおまへんで——それに弟さんも妹さんも、何にもあらしまへん、ほんまの一人娘さんだんがな………」

「そらわたいかて、そないに見込まれたら、行かんことはあらへんけど——」あからさまに喜ぶわけにも行かぬので、

ほんの口元に一寸笑ひを見せただけだが、然し婆さんの話を聞いて居ると、だん／＼、たまらないほどよくなるのであつた。

「そのお寫眞はぼんちにもうお上げしますが、ぼんち、そんなら、あんたはもう承知だつか。」

「わたいはまアええとしても」富次郎はもうさう云つて了つた。「そんなことは家へ話してもらはな。わたいから何ともたしかな返事は出來やへん。」

「そんなことはわかつてますさいな――あんさんさへ承知やつたら、早速明日にでも、ほんまの媒介人になる人が本町のお家へ行かはりまんね。」

同じやうなことをくりかへし／＼婆さんが話すので、いつその話が盡きるとも思はれなかつたので、それでも富次郎も、可なり根氣よく、内心では喜びながらいつまでも／＼きいて居たが、然し、それではいつまでも果しがないので、あまり遲くなつては母がまた心配するからと思つて、富次郎は、婆さんの家を辭したのであつた。

「いよ／＼さうなつたら――」富次郎は今日は俥に乘らずに散歩するつもりでぶら／＼歩いて、いつまでも今の婆さんの話を思ひ出すことを樂んだ。「――惠美子をどうする。」惠美子との關係は、もうあの廓では一ぱいになつてるのやさかい、惠美子を今捨てることは、惠美子は困るやろが――悲劇でも起らないやろか。」さう考へると惠美子に對してすまぬやうな氣もし「そんなことになつたら、可哀さうなことは可哀さうなが」富次郎は、もう、惠美子が、何か劇藥でも飮んで、自殺でもしてるところが、眼の前に浮んだりするのであつた。

けれどもふと考へついて、思はず手を拍つて居た。「――惠美子は何も捨てるには及ばん、立派な妾宅を作つて、そこへ大事にして入れてやつたらええ」

六

若松屋へは、三日目ぐらゐには、どうしても出かけなければ氣が濟まなかつた。それに惠美子とは、もう深い仲にな

つてゐるので、いくら店への都合がわるくても、時計を見て何時に歸ると云ふことは出來なかつた。たゞ、泊つて來ることだけはどうしても出來ないものだから、夜更けてからではあるが仕方なしに本町の宅へ歸ることにして居たのである。

「朝歸りなはつたらえゝやおまへんか。今頃から歸りやはつたかて、同じことやわ――」惠美子はよくさう云ふが、そしてなるほどそれでも惡くはないのだが――と云ふのは、母はもう富次郎が夜中に歸ることもよく知つて居た、賄掛のおみつ婆さんに云ひ含めて、富次郎がいつ何時に歸つて來ても一寸一ぱいぐらゐ飲んで寢られるやうに、そんな心盡しまでしてくれて居たのだが――然し、母はまあよいとしても、朝歸るとなると、とても支配人が出勤するまでには歸ることが出來ないので、

「朝やつたら、七時から起きて歸らんならん――」

「それもいやだすな……若旦那、もつと自由になりたいもんやわ。」惠美子がさう云ふにつけ、富次郎は杉村との緣談はいつも苦しいものゝ一つではあつたが、然し、あの女はかへられぬ、その代りお前は立派な妾宅へ入れてやると、心に念じながら、それでも、別れて歸るのは名殘りおしく、いつも、も少し早く〳〵と思ひながら、十二時より早くは歸つたことがないのであつた。

おみつ婆はいつも寢床には入つて居たが、富次郎が裏の木戸をコツ〳〵と叩くとすぐに起きてくれて、それから銚子を一本つけてくれるのであつた。斯うして幾日も重なるにつけて、おみつもこちらの贔負になり、

「ぼんちが大けいお家へ養子に行かはつたら、この婆あを何ぞ役に立つことに使とくなはれや――」と云つたりした。

「わしが養子に行くなんて、お前そんなこと知つてるのか――」富次郎は意外に思つたが、然し杉村との話がそんなにみんなが知つてるぐらゐに進んで居るのだつたら、と嬉しい心が躍るのであつた。

「知つてるも知らんも――」とおみつは云つた。「昨日その材木問屋からの――あの媒介人さんは何とか云ふ人や、わたい御寮人さんから聞いたんやけど――昨日いよ〳〵來やはりましたやないか。」

「さうか、昨日來たのか！さうか！」富次郎は思はずさう叫んだ。そしておみつがなみ〳〵とついでくれた盃をぐつと飲み干したが、嬉しさがそのまゝで止まらず、

「こんな遊びものをどこがようて貰ひに來るのやろ。」とから〳〵と笑ひながら云つた。

「そらぼんち――殿方で遊ばん人はおまへんよつて、そんなことはあたりまへやけど、ぼんち見たいな人を貰たら、先方もうまいもんやおまへんか。」

「お前までがそんなこと云うてくれるのんか。」富次郎は、その夜はそれだけで、大分に眠かつたので、急いで床の中に入つたが、さて寢床に入つて見ると、妙に神經が昂奮して、とても眠られないのであつた。「明日の朝、葉村の婆さんとこへ一寸狀況を聞きに行て來たろ――」

七

朝、母に、一寸急用が出來たから友だちの所へ行つてくる、すぐ歸りますさかへ――さう云ふつもりで廊下に出ると母が今起き出て來たところであつた。そしてこちらからまだ何も云はぬさきに母が云つた。

「富坊あんたにまだ云わなんだけどもな、今日から青雲寺の授戒があるのやさかい――濱寺からはお祖母さんも女衆はみんなこつちで泊つて毎日青雲寺へ行くのやさかい、あんたは今日から一週間濱寺へ留守番に行とくなはれ――店へは毎日來いでも好えけれど、時々は出て、それから支配人や兄さんも時々は青雲寺へ顏出しをせんとすまんのやが、あんたもまた一寸は顏を出しなはれ――以前は青雲寺の授戒には家中總出で手傳ひに行たくらゐやさかい。」

「へえ、よろします――」富次郎は平氣でさう答へて、今母に云はうとして居たことは急に止めて了ひ、たゞ手水をつかひに行くふりをして水道の方へあるいて行つた。「葉村の婆さんとこへは、そんなら飯を食てからゆつくり行かう」

それでも飯を食ふのも何だか急がれてならなかつた。今日から一週間、公けに、母の許しのまゝ濱寺へ行くのだからまたどんなことでも好きなことが出來ると思たが、大阪へ出て來られないのが一寸困るには困るが――そんなことは正直

に守らなくとも出て來たいときは出て來たらええ、とも思ひ、又そんな時に限つてひよつこり店のものに出會つたりするものだから、そんなことから信用をおとすのもつまらないし、惠美子を濱寺へ呼び寄せてやらうか、田村に電話をかけてやろ――そんなことばかりを考へながらあるいて居るのであつた。

「媒介人がいよ〳〵家へ來たんやさうやな？」葉村の婆さんの顔を見ると、富次郎はすぐにさう訊つた。

「はあ、ぼんちうまいこと行きまつせ。わたい昨日電話かけようと思ひましたんやけど、そんなことぐらゐぼんちかて聞いたはるやろと思て――」

「いゝや、わたいはやつと昨日おみつから聞いただけや――」

「そんならお母はんはあんたに云わはらへなんだんだすな――不贊成だすか――」

「さあ――」富次郎は、婆さんをぢれさしてやれと思つて、むつかしさうに云つた。事實こちらも知らんのではあるが、あんまり安々と事が運んではこちらが如何にも待ち構へて居たやうでもいけないので――。

「これが出來たら、わたいも杉村はんからどつさりお禮が貰へるのやけど。」

「わてからも上げるわいな。」

「ぼんちからはいつも頂いてますよつて、これは御奉公だんが――」婆さんはそこで急に大事なことでも思ひ出したやうに「なあぼんち、あんたの聞き合せは、まあよろしましてん。尤もあんたがよう遊んでやはると云ふことはどこでも云ふたさうでおますが、あんたにはまたええとこがあると云ふ一般の評判だしたさうな。」

「へえ、どこがええとこやろ。」富次郎は、然しその言葉が何よりも嬉しかつた。縁談の聞き合せと云ふやうなものは、大抵は惡口を云ふもので、平素懇意にしてればしてるほど、そんな人に限つて惡口を云ふものだと、富次郎はこれまでも多少經驗してるのだが、今度の聞き合せに、その「えゝとこもある」と云ふてくれた人は誰れやらうと、嬉しさのあまりそんなことを考へたりして居ると、

「ぼんち――」と、また婆さんがつゞけた「然しな、ぼんち、杉村はんではかう云わはりまへんねん。――どうせ若い男

のことやさかい、これまでに遊んだことぐらゐはかまわん。然しいよ〳〵家へ來てもろたら、外に女があつたりすることは一切御免や、そこんところをよく調べてくれと、これは杉村はんからわたいへの特別の頼みだすのや。」

「ふ、ふん――」富次郎は思はず笑つた。

「もう花子はんもあらへんし、それはわたいが保證しますけど――」

婆さんのその言葉を聞くと、富次郎は、心のうちでは更におかしかつた。こちらへの女の世話は、婆さん自身より外にする者がないと思てるのか、あのころの富次郎なら知らんこと、今日の富次郎の天地は、もつと廣く、もつと自由や――大阪はおろか、箱根でもあの通りやし、天下の女で、この富次郎が出來んと云ふ女があるものか、とつく〳〵おかしかつたが、

「もう花子のことは云はんとおいてんか」と云つた。

「まあ、それはたとへだんがな」と婆さんは益々得意である。こちらの考へは無論婆さんにはわからないのだが、あんな花子のことは　それがたとへだとは云へ眞平御免なのである。

けれども氣になるのは惠美子のことであつた。富次郎は、今ではそれでも惠美子に熱中してるわけではなく、そして無論あの杉村の嬢はんのことはちよつとの間でも忘れることはないのだが、その話がまだまとまらぬので、それが待ち遠うしくて、せめて、今手を出して待つて居てくれる惠美子のとこへでも行かねば淋しくて〳〵ならないので、三日に一度はきつと行くことにしてるのである。然し、さうしてしげ〳〵行て見ると、また言葉に云へぬ愛情も出て、よしそれが杉村令嬢よりは少しはわるいにしたところが、今更惠美子を捨てて了うと云ふことは、人情としてどうしても出來ないのである。

――婆さんの今云つた言葉が富次郎には急に氣になり出したのである。こないだも、もしか杉村との縁談がまとまつたら、どうせ可愛がつてやるにしても、今迄のやうには行くまいと、惠美子がこちらにお酌をしてるその手を眺めながらさう思つたのだが、そしてもしか惠美子が、少しでもこちらの氣に入らぬことでもすれば、――

と考へてたのだが、あの夜も、あの夜ばかりではない、もうこの頃はどんなときでも、恵美子自身には、今はこの富次郎なしでは一日も暮せない――とさう思つてる彼女の心が、あり〳〵とこちらに寫るのである。「さうすると恵美子は可哀さうなことになる！」

「あ、ぼんち。昨夜また孃はんが寫眞持つて來やはりましてん。」婆さんは急に思ひ出したやうに、またいつもの、後の茶箪笥から寫眞を取り出したのであつた。

「この横顔もええな――」富次郎は、もうすつかりまゐつてしもたのであつた。「ほんまにええ」

「よろしますやろ」

　こないだのは眞面目に眞正面から撮つた寫眞だつたが、今日のそれはたゞ美しいと云ふばかりでなく、ふるひつきたいほど意氣で、然し上品なところもあるのであつた。

「それは？――」富次郎は婆さんが持つてる今一枚のものを受取らうとして手をさしのべた。

「これは孃はんが見せてくれるな云ふたはりまんねけど――」

「これもええやないか。」富次郎はさう云ふのに躊躇しなかつた。これは後姿であつたが太鼓に結んだ帶から腰のあたりのやわらかな曲線がよく寫つて居た。「あの寫眞屋中々上手やな！」

「それみんなあんさんにお上げしまつさ。」

　富次郎は無論そのつもりでは居たが、然し、こないだの一枚だけで好いものを、今日も又、しかも二枚まで斯うして寄すことを思ふと、彼女の心持を推察すると、富次郎も嬉しさで一ぱいであつた。

「そのかわりに――」と婆さんが云つた。「あんさんの寫眞を一枚おくれやす。」

「上げてもええけど、そやけどあんたそれを貰て杉村はんへ持つて行くつもりやろ。」

「持つて行たらいきまへんか。」

「家から出すのならあたりまへやけど、わたいから出すのはおかしいやないか。」

「そんなら家から出したことにしといたらよろしいやおまへんか――ぼんち、そんな云うてなはつたらあきまへんで――こんなええ機會はおまへんのやさかへ、そんなことぐづ／＼云うてなはつたらあきまへんで――」

さう云はれると富次郎は、すつかり婆さんの前に降參せざるを得なかつた。もしその寫眞を出さなかつたが爲めにこの緣談が不調になるやうなことがあつたら、と思ふと、つまらぬ自尊心やかけひきは捨てなければならないのであつた。

「そんなら新しく寫しまひよか。」

「そんなことしなはらんかてぼんち、今寫したのがおまへんのかいな？」

「あるけど――」一枚は謡ひの會の歸途の紋付の半身うつし、今一枚は普通のだが、セルの着物にお召の鐵無地の單羽織を着たのが――婆さんにさう云ふと、

「それでよろしまんがな――今夜でもぢきに持つて來とくなはれ、あ、郵便でもかましまへんわ。」それから婆さんは笑ひながらつけ加へた。「ぼんち、あんた寫眞出すのん嫌がつてなはるけど、あんたは本物より寫眞の方がよつぽどよろしまつせ今度の緣談かて、孃はんがあの寫眞屋の門に立たはつたよつて出來たようなもんや。」

「もうそんなこと云ひな！　持つて來る云ふたら持つてくるやないか」富次郎は婆さんのその言葉が如何にも急所を突いてると思ふと、嫌で嫌でならなくなつたのでさう云つたが、然しまた、あまり正面になつたのが氣になつたので笑ひながらつけ加へた。「――そんならお婆はん、今度の緣談は寫眞で出來ても、もしいよ／＼婿入りしてから破談になつたらどうする？」

「冗戯やない――緣喜のわるい。」婆さんが、思ひの外しかめ顏をして如何にも緣喜わるさうに云つたので、富次郎は、それ見ろと思ひながら、得意さうにから／＼と大笑ひをした。

八

葉村で案外ひまい取つたので富次郎が難波驛へ來た頃は、驛の時計は三時を過ぎて居た。自分の時計が遲れてたのか

な？と思ひながら念の爲に帶の間から出して見たが、やつぱりおくれてるのではなくて、いつの間にか時間が經つてるのであつた。こんなに遲くなつては留守番に賴まれ甲斐もなく、そればかりではない、また小言の一つも云はれなければならぬと思ひながら急いで改札口を出やうとすると、

「おい――」と云つて背を打つたものがあつた。

「おや田村か――不思議やな！お前とこの頃こんなとこでよう會ふやないか。」

「さうやな！」と田村も云つたが「然し、この頃は僕はよう天下茶屋の友人のところへ散步に行くねん」

「これからも行くのか。」

「は――」

「別に用事はあらへんのやろ。」富次郎は、田村がこないだも云つたことを思ひ出した。天下茶屋の友人は學校のクラスメートなのだが、彼れは學校へはあまり出て來ないで、家で勝手な講談や小說類を讀んだり、それにこの頃は圍碁に熱心になつてるのだが、田村自身もこの男から圍碁を學んで、今では丁度好い相棒なので時々そこへよく遊びに行くのだと――で、

「今日も碁なんやろ。」

「うん。」

「そんならこれから僕の濱寺へ行かう。丁度好えとこやよつて。」富次郎はさう云ひながらも丁度好い機會だと思つた。自分もこれから濱寺へ歸つて何をしやうと云ふあてもなく、女中がたゞ一人留守番してるだけだから――あの顏ぢや仕樣がない、と今更のやうに思ひ出しては獨りで苦笑しながら「ほんまに行こ。」

「そんなら行こか。」と田村も云つた。

濱寺へついてからは一寸別莊へ立ち寄つたが、たゞ女中に「友だちが來たから、夕飯を一寸日柄喜で食べて來る。本町から誰れか來たら、さう云つてくれ」と云ひ殘して、すぐにその日柄喜へ田村を案內したのであつた。

「今夜はゆつくりやろ――君は今夜僕の別莊で泊つても好えやろ。」日柄喜では、離れ座敷を選んで、そこでちびり〳〵飮みかけたが、富次郎はどうせ今夜は一人なのだから、責任上別莊へ歸りさへすれば、いくらゆつくりでも差支へないと思つたので、强いても田村へさうすゝめたのである。

「まア都合で――」田村はそれよりも重大な相談でもあるらしく云つた。「お前に聞きたい思てたんやがな――お前も大分借金などして困つたこともあるやうやが、その借金と云ふものはどうしてしたらええやろ――お前今でもやつぱり借金してるのか？」

借金の方法に關する質問は、富次郎には興味があつた。二三年前には富次郎はその「借金」にせめられ〳〵して、とう〳〵箱根くんだりまで逃げて行くことになつたのだが――お前大分に借金出來たんか。」

「いやまだそない出來たわけやないけど――」

それでもまだえらいわ、と富次郎は思つた。無論田村が遊び出したのは、ほんのあの袖子が初めらしいが「――僕もあのころのことを思ひ出すな！」

「そいでお前どうしたんや？」

「高利貸に周旋してもろて借つたんやが、田村、もう高利貸の金を借つたらあかんで――そんなら僕一寸心當りあるよつて安い利で君を信用して貸してくれるとこを周旋したるわ。」

「お前もそこで借つてるのか？」

「いや――」と答へたが、富次郎は、この頃使つてる金は、あの箱根の福住の屋敷で、迎ひの人の足音をすぐそこの廊下で聞きながら、大急ぎで足袋の底へ五百圓あまりの紙幣を、持ち逃げ金の中から隱したことを思ひ出して、今更ながらおかしいやうな、悲しいやうな氣がするのであつた。

「そんなら賴むわ、別に急へんけれども。」田村は、この上は富次郎の事情はさかずにおだやかにさう云つた。――田村は、今ではまだそれほど迫つては居ないのだなと思ふと羨しいほどであつた。

「然し——西田——」田村はまた新しく卷煙草に火をつけながら云つた。「お前にこの頃緣談があるのやないか。」
「どうしてお前知つてるねん？」富次郎はあまりのことに一寸驚いたが、然し少々得意であつた。
「なに杉村は僕の家の親戚の親戚になるのやけれど、僕はあの娘のことはよう知つてるよつて——」
「さうか、親戚になるのか——世間は狹いもんやな！」富次郎はそれを驚くよりも、田村がよう知つてると云ふその娘のことを少しでもきゝたいのだが、何だかそれをきゝだすのも恥かしいやうな氣もしたので、それよりも高飛車に云つて見た。「そんなら僕があこへ行たら、君とも親類になるわけやな！」
「けども僕は、君に是非そのことを云はうと思てたんやが——」田村は如何にも忠告がましい口調で「君、あの娘は品行はまるでゼロやで——前にも二三度もそんなことがあつたと云ふことやが、最近にも學校の教師と何かやゝこしいことがあつて、そのことは君、新町邊では誰れ知らんものもないくらゐやで。」
「さうか！」全く意外なことなのだ。富次郎は——何と云つて好いか、何よりも彼よりも富次郎はがつかりしてしまつたのである。
「そんなことを君、知らなんだのか？」
「…………」花子などは問題でないが、惠美子よりも誰よりも、富次郎がこれまで知つた女の誰れよりも美人で、然しどこかに品があつて、そして財產があつて、その上、先方から戀ひ焦れて自分を欲しいと云ふ、そんな都合の好い女が——富次郎には全く天から降つて來た幸福としか思はれないほどのその大きい幸福を、今計らずも親友の田村の口から打ちこわされると云ふことは、何たる皮肉だと、富次郎は全く身も心もおきどころがないほどにがつかりして了つたのである。殊には富次郎自身の容貌自慢が、その自尊心が、田村のその一言によつて、すつかり打ちこわされて了つたのであつた。それではあの寫眞を見て惚れて來たのは、富次郎が考へたやうな、純粹な憧憬や愛ではなくて、ほんの簡單な出鱈目の情慾であつたのか——さう思ふと、この數日來、緊張に緊張を重ねて來た富次郎の光明なる生活が、一時に暗い谷底にでもつきおとされたやうな氣がして、ほんとに心から、泣きたいほどであつた。

——なに、それは田村の中傷に過ぎないのだ。よしまた、それが幾分事實でも、今となつては、富次郎には後に引くことは出來なかつた。殊には、その杉村の財産が、あの葉村の婆さんが云つたやうに、かぎやよりも上手だつても下ではないとすれば、たゞそれだけでも後に引くことは出來ないのである。「——兄を踏みにぢつてやる。支配人に復讐してやる。」富次郎はいつの間にか、その杉村の財産のことを、もう我もののやうに樂しみにして居たのだつたから——。それからまた富次郎は、葉村の婆さんの言葉を思ひ出したのであつた。富次郎自身の聞き合せに關しての先方の親たちの意見に「——これまでは遊んだのはかまわない、どうせ若い男なのだから——然し、一旦家の人ときまつてしもたら、外で女をこしらへることはいかん——」

さう云ふ親たちの心持は、たゞに富次郎に對しての寛大さを示すばかりでなく、畢竟は彼等の娘に對しての言ひわけとも取れるのである。さう思へばあまりありがたい言葉でないことは無論だが、然し結婚後のことに關してのこちらへの要求は、同時に彼自身の覺悟とも受け取れるのである。——さう思ふと、富次郎はまた俄かに一道の光明に接したやうな氣もするのであつた。どうせ自分だつて今日迄ありだけの放蕩をつゞけて來て居ながら、先方の女にばかりそんな堅いことを要求するのは、寧ろ要求するこちらの方がわるいのではないか。——なに、もし結婚後にでも、女がそんなに浮氣をするやうだつたら、こちらも大に、別の女を作るだけだ。惠美子ばかりではない、第二の女、第三の女をも作れば好いのだ。さうだ、今自分の要求するものは、その杉村の財産なのだ、支配人に復讐することなのだ。——

「君、僕は何も君の心持を惡くさせる爲めに云うたのやないで——とにかく參考迄に一寸云ふとくさかい、調べて見たまへな。」

富次郎がいつまでも默り込んで居たので、田村は、最初は獨りで酌をして二三杯飲んで居たが——富次郎はそれを見ては居たのだが、手を出す元氣もなかつたので——とう〳〵田村はまた煙草を出して頻りにくゆらしながら、そして二本目のに火をつけてから、さう云つたのであつた。

「いゝや、僕は氣を惡るなんてしやへん——」富次郎は自分の考へが、さうはつきりときまつたので急に元氣がついて

さう云つた。「この結婚には僕にも考へがあるのやさかい。」

それを云ひ終らぬうちに田村は、

「何んや今日は陰氣になつたよつて、一つ大に騒ごか――」と云つた。「僕、大阪から一流の藝妓をおごるさかい。」

「騒ご！然し君――」富次郎は、田村の今の借金も聞いて居ることではあるし、で少し分別顏して「こんなところで一流を呼んだかて仕樣がないさかい、それよりも君、僕にまかしときたまへ、僕がおもしろい藝妓を南地から呼ぶよつて――」

で、千代次と云ふのが、座敷の賑やかなおもしろい奴なので、それを呼ぶことにしたのであつた。富次郎は仲居に電報用紙を持つて來させると、

「チヨジ　スクヨコセヒカラキニテマツニシタトミ」

それをのぞき込んで見て居た田村は、富次郎が宛名を書き終ると、

「戎橋北詰東――」と獨り言のやうにつぶやいて「ある〳〵、ササヤと云ふのがあるな。」

「電車は夜は早いよつてすぐや――」さう云ひながら、その藝妓のことが片付いたので、今度は昔に返つて、中學時代の學友やら教師の噂などで、殊にそのあだ名などを思ひ出して大笑ひをしたのであつた。

「僕は今思ひ出してもよう出來てると思ふのは過分數やな、それが數學の教師やさかい、よけいええのや――」

「さうやつたな、あの先生はほんまに頭ばかりが大けかつたな。」富次郎も久しぶりに學校のことを思ひ出してなつかしかつた。――あの嚴格な伊原先生の家庭に預けられて居たのは、あの頃の富次郎には何よりもつらかつたのだが――然し、もし卒業するまで文句を云はずにあの先生の許に居たら、中學も立派に卒業し、それから父が所望の通り高商へ入つて、かぎやの相續をして居たかも知れないに――お父さんが、一時は、あれほど自分を見込んで、新吉兄さんをおいても相續させやうとまで考へて居て下さつたのに――

「そんな過ぎ去つた夢を惜しんでも仕樣がない。」富次郎は心の中で呟いて、それよりも今は、そのかぎやの二倍もあら

うと云はれて居る杉村への養子縁談のことがすぐに胸の中に蘇返つて來るのであつた――田村が今、どんな不吉なことを云はうとも！

「學校も中學時代が一番おもしろいな！」田村は、さきの話のつゞきを、そして如何にも嘆息するやうに「この頃はもう學校もおもしろうない。止めたろかと思てるねん。」

「それでも學科は專門になつたよつておもしろいやろがな。」富次郎は、自分が一度も專門學校に入つたことがないのでやはり何となくさうした學生生活が羨しいのであつた。で、父の死後靜かに讀書などする夜には、今一度學校へ――もと〳〵富次郎は神戸高商の志望だつたが、大阪の高商でも無論わるくはないから、何とかして入つて見たいとも思ふことがあつたが、中學を五年の初めに止めて了つた富次郎には、それもならず、たゞ心のまゝに經濟學などを讀んだりして居たのであつた。「經濟と云ふ學問はおもしろいな。」

「君そんなもん勉强してるのか？」

「いゝや、勉强してるのやないけど、僕、謹愼中に、讀むことは大分に讀んだけど――」

「そら、えらいやないか――君はもと〳〵頭腦がよかつたんやさかい――大に金儲けの法でも考へたか。」

「僕は神戸高商のS博士を崇拜してるねん。あの先生なか〳〵えらいことを著書に書いてるで。」富次郎は嘗て讀んだものゝうちから、思ひ出し〳〵、自分の氣に入つてる說を田村に紹介して、おしまひには、自分勝手な空想にまで氣焔を上げたのであつた。「僕は今、何と云ふても金が欲しいのや。こないだも一寸話したやうに、僕は今支配人とは反目してるのやよつて――僕は何とかしてあんな奴等にはなをあかしてやりたいねん」それから別に大して關係のないことだが急に云つて見たくなつた。「僕、大金持になつたら、極端にキヤピタリズムをやつて見たいな！思ひ切り金の力をためして見たいな。」

「ふうん――えらいことを考へてるのやな。」

「デモクラシーと云ふ本を、僕讀んだけれども、そんなことなんぼ云ふたかてあかんと思ふな。何と云ふたかて、金儲

けなあかへん。」富次郎は、田村が默つて聞いて居るので、だん／＼雄辯になることを自分もおかしく思ひながら
「學校の修身やなんて何んにもならへん、なんぼ正義やとか正直やとか云ふておしへたかて、先生の敎へてくれたことをしたらそれこそ世間の人は阿呆や云ふて笑ひよる――僕は大分に道樂もしたけど、その代り世間も大分にわかつて來たつもりや。」
「そらさうやけど――」田村は案外にも反對した。「然し社會にもほんとうの正義と云ふものがあるやろ――そやこそ、この頃ぽつ／＼社會問題がやかましなつて來たんやないか。」
「その社會問題がやな――僕はまだそんなことはよう知らんけど、結局はみんな自分の我儘を云ふてるのやで。そやよつて僕はその我儘を通した奴が一番えらい人間やと思ふな。」
「よう知らんと結論するのは無茶やないか。」田村のその言葉には何とも答へる法がなかつたので
「そらまあさうやけど。ハハ………」と富次郎は笑ひにまぎらして了つた。だが、議論では負けても、富次郎の信念は少しも變らないのであつた。
「君は、我儘を通したものがえらいと云ふけど、――それはなるほど理屈はある、世の中の結果はさうなつたるけど、その代り爭ひが絶へやへんのや。――そんなら君自身はほんとうに我儘を通して、眞の勝利者になれるやろか。それだけの自信があるか。かいぎやは金持やさかいええけど、もし君が裸一貫やつたら、今の議論が出るやろか。」だん／＼田村の議論の筋道が通つて來るので、富次郎は困つて了つた。何か答へねばならぬと思つても、よい思ひ付はないのであつた。お茶屋ではいつも間拔けたことをしてるけれど、やつぱり高商の學生だけで理屈は通つてると、ひそかに感心はしたが、然し、田村に議論を負けるのは先づよいとしても、今度の杉村との縁談は是非何とか成功したいものであつた。そしてあの支配人にも兄にも復讐したいと云ふ心持が、今では何よりも大問題なのであつた。で、今のさき田村が云つた杉村の娘に關する評判は、あまり望ましくもないが、然し、評判は評判として――何とかこの話をうまく運んでくれないか、幸ひ君の縁つゞきなら――さう云つて富次郎は、田村に懇願したいのは山々だつたけれど、いくら醉つて居て

も、それぱかりはどうしても口に出ず、たゞ「君、もう議論は止めやう。飲まう!」と云つた。

九

翌日、田村が大阪へ歸つたあとは、何だか急に淋しくなつて、久しぶりに謠本を出して唸つて居たが、然しこの場合自分の心持と謠の響とはちつとも調和しないやうな氣がして、好きな「熊野」だが、途中で謠本は伏せて了つた。

何だか身體がだるいので、謠本を枕にしてそのまゝ仰向けに寝そべつたが――花が散つて青い葉が一ぱいに茂つて來たこの頃の初夏の風は、セルの着物の上にもやわらかく心よくて、嬉しいことを思ひ出すには何とも云へぬ好い時候であつた。

「……………たましひぬけて、とぼ、とぼと…………」いつの間にかそんなことを口づさんで居たが、小春治兵衛ぢやあるまいしと、ふと氣がつくと、そんな緣喜でもないことはと思つてそれもやめてしまつたのである。

「これから惠美子のとこへでも行たらか――」獨りで答へて富次郎はがばと起き上つた。そしてそのセルの上にあの羽織――杉村へやることに約束したあの寫眞の通りの服裝になると、富次郎は今一度鏡の前に立つて、髮ヶ丁寧に撫でつけた。

「お縫!」

「はい――」

「これから青雲寺へ一寸行てくるよつてな――然しお前は一人で淋しいことないか。」

「今日から植木屋の爺さんが來て下はることになつてますよつて。――」

富次郎は玄關に、昨夜おそく脱ぎ捨てゝおいた下駄を引つかけて急いで停車場の方に向つたが「寫眞を忘れてた」と思ひ出してまたあと戻りをしたのであつた。

寫眞は二枚とも、思てた通り本箱の抽斗に入れてあつたが、これから青雲寺の授戒に一寸顔を出し、それから惠美子

のところへ行つて、十時頃にこゝへ歸つて來るのでは、とても葉村の婆さんのところへ立寄る隙はないと思はれたので寫眞は郵便で出すことにして西洋封筒に納めたのであつた。

袂の中を探して見たが、萬年ペンが入つて居ないので「お縫――」と呼んだが返事がないので――時計を見ると、あと戻りしてからもう三十分以上も過ぎて、やがて二時半にもなるので、富次郎は一寸氣が急くまゝに梯子段の下り口まで行つて「お縫！硯を持つといで――」

一〇

青雲寺へつくと、母などの居る控室へすぐ行つたが、そこには檀中の重なる人々の顏が揃つて居て、本堂などは無論人の山を築くかと思はれるほどであつた。富次郎は、遊ぶとなると可なり賑やかに遊ぶのが好きなのだが、それからまた道頓堀あたりの盛り場の氣分なども嫌ひではないが、斯うした催しごとで多人數が集るところへ寄りつくのは大きらひなのである。

「お寺も、平素のあの靜かな氣分はわるくはないが――」と思ひながら、店のものは誰れか來て居ないのかとあちらこちらを見廻したが生憎誰れも見當らず――やつと本堂の說敎壇に近いところに、母とお祖母さんと女中たちの一群が居るのに氣づいたのであつた。

說敎壇上では鹿ケ谷の方丈が――いつかも一度見たことがあるのだが、多分その鹿ケ谷の方丈が、今お說敎の最中で「これぢやお母はんに會ふのはまだ〳〵かな？」とは思つたが、然し、さきに若松屋へ行つて來て歸りにこゝへ寄ると云ふ順序にもならず、仕方なしに、本堂へつゞく敷居の上に立つて暫らく見て居た。すると急に「南無阿彌陀佛々々々々……………」と云ふ騷々しい聲がしたので說敎がそれで終るのかと思つて、母に一寸聲をかけたらすぐに若松屋へ行かうと思つてたが、その南無阿彌陀佛の騷音が途切れても、說敎はまだなか〳〵終るのではないらしく、お祖母さんの斬切頭だけがこちらから一寸見えてゐるのだが、その頭は中々後を振り返らうともせず、いつまでも說敎壇の上のお坊さん

を見つめて居るらしかつた。

仕方がないので富次郎は、かねて勝手はよく知つて居るので、和尚の室にでも引つ込んでお茶でも飲まうとしてそこへ入つて行つたが、そこも無論平素とはすつかり樣子が變つて居て、見知らぬお坊さんが十人ばかりも集つて居るのであつた。そんなところへ入つて行くのもおかしなことだとは思つたが、それよりも庭にでも出て散歩して來ようとも思つたが、市電を下りてからこゝまであるくのに――昨夜眠なかつたせいか――何だかだるくて仕方がないので、そのお坊さんの集つてる末座に入り、そこに散かつてた茶碗を一寸ゆすぎ、少しにがくなつてる土瓶の底のお茶をついで、かわいた咽喉に、ぐつと飲み干したのであつた。一杯で止めておいてもよかつたのだが、あたりを見廻すと、少しきまりがわるかつたので、また一杯茶碗についで、飲まぬわけにも行かぬので半分ばかり無理に飲んで、それからは懷の中に入れてあつた聲色集と云ふ小さい袖珍本を取り出して、この室の空氣とは全く獨立して富次郎は富次郎の世界に遊んで居た。が、側に居る一人の若い坊さんが、何だかぢろ〳〵こちらを見るので、これにも安心して居られず、丁度その時、向ふの老僧が新聞を離したので、早速手を延してそれを取り寄せ、袖珍本はもとのふところにしまつたのであつた。

それからまた、新聞をよみ飽きては聲色集に歸り、聲色にも飽きてはあたりをぼんやり眺めたりして居たが、本堂の方が何だかざわ〳〵して來たので、多分お說敎は果てたのであらうと思つて富次郎は急いでその方へ行つて見たのであつた。

するとその途中の茶の間に母たちが居た。のみならず支配人も居た。別家の松井までが居るのであつた。無論見知らぬ顏も室中に一ぱい居るのである。

「わたいさつきから、來てましてんで――」母の顏を見ると富次郎はさう云つた。母は、こちらの顏を見るとすぐ、

「あんた來てたんかいな!」と云つた。それから早速「富坊一寸こつちへお出なはれ」

さきに立つて行く母のあとからついて行くと、母はどこまでも〳〵ずん〳〵と行き、その途中の廊下では、いつの間についたのかと思ふ電燈が薄暗く點つて居るのであつた。母は藏の前まで行くと止つてこちらの顏を見るのであつた。

そして云つた。

「あんた昨夜はあれだけ留守番をよう頼んだるのに、日柄喜で藝者を擧げて騷いでたんやないか――」

「阿呆らしい、そんなことおまんもんか」富次郎は何を考へるよりもまづ反射的にさう答へるのであつた。然し、さう云つてしまうてから、母が、どうしてそんなことを早くも知つてるのか――まさかお縫が電話でそんなことをわざわざ知らす筈もなし――。

「そんなことおまへん云ふたかて、こつちにはちやんと證據があるのやさかい。」

さう云はれて見ると、その報告が誰れから行つたかは、もう問題ではなかつた。母は可なり慥な證據を握つて居るらしいので仕方がなく、

「そら、日柄喜へ飯を食ひには行きました。友達が來たもんやさかい――それはお縫にもちやんと斷つて、本町から用事でも云ふて來たらと念を押しといたんだすよつて――」

「それ見なはれ――あんたはいつでも僞を云ふさかい――やつぱりほんまやないか。」

「さうかて、藝妓を上げて騷いだやなんて、そんなことは根も葉もないことやおまへんか。」富次郎はそれだけは自信を以て云へるのであつた。昨夜は田村との話のかゝりで、あゝして千代次を呼ぶことにしたのだが、幸か不幸か、いくら待つても待つても、とう／＼千代次が來なかつたので、堺の龍神からでも呼ばうかと富次郎は云つたのだが、田村がもう疲れて眠くなつた、それよりも別莊へ歸つて眠ながら、もつと中學時代の話でもしやうと云つたので、昨夜はとうとう富次郎にしては珍らしく藝妓ぬきで四時間も五時間も酒ばかり飲んだのである。――さうや、昨夜はあないに酒ばかり飲んだよつて、それで今日はこないにからだがしんどいねんと、そんなことを考へてると、母は、

「あんた僞を云ふたかてあかんのやで――」と云ひながら、手に持つて居た赤新聞をこちらにつきつけるやうに見せるのであつた。

「なんだんね？」富次郎はたゞさう云つて新聞を受け取つた。今迄母が手にして居た赤新聞は、いつも母が老人のくせ

に愛讀して居るその夕刊だと云ふことがわかつて居たので、それには別に氣も止めて居なかつたが、かうして自分の前へ突き出されて見ると、急にその新聞記事にどんなことが書いてあるのかと胸が轟くのであつた。

然し、富次郎は、その夕刊の記事を讀むまでは、何としても、まだ、母の云ふ意味がよくわからなかつたが、さて母から示されたその「電報の間違ひ」と云ふ二號活字の見出しを見ると、かつとしたのであつた。

……富次郎が昨夜、賑やかな藝妓の千代次を呼ばうとしてわざ〳〵電報をササヤに打つたにも係らず、そして十時も過ぎ十一時頃まで待つて居たにも係らず、何の返事もなく、とう〳〵待ちぼけを食はされて別莊へ引き上げたのであつたが、さてはその電報がササヤには配達されず、

「同じ枝橋の北詰だが、東へ入るササヤではなくて、西へ入るのササキへ配達された」のか――富次郎は一心に讀みつゞけて居たが、母がまたこちらの返事を眞面目な顏して待つて居るのが、この間違ひの記事を讀んでる富次郎の心に殊におかしく。

「……その電報を受取つたササキ旅館では、何とも意味が解しかねて、千代次と云ふ藝妓を自分の方から出すわけもないが、殊に發信人のユシタと云ふ人は、旅館ではまるで知らない人なので」と書いてあるところまでよんで來ると、だん〳〵腹が立つのであつた。ササキ旅館が、そのまゝ電報を反古にして了へばこんなことが赤新聞に出る必要もなかつたのに――と、富次郎はその次をよみながら思つたのであつた。「……ササキではいろ〳〵評定した結果、ササヤの間違ひに相違ないとの、氣の利いた若い衆の計ひで、その電報が、西から東へ廻つたのであつた。そしてササヤでは無論その意味は充分にわかつたが、當の千代次が、客に連れられて京都に出かけて不在であり、然し今日の夕方までには歸つて來る筈なので、歸りさへすれは、すぐにも出さうと、ササヤでは今や千代次の歸りの一刻も早からんことを祈つて居る――」と云ふやうなことが茶化して書いてあるのであつた。

「こんな阿呆らしいことがおまつかいな!」富次郎は讀み終ると母の顏を見つめながら咽喉を飲んでさう云つた。

「そいでもこんなくわしいことが、僞にも云へますか。富坊!」

「そら、ちつとは形はおますさいな——昨夜來たんは田村と云ふ中學時代の友達だすが、夕飯に一ぱい飲んで機嫌がようなつたよつて、わたいがそんなこといらんと云ふてるのに、無理に電報打つたんやおまへんか——わたいそんなこと知りまへんがな。」

「そいでも、西田として打つたら、あんたのことやないか——」

「そんなことわたい知りまへん——」富次郎はもう辨解の餘地がなくなつたので、さう云つて突つ放して了つたのであつた。

「そんなええ加減なことを云ひなはつたかて、——富坊——」母は今日は少し、悲しさうに、聲までふるわして、「支配人が云ふてまんのやがな、そんなことが新聞に出たら、世間では、あんたがどないに道樂息子やろと思ふよつて、五千圓や一萬圓費消てもろたより、どれだけ不面目や知れやへんと云ふのや」

富次郎は、また支配人かと、鼻をならしてわざと反抗の心持を見せたが、母はまだつゞけた。「——支配人は、今日では御主人も居られないことやし、こんなことでは本家や親戚に對して濟まんと、云ふてますのや。」

「支配人にそないに責任があるのなら、腹でも切つて死んだらよろしがな!」富次郎はあんまり腹が立つたので、もうやけくそでさう云つたのである。すると母は、

「あんたはこの頃はもう無茶なことを云ひなはる、わたいはこの頃は、よつぽど大目で見てるつもりやけど、支配人の云ふことだけは、表面だけでも尤もやと、云はなければ——それに」と母は今度は如何にもこちらをおどかすやうに、「實はあの杉村はんの話でも——あんたはもう杉村はんの話はおみつからでも聞いてなはるやろが——あの話でも、こんなことが新聞に出たりしたら、もうとてもあきまへんで。媒介人さんの話では、杉村はんはそんなことは大分にやかましいようやよつて——」

それをきくと富次郎も急に不安が込み上げて來た。母が云ふやうな意味での、杉村の堅いのではなく、婆さんがこないだも云ふたやうに、先方へ行つてからさへ、おとなしくして居ればよいのではあるが、然しそんなことが大げさに新

聞に出てしまへば、いくら杉村でそんなことを云ふて居ても、やはりこれは容易ならんことだと思はれた。――尤も富次郎自身には、千代次とどれだけの關係があると云ふわけではなく（一度や二度は、それはあつたとしても）何もこれが杉村問題に大影響すべき性質のものではないのだが――あんまり馬鹿げてるので、考へれは考へるほど口惜しくさへなるのであつた。で、富次郎は、もう母の言葉を聞いて居るのが、むしやくしやして仕方がなくなつたので、

「お母はん、まあわたいの云ふことも、ちつとは信用しとくなはれ――それに支配人がさう云ふのなら、わたいから直接に云ひわけもしますさかい、今日は、支配人も來てるやうやけど、こんなとこでは云ふのもいややし――明日店へ朝から行きますさかい。」

さう云つて富次郎は、もう母の言葉もきかずに、先きに立つてその長い廊下を本堂の方へ歸つて來た。そしてなるべく支配人には會はぬようにして、急いで青雲寺を出て了つたのであつた。

出てから富次郎はほつと吐息をついた。そして取り敢へず電車道の方へ急いだが、心の中ではやはりそのことばかりが考へられた。――艶種ばかり集める爲めに、あの三面記者が廓の中へ出入してることは富次郎もよく知つて居るが、あんなにくわしいことまで、どうして――ササヤのおかみもよつぽど阿呆な奴や、會ふて理屈の一つも云つてやりたいと思つたが、そんなことを今更女將に云つたところで始まらないと考へなほして、それよりも新町へでも行つて、惠美子に會へば、このむしやくしやもなほるだらうと思つて――さう考へをきめて電車に飛び乘つたのであつた。……

「若旦那！こんなことが新聞に出てますやないか！」富次郎の顏を見ると、惠美子は如何にも待ち構へて居たやうに、やゝけわしい眼つきをして云ふのであつた。

富次郎はそれをきくと、はつとしてなさけないことだと思つたが、然し殊更平氣で、

「それかいな！それならもう見た――」

「そんなら、これはほんまだんのか！」

その言葉が、その眼つきよりも一層けわしくなつたので、富次郎は、こちらにも用意なかるべかずと思ひ、一寸聲を

高くし云つた。
「お前までがそんなことを疑がうてるのか——なさけない。お前だけはどんなことがあつてもそんなことを信じてはくれまいと思うてたのに！」
　すると惠美子は富次郎が豫期して居たやうに急にやわらかくなり「わたいは別にこんな赤新聞ぐらゐを信用するのやおまへんけど——」と、こちらの機嫌を取るやうに云つた。で、富次郎は、如何にもなさけないと云ふ表情をして
「實は今も——今日はわたいは青雲寺の授戒に一寸寄つて來たんやが、そこでもお母はんや支配人から、この新聞の記事について、やかまし云はれて來たんや。わたいもうなさけ無うなつてな！」そして昨夜は、田村が濱寺へ遊びに來たことから、日柄喜で夕飯を食べたこと、田村がふさぎ込んでたので——あんたや柚子を呼びたかつたのではあるが、濱寺でそんなことをして、もしか家へ知られたらそれこそ一層面倒になるのはわかつてるので、田村にも自分にもあまり關係のない、たゞこのふさぎ込んでる座敷を賑やかにすることだけが目的で、座敷の賑やかなので評判のあの千代次を呼ばうと云ふことになつたのだが「あの新聞に出てる通り、とう／＼來なかつたので、田村と二人は別莊へ歸つて中學時代の話でもしておとなしく二人眠たんやないか」
「まあそんなことだつかいな！」惠美子は、今度はほんとに胸の中から解けたと見えて、大笑ひをしたのであつた。
「わたいはもう、あんな支配人の云ふことが腹が立つて仕様がないさかい、もう明日からは店へ出てやらんつもりや。」
　惠美子は一寸心配顔をしたが、然しすぐ笑ひにまぎらして如何にもこちらを慰めるやうに
「支配人がどんなこと云わはりましてん？」
「新聞にあんな記事が出たさかい、支配人が本家に對して申譯がないと云ふたよつて、わたいは——そんなら申譯の爲め腹でも切つて死ね——と云ふてやつたんや」母に云つたことを、富次郎は如何にもそこに支配人が居るかのやうに、だん／＼獨りで立腹して、さう云つたのであつた。

「まあ」惠美子は、これは容易ならぬことだと云つた風に「あんさんは癇癪持やさかい――然し、今では、やつぱりそないに支配人と喧嘩をせん方がよろしますのやろ。」

「喧嘩もせんならんときには、せんならん。」今度は、惠美子に食つてかゝるやうに云つたのであつた。それからふと氣づいたので富次郎は急にやさしい口調になつて「――支配人のことなどは、どうでもええ、どうせあんな奴はわたいの心の中などはわからへんのやさかい――然しやな！」と富次郎はそこで一段力を入れて「然しお前までが、こないに疑がうたりしたら困るやないか。序やさかい云ふとくのやが、わたいはお前の外に女のことなど、今ではもう決して思てやへんのやさかい。――そんなものがあらへんのやさかい。

「若旦那！」さう頓狂に叫んだかと思ふと惠美子は急に袂で顏を掩ひながら、涙聲で「若旦那！どうぞわたしのふつゝかものを御勘忍願ひます。わたしは若旦那がこないにわたしのことを思うてとくなはるのに、わたしはほんの一時の出來心とは云へ、若旦那を疑がうたりして――どうぞお許しを願ひます！その代り若旦那！これからは若旦那の身の上にどんなことが起りませうとも、唄にもある通り、たとへ火の中水の中でも若旦那のお供を致しますよつて――」

惠美子は、さう云ひながらもだん〳〵感情を高めて行つて、しまいにはおい〳〵泣くのであつた。

「わかつてるがな〳〵。わかつてるよつて――」富次郎は、泣いて居る惠美子を抱へるやうにしてさう云つたが、然しこの時ふと思ひ出したのは杉村のことであつた。あれほどまでに話がすんでるのだから、どうせあれはまとまるにきまつてるのだが、その時には、今こんな好い加減なことを云つておいて、もしも其時にいよ〳〵ぬきさしならぬことにでもなつたら、とさう思ふと、富次郎は急に口を噤んで、抱へて居た手を離したのであつた。「泣くのはお止めよ。みつともないぢやないか。」

で、惠美子も涙を拭ひ、それから機嫌なほしに一ぱい飮まうと云ふことになつたが、そして惠美子は甲斐々々しく用意に取りかかつて居たが、富次郎は、今思ひ出したその杉村のことが急に氣になり出したので――どうせ今夜からは幾日間かこの若松屋に居ることにきめて居るので、急いでこゝでお酒を飮まねばならぬこともなし、それよりも氣にかゝる

方を早く片付けてから、そして歸つてからゆつくり飲んだ方がよからうと思つたので、

「惠美子――」銚子を持つて入つて來た彼女に云つたのであつた。「わたいな、大事なことで、忘れてたことがあるよつて一寸そこまで出てくるさかい――」と立ち上りかけた。

惠美子は妙な顔をして、また少し疑ふやうな口調で「今やないかてよろしますやないか、折角あついのが出來たのに！」

「大事な用事やさかい！」富次郎が重ねてさう云ふと、惠美子は急に何か氣づいたやうに快話になり、

「そんならさきに行といでやす」と云つた。それでも氣にかゝるのか「なんでんね？」と念を押すやうにきくのであつた。

「ぢきに歸つてくる――」

富次郎は夢中で外に出たが、電車道まで出て、さて葉村の婆さんに、どんな用事があるのかと考へて見たが、別に今すぐ會はねばならぬ用もなかつたのだが「こんなやつたら寫眞を郵便で出さんと置いとけばよかつた――」だが、その後何か用事が起つて、婆さんはこちらに會ひたいと思ふてるかも知れない。それにひよつとしたら今の赤新聞の記事でも見てるかも知れないから、それの辯解もしとかねばなるまいと思はれたので――。

「ぼんち、えらいことになりましたやないか。そやさかい、わたいがあれだけ御忠言をしてあるのに――」やつぱし葉村の婆さんは富次郎の顔を見ると、すぐにさう云ふのであつた。こちらも一寸興奮せざるを得なかつた。

「赤新聞のことやろ？――それ、あんたがそんなことに氣を揉んでるやろと思たよつて、一寸その邊まで來たさかい寄つて見たんや――」

「そいでもぼんち――」氣早い婆さんは、富次郎がそれだけ云ふと、すぐにこちらの云はうとしたことを察したらしく「そら、あんたのことはわたいはよう知つてますよつて、こないだもあんたはあないに云ふてやつたんやさかい、そんなことはあるまいとわたいは萬々さう思てますけど――然しあんなことが新聞に出たら困りますやないか――今丁度大

事な時やのに！」
「あんたにも似合はんことを云ふな！」富次郎は出來るだけの抗議は必要だと思つた。尤も婆さんにそんなことをいくら抗議したところが仕樣がないわけなのだが、それでも富次郎は杉村の親たちと面談してるかのやうな昂奮した心持で云つた。「あんな赤新聞がどれだけ信用あるねん、それにあの記事を見てもわかるやうに、友人と料理屋で夕飯を食うて居てその場の座興で千代次と云ふ藝者を呼ばうと云ふことになつた、それで電報を打つただけやないか、それがどれだけ悪いのやろ。」

これだけ云へば、こんな社會のことにはよくわかつてる筈の婆さんだから、すぐにもこちらの心持がわかるだらうと思つたのだが、婆さんは案外にも强硬だつた。
「ぼんち、あんたはそない云ひなはるけどな！そらわたいやつたらそれだけのお言葉でようわかつてますわいな、けどもな、杉村はんは、よつぽと堅いねんさかいな！」

馬鹿なことを云へ、杉村の娘の品行が、どんな風かと云ふことは富次郎には、はや、あれだけ田村からきいて知つてるのだから、婆さんのその言葉に對してあの小學教師との關係のことも素ツ破ぬいてやらうかとも思つたが、然し今更そんなことを云ふのも――それにもしか自分の妻になるものなら、或はまだ婆さんが知らぬことを、そんなに大げさに云ふでもないと思ひ返して、
「でも杉村はんは、これまで遊んだのはかまへんけど、これからそんなことがないやうにと、あれほどよう物のわかつたことを云ふたはるやないか。」と云つて見た。
「ぼんち、それはさうだすけど――そんならよう考へて見なはれや、以前のことはええとしても、今にもこの縁談がきまらうとしたるその時に、今でさへもこれやつたらと、だれでもがさう思ひますやないか。」
「――そんならもう勝手にしたらええがな！」富次郎はまたむしやくしやして來たので、さう云つて了つた。
婆さんは默つて居たが暫らくしてから、

「ぼんち、何もあんたはおこりなはることはおまへんやないか、わたいも何もぼんちをおこらすつもりで云ふたんやおまへん。——つまりは杉村はんが承知さへして下はつたらそれでえゝねんけど、もしあんなつまらん新聞のことで、話がおぢやんになつたら、わたいかて、これまで骨を折つてつまりまへんやないか。」

「そらあんたの心持もよくわかつたるよ。」富次郎もさう云ふより仕方がなかつた。「わたいかて、何もあんたにおこつてるのやないけど——赤新聞があんまりひどいよつて。」

いつまで議論をして居ても、この怨みの持つて行きどころがなく、果しがないので

「また來るけど、一寸そこまで來る序があつたもんやさかい——」さう云つて富次郎は婆さんの家を出たのであつた。さうだ、どこへこの怨みを持つて行きどころもない、赤新聞は悪いと云へば云へるが、然しあれも別に(あの甚七が鐵道自殺をした時のやうに)悪意を込めて書いたところは少しもなくて、寧ろおもしろい讀物の一に過ぎないのではないか。遊蕩生活をして來た富次郎に取つては、赤新聞の記者が、この西田富次郎と云ふ有名な遊蕩兒を知つてのことか知らんでのことかは知らぬが、あれを、西田富次郎を、新聞が問題にしてるだけでも寧ろ光榮ではないか。——なにも本家にすまぬとか、縁談が破れるとか、そんなにやかましく云ふほどのことやない——、富次郎は、もう仕方がないのでこんなことでも考へながら、あまり遠くもない新町までをぶら〳〵とあるいて居た。

二

若松屋へ歸ると、それでも惠美子は機嫌よく迎へてくれた。さきほど葉村へ出がけに飲みかけて居た室は縁喜が悪いからと云ふので、南側の廣い座敷へ移つた。そして二人で今後のことなど話し會ひながら飲みつゞけたのであつた。——だん〳〵惠美子に實意のあることがわかると、現にさきほども、たとへ火の中水の中でも一緒に行くと、あれだけこちらに誓つたのだから、もうこゝまで來れば男の意地として、かぎやの家が反對しようが、杉村の方から懇請しようがどうしても惠美子と添ひ遂げなければ仕方がないと——話をしてゐるうちに、だん〳〵昂奮して、決心して了つたのであ

る

――さうだ、葉村の婆さんがあんなに云ふくらゐだから、杉村の方もきつと今度の事件でおぢやんになるに違ひないそれが明かにわかつて居ながら、男らしくもないあのやうに度々足を運んで杉村の機嫌を伺はうとしたのは！さう思ふと富次郎は自分ながら自分の卑しい行動が眞に唾棄されるのであつた。

「あの寫眞は何よりもさきに取り返さなければならぬ、あんなものが杉村へ屆けられるのは侮辱の上の侮辱や。」さう思ふと富次郎は早速電話口に立つて行つた。

「あなた、電話ならわたしがかけてまゐります。」と云ふ惠美子の言葉に返事もしなかつた。

電話口に立つてから葉村の番號を思ひ出すのに一寸困つた。あの花子との關係のあつた頃はよく葉村へ電話をかけたものだが――尤も葉村は、自分で電話を持つて居るのではなく、向ひの酒屋で借りるのだが、その酒屋の家の名を忘れたので電話帳を繰ることも出來なかつた。

仕方がないので座敷に歸らうとしたが、その時ふと舊い〱記憶が蘇つて、そしてその酒屋の電話番號を思ひ出したのであつた。――それは花子のことに關して居た。もう二三年も前のことになるが、初めて花子を知つたころ、「こゝへ電話をかけなはるのやつたら花子はんの名を覺えときなはつたらよろしまんねん。前の酒屋で借りるのだすがその番號が南八七五どうだす、ぼんち、よもや花子はんを忘れなはらしまへんやろ、そいだけこの葉村へ電話をかけることも、いつまでも忘れて貰ひまへんやうにな………」婆さんがそんなことを云つたのであつた。富次郎は今更そんな舊いことを思ひ出して、苦笑しながら受話機を取ると、

「あのな、南八七五番」と呼んだ。すると間もなく

「どなた！」と如何にも人を怒鳴りつけるやうな聲が答へるのであつた。「あ、酒屋の主人や、」と富次郎はすぐ、あの頃もよく電話をかける頃に聞いたその聲を思ひ出した。その怒鳴るやうな聲がまた如何にも父によく似て居て、あの頃葉村へ行く度にその電話の話をすると、婆さんがいつでも「なんぼ、ぼんちのお言葉でも酒屋の御主人の聲をどうしよ

うもおまへんさかい」と云って笑つたのであつた。…………

「あの、すみまへんが、向ひの葉村に一寸取りついとくなはらんか。」と富次郎はその怒鳴り聲に對して恐縮して頼んだのであつた。都合のよいことには酒屋の主人は、どんなときでもこちらの名前をきかないのであつた。尤もおかみさんの時はいつもきかれるのでどうせ出鱈目のことを云ふてはおくのだが、然し斯うして急いで居るときなどは、こちらの名前などをきゝかへさずに、すぐに取次ぎしてくれる主人の方が都合がよいのであつた………

「どなたはんだす――」婆さんの聲だつたので、富次郎はすぐにもあの寫眞取り返しのことを申渡さうとは思つたが、然し、婆さんのその聲をきくと、今一度何か先方の様子でもきいて見たいやうな氣がして

「わたい西田――」さう云つてから靜かにあとをつゞけた。「さきほどはお邪魔を――」

「ぼんちだつか！」婆さんの聲は急に鋭くなつて「ぼんち――今、あんたが歸らはつたあとへな、案の定杉村はんの番頭はんが來やはりましてな――」富次郎はそれをきゝながら不安な胸がどき／＼おどるのであつた。――何だ、どうせ寫眞を取りかへす爲めに今電話をかけたのやないかと思ひながらも――婆さんが尚ほ

「杉村はんでもあの新聞を見やはつて、それで番頭はんがそのことで來やはりましたんやが、なんぞわたいが僞でも云ふたやうに取つて先方では、とうない御立腹だんのやが。それで――」

富次郎はもうあとをきく必要がなかつたのでこちらも一段と聲をあらゝげて、途中だが、云つた。

「お婆はん――實はこちらにもちよつと都合があるよつて、おひるに郵便で出したわたいの寫眞を、ぢきに戻して貰いたいのや」それだけではまだ手ぬるいと思つたので「もう杉村の話はこつちから御免や！」

婆さんが驚くかと思ひの外、案外平氣で、

「それでだすな、ぼんち――」と、まだぐづ／＼つゞけさうになつたので、そしてその時丁度後に惠美子が來て「長い電話でんねな？」と云ったので、

「もうこちらの用事はそいだけ！送り返して貰ふこと間違ひなくたのみまつせ――」さう云って、ぷつつり切つて了

つた。婆さんの聲が何かぶつ〲云つたが、富次郎はそれをきかないで受話器をがちやんと下したことが氣味がよかつた。

富次郎がまだ電話を去らずにぼんやり立つて居たので惠美子は

「まだ、どこぞへ？」と詰るやうに云つた。

「あ、本町の家へかけるのやさかい」富次郎は自分であとじさりをして惠美子をその前にすゝませ「——一寸呼び出してんか。」

あ、つかれたと富次郎は思はず呟いて居た。昂奮してると云ふことが心臟の皷動でよくわかつた。

「みなみのな、七百三十四番から三十七番まで——」さう呼び出してる惠美子は案外落ちついてるやうであつた。「あんさん、何をお家へおかけやすの？」

「——出たら、僕が云ふ！」

「——あ、もし〲西田はんでつか——は、一寸おまちを——」

富次郎は惠美子から受話機を受取つたが、それは兄の聲であつた。——丁度都合が好いと思つた。

「新兄さんだんな！——遲うにすんまへん。」

「富坊か——お前どこからや濱寺からか？」

「いゝえ——」富次郎は、實は今電話をかけやうと思つた目的は、今日は都合で濱寺へは歸られぬから、折角留守番を頼まれてるのやが、と云ふこと、それから尙ほ當分は…………

「お前はどう思てるか知らんけど、今日夕方にはこの本町邊一ぱいにあの赤新聞が讀賣りに來たんで、本町界隈やかましいことやがな。それに今、支配人もみなまだ店に集つて相談してるのやが、本家に對しても濟まんよつて、支配人の云ふことには親類會議をして、お前の身の處置をせにやならん、さうしなければ本家に對して濟まんと云ふのやが——お前一ぺんこゝへ來て、みんなの前であやまつたらどうや——」

富次郎はもう癇癪玉が破裂して了つたのであつた。それに對手が不得要領の弱蟲の兄貴なので、こちらも一寸元氣になり「お母はんにも言傳しときました通り、支配人が本家に對して濟まんのやつたら、その申開きに支配人は腹を切つて死ぬがええ！」

「富坊！　そらお前何を云ふてるのや」それは新兄さんにも似合はぬ大聲だつた。全くこちらの鼓膜がきゆツといたくなるほどであつた。だが、富次郎は平氣を粧ひながら云つた。

「わたいは勿論申譯の爲めに店は缺勤します。もし御用事がありましたら、これからは南一六三二番に電話をかけとくなはれ――」さう云つて、きつぱり電話を切りかけたが、兄の聲が大急ぎに追ふて來たので、葉村の婆さんの時のやうにはやはり切りかねて、まだ受話機を持つて居た。

「南の？――一六三二番と云ふと？　何町の何をしてる家や？」新兄さんにしてはその質問はあまりに用意周到だとは思つたが――然しあとの言葉の何をしてる家や？は、あまりに野暮な質問ぢやないか――

「今一寸それはいへまへん――とにかく用事がありましたら――」さう云つて今度はきつぱり切つて了つたのであつた。

「なんでんね？　そないにやかましいこと云やはつて？」まだ惠美子が後に立つて居た。そして心配さうな顔付をしてさうきいたのであつた。

「あ、は、は、は、…………」富次郎は悲しいやうな、腹立たしいやうな心持で胸が一ぱいだつたので、無論惠美子には何とも答へやうがなかつたので、たゞ大きくさう――自分ながらも氣狂ひのやうだと思ふほどの、たゞさう笑つたのであつた。

二

四五日はまだ好いが、もう十日はかりも斯うして終日お茶屋の座敷に居ると云ふことは可なり退屈なので、それに連

日の馬鹿騒ぎも、少し落ちついて見ると、この上毎晩續ける興味もなかつたので、今晩は二人連れで道頓堀でも散歩して、それから何か甘いものでも食べて來ようと、さう惠美子と相談して居たところへ、

「かぎやの番頭はんが見えました。」と仲居が通じて來たのであつた。

「何や――こないだ見たいに歸らしたらええがな……」富次郎は、二三日前に店の小僧が新兒さんの手紙を持つて、お供して歸りますと云つて來たのを、たゞ阿呆らしいと、突き返してしまつたので、今夜も仲居の手前、やはりさう云つて見たのであるが、今夜のは小僧ではなく、番頭だと云ふと、さて誰れが來たのかと云ふ好奇心も起つたのである。

「このお方でんね――」仲居は帶の間に入れた名刺を、二三分間もぐず／＼して、探し出しながら云つた。

富次郎は急いで名刺を取り上げて見た。「松井作平」の四字が眼に入ると思はず聲を勵まして「惠美子！ 別家が迎ひに來た。」

すると仲居が云つた。「あの、若旦那にやおまへんねん。惠美子姉さんに會ひたいと云ふてやはりまんねん。」

「さうか――」

「わたいにだつか」惠美子は仲居にさう聲をかけたが、實は富次郎の方へ、會はうか會ふまいか、どうしまひやうと云つたやうな表情をして「――わたいに何の用があるのやろ。」

「會ひたいと云ふなら、會ふて見たら好えがな！」松井はかぎやの幹部の中でも、幹部と云ふよりは今は別家してるので、顧問格だが、とにかく富次郎に對しての舊くからの同情者なので、或は松井が今度のことにも豫想外のよい解決をつけてくれるのかも知れない――或は、それとなく惠美子を見に來たので、もしか惠美子がこちらの嫁にするに足る女なら、斯うして思ひ合つた仲だから仕方がない、夫婦にしやう――と、でも云ふのかも知れない。「ともかく會ふて見たらええ――松井は店でも一番物のようわかつた男やよつて。」

「そんなら會ふて見まひやうか――わたい、嫌やけども。」惠美子がさう云つて廊下へ出て行つたのを、富次郎は一寸呼び返して云つた。

「あのな、わたいも松井の話をきゝたいさかい――わたいはこの室に居るさかい、こゝの襖を閉め切つて、この隣の室へ松井を案内しなはれ。わかつたな！」

「そんなら、さうしまひやう」惠美子は笑ひながら隣室との間の襖を閉め、それから廊下との襖も閉めて、「わたい何やしらん嫌やけど。」と云ひながら玄關へ迎ひに行つたのであつた。

煙草を半分も喫はぬうちに――間もなく惠美子の足音が廊下に聞えて來た。そのあとにみしり／＼とつゞいて來る大きい足音は、無論松井であることがわかつて居た――彼れは一年志願兵の、砲兵の伍長で、然し退營してからもう可なりの年になるのだが、やはり歩き方は室内にも係らず兵隊流なのである。

向ふは無論知る譯はないのだが、然しこちらは斯うして襖一重を隔てゝ、いつも聞く親しい人の聲を、知らぬ顏で聞いで居るのは、殊に事件が事件だけに、何とも云へず息苦しいのであつた。卑怯なやうでもあり、然しまた云ふに云はれぬ興味も湧くのであつた。……どうか松井樣、樣、樣、樣、わたしの爲めのよい話を話してくれ――

「どうぞお敷きなして。」惠美子が襖の向うでさう云つて居る。松井が座布團を敷くことさへも遠慮してるのか。では、無論お茶屋へ遊びに來て敷物を遠慮する正直者もあるまいから、では松井は、もはや惠美子に對して、こちらの細君とでも思つて、そのつもりで禮義を正して居るのか――それにしても惠美子は堂々たる態度のやうに、こちらからは思はれるのであつた。田村や自分に對しての外の場合、友人や親戚としての人間を惠美子が取り扱つたことは、富次郎は無論これが初めてではあるが――

「今日は、わたしがあなたに折入つてお願ひしたいことがあつてまゐりましたんやが」松井はさう叮嚀に云つてから、思ひ出したやうに今一度名刺を惠美子の前に出して「さきほども仲居さんに一寸申上げましたやうに、私はかぎやの別家のものですが、然し特に富坊のことは、私の胸にいつも心配をして居るもので、どうか、これから私が申上げることはその富坊の爲めのほんとの忠言――身の立つやうにと思ふその忠言やと思てきいて貰ひたいんですが――。」

「はい」

「こんなことはあなたに對して直接にお願ひ出來た義理やおまへんけど、然し評判をいろ〳〵きゝますと、あなたは物のようわかつたおかたやと云ふことも、きいてますので――」惠美子はたゞ默つて、多分うつむいてでも居るのか、松井もそこまで云つてからは一寸さきが出ないらしく、煙管を、ぽんとはたく音がしたばかりで、一寸の間の沈默が、こちらで聞いて居る富次郎の胸にまで、もの凄いほどに――

「で、わたしは甚だ簡單明瞭に申しますが――」だがやはりそこでも一寸行き止つて松井は「ですが、わたしもこれで血も涙もある人間だと、自分では思つてるのですが――どうでせう、今度の富坊との仲は、きつぱりと切れて貰ひたいのですが――」

「――……」惠美子が默つて居るので、然しその默つてることが、如何にも座敷が緊張してることが、こちらからも充分察せられるのであつた。富次郎としては、松井の云ふこともよくわかつてるので、また惠美子の默つてる心中もよくわかつてるので、然し他人のことよりも、さて自分はどうかと、自らにきゝかへして見たが、反つて自分自身には、何と答へてよいか、まるでわからないのであつた。たゞ「松井にも、然し、あれだけの親切があつたのか」と、それが如何にも嬉しかつた。

惠美子はいつまでも默つて居る。然し、惠美子が默つてるなら、松井は何とかもつと惠美子にわかるやうに言葉を盡せばよいではないかと、こちらの方がはら〳〵してるのに、松井もやつぱり默つてるのであつた。――松井のはそれではあまりに簡單明瞭過ぎる――。

ふと耳をそば立てると――こちらの心をそのまゝ彼女の心の中へでも通じたのか――惠美子の聲は如何にも遠慮勝な小さい聲ではあつたが、然し對手の松井には充分きつい怨みの――「それはお言葉はようわかつては居りますけれど、わたしも若旦那には、もうどうしても別れられん中になつて居りますので――」

「それはよう〳〵わかつては居りますけどもな！」

「わたしが若旦那を大事にして居りますのは何も若旦那が大きいかぎやはんのぼんちやさかい大事にしてるのやおまへ

んので、若旦那がどないに裸になりやはつても、わたしはいつまでもかうして若旦那をお預りしておきますのやよつて――」

富次郎は、松井の親切心にも涙ぐまれたが今さう云つてくれた惠美子の言葉には、もうほと／＼胸が一ぱいになるのであつた。――それにしても松井が初め來た時には、富次郎には何か非常な吉兆のやうに思はれたのだが、こちらが望んで居ることゝはまるで反對の、別れ話とは――。

「實は――」と松井がやつと口を開いた。「こんなことはあんたに云ふてよいかわるいか知れまへんが、もう何もかも打ち開けて御相談するのだすが、實は富坊にはこの頃縁談がありますので、こちらの方が、手が切れさへしますれば――」

松井のその言葉をきいた時には、富次郎も一寸ぎよつとしたのであつた。それは無論具體的に云つてるのでないから惠美子もほんとのことゝは取るまいが、もしかこないだからのあの杉村の話が、松井の口からみんな話されるやうなことになつたら、然しその時には何でもなくこちらは惠美子に、さうだ――そんな話もあつたが、そんなことはこちらの眼中にはないので――と、さう云ふまでのことだ。だが、松井の云ふその杉村の話がその後どうなつたと云ふのか――いや阿呆らしい、今となつては、どんなことになつて居ても――

すると今度は、惠美子は、さきほどのやさしい靜かな言葉と打つて變つて、

「その縁談のお話は、私も、もうとつくから聞いて居ります。」惠美子がさう云つた時富次郎は、惠美子がどうしてそれを知つてるのか、そして知つて居てこないだから――富次郎は冷汗がぞつとするやうだつたが、惠美子がそのつぎを語つたので、ほつとした。

「若旦那もその縁談は、もうとつくに思ひ切つたのやと云ふて居られますので――なるほどわたしがあつた爲めに、親御さんのおきめになつた縁談がつぶれてしまふのは何とも申譯はございまへんが、でも、わたしの方で一時的に若旦那を迷はせて居るのなら、わたしもお詫びは致しますが、わたしが若旦那をお預りしてるのはそんな一時のことやございまへんので――一生も二生も――」あとが急に途切れたと思ふと、そしてその氣わいが富次郎にも唯事ではないと思は

れたので、急に立ち上つて襖の隙からのぞいて見たのであつた。「あ、惠美子――」惠美子が、松井の膝の前に泣きくづれて居るのであつた。

松井の當惑したやうな顔が、富次郎にはおかしいとも悲しいとも見えたが、また、そつとこちらの座に歸つて腕ぐみをしたのであつた。――するとふと五六日前、あまりのつれ〴〵にすぐ近所の活動寫眞を見に行つたとき、どうせそんなものは、つまらないものだが、その新派劇で見た、藝題は何だか忘れたが、丁度今日の富次郎と同じやうな場面で、然しその時の藝者は惠美子とは反對に「それではきつぱり思ひ切りますから」と親たちに誓ひ、次にその男の座敷に出てからは、まるで昨日とは打つて變つてさん〴〵にその男を冷遇し、男はとう〳〵怒つてそのお茶屋を出て行く――そのあとでその藝者がハンカチを眼にあてゝ獨りでおい〳〵泣いて居たと云ふ場面だつたが、そしてその時も惠美子は「阿呆らしい、ほんまに男が可愛いならあんな阿呆らしいことが出來るもんか、ほんまに二人の腕で何もかも築き上げて行たらええやおまへんか――若旦那どうです。」と、それは言葉は冗戯のやうではあつたが、惠美子の本心はやつぱりそれであの時に富次郎がたゞにや〳〵笑つてると「たよりないことや――」とそれも冗戯のやうにだが、おこつて居たのであつた。………

松井はやつぱり默つて居るやうであつた「あの支配人になら、なんぼても、いやもつと〳〵ひどいことも云ふて貰ひたいのやが、こちらに厚意を持つて居る松井には、あれほどまでにすげなく云はんでも――」富次郎はそんなことも考へられたが、然し、惠美子の云ふことも尤もで、もしかあの活動寫眞で見たやうに「よろしうございます」と惠美子がこの場合承知したのだつたら、それこそ自分は、あん冷酷な人間ばかりのかぎやへ――どうしてこの富次郎はかぎやへなど二度とおめ〳〵歸られようか………

「あゝ、考へれば考へるほど、何にもわからんようになる――」たゞ松井にだけはたゞ一言頭を下げてお禮を云いたいやうな氣もするのであつた。と云つても決して惠美子が不道理を云ふてるわけではなく、惠美子に對してこそは、ほんとに――ほんとに今日と云ふ今日こそ、最後の惠美子の堅い決心をきいて、富次郎もこれでやつと安心したのであつた

杉村のことなどを考へると、惠美子に對しては、ほんとに〳〵濟まないことをして居たのであつた。
「あなたのお言葉で――御心中は、ようわかりましたよつて、わたしはこれで失禮致します。」松井は急に立ち上つた。
惠美子は容易に立ち上るけわいもなかつた。松井はまた云つた。「今日は富坊にはお眼にかゝらずに歸りますよつて、どうぞよろしう云うて下さい。」
松井が廊下に出たので、惠美子も、無言のまゝ、口にハンカチをあてゝではあつたが松井を玄關まで見送つて行つたのであつた。――思はず富次郎は、またそれを隙見して居た。そして二人の姿が曲り角で消えると、いつの間にかそれに手を合せて、そしてわれ知らずに泣いて居た。眼からはぽた〳〵限りなく涙が溢れて、そして胸一ぱいにつまるやうであつた。――すぐに廊下に足音がきこえた。それは惠美子だと云ふことがわかつたので、富次郎は、自分のこのさまを見られるのが恥かしさに、あてゝ居たハンカチを眼から離すと、あかるい電燈がぱつともとの通り輝いて、いつもの通りのあたりまへの世界なので、今迄泣いて居た自分が阿呆らしくなり「松井もう歸んだか」と襖を明けて廊下に出たのであつた。

一三

その事件のあつてから四日目の朝である。富次郎は岡町の椎原おぢさんからの手紙を受取つたのであつた。――無論それは今度の事件に關してであることはわかつて居たが、そしてもう凡てを覺悟して居るのだが、その封筒の表面に「若松屋方西田富次郎樣」と書いてあるのを見ると、富次郎は何だか淋しいやうな氣もするのであつた。
おぢさんの手紙は簡單ではあつたが、情誼はよくつくされて居た。――二三日の中に、富次郎の身の處置に關する親族會議が催されるのだが、今度の會議は、實はこの前に開くと云ふて居たあの赤新聞事件の内輪會議ではなく、今度は本家の主人も出席することになつて居るので、云はゞ富次郎の身に取つては尤も重大な、最後の會議であると云ふことがその書中に明かに書いてあつた。――富次郎は、さう云はれて見ると今更ながら自分の身の如何にも危險な淵に立つて居

ることを思ひ、空おそろしくもあつたが、そしておぢさんの言葉のかず〳〵は、しみ〳〵ありがたいとは思つたが、最後の文句に「――この先き永く、お茶屋の女などと添ひ遂げると云ふことは殆んど不可能にして、又これまでそんな女に實意のあつたためしなし。然るに一方お前の今日の立ち場は、もしかその女と添ひ遂げるに於てはかぎやの體面上、如何にしてもそれを許すこと能はず、お前は今後かぎやと永久に義絶せねばならぬ。それでもよいか。就てはお前の意見もとつくり聞きたし、この手紙つき次第、一度私方まで來るやうに――」

誰れが云ふても同じ言葉、それもこの富次郎にはわからぬこともないが、今となつてはもうどうすることも出來ない立ち場になつて居る。おぢさんも何故「二人の間を添はせてやると云ふてくれないのか」富次郎はもう、これから岡町へ出かける根氣もなかつた。――せめて一度、話はどうなるとも、おぢさんだけは會ふ必要はあるかとも思つたが、毎日々々同じことばかりで、然もみんなが、わかつてるやうでわからぬことばかりを云ふので、富次郎には今では全く根氣がなくなつて居るのである。

「折角のおぢさんのお言葉やが、行くことは――」手紙を卷きおさめながら富次郎は獨り言を云つた。だが、何の返事もせずにおくわけにもいかないので、ともかく手紙でなりとも、くわしい事情を述べやうと思ひ、机の上の卷紙を廣げては見たが、さて何を書かうかと思ふと――もし云ふなら二丈や三丈の紙ではほんとの思ひが屆かぬ氣がして、富次郎は初めは書いては破り、書いては破りして居たが、もう書く氣もなくなつて、さてはほんの三くだり半の手紙になつて了つたのであつた。

「今度のことはいろ〳〵わたしのわがまゝで、まことにすみませんが、わたしとしては今はどうしやう術もなく、たゞ其親族會議の決議の一日も早く通知せられることをのみ待つて居ります。どうかおぢさん！　何分によろしくおたのみ申上げます。」

その手紙は富次郎自身散歩かたがた投函に出かけたのであつた。一つにはまた折角のおぢさんの親切にも背くと思つて岡町へ出かける代りにもと思つて、自分で投函に出かけたのでもあつた。

そのタ方――惠美子がこちらに歸つてお湯にでも行つたのかと思つて居ると、一時間ばかりも見えなかつた惠美子が元氣のない靑い顏をして室に歸つて來たのであつた。

「今お母はんからのお使ひが見えましたんや。」

「誰れが來たんや――」富次郎は、それでもやはり氣になるので急いできゝかへした。

「わたいにだすが――來たんは、あのそれ、宗右衛門町の鶴丸と云ふお茶屋のお婆さん――」

「は？」あの婆さんは先代からの知り合ひではあつたが、然しあまりに思ひも寄らぬ人が來たので富次郎も一寸眼を見張つたのであつた。「いろ／＼の人が來るのやな！――それで？」

「お母はんから賴まれて來やはつたんだすが。やつぱりわたしに切れてくれと云ふ――」

「ふん――」もうそれには富次郎も答へる元氣さへなかつた。

「切れてくれるなら、わたしにお母はんから三千圓下はるんだすて――」惠美子も、もうそんな別れ話には聞き飽いて居るのか、何の昂奮もなしにさう云ふのであつた。然し富次郎は、その三千圓には一寸耳を傾けた。――富次郎が箱根へ逃げて行く前、頸がまわらぬ借金のうちへ千五百圓出してくれと云つたことを聞き入れなかつた母が、今度は三千圓出さうと云ふのは――。「その三千圓わしに貰をか。」

「そんな冗戲云ふてるときやおまへん」それでも惠美子は眞面目な悄で、こちらをたしなめるやうに云ふのであつた。

こんな風で――無論二人の生活は眞面目ではあつたが、何の昂奮も緊張も熱もなくなつて、ないことはないのだが何だか疲れて、然し夜は一時までも二時迄も同じやうなことをぐづ／＼話し合ひ、朝は十二時迄も、ともすると一時までも寢床の中に居て、夜ともなく晝ともなく、いつの間にか數日が過ぎて行つたのであつた。

――鶴丸の婆さんが來てから丁度一週間目の夕方であつた。突然かぎやの家から一通の封書が配達されたのである。

「へえ、來ました。」惠美子がさう云つてさし出した時、富次郎はぎよつとしたが、それが書留郵便なので「お母はんからお金でも送つてくれたのかな」と思ひながら開いたのであつた。

「どんた決議だすやろ！」惠美子は、呼吸さへせか〳〵云はせながら覗き込んだのである。

「あ、さうか！」富次郎は、なるほどその爲めの書留かと初めて氣がつくと、今度は惠美子よりも一層呼吸のはづむのを覺えたのであつた。

卷紙はほんの五六行書いてあるだけだつたが、美濃罫紙に書かれてある――それを開くときには、富次郎は思はず手がぶる〳〵と震へて居た。………

一、富次郎はかぎやから義絶すること、

二、西田家より除籍し、父の舊姓松川をつがせ、廢家松川を再興せしむること、

三、一時金五千圓を與ふること、以上。

決議書は僅かにこの三ケ條ではあつたが、然しこの三ケ條は、富次郎に取つての、最大苛酷の宣言であつたのである。――あまりのことに口も利けなかつた。富次郎はいつまでもぢつとそれを見つめて居た。惠美子は覗いて居た頭を引つ込めたが、やはり何とも云はなかつた、

「表面的でなくとも、惠美子と添ふことは許してくれて、ともかく店へは通勤させるだらう――」いつまでもさうして通勤することが富次郎の本意ではなかつたが、まあそのくらゐのことになるのだらうと思つて居たのだが、これはまたあまりに案外な、斷乎たる決議ではあつた。支配人に、あまりに涙がないとも思はれたが、然しこの場合、支配人だけを怨むには、あまり會議の陣容が調うて居るやうな氣がした。無論本家の主人も出席したと云ふからには、笹原のおぢさんだけの意見が通るわけもなく、まして母や兄が何と云つたところで――だと云つて本家の主人がそれほどひどい人だとは――富次郎はあの、老人だが然し可なり物のよくわかつて居るあの本家の主人をのみ憎しみの對象とするわけにもいかなかつた。さうすると、その會議も、誰れが云ひ出すともなくさうした結果になつて了つたのだと云ふことも察せられた、そしてすべてが自分のだらしのないこのぐづ〳〵した生活が――さう思ふと、我ながらこ　頃の生活がなさけないものに思はれ出したのである、そして、今はもう涙もなく、たゞこの墮れ切つた自分の身と心とを何とかして斷

ち切りたいやうな——然し、ほと〳〵自分を見返つて見ると、自分ながらいとほしくてならない氣もするのであつた。

「あんさん、こんなひどいことを云はれてどうしやはります？」やつと惠美子がさう云つた。

「どうすると云ふても今更仕樣がない。」

「それでも、あんまりやおまへんか——わたしはどうなつてもええけどもあんさんが氣の毒で仕樣がないよつて、どうだすやろ、思ひ切つて暫らくでも別れて見たら！」

　さう云はれたので富次郎は初めて我れに歸つて、そしてまた初めて强い昂奮が湧き上つて來るのであつた。「——そんならお前は、今になつて僕を見限るのやな！」

「阿呆らしい若旦那！」惠美子は、こちらの言葉をきゝ終らぬうちに叫んだ。「わたしの心を、そんなものやと、あんさんはまだそんなことを思てゝでんのか？」松井の前で泣いたやうな涙は惠美子にはもう見えなかつたが、言葉には火の出るやうな熱があつた、怒りがあつた。

「そんなら今になつて何故そんなことを云ふのや！」

「いゝえ！」惠美子は如何にもしんきくさゝうに顔をしかめて、然しまた言葉の調子はやわらげて「わたしの思ひますのには、なんぼ親族會議やと云ふても、現在血をわけたお母はんも居やはることやし、それに松井さんかてあれだけ實意のある人だすさかい、あんさんをこんなひどい目にあわして誰れも喜ぶ人はあらへんのやけど——わたしと云ふものが居る憎さに、たゞそればつかりに、こんなことになりましたのやさかい、それでわたしさへ手を切れば、若旦那のお身體は向ふさんは欲しいのやさかい——」惠美子はここまで云ふと、とう〳〵口籠つて了つたのであつた。

　で、富次郎も急に涙が込み上げて來て——なるほど惠美子が說明するやうにお母はんやおぢさんの心持も、まんさらあの決議書に現はれた通りでもあるまいに——それからまたその人たちの心を押し計つてから結局惠美子自身が一人だとわかつての惠美子の涙をも察すると

「それでもお前は、こないだの活動寫眞で、あないに云ふたんやないか——それを今になつて！」さう云つてから富次

郎はその言葉が惠美子を慰め得たであらうと思つて、そして自分も急に感傷的な心持になつて居た。

「わたしの心は――そやさかい、いつまでもあの通りやと云ふてますやないか。わたしはなんぼさうかて！」

「そんならわしが何ぞ、この決議書を見てこゝを逃げて行かうとしたか。どこにそんなことを云ふた？」

「いゝえ、何もそんなことは仰しやらへんけど――」惠美子はとう〳〵、大聲においおい〳〵と泣き出して「そんなら若旦那！　後生だすさかい、この惠美子をいつまでも捨てんと、たつた一言聞かしとくなはれ！」

「誰れがお前を捨てるのや！　捨てゝどうするのや？」

すると惠子美は、急に、こちらに抱きつくやうにして「若旦那ありがたうございます。もうわたしは死んでも本望だすかい」今迄云つた二三の言葉は、富次郎には、たゞ惠美子を慰める爲めであり、惠美子が泣いて喜ぶのがせめてもの滿足だつたが、さて最後に惠美子が「死んでも！」と云つたその言葉が、富次郎にも、急に針でも刺されたやうに、たゞ何となくどきんと悲しい底の底まで刺し通されたのであつた。で、富次郎も、いつまでも惠美子のやわらいか胸を抱へて居た――。

霧が降つて居た。雨はずつとさきから降つて居たのだが、その時しみ〴〵とそのわびしさが感じられた。二三軒隣りのお茶屋では、赤襟がまだあまり達者でない爪で、ぽつり〳〵とおさらへをして居るのであつた。そのたど〳〵しい音色が一しほあはれで、久しく廓で遊んで來た富次郎にも、この時初めて、その三味の音によつて涙が誘はれるのであつた。

………「心中と云ふものは斯う云ふときに突差的に起るものかも知れん。」富次郎はやがてそんなことを呟いた。そしてそんなことを考へるほどに、やゝ我れに歸つたのであつた。で、抱へて居た手を離しながら

「惠美子！　大丈夫や。なんぼこんな決議書を持つて來たかて、お母はんと岡町のおぢさんとが生きてる間は大丈夫や。」

「そいでもな、お母はんが、なんぼわたしを怨んで居なはると思うて――」頬はまだ涙で濡れては居たが、それでも惠美子はやゝ靜かになつて云つた。

父が遺言したところでは、たとへ少いにしても二萬圓と云ふ金が富次郎について居るのだが、その二萬圓さへも出さ

ずに、この際五千圓で終はらうとするのは、たとへ父の但し書があつたとは云へ、永久に殘りの一萬五千圓はかいぎやで卷き上げてしまはうと考へてるのでないことが、この場合の富次郎には明かに讀めるのであつた、——ほんとに手を切るのなら、何よりもその二萬圓の金を出さなければならぬのだと思はれた。それが殘つてゐる以上は——。

「それにやな、お父さんの舊の姓をつぐのは、わしには何よりもありがたいことや。」富次郎はさう云ひつゝ、ほんとにそのありがたさが思はれた。「お父さんのやうに、ほんまに腕一本からやつて見るよ、なア惠美子！　お前もそのつもりでやつてくれるやろな！」

「それは初めから覺悟はして居ります。」もう何も泣くことはないのだが、惠美子がまたしく〳〵と云ひ出したので、富次郎もまた何となく悲しくなつて、それから暫らくの沈默が、くさ〴〵のことを走馬燈のやうに胸に思ひ浮ばせるのであつた。

「若旦那、もう泣くのは止めまひやう！」と惠美子が涙を拭いて顏をあげた。

「わしは何も泣いてへやん——」と云ふと、惠美子は急に笑つて、

「そんならもう機嫌ようして、早よ夕御飯を食べて——法善寺へでも落語きゝに行こやおまへんか。」

「あ、それがええ」富次郎はさう云つたが、いつもならばこんな氣分の悪いときは、五人も七人も藝妓を上げて、大騷ぎをするところなのだが、惠美子が今落語に行かうと云つたのは、そして自分もまた、たゞ惠美子のおつき合をしてやると云ふだけの心持でなく、ほんまにさう云ふたのは、この場合何となく、靜かに、しつくりと自分の胸に合ふやうな氣がしたのであつた。（終）



あらそひ

正宗白鳥

今村は、身つくりに手間取る妻を急立てて、朝早く名古屋の宿を立つて、豫定の時刻に中央線の列車に乘つた。二年前の同じ時節にこの線路を同じ方へ向つて旅をした時、善光寺詣りの團體などのために、二等も三等もギツシリ詰つて身動きも出來ないほどであつたことを思つて、昨日から氣遣つてゐたのであつたが、今度は案外に乘客が尠かつた。緩やかに席が取られるのを彼等は口へ出して喜んだ。

尾濃の平野から木曾の溪谷へかけての初夏の眺めは、十日ばかりの落着かぬ旅に疲れてゐる今村の目にも快く映つた。彼れは鞄を枕にして横になつたり、起きて煙草を吸つたりして、氣儘に時を過しながら、その間に他の乘客同士が選擧話や經濟界の恐慌談をしてゐるのに耳を傾けたり、あるひは二三の薄ぺらな書物を取出して出鱈目に開けて讀んだりしてゐた。

「東風吹雨惱遊人、滿路新泥換細塵。花睡柳眠春自嬾、誰知我更嬾於春」

半歳も故郷に蟄居してゐた間つねに机の上に置いてゐて、旅へ出る時にも忘れないやうに鞄へ入れて來て、宿屋で怠屈した折々に出して見てゐる陸放翁詩鈔の中から、かういふ自分の氣に入つた詞句を選出しては、心の中で微吟した。

故郷は彼れに取つては忌はしい現實の巣であつた。そこに長くゐると、彼れはわざと竿を執つて蜂の巣を突つきたくなることがあつて、時には何の氣なしに觸つたゝめに、大蜂小蜂に皮膚の弱い彼れの手足を刺されることもあつたが、さう云ふ時にも、陸放翁などの東洋の天才の隱者めいた詩歌は、多少彼れの疼みを和らげる力を有つてゐた。

「財産の分配で面倒くさけりや、私は家のことなんか抛つ散らかしといて、何處へでも行きませうか」と、彼れは出郷間際に父親に向つて云ふと、

「そりやこんな田舍にぢつとして居られにや、大阪へでも東京へでも好きな所へ行きやえゝが、わしが今度お前にやることにしてゐる物は取つといて呉れ。さうでないとわしの心が濟まん。わしも何時までも生きとられる譯ぢやないから、ボツ／＼何かの處分をしとかにやらんのぢや。此間も田地の賣買や小作人の悶着で二三日續くまで彼方此方と歩いて身體を使つたためにえらう根が疲れた。以前はこんなことはなかつたのぢやが」

さう云つた時の父親の顏には、著るしく老いの影が漂つてゐた。過去の長い生涯をひとりの意志でやり通して來た父親も、この頃になつて俄かに杖が欲しくなつて來たのぢやないかと、今村には感ぜられた。そして、いとほしいやうな思ひがふと彼れの心にも萠した。

「性分だから仕方がないが、お前は時々カツとして度外れなことをするからいかん。××にもよう云うとかうと思ふが、兄弟が融和して家を維持して行くやうでなけりや、わしも不安心でならんのぢや」と、父親は珍らしく親しみの目を向けて親しみのある口を利いた。

「時々カツとして無茶を云つたり、爭つて見たい氣を出したりするやうだからこそ、私もまだ萎け切らないで生きてゐられるんです」と答へて、今村は微笑した。

「おれがゐなければ、表面だけでも際立つた事がなくなつていゝんだらう。親爺だつておれを手頼らうといふ氣はない。おれがゐると却つて何かいやなことを云出しやしないかと、不斷目障りになるくらゐなものだらうから」

彼れは故郷を立つて大阪の宿へ着いて、樂々と手足を伸してから云つた。

「お母さんはあなたに對する不平をあなたには云はないで、みんな私のところへ持つて來なさるから溜らない。私には返事のしようがないんですもの」と、彼れの妻は彼れよりも一層樂々とした氣持になつて手足を伸ばして云つて、「世の中は弱い者虐めだから、強くならなきやいけないとつく〴〵感じましたよ」

「しかし、誰れだつて弱いんだ。家の者にも強い者は一人もありやしないよ。おれなぞも身體や心が弱けりやこそ、何一つ徹底したことは出來ないで、愚圖ら〴〵して生きてるんぢやないか」

「だから、おさとさんが、兄さんは口ではあんなえらい事を云ふとんなさるけれど、實際は何も出來んぢやありませんか。家を壞すのなら早う壞してお見んさりやえゝのに。ねえ、お姉さん、さうぢやありませんかと云つてゐましたよ」

「さうかねえ」

今村は、兩親でも、弟嫁のおさとでもいく人もの弟でも、數十里を隔てた土地でそれ等の面影を浮べてゐると、愛憎好惡の念を寄せることは出來なかつた。目に觸れ耳に觸れた食瞋痴から起つた事件も、たゞさう云ふ事件があつたとして顧みられるに過ぎなかつた。

彼れは催眠歌を聞いてゐるやうな氣で、放翁の詩を讀んでゐる間に、知らず〴〵假睡の夢へ落ちた。寢覺の床近くなつて、周圍の騷がしさにふと目を醒ますと、一見して選擧の運動員と察せられる羽織袴を着けた五六人の連中が入込んでゐた。やがてその中の一人は、葉卷の火を揉消して横になるや否や、鼾を搔いて眠つた。

「僕のやうな泥飲者も、この頃はコップで一杯煽つただけで、へト〴〵に醉つてグッスリ眠つてしまふ。家の者に吩咐けて朝は極めた時刻に無理無體に引起させることにしてゐるんだが、一度起しやうが酷いつて僕が怒つたもんだから、次の朝は家の者が遠慮して、打やつといたために、一時間ばかり眠過してえらい失策をやつた」と、その男は横になる前に話してゐた。

選擧期日は後二日と迫つてゐると、今村はこの連中の忙しさを想像しながら、様子を見てゐた。籔原や鳥居峠あたり

の寂しい高地も、今は若葉が日に冴えて美しかつた。山吹が咲いてゐて、櫻もまだ萎れた花をつけてゐた。他の土地よりも時節のおくれた弱々しい春景色は、暫く彼れの目を惹いた。

諏訪溫泉を經て甲府の方へ行く筈になつてゐる今村夫婦は、鹽尻で汽車を乘替えなければならなかつた。さしたる手荷物もないものだから、鹽尻へ着くと、互ひに一つゞつ持つて、急いで乘替え場所へ行つたが、長野からの汽車はまだ來てゐなかつた。そしてプラツトホームは可成り混雜してゐた。

廣漠たる高原の風は初夏の頃とは思はれぬほどに寒かつたので、彼は暫くして待合室の中へ入つたが、すると「約一時間列車延着」の掲示がふと彼れの目に觸れた。急がぬ旅ではあるが、待遠しさにいら〳〵して、屢々立つたり坐つたりして、あるひは線路を遠く見やつた。

やうやく列車の音が聞えだすと、待ちあぐんでゐた乘客は乘場へ出て押し合つたが、そこへ近づいた列車は人で詰つて室外にまで溢れてゐた。待つてゐた大勢は前後入口を目かけて押寄せたが、下車する客は殆んど一人もなかつた。今村などは群集の後に立つて茫然としてゐなければならなかつた。一列車おくらすとすると、また三時間もこんな所でまご〳〵してゐなければならないと思はれて心苦しくなつたが、一生懸命に乘車を爭つてゐる連中の中を潛つて自分だちの道を見つける力をも手だてをも彼れは有つてゐなかつた。それに、こんな時には女を連れてゐるのが旅の累ひとなつた。

怒聲罵聲、泣出しさうな聲などで周圍は喧しかつた。

「仕方がない、諦めるんだ」と云つて、今村は入口の雜沓を見てゐたが、すると、一人の若者が入口の鐵の棒を掴へて延び上つて、內から締められた扉を押開けようとした。

「開けろ〳〵」と、後に續いた連中が聲を合せて加勢した。」

「もう入れません。開けようたつて駄目だ」

內側から扉を壓えてゐた中婆さんが、ふと金切聲で叫んで、邪慳な目付で下を見下した。

「なにを、この糞婆あ」と、かの若者は怒鳴つたが、それと同時に扉を足で蹴るか、手で押付けるかしたやうだつた。扉の玻璃が裂けてかの婆さんは悲鳴を揚げた。

押し寄せてゐた人々も、懸り合ひを恐れたのか、悲鳴に驚いたのか、一時後退りして、かの若者も人込みの中へ藻繰り込んで姿を隱したやうであつた。

「さあ早く乘らう」

隙間を見つけた今村は、荷物を持つたまゝ咄嗟に妻を促して、一時押合ふ力の怯ひでゐる群集の中を潛つて、辛うじて扉の中へ身を入れて、二等室の中を覗きながら室外に立つた。

そこには、額を玻璃の破片で傷けられて血を滴らせてゐる婆さんが、周圍の人々に慰められてゐた。「拳骨で打つたんだ」とか「足で戸を蹴つたから上の玻璃に響いて壞れたんだ」とか、人さまぐに云つて、亂暴者を罵つてゐた。しかし、今村は乘車難に惱んでゐたゝめだか、かの若者を非難する氣になれないで、むしろ意地くね惡い顔してゐる婆さんに對して反感を覺えてゐた。

「この上、人を乘せられるか。怪我人が出來とるぢやないか」と、二等室にゐる田舍紳士らしい肥滿した男が、腰掛から腰を浮かせて興奮して叫立ててゐた。そして、無理にも身體だけを室内へ入れようとしてゐる今村の方を睨んだ。

「負傷者があるんだぞ。人に大怪我をさせてまで客を乘せるといふ法があるか」

田舍紳士の義憤は暫く續いてゐたが、その間に今村は室内へ蹈り寄つて、足と足との間に辛うじて自分の足を入れて蝙蝠傘で身を支えた。室外で驛夫や車掌がやつて來て、萬創膏を婆さんの傷口へ貼つてやつて住所姓名を訊ねたりしてゐた。

「亂暴した男は捕まつたやうですよ」と、白粉を塗立てた年增女が當推量の報告をして、隣りの田舍紳士の意を迎へた。

「それは逃げられますまい。亂暴する奴は誰れの目にもつくから、逃げようたつて駄目だ」

田舍紳士は安心したやうに顏を和げた。そして、汽車が動きだすとともに、話を外へ轉じた。

皆んなの話によつて、この大勢の男女は諏訪の御柱祭とかへ出掛けてゐることが、今村にも分つて來た。御柱のある年には結婚してはいけないと誰れかが云つてゐたことが思出された。

彼は諏訪の混雑を恐れて、甲府まで直行することにした。

南京の基督

芥川龍之介

或秋の夜半であつた。南京奇望街の或家の一間には、色の蒼ざめた支那の少女が一人、古びた卓の上に頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。

卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明くすると云ふよりも、寧ろ一層陰鬱な効果を與へるのに力があつた。壁紙の剝げかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した籐の寢臺が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何處を見ても、裝飾らしい家具の類なぞは何一つ見當らなかつた。

少女はそれにも關らず、西瓜の種を噛みやめては、時々涼しい眼を擧げて、卓の一方に面した壁をじつと眺めやる事があつた。見ると成程その壁には、すぐ鼻の先の折れ釘に、小さな眞鍮の十字架が、つつましやかに懸つてゐた。さうしてその十字架の上には、稚拙な受難の基督が、高々と兩腕をひろげながら、手ずれた浮き彫の輪廓を影のやうにぼんやり浮べてゐた。少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛

の後の寂しい色が、一瞬間何處かへ見えなくなつて、その代りに無邪氣な希望の光が、生き生きとよみ返つて來るらしかつた。が、すぐに又視線が移ると、彼女は必吐息を洩らして、光澤のない黒繻子の上衣の肩を所在なささうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぽつりぽつり噛み出すのであつた。

少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける爲に、夜々その部屋に客を迎へる、當年十五才の私窩子であつた。秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもゐるのに違ひなかつた。が、金花程氣立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少くとも疑問であつた。彼女は朋輩の賣笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰欝な部屋を訪れる、さまざまな客と戯れてゐた。さうして彼等の拂つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親に、一杯でも餘計好きな酒に飽かせてやる事を樂しみにしてゐた。

かう云ふ金花の行狀は、勿論彼女が生れつきにも、據つてゐるのに違ひなかつた。しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなつた母親に敎へられた、羅馬加特敎の信仰をずつと持ち續けてゐるからであつた。

——さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに來た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。その時彼は葉卷を啣へて、洋服の膝に輕々と小さな金花を抱いてゐたが、ふと壁の上の十字架を見ると、不審らしい顏をしながら、

「お前は耶蘇敎徒かい」と、覺束ない支那語で話しかけた。

「ええ、五つの時に洗禮を受けました。」

「さうしてこんな商賣をしてゐるのかい。」

彼の聲にはこの瞬間、皮肉な調子が交つたやうであつた。が、金花は彼の腕に、所謂鴉髻の頭を凭せながら、何時もの通り晴れ晴れと、糸切齒の見える笑を洩らした。

「この商賣をしなければ、阿父樣も私も餓え死をしてしまひますから。

「お前の父親は老人なのかい。」

「ええ――もう腰も立たないのです。」

「しかしだね、――しかしこんな稼業をしてゐたのでは、天國に行かれないと思やしないか。」

「いゝえ。」

金花はちよいと十字架を眺めながら、考深さうな眼つきになつた。

「天國にいらつしやる基督樣は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。――それでなければ基督樣は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」

若い日本の旅行家は微笑した。さうして上衣の隱しを探ると、翡翠の耳環を一雙出して、手づから彼女の耳へ下げてやつた。

「これはさつき日本へ土産に買つた耳環だが、今夜の記念にお前にやるよ。」――

金花は始めて客をとつた夜から、實際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた。

所が彼是一月ばかり前から、この敬虔な私窩子は不幸にも、惡性の楊梅瘡を病む體になつた。これを聞いた朋輩の陳山茶は、痛みを止めるのに好いと云つて、鴉片酒を飲む事を敎へてくれた。その後又やはり朋輩の毛迎春は、彼女自身が服用した汞藍丸や迦路米の殘りを、親切にもわざわざ持つて來てくれた。が、金花の病はどうしたものか、客をとらずに引き籠つてゐても、一向快方には向はなかつた。

すると或日陳山茶が、金花の部屋へ遊びに來た時に、こんな迷信じみた療法を尤もらしく話して聞かせた。

「あなたの病氣は御客から移つたのだから、早く誰かに移し返しておしまひなさいよ。さうすればきつと二三日中に、よくなつてしまふのに違ひないわ。」

金花は頰杖をついた儘、浮かない顏色を改めなかつた。が、山茶の言葉には多少の好奇心を動かしたと見えて、

「ほんたう?」と、輕く聞き返した。

「ええ、ほんたうだわ。私の姉さんもあなたのやうに、どうしても病氣が癒らなかつたのよ。それでも御客に移し返したら、ぢきによくなつてしまつたわ。」

「その御客はどうして?」

「御客はそれは可哀さうよ。おかげで目までつぶれたつて云ふわ。」

山茶が部屋を去つた後、金花は獨り壁に懸けた十字架の前に跪いて、受難の基督を仰ぎ見ながら、熱心にかう云ふ祈禱を捧げた。

「天國にいらつしやる基督樣。私は阿父樣を養ふ爲に、賤しい商賣を致して居ります。しかし私の商賣は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません。ですから私はこの儘死んでも、必天國に行かれると思つて居りました。けれども唯今の私は、御客にこの病を移さない限り、今までのやうな商賣を致して參る事は出來ません。して見ればたとひ餓え死をしても、――さうすればこの病も、癒るさうでございますが、――御客と一つ寢臺に寢ないやうに、心がけねばなるまいと存じます。さもなければ私は、私どもの仕合せの爲に、怨みもない他人を不仕合せに致す事になりますから。しかし何と申しても、私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陷らないものでもございません。天國にいらつしやる基督樣。どうか私を御守り下さいまし。私はあなた御一人の外に、たよるもののない女でございますから。」

かう決心した宋金花は、その後山茶や迎春にいくら商賣を勸められても、剛情に客をとらずにゐた、又時々彼女の部屋へ、なじみの客が遊びに來ても、一しよに煙草でも吸ひ合ふ外は、決して客の意に從はなかつた。

「私は恐しい病氣を持つてゐるのです。側へいらつしやると、あなたにも移りますよ。」

それでも客が醉つてでもゐて、無理に彼女を自由にしようとすると、金花は何時もかう云つて、實際彼女の病んでゐる證據を示す事さへ憚らなかつた。だから客は彼女の部屋には、おひおひ遊びに來ないやうになつた。と同時に又彼女の家計も、一日每に苦しくなつて行つた。……

今夜も彼女はこの卓に倚つて、長い間ぼんやり坐つてゐた。が、相不變彼女の部屋へは、客の來るけはひも見えなかつた。その內に夜は遠慮なく更け渡つて、彼女の耳にはひる音と云つては、唯何處かで鳴いてゐる蟋蟀の聲ばかりになつた。のみならず火の氣のない部屋の寒さは、床に敷きつめた石の上から、次第に彼女の鼠繻子の靴を、その靴の中の華奢な足を、水のやうに襲つて來るのであつた。

金花はうす暗いランプの火に、さつきからうつとり見入つてゐたが、やがて身震ひを一つすると、翡翠の環の下つた耳を掻いて、小さな欠伸を噛み殺した。すると殆その途端に、ペンキ塗りの戶が勢よく開いて、見慣れない一人の外國人が、よろめくやうに外からはひつて來た。その勢が烈しかつたからであらう。卓の上のランプの火は、一しきりぱつと燃え上つて、妙に赤々と煤けた光を狹い部屋の中に漲らせた。客はその光をまともに浴びて、一度は卓の方へのめりかかつたが、すぐに又立ち直ると、今度は後へたぢろいで、今し方しまつたペンキ塗りの戶へ、どしりと背を凭せてしまつた。

金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外國人の姿へ、呆氣にとられた視線を投げた。客は年頃は三十五六でもあらうか。縞目のあるらしい茶の背廣に、同じ巾地の鳥打帽をかぶつた、眼の大きい、顋髯のある、頰の日に燒けた男であつた。が、唯一つ合點の行かない事には、外國人には違ひないにしても、西洋人か東洋人か、奇體にその見分けがつかなかつた。それが黑い髮の毛を帽の下からはみ出させて、火の消えたパイプを啣へながら、戶口に立ち塞つてゐる有樣は、どう見ても泥醉した通行人が戶まどひでもしたらしく思はれるのであつた。

「何か御用ですか。」

金花は稍無氣味な感じに襲はれながら、やはり卓の前に立ちすくんだ儘、詰るやうにかう尋ねて見た。すると相手は首を振つて、支那語はわからないと云ふ相圖をした。それから橫啣へにしたパイプを離して、何やら意味のわからない滑な外國語を一言洩らした。が、今度は金花の方が、卓の上のランプの光に、耳環の翡翠をちらつかせながら、首を振つて見せるより外に仕方がなかつた。

客は彼女が當惑らしく、美しい眉をひそめたのを見ると、突然大聲に笑ひながら、無造作に鳥打帽を脫ぎ離して、よろよろこちらへ歩み寄つた。さうして卓の向うの椅子へ、腰が拔けたやうに尻を下した。金花はこの時この外國人の顏が、何時何處と云ふ記憶はないにしても、確に見覺えがあるやうな、一種の親しみを感じ出した。客は無遠慮に盆の上の西瓜の種をつまみながら、と云つてそれを噛むでもなく、じろじろ金花を眺めてゐたが、やがて又妙な手眞似まじりに、何か外國語をしやべり出した。その意味も彼女にはわからなかつたが、唯この外國人が彼女の商賣に、多少の理解を持つてゐる事は、朧げながらも推測がついた。

支那語を知らない外國人と、長い一夜を明す事も、金花には珍しい事ではなかつた。そこで彼女は椅子にかけると、殆習慣になつてゐる、愛想の好い微笑を見せながら、相手には全然通じない冗談などを云ひ始めた。が、客はその冗談が、わかるのではないかと疑はれる程、一言二言しやべつては、上機嫌の笑ひ聲を擧げながら、前よりも更に目まぐるしく、いろいろな手眞似を使ひ出した。

客の吐く息は酒臭かつた。しかしその陶然と赤くなつた顏は、この索寞とした部屋の空氣が、明くなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れてゐた。少くともそれは金花にとつては、日頃見慣れてゐる南京の同國人は云ふまでもなく、今まで彼女が見た事のある、どんな東洋西洋の外國人よりも立派であつた。が、それにも關らず、前にも一度この顏を見た覺えのあると云ふ、さつきの感じはどうしても、打ち消す事が出來なかつた。金花は客の額に懸つた、黑い捲き毛を眺めながら、氣輕さうに愛嬌を振り撒く内にも、この顏に始めて遇つた時の記憶を、一生懸命に喚び起さうとした。

「この間肥つた奧さんと一しよに、畫舫に乘つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髮の色が、もつとずつと赤かつた。では秦淮の孔子樣の廟へ、寫眞機を向けてゐた人かも知れない。しかしあの人はこの御客より、年をとつてゐたやうな心もちがする。さうさう、何時か利涉橋の側の飯館の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてゐたつけ。事によると、――が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。………」

金花がこんな事を考へてゐる内に、相不變愉快さうな外國人は、何時かパイプに煙草をつめて、匂の好い煙を吐き出してゐた。それが急に又何とか云つて、今度はおとなしくにやにや笑ふと、片手の指を二本延べて、金花の眼の前へ突き出しながら、？と云ふ意味の身ぶりをした。指二本が二弗と云ふ金額を示してゐる事は、勿論誰の眼にも明かであつた。が、客を泊めない金花は、器用に西瓜の種を鳴らして、否と云ふ印に二度ばかり、これも笑ひ顔を振つて見せた。すると客は卓の上に横柄な兩肘を凭せた儘、うす暗いランプの光の中に、近々と醉顔をさし延ばして、じつと彼女を見守つたが、やがて又指を三本出して、答を待つやうな眼つきをした。

金花はちよいと椅子をずらせて、西瓜の種を含んだ儘、當惑らしい顔になつた。客は確に二弗の金では、彼女が體を任せないと云つたやうに思つてゐるらしかつた。と云つて言葉の通じない彼に、立ち入つた仔細をのみこませる事は、到底出來さうにも思はれなかつた。そこで金花は今更のやうに、彼女の輕率を後悔しながら、涼しい視線を外へ轉じて、仕方なく更にきつぱりと、もう一度頭を振つて見せた。

所が相手の外國人は、暫くうす笑ひを浮べながら、ためらふやうな氣色を示した後、四本の指をさし延ばして、何か又外國語をしやべつて聞かせた。途方に暮れた金花は頰を抑へて、微笑する氣力もなくなつてゐたが、咄嗟にもうかうなつた上は、何時までも首を振り續けて、相手が思ひ切る時を待つ外はないと決心した。が、さう思ふ内にも客の手は、何か眼に見えないものでも捉へるやうに、とうとう五指とも開いてしまつた。

それから二人は長い間、手眞似と身ぶりとの入り交つた押し問答を續けてゐた。その間に客は根氣よく、一本づつ指の數を增した揚句、しまひには十弗の金を出しても、惜しくないと云ふ意氣ごみを示すやうになつた。が、私窩子には大金の十弗も、金花の決心は動かせなかつた。彼女はさつきから椅子を離れて、斜に卓の前へ佇んでゐたが、相手が兩手の指を見せると、苛立たしさうに足踏みして、何度も續けさまに頭を振つた。その途端にどう云ふ拍子か、釘に懸つてゐた十字架がはづれて、かすかな金屬の音を立てながら、足もとの敷石の上に落ちた。

彼女は慌しい手を延べて、大切な十字架を拾ひ上げた。その時何氣なく十字架に彫られた、受難の基督の顔を見ると、

不思議にもそれが卓の向ふの、外國人の顏と生き寫しであつた。

「何でも何處かで見たやうだと思つたのは、この基督樣の御顏だつたのだ。」

金花は黑繻子の上衣の胸に、眞鍮の十字架を押し當てた儘、卓を隔てた客の顏へ、思はず驚きの視線を投げた。客はやはりランプの光に、酒氣を帶びた顏を火照らせながら、時時パイプの煙を吐いては、意味ありげな微笑を浮べてゐた。しかもその眼は彼女の姿へ、——恐らくは白い頸すぢから、翡翠の環を下げた耳のあたりへ、絕えずさまよつてゐるらしかつた。しかしかう云ふ客の容子も、金花には優しい一種の威嚴に、充ち滿ちてゐるかのやうな心もちがした。

やがて客はパイプを止めると、わざとらしく小首を傾けて、何やら笑ひ聲の言葉をかけた。それが金花の心には、殆巧妙な催眠術師が、被術者の耳に囁き聞かせる、暗示のやうな作用を起した。彼女はあの健氣な決心も、全く忘れてしまつたのか、そつとほほ笑んだ眼を伏せて、眞鍮の十字架を手まさぐりながら、この怪しい外國人の側へ、羞しさうに步み寄つた。

客はズボンの隱しを探つて、じやらじやら銀の音をさせながら、依然とうす笑ひを浮べた眼に、暫くは金花の立ち姿を好ましさうに眺めてゐた。が、その眼の中のうす笑ひが、熱のあるやうな光に變つたと思ふと、いきなり椅子から飛び上つて、酒の匂のする背廣の腕に、力一ぱい金花を抱きすくめた。金花はまるで喪心したやうに、翡翠の耳環の下がつた頭をぐつたりと後へ仰向けた儘、しかし蒼白い頰の底には、鮮な血の色を仄めかせて、鼻の先に迫つた彼の顏へ、恍惚としたうす眼を注いでゐた。この不思議な外國人に、彼女の體を自由にさせるか、それとも病を移さない爲に、彼の接吻を刎ねつけるか、そんな思慮をめぐらす餘裕は、勿論何處にも見當らなかつた。金花は髯だらけな客の口に、彼女の口を任せながら、唯燃えるやうな戀愛の歡喜が、始めて知つた戀愛の歡喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて來るのを知るばかりであつた。………

數時間の後、ランプの消えた部屋の中には、唯かすかな蟋蟀の聲が、寢臺を洩れる二人の寢息に、寂しい秋意を加へ

てゐた。しかしその間に金花の夢は、埃じみた寝臺の帷から、屋根の上にある星月夜へ、煙のやうに高々と昇つて行つた。

――金花は紫檀の椅子に坐つて、卓の上に並んでゐる、さまざまな料理に箸をつけてゐた。燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海參の羹、――料理はいくら數へても、到底數へ盡されなかつた。しかもその食器が悉、べた一面に青い蓮華や金の鳳凰を描き立てた、立派な皿小鉢ばかりであつた。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、靜な水の音や櫂の音が、絶えず此處まで聞えて來た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今ゐる所は、確に天國の町にある、基督の家に違ひなかつた。

金花は時々箸を止めて、卓の周圍を眺めまはした。が、廣い部屋の中には、龍の彫刻のある柱だの、大輪の菊の鉢植えだのが、料理の湯氣に仄めいてゐる外は、一人も人影は見えなかつた。

それにも關らず卓の上には、食器が一つからになると、忽ち何處からか新しい料理が、暖な香氣を漲らせて、彼女の眼の前へ運ばれて來た。と思ふと又箸をつけない内に、丸燒きの雉などが羽搏きをして、紹興酒の瓶を倒しながら、部屋の天井へばたばたと、舞ひ上つてしまふ事もあつた。

その内に金花は誰か一人、音もなく彼女の椅子の後へ、歩み寄つたのに心づいた。そこで箸を持つた儘、そつと後を振り返つて見た。すると其處にはどう云ふ譯か、あると思つた窓がなくて、緞子の蒲團を敷いた紫檀の椅子に、見慣れない一人の外國人が、眞鍮の水煙管を啣へながら、悠々と腰を下してゐた。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに來た男だと云ふ事がわかつた。が、唯一つ彼と違ふ事には、丁度三日月のやうな光の環が、この外國人の頭の上、一尺ばかりの空に懸つてゐた。

その時又金花の眼の前には、何だか湯氣の立つ大皿が一つ、まるで卓から湧いたやうに、突然旨さうな料理を運んで來た。彼女はすぐに箸を擧げて、皿の中の珍味を挾まうとしたが、ふと彼女の後にゐる外國人の事を思ひ出して、肩

越しに彼を見返りながら、

「あなたも此處へいらつしやいませんか」と、遠慮がましい聲をかけた。

「まあ、お前だけ御食べ。それを食べるとお前の病氣が、今夜の内によくなるから。」

圓光を頂いた外國人は、やはり水煙管を啣へた儘、無限の愛を含んだ微笑を洩らした。

「ではあなたは召上らないのでございますか。」

「私かい。私は支那料理は嫌ひだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ。」

南京の基督はかう云つたと思ふと、徐に紫檀の椅子を離れて、呆氣にとられた金花の頰へ、後から優しい接吻を與へた。——

天國の夢がさめたのは、既に秋の明け方の光が、狭い部屋中にうすら寒く擴がり出した頃であつた。が、埃臭い帷を垂れた、小舟のやうな寢臺の中には、さすがにまだ生暖い仄かな闇が殘つてゐた。そのうす暗がりに浮んでゐる、半ば仰向いた金花の顏は、色もわからない古毛布に、圓い括り顎を隱した儘、未に眠い眼を開かなかつた。しかも血色の悪い頰には、昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髮が亂れて、心もち明いた唇の隙にも、糯米のやうに細い歯が、かすかに白々と覗いてゐた。

金花は眠がさめた今でも、菊の花や、水の音や、雉の丸燒や、耶蘇基督や、その外いろいろな夢の記憶に、うとうと心をさまよはせてゐた。が、その内に寢臺の中が、だんだん明くなつて來ると、彼女の快い夢の心にも、傍若無人な現實が、昨夜不思議な外國人と一しよに、この籐の寢臺へ上つた事が、はつきりと意識に踏みこんで來た。

「もしあの人に病氣でも移したら、——」

金花はさう考へると、急に心が暗くなつて、今朝は再彼の顏を見るに堪へないやうな心もちがした。が、一度眼がさめた以上、なつかしい彼の日に燒けた顏を、何時までも見ずにゐる事は、猶更彼女には堪へられなかつた。そこで暫くた

めらつた後、彼女は怯づ怯づ眼を開いて、今はもう明くなつた寢臺の中を見まはした。しかし其處には思ひもよらず、毛布に蔽はれた彼女の外は、十字架の耶蘇に似た彼は勿論、人の影さへも見えなかつた。

「ではあれも夢だつたかしら。」

垢じみた毛布を刎ねのけるが早いか、金花は寢臺の上に起き直つた。さうして兩手に眼を擦つてから、重さうに下つた帷を掲げて、まだ澁い視線を部屋の中へ投げた。

部屋は冷かな朝の空氣に、殘酷な位歴々と、あらゆる物の輪廓を描いてゐた。古びた卓、火の消えたランプ、それから一脚は床に倒れ、一脚は壁に向つてゐる椅子、――すべてが昨夜の儘であつた。そればかりか現に卓の上には、西瓜の種の散らばつた中に、小さな眞鍮の十字架さへ、鈍い光を放つてゐた。金花は眩い眼をしばたたいて、茫然とあたりを見まはしながら、暫くは取り亂した寢臺の上に、寒さうな横坐りを改めなかつた、

「やつぱり夢ではなかつたのだ。」

金花はかう呟きながら、さまざまにあの外國人の不可解な行く方を思ひやつた、勿論考へるまでもなく、彼は彼女が眠つてゐる暇に、そつと部屋を抜け出して、歸つたかも知れないと云ふ氣はあつた。しかしあれ程彼女を愛撫した彼が、一言も別れを惜まずに、行つてしまつたと云ふ事は、信じられないと云ふよりも、寧ろ信じるに忍びなかつた。その上彼女はあの怪しい外國人から、まだ約束の十弗の金さへ、貰ふ事を忘れてゐたのであつた。

「それとも本當に歸つたのかしら。」

彼女は重い胸を抱きながら、毛布の上に脱ぎ捨てた、黒繻子の上衣をひつかけようとした。が、突然その手を止めると、彼女の顔には見る見る内に、生き生きした血の色が擴がり始めた。それはペンキ塗りの戸の向うに、あの怪しい外國人の足音でも聞えた爲であらうか。或は又枕や毛布にしみた、酒臭い彼の移り香が、偶然恥しい昨夜の記憶を喚びさました爲であらうか。いや、金花はこの瞬間、彼女の體に起つた奇蹟が、一夜の中に跡方もなく、悪性を極めた楊梅瘡を癒した事に氣づいたのであつた。

「ではあの人が基督様だつたのだ。」

彼女は思はず襯衣の儘、轉ぶやうに寢臺を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に跪いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのマリアの如く、熱心な祈禱を捧げ出した。……

翌年の春の或夜、宋金花を訪れた、若い日本の旅行家は、再うす暗いランプの下に、彼女と卓を挾んでゐた。

「まだ十字架がかけてあるぢやないか。」

その夜彼が何かの拍子に、ひやかすやうにかういふと、金花は急に眞面目になつて、一夜南京に降つた基督が、彼女の病を癒したと云ふ、不思議な話を聞かせ始めた。

その話を聞きながら、若い日本の旅行家は、こんな事を獨り考へてゐた。――

「おれはその外國人を知つてゐる。あいつは日本人と亞米利加人との混血兒だ。名前は確 George Murry とか云つたつけ。あいつはおれの知り合ひの路透電報局の通信員に、基督教を信じてゐる、南京の私窩子を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて來たと云ふ話を得意らしく話したさうだ。おれがこの前に來た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊つてゐたから、顏だけは今でも覺えてゐる。何でもやはり英字新聞の通信員だと稱してゐたが、男振りに似合はない、人の惡るさうな人間だつた。あいつがその後惡性な梅毒から、とうとう發狂してしまつたのは、事によるとこの女の病氣が傳染したのかも知れない。しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無賴な混血兒を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一體この女の爲に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも默つて永久に、昔の西洋の傳說のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」

金花の話が終つた時、彼は思ひ出したやうに燐寸を擦つて、匂の高い葉卷をふかし出した。さうしてわざと熱心さうに、こんな窮した質問をした。

「さうかい。それは不思議だな。だが、――だがお前は、その後一度も煩はないか。」

「ええ、一度も。」

金花は西瓜の種を噛りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。（九・六・二十二）

本篇を草するに當り。谷崎潤一郎氏作『秦淮の一夜』に負ふ所尠からず。附記して、感謝の意を表す。（著者）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區本石町 至誠堂
同 本郷區本富士町 盛春堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大盛社
名古屋市富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

○定價 金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附録號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一 誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一 振替貯金 口座は東京三十四番なり
一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一 代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一 集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢

一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一 受領證請求 は必ず返信料を要す

大正九年六月三十日印刷納本
大正九年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木酉三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 中央公論社
電話（小石川一四四一）（小石川三四二〇）
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11,90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.